

983-cD72h-Nm



\*00236407 \*

ドストイェフスキイ

白痴

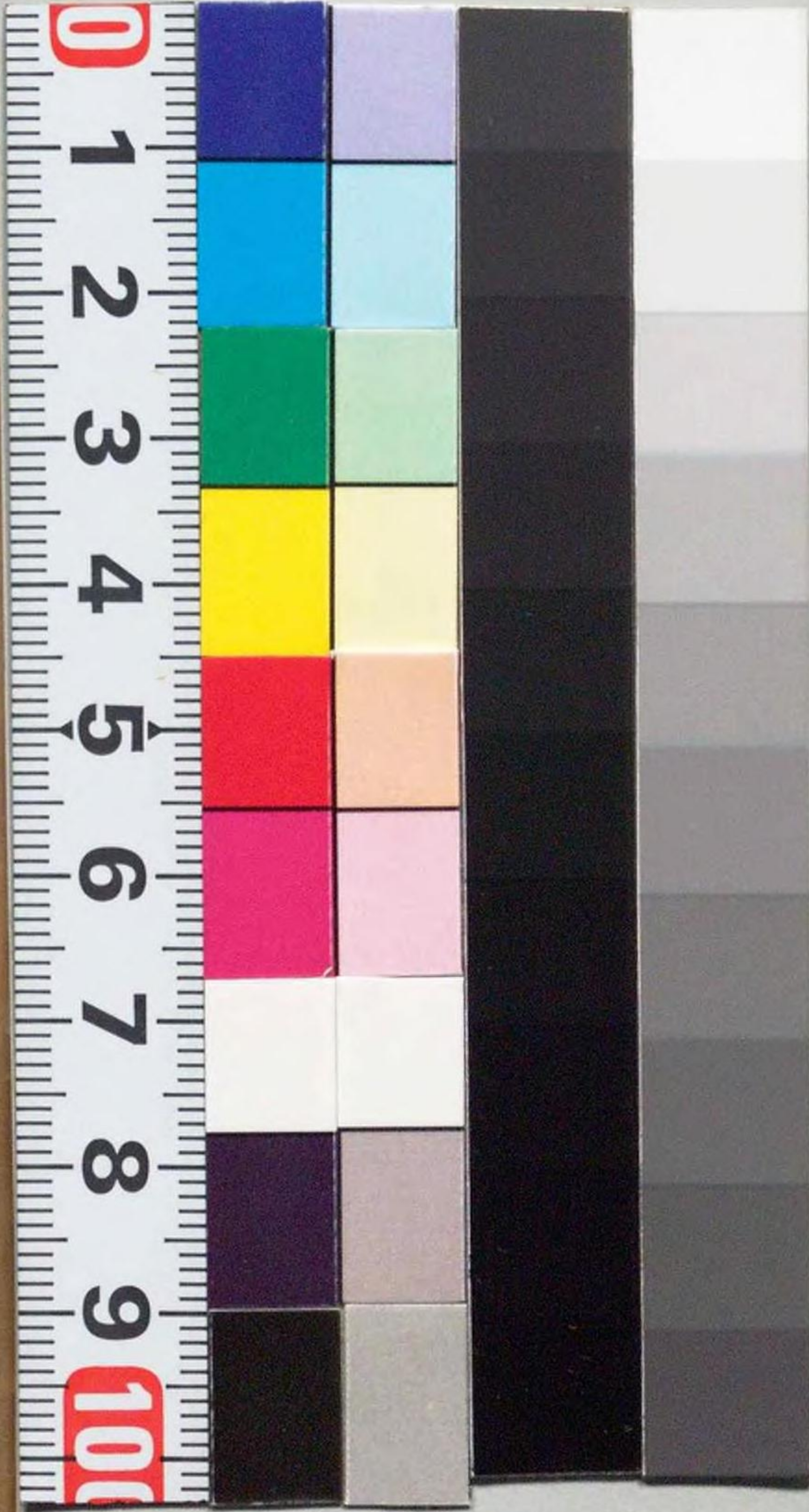
★★

中山省三郎譯

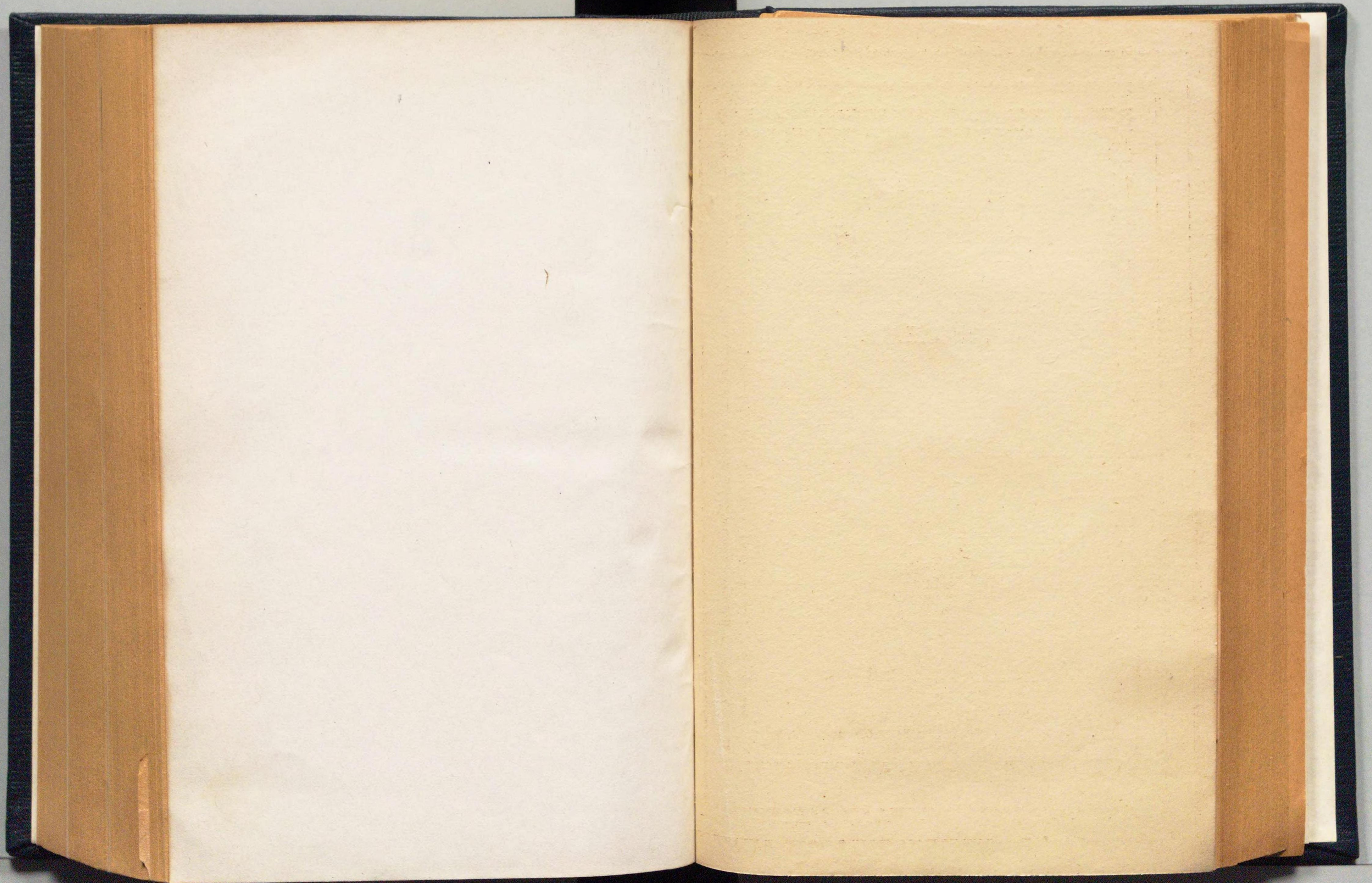


世界文學選書

87









白

痴

★★



ドストイエフスキイ作

中山省三郎譯

白痴

第二卷



世界文學選書

87

三笠書房

The Title:

“ИДИОТЪ”

The Author:

ДОСТОЕВСКИЙ

The Date:

1868

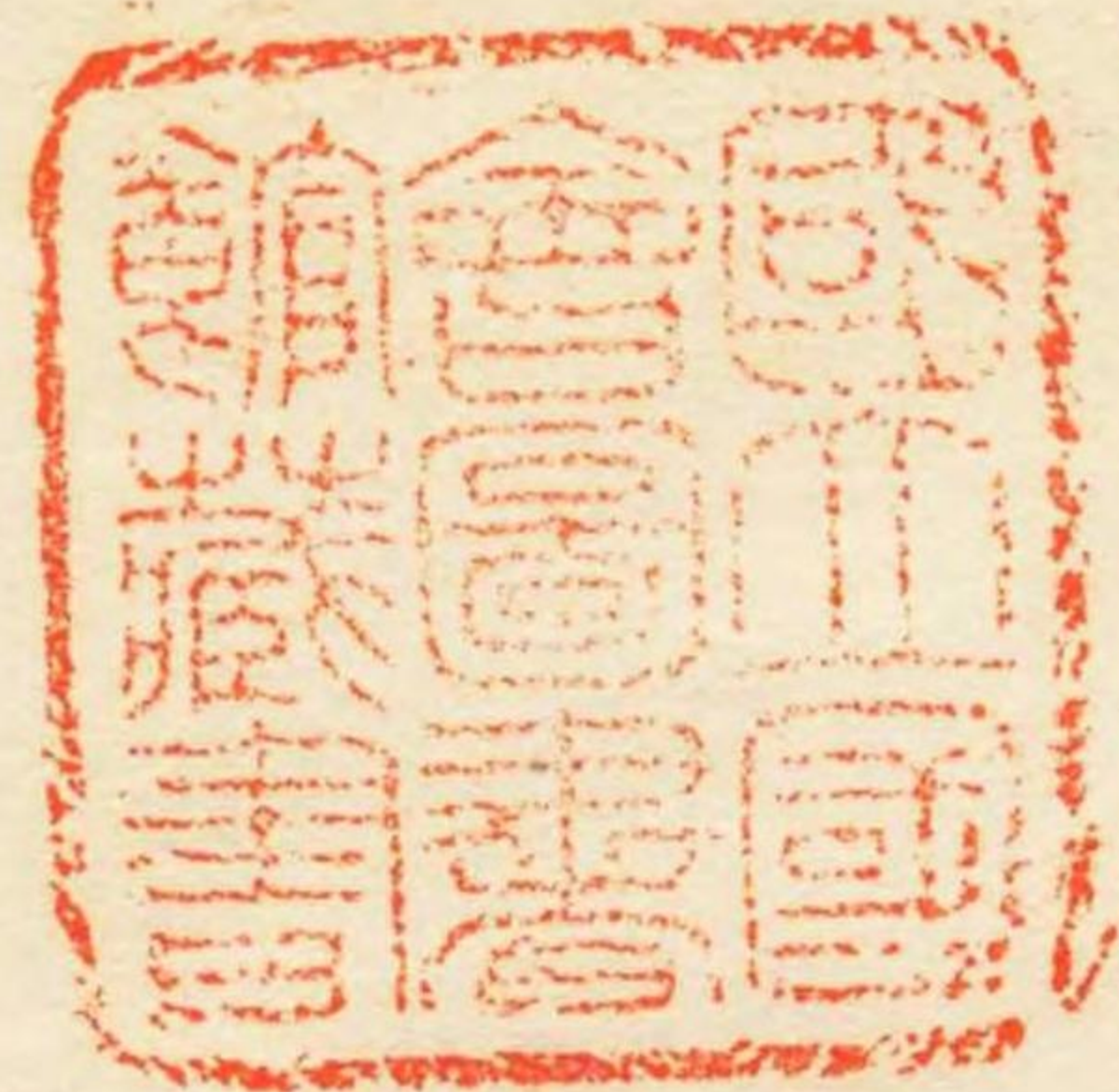




白

痴

第二卷



236407



第二篇

この物語の第一編の終りとなつてゐるナスターシャ・フィリップソフの夜會での、奇妙な出来事のうち二日ばかり経つて、ムィシキン公爵は思いもかけなかつた遺産を譲りうけるために、あわただしくモスクワへ出發した。公爵のこうしたあわただしい出發には、必ず他に何か仔細があるに相違ないといふのがその頃に擴まつた噂であつた。しかし、このことについては、ペテルブルグを離れてモスクワに滞在中の公爵の動靜と同じように、餘り詳しい消息を傳えるわけには行かない。公爵は丸六カ月の間に、ペテルブルグを離れていたのであつたが、その間に起つたことは、公爵の運命に當然、何らかの興味を懷かなければならない理由のある人人でさえも、ほんの少ししか知らなかつた。尤も、何かしら一寸した噂を時おり耳にしないわけではなかつたが、この噂にしたところで、大部分は奇妙なもので、ともすれば互いに矛盾を來すものであつた。誰よりも公爵に興味を懷いていたのは、エバンチン家の人々であつたことは、もとより當然のことであるが、その人々のところへ、出發に際して公爵は暇

將軍は仕事に追われて、夜も晝も忙しげであつた。彼がこのように忙しそつにして、いかにも事務家らしく立ち廻つてゐるのは、殊に勤めのことである。あまり見かけないことであつた。家の人でさえも、彼の姿を時たまにしか見られなかつた。エバンチン家の令嬢たちははつと、勿論、この人たちの口から、はつきりとしたことは何にも聞けなかつた。おそらく、この人たちだけの時にさえも口数は少なすぎるくらいであつたらう。この令嬢たちは傲慢なほどプライドの強い人であつたから、どうかするとお互いの間でさえも打ちとけないやうなところがあつた。尤も、最初の一言はおろか、最初の一眼で、お互いの心の奥底まで理解し合うほどの仲であつたから、あれこれと無駄な口を利かなくとも充分に事足りたのであろう。

ところで、縁もゆかりもない人が局外からこれを觀察したならば、いささかなりとも以上に述べた凡てのことを綜合して、公爵はただの一度、それもほんの一寸の間、顔を出したにすぎなかつたにも拘わらず、兎にも角にも、特殊な印象をエバンチン家の人たちに残して去つた。このことだけは斷言できたであらう。恐らくはこの感銘さえも、公爵の奇矯な舉動によつて惹き起された單に好奇心であつたかも知れない。しかし、それはどうあらうとも、印象を残して行つたといふことは明白な事實である。

町じゆりに擴がつた様々な噂も次第々々に暗々裡に葬られて行つた。そうした噂というのは、事實、次のやうなものであつた。ある愚かしい公爵が（誰も正確に名前を知つてゐる

乞いを言いにゆくことさえもできなかつた。とはいへ、エバンチン自身は、そのとき二度三度と公爵に會ひ、或る重要な事柄について公爵と打ちあわせはしたのであるが、家族の者には、このことを、おくびにも出さなかつた。それといふのも、公爵が出發してから、かれこれ一カ月の間、エバンチン家では彼の話をしなかつたからである。ただひとり將軍夫人、リザヴェータ・プロコフィヰナだけは一ばん最初に「わたしは公爵に向つて、ずいぶんひどい思い違いをしてゐた。」と、自分の胸中を打ち明けるのであつた。しかし、それから二三日たつと、もはや公爵とはつきり名を指さずに、誰といふこともなく「わたしの一生のうちで最も著しい特徴といへば、性懲りもなく人を見あやまつてばかりゐることだ。」といつたが、十日ほど経つてから、とうとう痲癩を起して、娘たちに當り散らし、「間違ひはもう澤山だ！ 今後そんな間違ひをしてはいけぬ。」と、判決めいた口調で結論した。かなり前から、この一家に、そこはかとない不快な氣分が漂つてゐることを、今は氣づかない譯にはゆかなかつた。何といふこともない重苦しい、神經をいらいらさせる、そうかといつて思ふ存分に口に出しえない、争ひの基になりそうなる或るものが、婚まつていて、誰も彼も面白くないやうな顔をしてゐた。

ものはなかつた。思いがけなく莫大な遺産を譲りうけて巴里の花屋敷の有名なカンカン踊りの踊り子で、目下わが國に在留中の佛蘭西女と結婚したといわれ、また或る者は、遺産を譲りうけたのは、さる將軍で、有名なカンカン踊りの踊り子の佛蘭西女と結婚したのは、露西亞の大へんな金持の商人であり、その男が結婚の席上で酔つ拂つたあげく、ちよつとした見榮のために、丸々七十萬留の近頃の富饒附公債を蠟燭の火で焼いてしまつたとも言つてゐた。こうした一切の風説は忽ちの間に消えてしまつたが、これは大部分は當時の状況の然らしめたところである。例へば、今度の出来事について、多少のことを知つてゐる者の多くはラゴージンの子分たちは、エカテリンゴフ驛で、ナスターシャまでが一しよになつて惹き起した恐ろしい馬鹿騒ぎのち丁度一週間して、ラゴージン自身を頭に立て、一同こぞつてモスクワへ出發し、また、この出来事に關心を寄せていた少數の人々のうち誰彼は、様々な噂によつて、ナスターシャ・フィリップソフがエカテリンゴフで馬鹿さわぎがあつた翌くる日、逃げ出して姿をかくしたことも、その後モスクワめざして彼女が出發したことも突きとめていた。だから、ラゴージンがモスクワさして出發したことは、或る點でこの風説と符合してゐるかのやうに思われた。

仲間たちの間でもかなり名聲のある、ガヴリーラ・アルダリオノフ・イツォルギンについても、また噂が立ちそうになつたが、ある事情が生じたために、彼に關する一切のやからぬ噂は鎮まり、暫らく経つうちに、すつかりあとかたも



なくなつてしまつた。というのは、彼がひどい病氣に罹つて、交際社會はいうに及ばず、勤めの方へ出る事ができなくなつたからである。一月ほど病氣が続いてから、やつと恢復したとはいふものの、どうした譯か、彼は株式會社の勤めをきつぱりと斷つたので、彼の椅子には他の人が代つて坐るやうになつた。彼はエバンチン將軍の家には一度も姿を見せなかつたので、將軍のところにも他の官吏が出入りするやうになつた。ガヴリーラ・アルドリオノキッチに敵意をもつてゐる人たちは、彼奴は己が身に起つた例の出來事のために、すつかり情氣こんで、往來へ出るのさえも恥かしいのだからなどと、勝手な想像に耽つたかもしれない。しかし、實際のところ何かと思ひ患つて憂鬱病にさえかかつて、鬱ぎ込んでいたかと思つと、癪癪を立てたりするのであつた。ワルワラ・アルドリオノヅナはこの冬ブチツインのもとに片づいた。二人を知つてゐる人々は、この結婚は、ガニーニヤが再び職務に就いて、家族の者を養おうとしなくなつたばかりではなく、却つて自分が他人の助力や看護を仰がなければならぬやうな状態に立ち到つたからであると、無遠慮なことを言つていた。

餘談に亘るかも知れないが、エバンチン家では一度としてガヴリーラ・アルドリオノキッチのことを口にしたことはなかつた。まるで、そんな人間はエバンチン家にはかりではなく、この世にいなかつたかのようにあつた。ところが、この家の人々はみな（しかも極めて早く）彼に關する或る極めて注目すべき出來事を聞き知つた。というのは、彼にとつては

眞に運命の岐れ目ともいふべきあの夜、ナスターシャ・フィリップツボヅナのところまで起つた不快な出來事の後で、ガニーニヤは家へ歸つてからも、床に入らず、熱病やみのやうに、いらした氣持で、公爵の歸りを待つていた。エカテリンゴフへ出迎えた公爵は、朝の五時過ぎに、そこから歸つてきた。その時、ガニーニヤは公爵の部屋に入つて、その前の卓子に半焼けの紙包みを置いた。それは彼が氣絶して倒れてゐた時、ナスターシャが贈つた十萬留の金であつた。彼はこの贈り物ができるだけ早く、ナスターシャ・フィリップツボヅナに返してくれるやうにと、くれぐれも公爵に頼むのであつた。ガニーニヤは部屋に入つて來た時は、敵意に充ちた殆んど自暴自棄といつてもいいやうな氣持になつてゐた。けれど、二人の間に二三の言葉が取り交わされてから、ガニーニヤは公爵の側に二時間も坐り込んで、その間、しきりに聲をあげて泣いてゐた。別れ際には、二人はもう友情に充ちた親しい間柄になつてゐたといふ。

エバンチン一家の人たちの耳へ入つたこの風説は、後になつて全く本當だといふことがわかつた。こうした類いの風説が、このやうに早く人に知れ亘つたのは、いうまでもなく不思議なことに、相違なかつた。例えばナスターシャ・フィリップツボヅナのところまで起つた事の一切が、殆んど翌くる日のうちに、それもかなり微細にわたつてエバンチン家に知られてしまつたことであつた。ガヴリーラ・アルドリオノキッチに關する報告は、ワルワラ・アルドリオノヅナの手によつて、エバンチン家へ運ばれたものと考えられる。彼女はなせ

かしら急にエバンチン家の令嬢たちのところへしげしげと出入りするやうになり、間もなくリザヴェータ・プロコフイーダが驚ろいたほど親密な間柄になつた。しかし何かの理由でエバンチン家の人たちと、このやうに親しくなるの必要と考へていたにしても、自分の兄のことは決して口に出さうとはしなかつた。自分の兄を追い出さんばかりに取り扱つた家と交際はしていても、彼女とても性根のある、かなりブライドの強い女だつたからである。その以前にもエバンチン家の令嬢たちを知らないわけではなかつたが、顔を合やすことは極めて稀であつた。尤も、今でさえ彼女はつかつかと客間に入るのではなく、何か知らぬところを逃げこむやうな風をして裏口から入つて來るのであつた。リザヴェータ・プロコフイーダは、ワルワラ・アルドリオノヅナの母ニーナ・アレクサンドロヅナを非常に尊敬はしてゐたが、今まで一度としてワルワラを招待した例がなく、今もつて少しも氣にはとめなかつた。彼女は驚ろいたり怒つたりして、ワリーヤと交際をしてゐる娘たちの氣まぐれと我の強いせいにして、『あの子たちは、もう、私に逆らうだけの思案が、つかなくなつたものですから……』といつてゐた。しかし、ワルワラ・アルドリオノヅナは、結婚する前と同じやうに、結婚のあとも、相かわらず、令嬢たちを訪問することをつづけていた。

ところで、公爵が出發してから一ヶ月ばかり経つた頃、エバンチン將軍夫人は『ベラコンスカヤのお婆さん』から一通の手紙を受け取つた。年老いたベラコンスカヤ公爵夫人はそ

の二週間ほど前に、某家に嫁いだ長女を訪ねて、モスクワへ行つたのであつた。この手紙は將軍夫人に強い感銘を與えたかのように思われた。この手紙のことは娘たちにも、イワソ・フォードロキッチにも何一つ知らせはしなかつたが、かなりに興奮してゐることは、多くの點から家の人たちには察しがついてゐた。彼女は娘たちをつかまえて、奇妙な突飛もないことを話すやうになつた。彼女は何かしら打ち明けたくてならないのを、どうした譯か、じつところらえてゐる様子であつた。手紙を受け取つた日、彼女は娘たちを勧めて、アグラーヤとアデライダには接吻までしてやつた。娘たちに對して何か後悔してゐるらしかつたが、一體それが何のためであるかは、娘たちにもよく分からなかつた。まる一月の間、手ひどく當り散らしてゐたイワソ・フォードロキッチにまでも彼女は急に控え目な態度を見せた。しかし、それも勿論、翌くる日になれば、昨日自分があまりにも感傷的であつたことを殊のほか腹立たしく思い、晝食の前には、散々みんなと口喧嘩をしたりしてゐた。ところが、夕方になると、また空模様がよくなつた。それは兎も角として、概して、この一週間ばかりといふものを、彼女はここ暫らくの間は見られなかつたやうな珍らしく晴れやかな氣持で過したのであつた。

それから一週間して、また、第二の手紙が、ベラコンスカヤ夫人から届いたが、今度はもう將軍夫人も皆に打ち明けることにした。彼女は勿體ぶつた様子をして、『ベラコンスカヤのお婆さん』が（彼女は公爵夫人のことを蔭で話す場合に



は、いつもこう呼ぶのであつた。『ほら……戀人の、例の公爵のことで大へん安心の出来るうよな事を知らせて来た。』とこう言つた。お婆さんはモスクワであの人を探し出し、色んなことを調べて、或る極めていいことを聞き出したのである。そして最後に、公爵が自分の方からお婆さんの所へ出かけて大變いい印象を與えた。このことはお婆さんが、彼に毎日一時から二時までの間に遊びに来てくれるようにと招待していることを見ても明らかであつた。『毎日毎日、あそこへ行つてくれるけれど、未だに飽かれていないのだよ。』と、こう結んでから、將軍夫人は更に公爵は『お婆さん』の紹介で立派なお邸にも二三度出入りするようになったと附け足した。『それに、いつまでも長居することもなく、馬鹿者にありがちな恥かしがりもしないのは結構なことだわ。』

こうした報告を聞いた令嬢たちはすぐさま、母親がこの手紙のこととまだいろいろのことをかくしているにちがいないと氣がついた。或いは、令嬢たちはこのことをワルワラ・アルドリオノヅナから聞き出したのかも知れない。ワルワラにして見れば公爵のこと並びにそのモスクワ滞在中の出来事についてブチツインの知つてはすつかり知ることとできるし、また無論、實際にも知つていたからである。しかもブチツインは、誰よりも一番くわしく知つていなければならなかつたのである。それに、彼は實際的交渉では恐ろしく口かずの少ない男ではあつたが、ワリーにはきつとこのことを知らせていたにちがいないのである。將軍夫人はこれを知ると、忽ち前にもましてワルワラ・アルドリ

する噂、つまり遺産の事實に關して取沙汰されたことは一切本當のことであるが、よくよくしらべた結果、遺産そのものは最初、やいやい言われたほど莫大なものではないといふことが分かつたのである。その財政状態は半ば紛糾していて、負債は發見されるし、甘い汁にありつこうとするような人間も出て来るような調子だつた。ところが公爵は人々が何と忠告しようとするは構わず、極めて非實務的な態度をとつたのである。『まあ、これはいいさ』と『沈黙の氷』の割れた今となつては『衷心から將軍はこう言つて喜んだ。それも『やつこさんは少しばかりあれなんだけれど、いいところがあるから』』と思つていたからなのである。しかしなんと云つても、公爵はそのとき莫迦なことをしてかしたのである。例えば、故人の債權者の商人が係争中のものであると言つて怪しい證書をもつて来るし、また或る者は公爵のことを嗅ぎつけてまつきり證書もたずにやつて来たのであるが、それに向つてどんな態度をとつたかという、あんな連中、あんな債權者なんて少しも權利なんかありはしないと語り友人達の忠告に耳もかさず、殆んど大抵のものに満足と與えてやつた。しかも、それは彼等の中の或る者たちが實際に苦しんでいるといふことが分かつたから満足させてやつたに過ぎないのである。

將軍夫人はこのことについて、ベラコンスカヤからも似よりの手紙をうけとり、『馬鹿、なんて馬鹿なんだろう、手のつけられない馬鹿だ。』ときつい調子で言い足したが、むしろこの馬鹿な行爲を悦んでいる様子が彼女の顔つきから窺い

オノヅナを嫌うようになった。

しかし何れにしても氷は割れてしまつたのであるから、急に大聲に公爵の話をすることが、出来るようになったのである。その上、公爵がエパンチン家に惹き起したまま立去つた、異常な印象と並々ならぬ強い好奇心とが今や一と際あざやかに本體を現わしたのである。將軍夫人はモスクワから送られた報告が娘たちに深く感銘を及ぼしたのには驚ろいてしまつた。また一方、令嬢達の方でも、母親の態度には驚ろかされた。なぜかというに將軍夫人は、『わたしの一生の一番目にたつ特徴といへば、人のことで性慾もなく思ひがちがいはかりしていることとす』などともつともらしい口をきいて置きながら、そのかげにまわつてはモスクワに滞在中の公爵に氣をつけてくれるように『權勢家』のベラコンスカヤ婆さんにたのみこんでいたことが分かつたからである。しかもこの『お婆さん』というのが、どうかすると却々興の重い人だから、この人にこんなことを依頼するにはよほど泣きおとすようにして頼みこまなければならぬのである。

さていよいよ氷が割れて新しい風が吹きはじめると、將軍も急にうちあげた話をしたので、この人もまた非常な興味をもつて事件の成り行きを見ていたことが始めて分かつた。しかし彼がうちあげたところはただ『事件の實際的方面』に過ぎなかつた。將軍の語つたところというのは、彼は公爵のためをおもんばかつて、公爵、特にその指導者サラズキンの行動を看視するようにモスクワのある方面でなかなか羽振りのいい勢力ある二人の人に依頼したのである。それで遺産に關

知られるのであつた。こうした夫人の様子的一切から、彼女が公爵に對して、まるで生みの子に向けるような心くばりをしていゝるのに將軍は氣づいたのであつた。そして夫人はどうしたのか恐ろしくアグライヤを可愛がり出した。これを見た、イワン・フォードロキツチは當分の間恐ろしく事務的なよそよそしい態度をとつていた。

しかしこの愉快な氣分もやはり永くはつづかなかつた。二週間ほど過ぎた頃、またしても或る變化が起つた。將軍夫人は顔をしかめ、將軍は二三度肩を顫わして再び『沈黙の氷』の中に身をとざした。その理由というのは次のようなことなのである。短いではつきりしないところはあつたが、しかも正確な或る秘密の報告を二週間まえに將軍はうけとつた。それによると、最初モスクワで姿を隠し、すぐその後で同じくモスクワでラゴージンにさがし出されたかと思つと、またどこかへ行方をかくして、またまた彼にさがされたかと思つた。イワン・フォードロキツチが、ついに彼と結婚しようといふ固い言葉を與えた。ところが、それからほんの二週間きりたないな中に、ナスターシャ・フィリップポヅナが三度目に、殆んど結婚の瀬戸際になつて逃げ出し、今度はどこか地方の縣下に行方をくらました。ところが、一方ムィンキン公爵も自分の事務の一切をサラズキンの管理にまかせたまま、モスクワから姿を消したという報告がまたもや閣下のもとにとどいた。

『あの女と一緒に、その跡を追つたのか——そのへんのところははつきりしないが、何か曰くがありそうだ。』と將軍は言葉



からぬ報告をうけていた。で結局公爵が出發してから二カ月の間に、ペテルブルグにおける彼の噂は、一切きえてしまつて、もはやエバンチン家の『沈黙の氷』はもう破られることがないのであつた。とはいへ、ワルワラ・アルドリオノヅナが令嬢たちのもとを訪れることには變りはなかつた。

こうした噂や報告などの一切にしまくつておけるため、次のことを言い添えておくことにしよう。春も近づいた頃、エバンチン家には極めて數々の變化が起つたので、自分の方から便りもしなければ、またしようもしなかつた公爵のことは自然と忘れられるようになった。遂に、夏が來たら外國へ行こうという目論見が冬の中に次第に根を擡げて行つた。と言つてもこれはリザヴェータ・プロコフィヅナと令嬢たちだけの話で、將軍は勿論こうした『くだらない氣晴し』に暇つぶしをするようなことはできなかった。このように話が始まつたのは、自分達が外國へやらないのは兩親とも揃つて、いつもいつも自分たちの嫁入話にばかり夢中になつてゐるからだとすつかり信じていた令嬢たちの執拗な主張が徹つたためであつた。若しかすると兩親の方でもとうとう、婿さがしのこととは外國に行つてもできるから、一夏くらい旅行しても嫁入話のさまたげにはならないくらいか、『却つて工合よく』なるかも知れないと考へ直したのかも分らなかつた。ところでちよつと言つておくが、以前交渉中であつたアフアナシイ・イワーノキツチと、エバンチン家の總領娘との結婚はすつかり破談になつてしまつたのである。そこで彼の正式の申込はしなくて専ら舞になつた。これは自然にそうな

つたのであつてとり立てて言うほどの相談もなく、少しの家内争いの争いも起らずに済んだのであつた。公爵の出發とともに双方から話がなくなつてしまつた。ところが、將軍夫人はその時、『やつとのこと、兩手をひろげて十字をきりたいほどうれい』と、言いはしたものの、この事情の幾分かはエバンチン家のその當時の重苦しい氣分の原因となつたのである。將軍は自分が悪かつたと思つて、不首尾をこぼしてはいたが、それでも永いこと怒つていた。彼はアフアナシイ・イワーノキツチを『あのよきな財産、あんなに如才のない男を！』と惜しがつていた。

間もなく將軍は、アフアナシイ・イワーノキツチが來朝中の上流の佛蘭西夫人の王朝正統派の公爵夫人に釣り込まれて結婚式を擧げた上、一と先巴里へ行き、それからブルターニュかどこかへ行くと言ふことを聞き出した。『ふん、佛蘭西女奴と道ゆきか。』と將軍は言い放つた。

そこで、エバンチン家では夏近くなれば出發することにして用意萬端をととのえていた。と、思いがけなく、また一切のことをすつかり變更するよきな事情が生じたために、旅行はまたしても延期され、將軍と夫人を喜ばした。モスクワからペテルブルグへSという公爵がやつて來たのである。この人は有名な、と言つても極めていい意味において有名な人であつた。意識的に心の底から有益な事業に従事することを欲し、絶えず働き、いたるところの仕事を見出すという幸福な珍らしい性質をもち、謙讓にして清廉な、いわば現代的な活動家の一人であつた。見榮を張つたり、政黨的な冷徹な空論

を避け、自分を一流の人物だなどと思ひこむよきなことのないこの公爵は、近ごろ世上に起つてゐる多くの事物に對して根本的な理解をもつていた。彼は初め官省に勤めたが、その後には引きつづいて地方の事業に關係するようになった。それ以外に、彼は露西亞の幾つかの學術團體の有力な通信員でもあつた。また知合いの技師と協力して、蒐集された報告や調査にもとづいて計畫中の重要な鐵道の一つに一層正確な方針をつけることにも力をつくした。年は三十五くらいであつた。『上流社會甲の上流人』であつた彼は、そればかりでなく、ある重大な用件で、自分の長官にあたる伯爵のところを訪ねた際に、彼と出逢つて知合いになつた將軍が批評したように、『立派な、しつかりした争うべからざる』財産家でもあつた。公爵は露西亞の『事務的な人々』と近づきになることをのがさない自分獨特の好奇心のために、將軍の家族の人々とも親しくなつたのである。三人姉妹のうちで、眞中のアデライード・イワーノヅナが彼にかなり強い印象をあたえた。春も近づいた頃、公爵は己が心をうちあけた。彼はアデライードの心になつていたばかりでなく、またリザヴェータ・プロコフィヅナ夫人の心にもかなつていた。自然、旅行は延期され、結婚は春と決められた。

しかし、旅行は別れたアデライードを思う悲しみを忘れるために、リザヴェータ・プロコフィヅナと、その二人の令嬢の二カ月の散歩と言つた恰好で、夏の半ばから終りへかけて實行されることになつていた。ところがまた、ほかに或る新な事情が生じたのである。もはや春も終り近い頃であつたが

(アデライードの結婚は少しばかり行きちがいがあつて夏の半ばまで延期されてゐた。) S公爵はエバンチン家へ、遠い親類の一人であるが、自分とは極めて親しいエツゲネイ・バヴロキツチ・エルという男を伴つてきた。この男はまだ若く二十八くらいで、侍從武官であり、名家の出であるし、繪に描かれたよきな美男子で、そのうえ『新しい』男ときいてゐるのである。將軍はこの財産ということにかけてはいつも慎重な態度をとつた。そこで彼はさつそく取り調べをして、『どうもそうらしい、まだまだくわしく調べて見ないことには分からんが。』と言つた。この若くてそのうえ『將來のある』侍從武官はモスクワのペラコンスカヤお婆さんには一方ならず持ち上げられていた。ただ一つ、ちよつとばかりむずがゆいよきな世間の風評があつた。つまり、關係のあつた女性ばかりなりな數にのほり、『不幸な心』を『征服した』こともあるというのであつた。アグラレーヤを見てからは、彼はエバンチン家にすいぶん長居をするよきなやつた。實際のところ、何も口に出して言つたわけではなく、また何か謎めいたことを言つたでもないが、この夏は外國旅行などのことを考へることは無駄なよきに兩親は思つていた。が、アグラレーヤ自身には、或いは他のちがつた意見があつたのかも知れない。

これは、この物語の主人公が再び登場する、殆んど直前に起つた事なのである。見たところでは當時ペテルブルグでは哀れなムシキン公爵のことを、もうすつかり忘れてしまつたかの如くである。若し、彼が以前の知合のところへ姿を現わしたならば、恰も天から降つて來たよきに思われたことで



あろう。しかしそれはともかく、いま一つの事を讀者に傳えて、それでこの前書きを終りたいと思う。

コオリヤ・イヴォルギンは、公爵の出発後も、ずつと以前のまゝの生活をつづけていた。つまり中學に通い、親友のイッポリットのところを訪れ、將軍の看取りをし、ワリーヤの家を手傳つたり、走り使いをしたりしていた。しかし下宿人は間もなくなくなつてしまつた。フェルデシチェンコはナスターシヤの事件があつてから三日後に、どこかへ飛び出して行き、そのまま姿を見せなくなつたので、彼の噂はすっかり消えてしまつた。どこかで酒をくらつていたと言ふ人もいたが、確かな事は分からなかつた。それに公爵もモスクワへ出發してしまつたので、下宿人は皆いなくなつた譯である。その後、ワリーヤが嫁入りをした際、ニーナ・アレクサンドロヴナとガーニヤは一緒にイズマイロフ聯隊の近くのプーチーインのもとへ引き移つて行つた。ところで、イヴォルギン將軍はどうかというに、これと殆んど時を同じうして全く思いがけない事件が起つて、彼は債務監獄に收容されたのである。將軍はこれまで度々、友人の大尉なる細君に額面二千留ほどの證文を渡したことがあるが、これがもとで債務監獄に收容されるようになったのである。これは彼が夢にも見たことのないことであつた、不仕合せな將軍は『概して言うならば人間の高潔な心を一途に信じたがためにみじめな犠牲』となつたのである。氣輕な氣持で借金證文や手形に署名する習慣のあつた彼はいつかはこうなるとはしよつちゆう考えてはいたが、それ程ときめんに效力を生じようとは思わなかつた。

も喧ましくは言わなかつた。家の人々には不思議でならなかつたのは、ガーニヤが例の憂鬱症にかかつているにも拘らず、まるで友達に對するよきな態度でコオリヤと話をしたり、應待をしたりすることであつた。こんな様子は今迄に見られなかつたことである。それと言ふのも、これまで二十七歳のガーニヤは、自然と年のちがう十五歳の弟に少しも情愛のある注意を向けようとはせず、亂暴な振舞をし、家の者にも嚴格なことをばかり要求して、事ごとに『耳をひつばるぞ。』と脅やかすのであつた。だからコオリヤは人間として我慢のできる最後の限界を踏み越えてしまつたのである。ところが今ではもうガーニヤにとつてコオリヤはどうかすると、なくてはならぬものと思われた。あの時ガーニヤが、金を突きかえしたと言ふことは幾分コオリヤを驚ろかした。このためにコオリヤは、大概のことは兄を許してやろうという氣になつたのであつた。

公爵が出發してのち、三月経つてからイヴォルギン家の人は、コオリヤが突然エバンチン家の人々と近づきになり、そのうえ令嬢たちからは、なかなか優遇されているという噂を耳にした。ワリーヤはすぐこのことに氣がついた。つまりコオリヤはワリーヤを経て近づきになつたのではなく、『自分の方』で近づきになつたのである。彼は次第次第にエバンチン家で可愛がられるよきになつた。將軍夫人は最初の間、彼が出入りするのをかなり不快に思つていたが、やがて、コオリヤが『率直で、おべつかを使わない』のを知るに及んで、彼を寵愛するよきになつた。コオリヤがおべつかを使わ

かつた。ところが、そうではなかつたのである。『こんなことであつた後で、どうして人を信ずることができよう、貴い信頼の情を示すことなんかできるものか。』と將軍は債務監獄で新しく友達になつた者と一緒に坐つて悲痛な調子で叫ぶかと思つと、酒壺を前に控えて、カルス包圍にまつわる逸話や蘇生した一兵士の話をするのであつた。監獄の中に行つてはいつても、彼はのちのちとした氣持で暮らしていたのである。プーチーインとワリーヤは、そこが彼にとつて一番似合の場所であると言つた。ガーニヤも、それにすつかり同意した。しかし、ただひとり不仕合せなニーナ・アレクサンドロヴナだけは、人知れず苦い涙をしばつていた。(このことは家の人にはかえつて不思議に思われた)が、暇さえあれば、しげしげと債務監獄にいる夫のもとへ出向いてゆくのであつた。

コオリヤの所謂、『將軍の事件』以後、つまり姉の結婚以來と云ふものは、コオリヤは家の人々と交渉を絶つて近頃では夜寝泊りに家にかえつて來ることも珍らしいのであつた。聞くところによると、彼は新しく様々の人々と交際を結んだと言ふことである。それにまた債務監獄では余りに顔を知られ過ぎたほどであつた。ニーナ・アレクサンドロヴナがそこへ行つたとき、彼がいなくてはどうにも方法がつかなくなつたからである。それでも家の人々は、ちよつとした物好きの氣持からでも、彼にとやかく言つてうるさがられるよきなことはしなかつた。以前コオリヤに口やかましく言つていたワリーヤも、いま弟が方々うろつき廻つてゐることについて何

ないのは全く事實である。時には夫人に新聞や雑誌を讀んで聞かせることもあり、日頃よく身體を動かしてはしたが、この家の中で充分對等の立場で應待するだけの氣概はもつていた。ところが二度ばかりリザヴェータ・プロコフィーヴナ夫人とひどく口論したことがある。その時コオリヤは、あなたは暴君だ、もうあなたの家になんか足踏みしやしないと宣告した。最初の時は『婦人問題』がもとで爭論を惹き起し、二度目のときは、ひわをとるには一年中でいつが一番いいかと言ふ問題からであつた。

嘘のように思われるかも知れないが、將軍夫人はそれから三日目に、せひ來てくれるよきにと従僕に手紙をもたしてやつた。コオリヤはこれにとやかく言ふこともなく、さつそく出向いて行つた。どうしたとか、アグララーヤ一人だけはいつても彼にいい顔を見せず、お高くとまつているよきな態度を示した。ところがコオリヤが幾ぶん彼女を驚ろかすよきな運命を擔つていたのである。あるとき、復活祭ちかくのことであつた、コオリヤは機會をねらつてアグララーヤに一通の手紙を渡して、誰も人のいないときに渡してくれといつてたのまされたのだと言つた。アグララーヤは恐い目で『自惚れな小僧つ子め』と睨みつけた。しかしコオリヤはそのまま出て行つた。彼女は手紙をひろげて、讀み始めた。

『嘗て、あなたは僕を深く信頼して下さいました。恐らくあなたは今では一切をお忘れになられたかも知れませんが、なぜ僕があなたに手紙を認める氣持に



なつたのでしよう？ 僕にはわかりませんが、しかしあなたに、他の誰でもなく是非あなたに僕のことを思い出していただきたいと言う希望が、押えても押えても私の心に起つて来たのです。あなたの方お三人は僕にとつてはなくては叶わぬ人です、僕は幾たび思つたことでしょうか。ところが僕はお三人のうちでいつもあなたばかりを見ていたのであります。あなたには僕にとつてはなくては叶わぬ方です。どんなことがあつてもなくては叶わぬ方です。僕は自分のことについて別に何も書くこともなければ話すこともありません。私自身もそんなことをしようとは思いません。僕はただもう、あなたが幸福でいらつしやればと望むばかりです。幸福にお暮らしてください。僕の申し上げたいのはただこれだけです。

あなたの兄なるエル・ムイシキン公爵

この短い、かなり無意味な手紙を読み終えると、アグライヤは、俄かに顔を赧らめて考え込んでしまつた。彼女の思想の流れを伝えるのは困難なことであろう。しかし、確かに彼女は『誰かに見せようかしら？』と考へた、しかし、彼女は何かきまりが悪いような氣がした。で、とうとう蔑むような變な微笑みを浮べて、手紙を自分の小机の抽斗へ抛り込んだ。ところが翌くる日になると、再び彼女はそれを引き出して、堅牢な背皮の装幀にしてある厚い本の間に挿んだ。(彼女は自分の書類を必要に応じて、すぐ探し出すことができる

に。

あなたを愛する公爵、エル・ムイシキン

『事もあろうに、こんな水腫れの小僧を信用するなんて滑稽だわ。』アグライヤは手紙をコオリヤに返しなから、思々しげにつぶやいて、侮蔑し切つた顔をして彼のそばを通りすぎた。

コオリヤはもう我慢がならなかつた。彼はわざわざこの時とばかりに、ガーニヤに譯も話さずに無理矢理にもらつて来た、まだ新らし緑色の首巻を巻いていたのであつた。彼はひどく憤慨した。

2

六月もまだ初めの頃であつた。ペテルブルグには珍らしく、もう一週間もずつと美しい天氣がつづいていた。エパンチン家では、バザロフスクに豪奢な別荘をもつていた。リザヴェータ・プロコフィーヴナは俄かに思い出して、そわそわしながら、二日の間あれこれと騒ぎまわつたあげく、バザロフスクへ移つて行つた。

エパンチン家の人々が移つて行つてから二三日たつて、モスクワ發の一番列車でレフ・ニコライキッチ・ムイシキン公爵がやつてきた。彼を停車場に出迎えるものは誰もいなかったが、公爵が車を出たとき、その列車で到着した人々をとり

ように、いつもこうするのであつた。一週間はかりたつて、不圖、ゆくりなくどんな本だつたか覗いて見ると、それは、『ラマンシュのドン・キホーテ』であつた。アグライヤはそれをみておそろしく笑いこけたが、何故か分からなかつた。彼女が二人の姉のどちらかに、この獲物を見せたかどうか、やはり分らないのである。

しかし、彼女はもう一度この手紙を讀んだとき、不意に頭に浮んだことがあつた。一體、あの己惚れ屋で意張りやの小僧を公爵が通信員などに、恐らくはこの土地での、頼りになる唯一人の通信員などに擧げなんことがあつたものだろうか？ とふと思ひ浮べたのである。全く馬鹿にしきつたような表情を浮べて、ともかく彼女はコオリヤを捉えて訊いてみた。すると、いつも憤りつばい『小僧』が、この時は彼女の馬鹿にしきつた表情には少しの注意も向けずに、極めてさりげない様子で説明するのであつた。公爵がペテルブルグを出發するに當つて、彼は自分の住所を公爵に知らせ、何か用事があつたら報らせてくれるように言つて置いたのである、そしてこの手紙を頼まれたのが初めての使命であり、また初めての手紙であると。そう言つてから、彼は自分の言つたことを證明するために、自分宛に来た手紙を出して見せた。アグライヤは躊躇することなく手紙を讀んだ。コオリヤ宛の手紙には次のように書いてあつた。

『コオリヤさん、どうか同封の手紙をアグライヤ・イワノヴナさんに渡して下さい。では、お大切

團む群衆の中で、思いがけなく誰かの焼けつくような異様な雙の眸が閃めいたように思われた。彼が注意を凝らして見つけたときには、もはやそこに何もものを見つけ出すことができなかつた。勿論、ただちらりと閃めいただけではあるが、それは不愉快な印象となつて残つた。そんなことがなくても公爵は物悲しく考へこんで、何かしら心がかかりな様子であつた。

辻馬車は、リティヤ通りからほど遠からぬ一軒の宿屋に彼を運んだ。宿屋は見すほらしいものであつた。公爵は粗末な道具のある、うすぐらい、さして大きくない部屋を二つ借りて、手水を使い、身仕舞をととのえて何も註文せずに、あたかも時間を無駄にするのが惜しいのか、或いは訪ねる先の人不在になりはしないかと心配しているような様子で、大急ぎで表へ出た。

半年まえ公爵が初めてペテルブルグにやつて来た頃の知合いの人が誰か、公爵をいま見たならば或いは彼の風采がずつと立派になつたと言ふであろう。しかしそれもどうかはつきりしたところは疑わしいのである。ただ服装だけはすつかり變つていた。服はモスクワの立派な洋服屋の仕立たものであつたが、やはり服にも缺點があつた。というのは餘り流行に適いすぎた仕立なのである。律氣ではあるが、餘り上手でない洋服屋のやりそうなことであるが。それに服を着ける人が、流行などには少しも關心を持たない人なのであるから、よほどの物好きな人がよくよく公爵を眺めたら、或いは



どこかに笑いたくなるようなところを見つけ出すかも知れない。それにしても、世の中には滑稽なことと言うものは決して少くはないのである。

公爵は辻馬車を備つて、ベスキイへ走らせた。彼は間もなくロヂェストヴェンスカヤ通りの一地點で一軒のさして大きくからぬ木造の家を探した。公爵が驚ろいたことには、この家は見つきが綺麗で、小ざつぱりして、草花を植えた小さな庭園がついて居り、なかなかきちんとしていた。通りに面した窓は開け放たれて、その中からは何だか大聲で演説でもしているように、殆んど叫ばんばかりの聲が鋭く耳に聞こえてきた。その聲は時おり幾たりかの人の高い笑い聲に遮られた。公爵は庭へ入つて階段を上り、レーベジェフ氏に面會を求めた。

「あれなんでございますよ。」と袖を肘のあたりまでまくりあげた女中が戸をあけてから「客間」を指さした。

この「客間」は暗緑色の壁紙を張りめぐらし、小ざつぱりしてはいるが、裝飾が幾分ごたごたしすぎていた。圓い卓子や長椅子、鐘形の硝子で蔽われた青銅の置時計、窓と窓との間の壁に懸けられた細長い鏡や、天井から青銅の鎖で吊るされた、幾つもの硝子玉で象眼の施こされた、さして大きからぬ古風なシャンデリヤなどが置かれていたのである。その部屋の中央に、夏らしく上着なしで胴衣一枚のレーベジェフその人が、入つてくる公爵の方に背中を向けて立つていた。そして自分の胸を叩きながら、どんな題目かは分からないが、聲をばりあげて雄辯をふるつていたのである。聞き手は、よろめいた。すると、彼はもうその方は止して、すぐに今度は隣の部屋の上の立つたまま、さつきの笑いの名残をどめて十三ばかりの女の子に襲いかかった。女の子は思わず悲鳴をあげて、そのまま臺所へ逃げこんだ。レーベジェフはまだ脅やかしてやろうと、逃げてゆく女の子の後ろで足を踏みならした。が、公爵の困りきつたような視線に出逢うと言いわけを始めた。

「敬意を……表すため、へへへ！」  
「あなた、そんなことをしたつて……」と公爵が始めて言葉を出した。

「ほんの一才、一寸です、すぐです……韻卷のように！」  
レーベジェフはこう言つて素早く部屋から姿を消した。

公爵はびつくりして、娘や少年や、長椅子の上に寝そべつて居る青年を眺めた。すると誰もが笑い出したので公爵も笑つた。

「燕尾服を着に行つたんです。」と少年が言つた。

「何て忌々しいことなんでしょう、」と公爵が言いかけた。

「僕はあの……ねえ、あの人は……」

「酔つ拂つて居ると思われたんですか？」と長椅子から叫び聲がした。「少しも！　そうですなあ、杯に三つか四つくらい、まあ五つくらいですか、ただ、そんなのあ、何でもありませんよ——いつものことですよ。」

公爵は長椅子の聲の方を振り向こうとした。が、そのとき娘が可愛い顔に素直な表情を浮べて言い出した。  
「あの人はあまり澤山はいただきませんの。あなた、何か御

書物を手にかけている、快活で、かしこそいな十三才ばかりの少年と、兩腕に乳飲兒をかかえ、喪服につつまれた二十才くらいの若い女と、やはり喪服を着て、口を大きくあけてしきりに笑つて居る十三才の女の子であつた。ところが最後に今一人、かなり奇妙な聞き手がいた。濃く長い髪をし、黒い大きな眼をして、ほんのおしるしばかりの鬚鬚を生やした、顔色は浅黒くはあるが、かなり美しい二十歳前後の青年である。この青年は長椅子の上に寝そべつて居た。この聞き手はレーベジェフの演説をしよつちゆう遮つたり彌次つたりしているらしかつた。きつと他の者たちが笑つて居たのはこれがためである。

「ルキヤン・チモフエーキツチ、ルキヤン・チモフエーキツチ！　まあなんてんでしよう！　ちよつとこつちを御覽なさい！　ふん、つまらないつたらありやしない。」

そう叫ぶと女中は兩手を一振りして、怒つて眞赤になりながらその場を立ち去つた。

レーベジェフは後を振りかえつて、公爵に氣つくと雷に打たれたように、暫しの間、突立つていた。やがて卑屈な微笑を浮べると、彼の方に驅け出したが、感覺を失つたように闕の上に立ち止まつて、

「公爵、さ、さ、さま！」

とだけ辛うじて言つた。

しかしまだ落ち着いて居ることができなかつたらしく、何と言つても譯もないのに、突然、喪服を着て兩腕に乳飲兒を抱いて居る娘に飛びかかつた。娘は不意をくらつて、よろよろと

用件でしつたら、今仰つしやつて下さい。いい折ですわ。夕方かえつて参りますと、もう酔つ拂つていますから。それに近頃では大い夜は泣きながら寝る前に私たちに聖書を讀んで聞かせますの。五時間前に母がなくなりましたので。」

「あの人が逃げ出したのは、きつとあなたに返答するのがむずかしいと思つたからにちがいませんよ。」と言つて長椅子の上の青年は笑い出した。「あの人はあなたをごまかそうとして、いまその計畫を考えて居るのですよ、決して間違

いありません。」

「まだ五時間にしかありません！　五時間にしかありません！」

「燕尾服を着込んで、眼をしよほしよほさせ、涙をふくためにポケットからハンカチを出しながら、レーベジェフは部屋にかえつて来た。

「親なし兒です！」

「何だつてあなたはそんな穴だらけの服を着て来たんです。」と娘が言つた。「だつてあすこの向うに新しい燕尾服があるじゃありませんか、見えないんですか？」

「生まれ、せつちかち！」

「だまれ、せつちかち！」

「まあ何を威かしていらつしやるの。私、ターニ……じやないから、逃げ出したたりなんかしなくてよ。そら、リニーボチカが眼を覚ますわよ、それに虫でも起つたらどうなるのよ……大きな聲なんか出したたりして？」

「と、と、とんでもない！　舌が腫れちやうぞ……ばかな！」



とレーベジェフは恐ろしく狼狽して、娘の腕に抱かれて睡っている乳飲兒のそばに走りより、あわてた恰好をして二三度十字を切つた。「神よ、守りたまえ。神よ守護をたれたまえ。これは私の實の赤ん坊でリュボーフィと言ひ娘でございませぬ。」と言つてから公爵の方を向いて、「この間なくなつた――難産で死んだ妻のエレーナと法律上の正當な結婚で産まれた兒でございます。この餓鬼は私の娘のエーラで、喪服を着せとくんです……ところで、これは、これ、お、こいつは……」

「どうしてしまひまで言わないんです？」と青年が叫んだ。

「さあ次を、もじもじすることは無い。」

「旦那！」と何かしら俄かに胸をつかれたようにレーベジェフが叫んだ。「ジェーマリ一家の殺人事件を新聞でお讀みになりましたか？」

「讀みました。」公爵はいささか驚いて言つた。

「ところで、こいつがその下手人です、こいつなんです！」

「あなた何を言うんです？」と公爵は言つた。

「まあ譬喩的にいえば、来るべきジェーマリ一家のその下手人です。この先こんなことがもう一度あるとすればですがね。こいつはそれを待ちかねているんですよ……」

一座の者はみな笑い出した。ことによつたら、レーベジェフは公爵にいろんなことを訊かれはしないかと思つて、それに何と答へたらいいか分からないものだから、どうして時を過ぎそうかと、そのために仕方なく變なことをばかり言つてい

「謀反してるのです！ たくらみを持つて居るのです！」とレーベジェフは、もう我慢していられないと言つたように叫んだ。「私は一体こんな悪態つきを、こんな放蕩者の碌でなしを肉身の甥と思わねばならぬのでしようか。死んだ妹アニーシャのたつた一人の息子と思わなけりやならぬのでしようか？」

「もう止しなさい。おまえさんは酔つ拂つて居るんだから！ 公爵、まあ考えてごらんなさい。この男はねえ、辯護士稼業をはじめ、訴訟事件をあさり歩こうと、思い立つたんですよ。それで、もう美辭麗句に夢中になつて、家の中で子供たちを擱まえては、しよつ中しかつめらしい言葉ばかり使つて居るんです。五日まえに裁判官の前に立つて喋つたんですが、一體だれを辯護したと思ひますか。身代かぎりの五百留の金を畜生みたいな高利貸に奪い取られた婆さんが、この先生に拜んだり祝福したりして頼んだのですが、それには耳も藉さず、報酬の五十留に眼が昏んで、相手のザイドレルとか何とかいう猶太人の高利貸のために、辯護したんですよ……」

「勝つたら五十留というんでして、負けたら、たつた五留です。」と今まで喚いたことなんかないと言つたような、打つて變つた聲でこう説明した。

「いや、勿論、飛んだ恥さらしでしたよ。何しろ法式つてのが昔とは違ふんですからね。ただもう皆さんのお笑ひを買つたばかりです。ところがこの人はすつかり満足して居る始末なんです。」「一點の私心なき裁判官諸賢よ、高潔なる勞働に基づいて生活せる足なしの同僚すべき老人が、一片の最後

の麵麩をまさか失わんとしつつかある事實を思い出して頂きたい。立法者の聰明なる一語法廷ニ於テハ、懇情ヲ旨トスベシ」を思い出して頂きたい」つてやらかしたですよ。それに、どうでしょう。この人は毎朝この演説を法廷でやつたときそのまま、わたし達にきかせるんですよ。今日で五度目です。あなたのいらつしやつた時までやつていたんです。それほど気に入つて居るんですよ。自分がやつて自分で感心して居るんですからね。それにまた誰だかを辯護しようとして居るんですよ。あなたはムィシキン公爵のようでございますね？ コォリ、あなたがあなたのことを言つていましたよ。世界中でああなたより賢い人には今まで出會つたことがないつて……」

「ないとも！ ないとも！ 世界中でこれより賢い人があるものか！」とレーベジェフが、すかさずその言葉尻をとつて言つた。

「だが、こいつは嘘だとしましよう。或る者はあなたが好きだし、また或る者はあなたに取り入ろうとして居るでしよう。だが私は決して、あなたにおべつかをせおうなんて思ひませんからね。これは篤と御承知おきねがいます。だが、あなたもまんざら分別のない方じやございません。ところで是非、この人と私を裁いていただきたいのですがね。そら、どうだい、公爵が私たちを裁いて下さるうと仰つしやるんだがな？」と彼は叔父に向つて言つた。「公爵、あなたが都合よく來合して下すつたので、大変喜んで居ますよ。」

「賛成！」とレーベジェフは仰々しく叫んだが、又つめかけて來た人々を思はず振りかえつて見た。

「あなた方は一體どうしたんです！」公爵は若々しい顔をして言つた。

彼は本當に頭痛がして來た。それにレーベジェフが自分を騙そうとして居り、事件に遠ざかつてゆくのを喜んで居ることが段々はつきり分かつて來た。

「先ず様子をはつきり述べておきますが、僕はこの人の甥です。この人はしよつちゆう嘘ばかり言つて居るんですが、これだけは本當のことを言つていますよ。僕は學校は卒業しなかつたけれど、卒業したいと思つて居ます。意地になつてこの一念を通すつもりです。しかし生活のために當分の間二十五留で鐵道のある仕事をするにしています。本當のことを言いますと、この外に二三度僕に補助してくれました。僕は金を二十留もつていましたが、カルタですつかり取られてしまいました！ 公爵、何と云ふことでしょう、僕はカルタですつかり取られてしまつたような、やくざな碌でなしなんです。」

「ごろつきにやられたんです。金を拂つてやらなくとも構わないごろつきですよ。」とレーベジェフが叫んだ。

「そらだ、ごろつきではあつたが、拂つてやらなきやならなかつた。」と若者は言葉をつづけた。「あいつがごろつきだつてことは僕が證明するよ。しかし何もおまえさんを殴りつたからつて言うんじやないよ。公爵、そいつは古手の士官、以前ラゴージンの一黨に加わつて居た退職中尉です。今は拳闘の教師をしています。ラゴージンに追つ拂われてから、今じやあの連中はみなぶらぶらして居ますよ。何よりも一番い



けないことは、あいつがごろつきで悪黨で、こそ泥だつてことを萬々承知していながら、あいつを相手にカルタをしたことです。それに最後の一留まで、賭けようつて段になつて（僕はバルキイをやつたんです）、負けちまえばルキヤン叔父貴のところへ行つて泣きつこうと腹の中で考えたことですよ。これは實際下劣なことです、恐ろしく下劣なことです！これは全く意識的な卑屈な根性です！」

「これは全くひどい意識的な卑屈な根性です！」とレーベジエフが同じように繰りかえした。

「ふう、そう喜びなさんな。ちよつと待つて、」と甥はいまいまげに叫んだ。「あいつめ、悦んでいる。公爵、僕はここへ来て、すつかりぶちまけてしまつたんですよ。僕は恥かしいような態度はとらなかつたんです。僕は自分を容赦しなかつたんです。僕はこの男の前でできるだけ自分で自分を罵倒しました。ここに居る者がみな證人です。鐵道の仕事に出るについてはどうしても何とか身なりをととのえなきやなりませぬ。なんたつて、こんな襪襦ですからね。まあ、この長靴を見てごらんさいよ！これじゃ仕事になんか出られませぬよ。それにきめられた時までに行かないと他のやつに仕事を取られちまいますからね。そうなる僕はまだ一文なしで、當分の間、他の仕事をさがし廻らなくちやなりません。いまこの男に僕が無心しているのは、たつたの十五留なんです。それに、今後はもう絶対に無心もしないし、この借金も三カ月以内の一哥残さず綺麗に耳を揃えてかえすと約束しているんですよ。僕だつて約束は守ります。僕だつて意地つ

ばゆすりみたいなきことをしているのだと僕が自分で知らないまでも、お考えなんですかね。しかし、ねえ、公爵、あなた……世間つてものを知つていられないんですよ。こんな奴らは、うんとたたきこまなければ、何も分らないんです。教えてやらなくてはならんです。僕の良心は綺麗なものです。僕は良心に誓つて、この男に損はかけませぬ。利子を添えてかえしてやります。この男はまた精神的賠償をうけています。なぜつてこの男は自分の前で卑下した僕の姿を見ているんですからね。このうえ一體何が入用なんです？この男がどんな役に立つたことをしています。どんな利益を齎らしています？まあ、考えてもごらんさい。この男がしていることは何ですか？この男が他人にどんな仕打をしているか、どんな騙し方をしているか、何で暮らし向きを立てているか聞いて御覽なさいよ。もしこの男があなたを騙したり、今後もどんな風に騙そうかと王夫をめぐらしていなければ、僕は首を切つてあげますよ！あなたは笑つていますね、本氣になさらないのですか？」

「やつぱり、僕、あなたの仰つしやるのが全然あなたの柄に合わないような氣がするんですがね！」と公爵が言つた。「僕はもう三日ここに寝ていますから何も彼もよく見ているんです。」と若者は公爵の言葉には耳も藉さずこう叫んだ。「まあ、どうでしょう、この男は。そら、この天使のような親なし娘の僕の従妹、自分の娘のところ、いい男でもやつて來はしなかつて疑ぐつて毎晩監視してらんです！それに、僕のいるところへもこつそりやつて來てはこの長椅子の

てものがありますから、二三月そこいら位は麵麩とクワスでやつてゆきます。三カ月の間には俵給が七十五留もらえるでしょう。以前の分と合わせて僕が借りる金は三十五留なんだから、返すのはわけはありませんよ。利息はいくらだつて取るがいい、この野郎！この人にや僕つてものが分らないのかしらん？公爵、この人に聞いて見て下さい、以前僕に都合した金を返さなかつたかどうか？一體どうして今度はいやなのかと言えれば僕があの中尉に拂つたのを面白く思つていないんですよ。ほかに理由なんかありません！

「こんな野郎なんですよ。とても手に負えない！」

「出て行くとうもしないんですよ！」とレーベジエフが叫んだ。「ここに寝たつきり出て行かないんですよ。」

「それだから、僕がそう言つたじやないかよ。借してくれるまでは出て行かないつて。公爵、何を笑つていらつしやるんです？大方、僕が間違つて言つて言うんでしよう？」

「僕は笑つてなんかいませんが、僕には、ほんとのところ、あなたが少々まちがつているような氣がします。」公爵は仕方なくこう答えた。

「それじゃ、僕が全然まちがつていると、はつきり言つて下さい。ごまかしはよして下さい。『少々』とは、何のことで

す！」

「そう言われるんでしたら、全然まちがつています。」

「そう言われるんでしたらつて！とんだお笑い草ですなあ！こんなことをするのは氣がひける。それに金はこの男のものだし、意志もこの男のものだ。だから、僕の方から言え下まで探りはじめらんです。疑いのあまり氣運いにでもなつたんでしよう。どこにもここにも、泥棒がいるような氣がしているんです。一晩中、ひつきりなしに飛び起きちや窓がよく閉つているかどうか見たり、戸口の門を調べたり暖爐の中を覗いて見たりするんです。一晩に七遍位つこんなことをやるんですよ。法廷じや、いんちきな辯護をやつた癖に、夜になると三遍も起きてお祈りをやらかすんですよ。そらこの座間に膝まづいて三十分も額を床にすりつけ、相手構わず思いつき次第に祈りをあげてやつて、思いつき次第のお祈りを讀んでやるんです。酔つ拂つた勢いでやるんでしようね？又、デュバルリ伯爵夫人の魂の安息を祈つてのを、僕はちやんと、この耳で聞いたことがありますよ。コオリヤも聞いたんですよ。全く氣ちがい沙汰ですよ！」

「見て下さい。聞いてやつて下さい。こいつがわたしに恥をかかしています！」とレーベジエフは根くなつて、夢甲になつて叫んだ。「わたしは多分、酔つ拂いで、ごろつきで、泥棒で悪黨には違ひござんすまい。しかしです、人に恥をかかしているこいつをまだ小つちやな赤ん坊の時分、わたしがお襦袢でくるんだり盥で洗つてやつたり、乞食みたいな見すほらしいやもめ暮らしをしていた姉のアニシの所へ、これらもまた乞食みたいな私が行つて、毎晩、夜つびてまんじりとせせず、こいつら母子二人のために看病してやり、下の門番のところから薪を盗んで來たり、こいつに獸を唄つて聞かせたり、指を鳴らしてみせたり、そんな工合にして空き腹をかかえて守をしてやつたものです。それをこいつは忘れやが



つて、いまこの私をばかにしているのです。それにいつか、おれがデューバルリ伯爵夫人の魂の安息を願うて祈つたらつておまえにそれが何のかかわりがあるんだ？ 公爵、私は四日前に初めてこの伯爵夫人の傳記を辭典で讀んだのです。それじゃ貴様はこの御夫人が、デューバルリがどんな方だか知つていやがるのか？ 知つていゝかどうか言つてみるよ！」

「ふん、そりや、そんなことを知つていゝのはおまえさんきりだろよ！」、嘲笑的な態度ではあつたが、あまり氣のりしない聲で青年はこう言つた。

「この方は賤しい家から出なすつた方だが、女王様に代つて政治をなすつたような立派な方なんだぞ。それからなあ、或るお豪い皇后さまが、この方にお送りになつた御親翰には、*« ma cousine »* (私のいとこ) といふ書かれてあるんだぞ。羅馬法皇の使節、カルヂナルがお自分の方から申し出て、レヅ・デ・ラアのために (貴様このレヅ・デ・ラア) といふのが何だか知つてるかえ？) この方の素足に絹の靴下をはかせたといふことだぞ。しかも使節はそれを非常な名譽と思つてなされたのだぞ。こんな風に氣高い御威光のあられるお方なんだ！ 貴様はそれを知つていゝか？ 貴様の面つきじや知つていゝそうもない！ それに、夫人のお亡くなりなすつたときの様子を知つてるか？ 知つてるなら答えてみるよ！」

「引つこんでろ！ うるさい」

「おかくれなすつたのはこうなんだ。こうした名譽なことのおつた後で、一時は、一國の政治までなすつたこのお方を何つてたまるもんか！ それにほんとうにぬすみ聞きしたのなら、貴様は嘘をついていゝ。おれはな、デューバルリ伯爵夫人ひとりのためにお祈りをあげたんじやないんだ、*「氣高き罪びと、デューバルリ伯爵夫人と、それに同じきあまたの罪びとの魂に安息を垂れたまえ。」* といふお祈りしたんだぞ。これとあれじや、すつかり事情がちがうからなあ。なぜつて、そんな風のえらい罪びとや、運命の手ひどい變化に會つた人や、不幸に苦しみにぬいて來た人などが數多くあつた世で、いま申したりして安息を待ちのぞんでいゝんだぞ。それに、貴様は、おれがお祈りをしていゝ時に、ぬすみ聞きしたのなら、おれは貴様と同じような碌でなしのためにも、また……」

「もう澤山だ。結構だ。誰だろうと、好きな奴の爲に祈るがいいや、この野郎、大きな聲を立てやがつて！」と甥は忌々しうに遮つた。「この男はわれわれの中じや一番の物識りなんですよ、公爵、あなた、御存じなかつたんですかい！」と何だかぎごちない冷笑を浮べて言ひ添えた。「今でもしよつちゆう、いろんな本や記録を讀んでいゝですよ。」

「あなたの叔父さんは決して……思いやりのない人じやありませんよ。」と公爵は氣のないような調子でこう言つた。

公爵にはこの青年が非常にいやらしくなつて來た。

「あなたは、なんだか家のこの男をいやに褒めますね！ よござんすか、こいつはねえ、胸に手をあてて口を一文字に結んでいゝが、すぐに慾望が頭をもたげて來るんですよ。恐らく思いやりのない男じやないでしょう。しかしべてん師でしようなあ。それが遺憾ですよ。それに飲んだくれでしてね、

の罪もないのに、ただ巴里の彌次馬の氣晴しのために、サムソンという死刑執行人がギロチンに曳つぱり出したんだ。このお方は恐怖の餘りご自分がどうなつていゝのかも分からないう。夫人は死刑執行人が自分の頸をつかまえて刃の方に押しながら足蹴にしているのに氣づかれると——これを見て他の見物人はどつと笑つたのだぞ——*« Encore un moment, monsieur le bourreau, encore un moment ! »* と叫ばれたんだ。

つまりこの言葉の意味は、*「もう一分間お待ち下さい。首斬さん、ほんの一分間だけ！」* といふんだ。それはこの一分間の間に神様が御夫人を赦して下さるからだぞ。なぜつて人間の魂をそれ以上も残酷な目にあわせるなんて想像もできないことじやないか。貴様は残酷つて言葉の意味を知つていゝか？ うん、こんな事こそ残酷といふものなんだぞ。このもろ一分間つて言う夫人の叫びを本で讀んだ時、おれの心臓はまるで火箸でさされたような氣がした。それなのに、やい、蛆蟲め、おれが夜、寝しなにこのお方、この御立派な罪びとの事をお祈りしたからつて、それが貴様に何のかかりあひがあるんだ。それにおれがこのお方のためにお祈りしたのはなあ、おそろしく今日までこのお方のために誰ひとり十字を切つた人間がないからなんだぞ。それに誰一人こんなことを考へて見たこともないだろう。あの世にいられる御夫人も、御自分と同じような罪びとが、ほんの一度だけでも自分のために地べたに額づいてお祈りしてくれたと知られたら、うれしく思つて下さるに、違ひないぞ。貴様、何を笑つていゝやがるんだ。貴様にや信じられないんだ。不信仰のため、貴様に分か

もう幾年も酒をくらつていゝ奴にはよくあるんですよ、この男も身體中の螺旋がゆるんじまつて、そのためどこもかしこも、ぎいぎい軋つていゝ始末ですよ。この人は亡くなつた叔母を本當に尊敬していらしんですが……僕までも愛してくれましてね、それにちやんと遺言狀に、ほんとうです、僕に財産の一部を譲ると言つていゝですよ。」

「な、なにを譲るもんか！」とレーベジエフは物凄く調子で叫んだ。

「いいですか、レーベジエフ。」公爵は青年から顔をそらし、心に固く決するところがあるように言ひ出した。「僕は經驗して知つていゝますが、あなたは實際的な人間です。ただその氣になりさえすれば……僕はいま非常に忙がしいので、それで、若しあなたが……失禮ですが、あなたの名と父稱は何と言ひますか？ 僕わすれたもんで。」

「チ、チ、チモフエイ。」

「そして？」

「ルキヤノキツチ。」

部屋にいたものがまた大きな聲で笑ひだした。

「嘘つけ！」と甥が怒鳴つた。「また嘘つきやがつた。——公爵、この男は決してチモフエイ・ルキヤノキツチというんじやありません、ルキヤン・チモフエーキツチですよ。ふん、なんだつてお前は嘘をつくんだい？ おい、ルキヤンだろがチモフエイだろが、お前にはどつちだつていいじやないかよ？ そんなことをしたつて、公爵になんのかかりあひもないじやないか。嘘をつくのが、もうすつかり習慣になつて



「いるんですよ。ねえ、ほんとですよ！」  
「一體ほんとうなんですか？」たまたまなくなつて公爵はこう訊ねた。

「ルキヤン・チモフェーキツチです、ほんとのところ。」とレーベジェフは本當のことを言つて、きまり悪るそうにして、おとなしく眼を伏せて再び手を胸の上に置いた。

「ほんとにあなたは何だつてそんなことを言うのです。なんて下らないことを言う人でしょう！」

「自分を卑下しようと考えましたもので、」段々おとなしく頭をたれながらレーベジェフがつぶやいた。

「ええ、一體それでどんな卑下ができようつていうのです！僕はただコオリヤがどこにいるか、ただもうそれが分かれば！」と公爵は言つて、くるりと後ろ向きになると、そのまま出て行きそうにした。

「コオリヤがどこにいるか僕が教えてあげましょう。」と青年が口を出した。

「と、と、とんでもない！」と言つてレーベジェフは飛び上つて急にあわて出した。

「コオリヤは昨晚ここに泊つたんですが、朝になると、親父の將軍をさがしに出かけましたよ。公爵、一體なんだつて金なんか出して將軍を『監獄』から貰い下げたんです。將軍は昨晚ここに泊りに來ると言つていたのに、やつて來ないんです。きつとここから大して遠くない『はかりや』つて宿屋に泊つたんでしょう。だから、コオリヤはそこか、バヴロフスクのエバツン家ですよ。あいつ少々ばかり金を持つていまし

ね？」

「真面目ですよ、真面目ですよ、やつぱり婚禮の間際だったんです。こつちじや一刻も早くと待ちかねているのに、あのひとはこのペテルブルグに、わたしの所にまつすぐにやつて來たんです。『救けて頂戴、かくまつて下さい、ルキヤン。公爵にも言わないで。』とこう仰つしやるもんで、公爵、あの人はあの男よりもあなたの方をすつと恐れていられますよ。それにここが……實に素晴らしいひととしてねえ！」

こう言つて、レーベジェフはするするな様子をして指を額にあてて見せた。

「で、あなたは今度もまた二人を引き合わせたんですね？」

「公爵様、どうして……どうしてそうせずにいられますか！」

「いや、もう澤山です。僕は自分ですべてのことを探し出します。しかしただこれだけは言つて下さい。あのひとは今どこにいますか？ あの男の所にですか？」

「お、どういたしまして。いや、いやあのひとはまだ獨り身でいられます。わたしは自由だつてあのひとは仰つしやつていられますよ、公爵、本當にあのひとはわたしは全く自由の身だつて、しきりと言つていられるんですよ。手紙でお知らせした通りペテルブルグ區のうちの女房の妹ん所にいらつしやいますよ。」

「今でもそこですか？」

「そこでございます。そこにいらつしやらないとしますと、こう天氣がいいから、バヴロフスクのダーリヤ・アレクセーヴナの別荘でございましょう。あのひとは、わたしは全く自

たから、ゆうべも行きたいつて言つていましたよ。だから、どうしても『はかりや』でなければバヴロフスクですな。」

「バヴロフスクですよ。バヴロフスクですよ……だが一つ、われわれはあちらの庭へ行つて……コーヒーでもやろうじやありませんか。」

こう言つてレーベジェフは公爵の手をとつて誘いだした。

二人は部屋を出て、小さな空地を通つて耳門の中へ入つた。そこには至つてささやかな可愛い庭があつて、快晴つづきのために、木立がもうすつかり青葉を見せていた。レーベジェフは地面に打ちこまれた緑色の卓子に向つた緑色の木のベンチに公爵をかけた。レーベジェフはその向いに席をとつた。間もなくコーヒーも本當にはこぼれて來た。公爵は辭退もしなかつた。レーベジェフは卑屈な表情を浮べてじつと貪るように公爵の眼の色をうかがつていた。

「あなたがこんな世帯を持つていることは僕は思いもかけなかつたですよ。」公爵は全く他のことを考えている人のような調子でこう言つた。

「み、みなし兒が、」とレーベジェフは身體を反らせながら言いかけたが、そのまま口を噤んでしまつた。公爵はほんやりと自分の前の方を眺めたが、勿論もう自分が今し方、訊ねたことを忘れていた。また二分ほど経つた。レーベジェフはやはりじつと公爵を見つめながら待つていた。

「ええと、何でしたつけ？」ふいに氣づいたように公爵はこゝろ言つた。「ああ、そうだ！ ねえ、レーベジェフさん、あなたに僕の用件が何かよく分かつているでしょう。僕はあ

なたの手紙でやつて來たんですよ。話して下さい。」  
レーベジェフはどきどきして何か言ひそうにしたが、ちよつと吃るような聲を出しただけで、言葉は一切も出なかつた。公爵は暫らく待つていたが、その後で愁わしげに微笑みをもたらした。

「ルキヤン・チモフェーキツチさん、僕にはあなたの氣持がよく分かるような氣がします。きつと僕が來ようなどとは思ひがけなかつたでしょう。一度ぐらいい知らせたつてあんな邊鄙なところから僕がこのこに出向いて來るなどは考えなかつたでしょう。そして良心に對する言い譯のために手紙をくれたのでしよう。ところが、僕はこの通りやつて來ましたよ。さあ、もう澤山ですよ。騙すのはおよしなさい。一君に仕えるのはもう澤山ですよ。ラゴージンがこの土地へ來て二週間になるつてことは、僕も知つています。あなたはこの前の時のようにあのひとをラゴージンに賣つたんですか。そうじやないんですか？ 本當のことを言つて下さい。」

「あのごろつき奴が自分でさがし出したんです、自分で。」

「あの人の悪口はおよしなさい。そりや、勿論、あの人もあなたに對してよくないことはしたでしょうが……」

「どやしつけやがつたんです。どやしつけたんです！」と恐ろしく興奮してレーベジェフは公爵の言葉尻をついだ。「モスクワじゆうの街という街には到る所に犬を放しやがつたんです。牝の獵犬を。物凄い犬でしたよ。」

「レーベジェフさん、あなたは僕を子供扱いにするんですね。あのひとは今度もラゴージンをモスクワで棄てたんです

ね？ 真面目に話して下さい。」

「真面目ですよ、真面目ですよ、やつぱり婚禮の間際だったんです。こつちじや一刻も早くと待ちかねているのに、あのひとはこのペテルブルグに、わたしの所にまつすぐにやつて來たんです。『救けて頂戴、かくまつて下さい、ルキヤン。公爵にも言わないで。』とこう仰つしやるもんで、公爵、あの人はあの男よりもあなたの方をすつと恐れていられますよ。それにここが……實に素晴らしいひととしてねえ！」

こう言つて、レーベジェフはするするな様子をして指を額にあてて見せた。

「で、あなたは今度もまた二人を引き合わせたんですか？」

「公爵様、どうして……どうしてそうせずにいられますか！」

「いや、もう澤山です。僕は自分ですべてのことを探し出します。しかしただこれだけは言つて下さい。あのひとは今どこにいますか？ あの男の所にですか？」

「お、どういたしまして。いや、いやあのひとはまだ獨り身でいられます。わたしは自由だつてあのひとは仰つしやつていられますよ、公爵、本當にあのひとはわたしは全く自由の身だつて、しきりと言つていられるんですよ。手紙でお知らせした通りペテルブルグ區のうちの女房の妹ん所にいらつしやいますよ。」

「今でもそこですか？」

「そこでございます。そこにいらつしやらないとしますと、こう天氣がいいから、バヴロフスクのダーリヤ・アレクセーヴナの別荘でございましょう。あのひとは、わたしは全く自



由だつて申されるんではございますよ。きのうもまたニコライ・アルドリオノキツチをつかまえて御自分の自由なことをずいぶん御自慢なすつていられました。何だか起りそうな前兆ですよ！」

こう言つてレーベジェフは變な笑いを浮べた。

「コオリヤはよくあのひとのところに行くんですか？」

「どうも輕はずみで口の輕い、祕密の守れない人です。」

「あなたはそこへ永らく行かないんですか？」

「毎日行きます、毎日。」

「じゃ、昨日も行ったんですね！」

「い、いえ、先おとついでです。」

「レーベジェフさん、あなたは少しきこしめているから、どうも残念ですね！ でなければ、あなたにお訊ねしたいことがあるんですけれども。」

「ちよつ、ちよつ、ちよつとも、これつばかりもそんなことは！」

こう言つてレーベジェフは反り身になつた。

「どうしてあのひとを見棄てて来たんですか？」

「あなたが別れてくるとき、あの人はどんな様子でしたか聞かして下さい。」

「さ、さがしてる風で……」

「さがすつて？」

「いつも何か探していられるようなんです。何かなくなつたという様子で。結婚が間近に迫つていて考へるだけでも氣持が悪くなつて腹が立つらしいのです。あの男なんか密冊

のですと、わたしは申しますとあのひとにもこれに賛成してくれましてね。なぜつて現代の世の中では、一切のものが秤と取引とで持ちきり、人間という人間がたでも權利を要求するのに血眼ではございせんか。「一ディナリイに小麥一升、一ディナリイに大麥三升」つてわけですよ……おまけに自由の精神だの、純潔な眞心だの、健康な肉體だの、神様のありつたけの賜物を保存して置くつていうのだから大變なんですよ。しかし權利ばかりで、それをしまつて置くわけには行きませんので、そのあとからその名を死という蒼ざめた馬がやつてくる、またそのあとから地獄……まあとにかくこんな風のことに見が一一致したのです。それに——かなり效き目がありましたよ。」

「あなた、自分でそう信じているんですか？」いぶかしげな

眼をしてレーベジェフを見ながら公爵はこう訊ねた。

「信じていますからこそ講義もするのです。なぜつてわたしは無一物で赤裸で、人間輪廻の二元素に過ぎないですからね。それに誰がレーベジェフなどを尊敬してくれますかい？

どいつもこいつもわたくしにきつくあたり、この男を足蹴りにしかねないので。だが、この講義によりますと、わたしも貴族と同じものです。なぜつて智慧のおかげです！ それもある貴族は叡智でもつてそれを感じ……長椅子の上にかけるれたまま顔を出されたつてことです。わたしが、まだ役所に勤めて居りました頃、あのニール・アクサーキツチ閣下は三年前の復活祭の前週にわたしのことをお訊きになつて、ピョートル・ザハリツチを通じて、當直室からわざわざ御自分

の皮ぐらいにしか思つていられんです。ほんとに、それつきりのことですよ。いや、それつきりじゃない。怖ろしい怖ろしいという氣はなかなか強うござんして、あの男の話をすることは禁ぜられています。どうしてもこうしても避けるわけには行かんという場合にはまあ話すこともありすがね……それにあの男もこれによく氣がついています！ 一騒動は免れんですよ……落ちつきのない、人を馬鹿にしたような、二枚舌を使う、人に突かかつて行くような女ですからね……」

「二枚舌をつかつて飛びかかつて行く女ですつて？」

「突かかつて行くんですよ。この間もある話のことから危うくわたしの髪を引つ掴まなければかりの權幕でしたよ。わたしは黙示録を讀んで、何とかその場をつくろいましたかね。」

「何でしたつて？」聞き違えたと思つて公爵はこう聞きかえした。

「黙示録を讀んだんですよ。あの御婦人は落ちつきのないことを空想する方ですつてね、へ、へ！ それに眞面目な譯あいのことなら、御自分に關係のないことにだつてずいぶん熱心になられるつてことは、ちやんとこの眼で見ましたよ。好きなんですわねえ、好きなんですわよ、そして御自分やそれをずいぶん偉いもののように考へておられます。全くです。わたしも黙示録の講義にかけちや相當なもので、十五年も講義してありますよ。われわれ人間つてもものは第三の生物たる黒馬と、その上に神を持つて跨がつた騎者と一様に生活している

の書齋にお呼びになつて、二人きりになつたとき話し向いて『おまえは反基督の教授だつていうが本當のことか？』とこゝろ問われました。それで私はかくし立てもせず『いかにも左様でございます』とお答え申し、事細かに仔細を申し述べ、臆しもせず意見を披瀝しました。またその上わざわざ諷刺畫の卷物や數字まで出して見せたものです。すると閣下は微笑んで聞いておられました。諷刺畫やなんかを御覽になると、身顛いされて、もう本を閉じてあつちへ行けと申されましたよ。そして復活祭の間には私に褒美をやるつて申されてはいましたが、そのすぐ前に魂を神様に返してしまわれました。」

「レーベジェフ、あなた何を言つていらんですか？」

「ありのままをでございます。御飯をいただかれたその後で幌馬車からおつこちなされて……踏台で顛顛を打たれて、そのまま子供のよう、まるで子供のよう、おかくれなすつたんです。履歷書によりますとこの方は七十三才としてありますが、緒ら顔をされ、白髪で、體中に香水をふりまかれていらつしやつて、いつも微笑なされて、もうまるで子供みだいな方でした。その當時、ピョートル・ザハリツチが思い出されては『おまえの豫言のとおりじゃつた。』とよく言われていたものでしたよ。」

公爵は立ち上ろうとした。レーベジェフは公爵が立ち上つているのを見ると、驚ろいてあわて始めた。

「馬鹿に冷淡におんななさいましたね、へ、へ！」と彼はあ

\*ディナリイ……古羅馬の銀貨



てつけらしく卑屈な調子で言った。

「本當に、僕、なんだか體が變なんです。頭が重くつて、旅の疲れかも知れませんが。」公爵は澁い顔をしてこう答えた。「別荘にでもいらしてはいかがでしょうか？」とレーベジェフはおおずと遠まわしにこう言った。

公爵はじつと考えこんだまま佇んでいた。

「その、私も三日ばかり経つたら、家の者みんなをつれて別荘へ行こうと思つています。今度生れた雛つ子の體のためにもいいし、その間にこの家の手入れも出来ますから。私の別荘もやつぱりバヴロフスクにあるんですよ。」

「あなたもやはりバヴロフスクへ？」と公爵はいきなり訊ねた。「一體それはどうしたんです。この人はみんなバヴロフスクへ行くんですか？ それに、あなたも今言つていられたましたね、御自分の別荘があるつて？」

「みんながみんなバヴロフスクへ行くのじやござんせんが、イワン・ペトロキッチ・ブチーツィンが安い値段で手に入れた別荘の一つを、私に譲つて下さいましたんで。それに、あそこは氣持のいいところですよ。高臺にあつて青葉につつまれ、物價は安くつて、土地柄は上品で音楽的です。だもんですから誰も彼もバヴロフスクへと押しかけるんです。尤も私は離れの方に入つて、別荘の母屋の方は……」

「貸したんですか？」

「いい、いいえ、全く貸して……しまつたつてわけじやございませぬ。」

「僕に貸して下さい。」突然、公爵はこう申し出た。

「で？」

「例のあの方がこのひとと親友なので、どうやら、しよつちゆうバヴロフスクにいらつしやる考えらしいですよ。

何か目的があつて。」

「それで？」

「アグラヤー・イワーノヰナさんは……」

「おお、もう澤山です、レーベジェフさん！」公爵はまるで痛いところへ觸られたように不快な氣持を表わしてこう遮つた。「そんなことはみんな……違つています。それよりか、何時引越しますので？ 僕は少しでも早い方がいいんです。何しろ旅館に泊つているんですからね……」

話を交えながら、二人は庭を出て部屋には入らずに、小さな空地を横切つて耳門に近づいた。

「じや、こうなすつた方がいいでしよう。」遂にレーベジェフが考へついた。「あなたは今日すぐに宿屋からここに引移つていらつしやい。そうすれば明後日私たちは一緒にバヴロフスクにまいります。」

「まあ考へときましよう。」公爵は一寸考へ込みながらこう言つて、そのまま門から出て行つた。

レーベジェフは公爵の後姿を見送つた。公爵が急に氣が抜けたようになつたのに驚ろいた。公爵は立ち去るにあたつて『さよなら』をいうことも忘れ、首を振つて會釋することさえしなかつたので、公爵が日ごろ丁寧で注意深いことを知つていただけにレーベジェフには不思議なことに思われ

レーベジェフはただこれを目あてにして、こうした仄かすような態度に出たものらしい。この考へは三分ばかり前にも

らと彼の頭の中に浮んだものである。しかし彼はどうしても貸手を求めなければならぬというわけではなかつた。もう既に別荘を借りようという人がいて、『恐らく』別荘を借りるだろうと通知をよこしていたのである。レーベジェフは「恐らく」ではなく、きつと借りるだろうと確信していた。ところが今、以前の借貸希望者との約束がまだはつきり決まつている譯でないのを利用して、自分の計算から見ると

非常に利益があると思われ、公爵に別荘を貸してしまおうという考へがふと浮んだのである。「いろんな衝突や局面展開があるぞ。」と彼は心の中にふと想像してみた。公爵の申込みを彼は有頂天にならんばかりに喜んで承諾し家賃に關する公爵のあけすけな問には両手を振つて耳もかさなかつた。

「いや、それはもうあなたのお好きなように。私がすることです。決して御損をかけるようなことはいたしません。」

二人はもう庭を出かかつていた。

「私はあなたに……私はあなたに……お望みでしたら、公爵様、あなたに非常に興味のあることをお知らせ申しますが、あの一件に關することでございますが。」うれしさに堪えかねて公爵の傍に身を擦り寄せるようにして、レーベジェフは囁やいた。

公爵は立ちどまつた。

「ダーリ・アグセーヰナもバヴロフスクに別荘をもつて居られますよ。」

た。

3

もう十一時をまわつていた。今はもう市内のエパンチン家へ出向いたところで、ただ仕事に忙殺されている將軍に會えるだけで、それさえどうやら疑わしいということは公爵もよく承知していた。又、將軍なら多分すぐに自分に會つてくれ、バヴロフスクに、つれて行つてくれるだろうとも考へた。が、それまでには是非訪れたいと思つていた家が一軒あつた。エパンチン家を訪問するのがおくれ、バヴロフスクに行くのが明日になつても仕方ないというつもりで、公爵は行つて見たくなつたある一軒の家を探し出そうと決心した。

尤も、この訪問は彼にとつては危険を帯びたものであつたので、決心がつかずに暫らく躊躇した。この家については、ただサドーワヤ通りから程遠からぬゴロホーワヤ通りにあるということを知つていただけであつた。それで彼はその近くまで行けば、結局、何とかはつきりした決心がつくであろうと思つて、その方に向つて歩き出した。

ゴロホーワヤ通りとサドーワヤ通りの交差点に近づいたとき、彼は非常に高まつて來た胸の鼓動に自分ながらも驚ろいた。彼は心臓がこんなにはげしく打ち出そうとは思ひもかけなかつたのである。多分、一ときは變つた外形のせいであろう、まだ遠くの方から、一軒の家が注意を惹きはじめた。こ



のことを公爵は後になつてから思い出して、『これがきつと、その家にちがいない。』と獨り言のように言つた。そして自分の豫想があつたかどうか確かめるため並々ならぬ強い好奇心を懷いて近づいて行つた。彼は自分の豫想の中していたら、なぜかしらないが非常にいやな氣持を覺えるであろうという氣がした。この家は陰鬱な感じのする大きな三階建てで、一切の裝飾というものがなく、一面くろずんだ緑色に塗られてあつた。尤も前世紀の終り頃に建てられた、この種の家の數はあまり多くはなかつたが、まだ幾軒かは殆んど昔の姿をかえずにそのままテルブルグの（變遷のはげしい）こゝろに街々に残つていた。これらの家の建て方は堅固なもので、壁は厚く、窓はきわめて少く一階の窓は時とすると格子が嵌まつていた。それに一番下の階には大てい兩替屋が住んでいて、その上には兩替屋の世話になつてゐるスウェットツが借りていた。外から見ても、内から見ても、何だか荒寥とした感じ、少しも潤いがなく、一切のものが何だか姿をかくそうとしてゐるような氣がした。ただ家の外形を見ただけで、なぜそんな氣がするのか、それは説明に困難である。勿論、建築上の線の配合が独自の祕密を持つてゐるからであらう。こうした家々に住んでゐるのは専ら商人であつた。門に近よつて門標を見た公爵は『世襲名譽市民ラゴージンの家』と讀んだ。胸の動悸を押ししづめて、硝子戸をあけた。戸は彼の背後で騒がしい音を立ててぱたりと閉つた。彼は正面の階段を二階へ昇つて行つた。階段は暗く粗雑に石で組立てられ、兩側の壁は赤い染料で塗られていた。ラゴージンは母と弟と一

お互いの胸と胸の中に忘れることのできない印象を深く刻みこまれた瞬間も幾たびかあつた。しかし今はもう三月以上も相會うことがなかつたのである。

蒼白い顔の色と、あたかも細かく走るように起る痙攣はまだラゴージンの顔から消え去らなかつた。彼は客を招き入れはしたが、激しく混亂した氣持はまだ、收まつてはいなかつた。彼が公爵を安樂椅子に導き、卓子に向つてかけさせようとした時、こちらは何氣なく彼をふりかえり、並々ならぬ奇妙な重苦しい視線に出會い、胸をつかれて佇んだ。何かしら或るものが公爵の胸を突き刺したかのようであつたがそれと同時にまた何かしら或ることが公爵の胸に思い浮んだようであつた。——それはさつき重苦しい陰鬱な印象である。坐ろうともせずじつと立つたまま、彼は暫くの間ラゴージンの眼を喰入るようにつめていた。その兩眼は最初の一瞬に一入はげしく輝やいていたようであつた。遂に、ラゴージンは微笑みを漏らした。しかしまだ幾分狼狽のあとが残つていて、何だか落ちつかないような様子であつた。

「何だつておまえは、そんなにじろじろと見るんだい？」と、彼はつぶやいた。「掛けるよ！」

公爵は腰をおろした。

「パルフェン」と、彼は口を切つた。「君、素直な氣持で言つてくれたまえ。僕が今日テルブルグに来ることは君は知つていたんだらう、そうだらう？」

「おまえが来るだらうとは考えていたさ。どうだい、間違いつこなかつたらう。」と、相手は毒々しい笑いをうかべなが

緒に、この人氣のない、ひっそりした家の二階を全部使つて暮らしてゐる事を公爵は以前から知つていた。公爵のために扉をひらいた下僕は取次ぎをせず、すぐそのまま先に立つて、長いこと彼を導いて行つた。二人は、壁は『大理石に似せて』塗られ、床は檜の嵌木細工になつており、二十年代風の荒削りな重そうな家具の配置されてある物々しい客間を通り抜け、それから曲りくねりながら小さな何とも知れない部屋を過ぎて、二段か三段の階段を幾たびか上つたり下りたりして、最後にある部屋の戸を叩いた。戸を開いたのはパルフェン・セミヨーノキッチその人であつた。公爵の姿を眼にとめると彼は眞つ蒼になつて、その場に棒のように佇んだ。じつと身動きもせずびつくりしたように視線をこらし、何かしら極度の疑惑にとらわれたように口もとをゆがめて微笑し、石の彫像のように暫らく佇んでいた。——まるで、公爵が訪ねて來ようなどとは全く不可能なことであり、殆んど奇蹟と言つてもいいことだと思つてゐるような様子であつた。公爵はこれに類したことを何かしら前もつて心の中に考へてはいたが、あまりに意外なこの様子には驚ろいた。

「パルフェン、僕は若しか悪い時に來たんじやないかしら。僕かえるよ。」と公爵はおどおどしながら、遂にこう言つた。「ちようど好い時だ！ ちようどいいんだ、」パルフェンは、はじめて我に返つてこう言つた。

二人はおれ、おまえと打ち融けた言葉で語り合つた。二人はモスクワでは屢々出會つて、時には永いこと語り合つて、

ら附け足した。「だが、おまえが今日來るつてことが、どうして分かるものか？」

この答えの中に含まれた鋭い發作的な調子と變にいらした疑問の調子は公爵を一入驚ろかした。

「だが、今日だと知つていたにしろ、何もそんなに怒ることはないじやないか？」公爵はどきまぎしてこうつぶやいた。

「じや、お前は何だつてあんなことを訊いたりなんぞするんだい？」

「さつき、汽車から降りたとき、今君が後ろから僕を見ていた眼そつくりの二つの眼を見たんだよ。」

「へえ！ 誰のだらう、その眼つてのは？」と、ラゴージンは胡散くさそうにこう訊いた。公爵はラゴージンがこの時ぶるぶると身顫いしたように思つた。

「しかし、どうだか分からないよ。人ごみの中だつたから。僕はただぼんやりとそんな氣がしたのかも知れないよ。僕は何かよくぼんやりした氣持になるんでね。ねえ、パルフェン、僕はね、このごろ發作の起つていた五年前によくあつたのと殆んど同じような氣持になるんだよ。」

「何だい、じや、ぼんやり、そんな氣がしただけかもしれないな、おれは知らんよ……」と、パルフェンはつぶやいた。

彼は愛想のいい微笑みを浮べたが、その微笑みには何だか毀れたようなところがあつた。パルフェンがどんなに一生懸命になつて苦心しても貼り合はすことができないもののように、この場合の彼には全く似てもつかないものであつた。

「どうだい、また外國に行くんじやないかい？」と、彼は訊



ねたが、不意にまた附け足した。「おまえ覚えてるかい、去年の秋、二人が一緒にブスコフから汽車に乗つて来たことを。おれはここに來るし、おまえは……マントにくるまつて、ゲートルをはいていたつげな？」

こう言つてラゴージンは不意に笑い出したが、今度はある憎悪の念をむき出しにして、あたかもそれをやつとのことで表に現わすことができたのを悦んで、いるような様子であつた。

「君はここにすつかり腰を据えることにしたんだね？」公爵は書齋を見まわしながらこう訊ねた。

「うん、おれは自分の家にいるよ。ほかにおれのいるところが何處にあるんだ？」

「二人は永いこと會わなかつたんだねえ。君のことに就いや、まさか君がとは思えそうもないような噂を色々聞いたよ。」

「噂なんて色々たつものさ。」と、ラゴージンはぶつきら棒にこう答えた。

「しかし、一黨の連中を追つ拂つて、こうして親御さんの家に引き籠つてるんだから、いたすらもできないね。だが、それも結構だよ。この家つてのは君のもの？ それとも君達共同のものなの？」

「おつ母さんの家だよ。廊下を越してこつちにいるよ、おつ母さんは。」

「君の弟さんはどこにいるの？」  
「弟のセミヨーン・セミヨーン・キッチは離れにいる。」

の卓子や仕事机や事務用の書箱や何かしら書類などの入つた戸棚であつた。幅の廣い赤いモロツキ革の長椅子は明らかにラゴージンの寢臺に使われているものらしくあつた。公爵はラゴージンにすすめられて腰をおろした椅子の向いの卓子の上に二三冊の本が置いてあるのに氣がついた。その一冊はソロゾフの歴史で、擲げられた個所に葉がはさんであつた。周囲の壁にはくすんだ金縁の額の中に黒く煤けた油繪が幾つか懸つていたが、その繪の形を見分けるのは極めて困難であつた。しかしその中で全身の肖像畫が一點、公爵の注意を惹いた。肖像の主は、五十才ばかりの男で、獨逸風ではあるが、裾の長い燕尾服を着こんで、首にはメダルを二つぶら下げ、白髪まじりの短い鬚を生やし、顔は黄色くて、皺が多く、疑り深そうな祕密をつつんだ眼は物悲しく光つていた。「これは君のお父さんじゃないかね？」と、公爵は訊ねた。「そうなんだ。」亡くなつた父親についてすぐさま、何か無遠慮な冗談を口に出してやろうといつた態度で、ラゴージンは不愉快な微笑を浮べた。

「この人は舊教派じゃなかつたのかね？」

「いや、教會へ通つていたよ。實際には舊教派の方が正しいとは言つていたが。スコベツツ派もずいぶん尊敬していたよ。これは親父の書齋だつたんだ。君、何だつてそんなことを訊くんない、舊教派なのかい？」

「結婚はここでするつもり？」

「こゝ、こゝさ。」思いがけぬ質問にラゴージンは身顛いせんばかりになつてこう答えた。

「家族はあるの？」

「獨身だ。お前は何の必要あつてそんなことを訊くんない？」公爵はちらりと彼を眺めたが、何も答えなかつた。彼は突然、考え込んでしまつて相手の問いも聞かぬやうであつた。ラゴージンはそれ以上、問い訊そうとはせず、公爵の様子を窺がつていた。暫らく沈黙がつづいた。

「僕はここに來る途甲、百歩も向うから君の家が分かつたよ。」と公爵が言い出した。

「どうしてそんなことが？」

「僕もさつぱり分らないんだよ。君の家が君の家族全體の外貌を持つてゐるんだ。なぜそんな結論が下せるかつてたずねられても、僕には何とも説明ができないんだ。無論これはたわ言さ。僕はこんなことに自分が氣をつかうなんて怖ろしい位だよ。以前は、君がこんな家に住んでゐるなんて考えもしなかつた。ところがこの家を見るとすぐに『あの男の家はこんなのにちがいない！』と思つたんだよ。」

「ちえつ！」と言つて公爵の漠然とした考えが少しも納得できなかつたので、ラゴージンは當惑したやうな微笑を浮べた。「この家は祖父の時代に建てたものだ。」と彼は言つた。「いつもスコベツツのフルヂャーコフの一家が住んでいたんだ。それに今だつて間借りしてゐるよ。」

「何で暗いんだらうねえ。君も陰氣な様子をしてゐるよ。」公爵は書齋を見まわしてこう言つた。

それは天井の高い薄暗い大きな部屋で、様々な家具類がごたごたとあたり一面に並べてあつた。大部分は大形の事務用

「もう近々？」  
「自分で知つてゐるじゃないか。おれの一存で行くことじゃあるまいし。」

「バルフェン、僕は君の敵じゃないから、何も君を邪魔しようとは思つてゐないよ。このことは以前殆んどこれと同じやうな場合に一度はつきり言つておいたことだが、今またこゝで繰返して言つとくよ。モスクワで君の結婚の話が進んでいるとき、僕は何も邪魔などしなかつたのは君も知つてるんじゃないか。最初あのひとは結婚の瀬戸際になつて、君から『救つてくれ』と言つて僕の所に飛込んできたんだ。僕はあのひとの言つた言葉をそのまま繰返してゐるんだよ。いいかね。」

その後で僕の所から逃出し、それから又君が探し出し結婚の話を進めて行つたんだらう。ところが又しても君のところから逃げ出してここに來てゐるつて言うことじゃないかね。こゝら本當のことなんだね？ レーベジェフが僕に知らせたやうな場合、やつて來たわけだがね。しかしこゝで君等の話越したんで、やつて來たわけだがね。これはつい昨日、汽車は又うまく行つてゐるんだつてねえ。これはつい昨日、汽車の中で君の以前の友達からはじめてきいて知つたわけなんだよ。よけりや言うがね。ザリョーヂェフから聞いたまです。僕がここに來たことについてちや考へてゐることがあつたからなんだよ。それつてのはねえ、僕はどうしてもあのひとを説き伏せて、保養のために外國へ行くようにしようと思つたのさ。あのひとは體も精神も、とりわけ頭がとてゝ亂れてゐるからねえ。それで僕の考へでは、あのひとを非常に親切に介抱してやらなければならぬと思ふんだよ。僕は自分があの



ひとを外國につれて行くなどとは思っていないよ。萬事は僕が表に立たずに進めたいと思つてゐる。僕は君に心の中から本當の事を言つてゐるんだよ。若し君等の間が又うまく運んでゐるつてのがすつかり本當のことなら僕はあのひとの前に出やしない。又君の所にも今後決して来やしないよ。君自身でよく知つてゐる筈じゃないかね。僕はいつだつて君に對して隠しだてなんかしないんだから、君を騙すようなことはないつて。この件について僕の考へてゐることをしよつちゆう言つてゐるだろう。君と一緒にゐるのはあの人の破滅だつて。君にとつてもまた破滅なんだよ……若しかすると、あの入よりもつとひどいかもしれないんだ。もし又君たちが、別れるようになつたら、僕はとてもうれいんだ。しかし君たちの話に邪魔を入れようの、掻き亂してやろうの、そんなことは毛頭考へてはいないんだよ。安心して、僕を疑うのはよしまえ。それに君は、自分でよく知つてゐるじゃないかね。僕はいつだつて君の本當の競争相手になつたことがあるかね。あのひとが僕の所へ逃げてきたときでさえ、おや、今君は笑つたね？何で笑つたね。何で笑つたか知つてゐるよ。それにあのとき二人は別々な町に別れて暮したんだ。そのことは君にはつきりしてゐる筈だ。以前に君によく説明してゐた通り、僕はあのひとを『戀で愛してゐるんじやなくて憐憫の情から愛してゐる。』んだよ。僕はこの言葉が實に適切に言ひ現わしてゐると思ふんだ。あの時君は僕のこの言葉の意味が實によく分かるつて言つたねえ。本當だつたんだらう？分かつたんだらう？ おお何で憎々しそふな眼をしてゐるん

だらう。君は僕にとつては愛すべき人だから僕は君を安心させようと思つて来たんだよ。バルフェン、君がとても好きなんだ。しかしもう行く。そしてもう決して来ないよ。左様なら。」

公爵は立ち上つた。

「ちよつと待つてくれ。」バルフェンはその場を立たずに右手の掌で頭を支えながら、低い聲でこゝろ言つた。「ずい分お前に會わなかつたなあ。」

公爵は腰をおろした。又しても二人は無言であつた。

「レフ・ニコライキツチ、おれはな、お前が目の前にいなくなるにすぐにお前に憎悪を感じるんだ。お前に分れてからのこの三カ月というものは、しよつちゆうお前が憎くつて堪らなかつた。本當のことだ。お前を引つ捉まえ何か毒でもくらわして殺してやりたかつたんだ！ そんな工合だつたんだ。しかし今はものの十五分とけ一緒にいないんだが、もう憎悪も何もすつかり、けし飛んじやつて、以前のようによつぱりお前が好きになつちまつたんだ。もう少し一緒にいてくれ……」

「僕と一緒にゐると、君は僕を信じてくれるんだが、僕がいなくなるとすぐ信じられなくなつて、また疑い出すんだねえ。君のお父さんに似てゐるんだねえ！」やさしい微笑を浮かべ、自分の感情を押しかくすようにしながら、公爵はこゝろ答へた。

「お前と向い合つてゐると、お前の聲を信じてしまふんだ。」

お前とおれとを一樣に見る譯にやゆかないつてことはおれだつてよくわきまえてはゐるんだが……」

「何だつてそんなことまで言うの？ 又腹が立つてきたね。」公爵はラゴージンの態度に驚ろいて、こゝろ言つた。

「だつておまえ、誰もおれたちの意見を訊いてゐるわけじゃないか。」とこちらは答へた。

「おれたちのことはそつちのけで一切きめつちまうんだよ。そら、おれたちが惚れるんだつて惚れ方が全然ちがうだらう。つまり何につけても相違つてもんがあるんだよ。」彼はこゝろ言つてちよつと口を噤んだが、又つづけて語り出した。

「それ、お前は憐憫の情から愛してゐるつて言うだろう。ところがおれはあの女に憐憫なんて少しも感じないんだ。それにあの女は何よりもひどくおれを憎んでゐるんだ。あの女は今じや毎晩おれの夢に出てくるんだよ。そしていつもあの女が他の男と一緒におれを嘲笑つてゐるんだ。なあおまえ、そりや實際のことだものなあ。おれと結婚すると言つておきながら、おれのこととは念頭がないんだからなあ。まるで沓でも取りかえるよな鹽梅だ。お前は本氣にするかどうかは知らないが、おれは思い切つて行く勇氣がないんで、もう五日というもののあの女に會わないんだよ。『何のご用でいらつしやつたの？』とやられると思ふとなあ。あの女にはちよいちよい恥をかかされたからなあ……」

「恥をかかされたなんて？ 何を君はいうんだい？」

「しらつばくされていやがる！ 『婚禮の間際』になつて、おれんところからおまえと一緒に逃げ出したつて、たつた今自分

で言つたじやないか。」

「君は自分では……なんて事は本當に信じられないだらう。」

「じやあの女はモスクワでゼムチュージニコフつて將校と一緒ににおれに恥をかかせなかつたかい？ 恥をかかせやがつたことはよく分つてゐるんだ。それも自分で婚禮の日どりをきめたすぐ後なんだぞ。」

「そんなことはないよ！」と公爵は叫んだ。

「いや確かにそうだ。」と確信してゐるやうにラゴージンは強く言つた。「じや何かい、そんな女じやないでも言うのか？ そりやお前、そんな女でないことは言うまでもないさ。今言つたことはつまらない愚痴だよ。お前と一緒にゐるときはそんな女じやないさ、寧ろ自分じやそんなことを見たら恐ろしがるだらう。ところがおれと一緒にゐる時には徹頭徹尾そんな女なんだ。全くそうなんだぜ。おれを底なしの悪黨だと思つてゐるんだ。ケルレルのことだつて、それ、あの拳闘をやらかす先生のことだつて、おれにはよく分つてゐるんだ——ただおれを嘲弄したためにばつかりあの女の拵えたことなんだよ……まあお前はあの女がモスクワでおれにどんな仕打をしたか、まだ知らないんだよ！ それから金だつて、金はずい分つきこんだものだぞ……」

「それに……君は今でもやつぱり結婚しようつて言うんだねえ！ 一體この先はどんな事になるんだらう？」公爵は恐れながらこゝろ訊ねた。

ラゴージンは重苦しい恐ろしい眼つきで公爵をながめたが何も返事をしなかつた。



「おれはもう五日というもののあの女のところに行かない。」  
しばらく口を噤んでいたラゴージンはやがて話をつづけた。  
「いつだつておれは恐れているんだ。追い立てられはしない  
かと思つて、わたしはまだ自分の魂の主人だから、しようと思  
えば、どんなにしてもお前さんなんか追つ拂つて、自分  
で外國へ行くことができるんですよ、とこう言うんだぜ。外  
國へ行くんだつてことは、あの女がおれに言つたんだよ。―  
と、彼は公爵を意味あり氣な眼つきでながめながら、丁度、  
括弧にでも入れるような調子で言つたのである。そうかと  
思えば人を散々嚇しつけて、しよつちゆう何かしら、おれを  
揶揄つているんだ。そして又どうかすると實際眉をしかめて  
嫌な顔をして一言も物をいわないんだ。おれはこいつが怖い  
んだ。で、近頃ふつと思いついたんだが、いつも手ぶらでく  
るからいけないんだとねえ。ところがはじめのうちあの女は  
ただ笑つてばかりいたが、しまいには、そんなことされるの  
をひどく憎み出したもんだ。それからなあ、あの女は以前は  
贅澤な暮しはしていたが、それにしてもこれまで見たことは  
あるまいと思われるような素晴らしい首巻をもつていた、と  
ころがそいつを小間使のカーチャにくれてやつてしまつたん  
だぜ。いつ結婚するかつてことは、これつばかりも言わな  
いんだ。相手の女のところに出かけて行くのにただもうびく  
びくしているような、こんな許婚の男なんて何時どこの世界に  
あつたらるか。こんな風にじつと坐つていても、堪らなく  
なると飛び出して行つて、こつそりあの女の家を近くを往つ  
たり來たりするか、それでなきや物蔭にかくれているんだ

「たいてやつた。」  
「そんなことをするつてあるものか！」と公爵が叫んだ。  
「それがあつたのさ。」低い聲ではあつたがラゴージンは眼  
をぎらぎらさせてこつ言ひ放つた。「それからまる一晝夜と  
半日つていうものは寝もせず、飲まず食わず部屋から一步も  
外へ出ず、あいつの前に膝まづいて、『赦して呉れない間は  
一步もここを出ないで、死んでしまふ。人を呼んで曳き摺り  
出すようだつたら水んなかへ飛びこんじまう。おまえと添え  
なきや生きてゐる甲斐がないんだから。』と言つたんだ。あ  
いつはその日一日というものはまるで狂人のようだつた。今  
泣いてゐるかと思つと、今度は小刀でおれをさし殺そうとし  
たり悪態をついたりするんだ。そして、ザリョジュフとかケ  
ルレルとかゼムチュージニコフとかいう奴等呼んで、おれ  
の方を指さしやがつて嘲弄するんだ。『みなさん、今日は一  
緒に芝居に行きましょう。この人はここから出たくないつて  
言うんだから、このまま放つておくがいいわ。わたしこの人に  
ひつばられている譯はないんだから。パルフェン・セミヨ  
ノキツチ、わたしがいなくても、お茶は出すように言つてお  
きますよ。あんたはきつと今日はお腹がすいてゐるでしよう  
からね。』芝居からは一人でかえつてきたが、『あの連中は臆  
病者で意氣地無しだからおまえさんを恐れているんだよ。そ  
の癖あの様子じゃラゴージンは歸つて行きそりもないし、も  
しかするとあなたを斬り殺すかも知れないと言つて私を脅か  
すのよ。わたしこれから寢室へ行くけれど、わざと戸締りな  
んかしませんよ。そら、わたしは非常におまえさんを恐れて

よ。ひよつと氣がつくと夜明け近くまで、門の近くで見はり  
してゐるんだ。そのとき何だかららつと目にとまつたものが  
あるんだ。するとあの女が窓から見ているんだ。そして『も  
しわたしがおまえさんを騙していることが分つたら一體私を  
どうするつもり？』つて訊くのさ。で、おれは堪りかねて『お  
まえさんが自分で知つてゐる筈だ。』と言つてやつた。』

「何を知つてゐるつて！」  
「おれだつて何で知るものか？」とラゴージンは憎々しげな  
微笑をもらした。「おれはあの時モスクワであの女の相手の  
男つてのを、ずい分長いことさがしたんだが遂に見つけ出す  
ことができなかった。で、おれはあの時一度あの女を掴ま  
えて訊ねたことがあるんだ。『おまえはもうじきおれと結婚し  
て眞面目な家庭に入ることになつてゐるのに、今の様は何と  
したことだ？ おまえは何ていう女だ！』こつ言つてやつた  
んだ。」

「君、あの女にそんなことをいつたの？」  
「いつたさ。」

「そしたら？」  
「わたしは今お前さんを、召使にだつて使いたくない。まし  
てお前さんの奥さんになんかなるなんて飛んでもないこと  
だ。』つて言いやがるのさ。それでおれは言つてやつた。『お  
れは出てゆきやしない。落ちつく先は分かつてゐるんだ。』  
すると今度は『じゃ、わたし今すぐにケルレルを呼んでお前  
さんを門の外へ抛り出させてやるからいいわ。』つてほざき  
やがるんだ。それであの女に飛びかかつてむくむく引つば

「おまえさん、お茶は飲んだの？」つて言うのだ。それでおれは『いや、飲  
むものか。』と答えた。すると『それはお立派なことかもし  
れないが、ちつともおまえさんに似つかわしくないわねえ。』  
つて抜かしやがるのさ。そして言つた通りに部屋の戸を閉め  
ずに寝ちまつたよ。翌る朝になつたら、『おまえさん氣でも  
狂つたんじゃないの？』そんなにしていたら飢え死にしてし  
まうじやないの？』と言つて笑うのだ。それでおれが『赦し  
てくれ。』と言つと、『わたし赦すのはいや。おまえさんとは  
一緒にならないつて言つたじやないの。それにしても本當に  
おまえさんはこの肘つき椅子にかけたまま一晩中ねむらな  
つたの？』『ふん、寝なかつたよ。』とおれは言つた。『まあな  
んて利巧な人だろう！ じゃ、やつぱりお茶のみたくなき  
や御飯もたべたくないの？』『ほしくないつて言つたじやな  
いか。』赦してくれ、よう。』『おまえさんにそんなのは全く  
似つかわしくないわよ。まるで牝牛に靴を置いたようじやな  
くつて？』それがわからぬの、おまえさんわたしを脅かそ  
うつて考へついたらんじやないの？ おまえさんがそんな風  
にお腹を空かせて坐つてゐるのを見てわたしが何て可哀想なん  
だらうなんて言つと思つたの？ とんでもない。人をおどろ  
かせるわねえ！』そう言つて憤つてゐるのだよ。しかしそれ  
も長く續きはしないんだ。すぐにおれを揶揄い出すんだよ。  
がその時、あの女がこれつばかりもおれを憎んでいないつて  
ことに驚かされたよ。ところがあの女は執念深く人に憎悪  
を懷いている女なんだ！ それでその時ふと念頭に浮んだこ



とがあるよ。あの女は強い憎悪をおれに感ずることができないほどおれを甘く見ているんだ。これは間違いないことだよ。『おまえさん羅馬法皇つてどんな人だか知つていない？』と、あの女が言った。それで『聞いたことある。』つておれは言った。するとあの女は『パルフォン・セミヨノキツチ、おまえさん萬國史をちつとも習つたことないの？』つて訊くんだ。で『おれは何も習つたことはない』と答えると、『じゃここでわたしが教えてあげよう。一人の法皇がいて、ある皇帝に腹を立てたのよ。するとこちらはお赦しがでるまで三日の間、法皇さんの門前に飲まず食わずに膝まついてまつていたのよ。この皇帝が三日の間、膝まついてまつていた間に、心の中でどんな事を考え、どんな誓いを立てていたか、お前さんわかる？』……あ、ちよつと待つて頂戴。これはわたし自分がおまえさんに讀んできかして上げるわ。』とこう言つて立上つて本をもつて来た。『これは詩なのよ。』と前おきして、この皇帝が三日間にこの法皇に復讐せずにはおかぬと誓つた詩を讀んできかしてくれた。そして『パルフォン・セミヨノキツチ、これはおまえさんの氣に入つて？』と訊いた。それでおれは『おまえさんの讀んでくれたことは全く本當だ。』と返事をした。『まあ、おまえさんが本當だなんて言うところを見ると、おまえさんもきつと、あいつがおれのところへ来たら、その時こそ一切のことを思い起して、あいつに思う存分のことをしなくては、とか何とか誓いを立てたんだわね。』『分らない。もしかすればそんなことを考えているかも知れぬ。』『どうして分らないの？』『そんなことは

分らない。いまそんな事を考えようとは思わない。』『じゃ、おまえさん、今何を考えているの？』『そらおまえさんが席を立て、おれの傍を通る、するとおれはおまえさんをながめ、後姿を見送る。おまえさんの衣觸の音がすると、おれの心臓は下の方に落ちてゆくような氣がする。おまえさんが部屋を出てゆく。するとおまえさんの言つた言葉の一事一ことを心の中によびかえてして、またどんな聲だつたか、どんなことを言つたかを心の中で考えてみる。それに昨晩は何ごともお考えずに、ただおまえさんの寢息に耳をすまして聴き入り、又二度ばかり寝がえりをした音もきいた……。』するとあの女は笑い出しながら言つた。『じゃおまえさん、わたしを殴ることなんか考え出しも思い出しもしなかつたんだね？』『若しかすると考えているのか知れん。分らない。』『じゃわたしがおまえさんを救さないで、一緒にはどうしてもならないつて言つたら？』『さきにもう言つたよ。水に入つて死ぬのだ。』『多分その前に殺すだろうね。』と、こうあの女は言つて考えこんでいたが、暫くするとぶりぶりして部屋を出て行つた。それから一時間ほど経つと恐ろしく陰氣な顔をしておれのところへやつて来て、『パルフォン・セミヨノキツチ、わたしは、おまえさんと一緒にになります。こう言つたからつておまえさんが怖いからじゃやないのよ。どつちみちわたしは亡びる體なんだもの。どこへ行つたつていいことはあるものか？ おかけなさい。おまえさんに今すぐご飯をあげるわよ。え、おまえさんと一緒にになると言つたからには、わたしはおまえさんの貞淑な奥さんですよ。だからもうこのこと

は疑つたり心配したりしないで頂戴。』と言つたんだよ。そして暫らく無言でいたが、また言ひ出した。『どうしたつておまえさんは召使じやないんだものねえ。わたし以前、おまえさんをもつてこいの下男だと考えていたの。』まあこうして兎に角式の日どりが決まつたのだ。ところが一週間すると、おれのところから、このレーベジェフのところへ逃げ出てきたんだ。おれがここに来ると、あの女は『あたしはどつちもあつてもおまえさんがいやだというんじやないわ。だけれどわたしが心ゆくまで待つていて貰いたいのよ。だつてわたしはまだ自分の心の主人なんですもの。わたしをおのぞみならおまえさんもお待ちなさいな。』まあつまりこれが今の二人の状態なのさ……。ところで、レフ・ニコライキツチさん、君はね、このことをどう思うのかい？』

「君は自分ではどう考えているの？」公爵は、ラゴージンを愁わしげな眼ざしでながめながら、こう問い返した。

「おれが一體何を考えるつていうんだ？」こちらは、ひつたくるような調子でこう言つた。彼はまだ何か言ひ添えたいような様子であつたが、口には出し得ない哀愁に捉われて口を噤んだ。

「僕はどうしたつて君の邪魔はしないよ。あたかも自分の心の奥深く秘めた思ひに答えるようにうち沈んだ調子で、小聲に彼はこう言つた。

「ところでねえ、お前に言ひたいことがあるんだ！」不意にラゴージンは活氣づいてこう言つた。彼の眼眸は輝き出した。「おまえは何だつてそんなにおれの下手に出ようつてするん

だい？ おれには合點がいかん。すつかり戀がさめたとしてもいふのかい？ 以前おまえ何と言つたつてさびしそうにしていたからなあ。おれはちやんと見ていたよ。それじゃ今度なんのために遮二無二ここへ駈けつけて来たんだい？ 憐憫の情のためかい？（こう言つてゐる彼の顔は兇猛な嘲笑のため）に至んで見えた。へ！ へ！」

「僕が君を騙してゐると思つてゐるのかね？」と、公爵は訊いた。

「いいや、おれはお前を信じてゐるんだ。しかしそれにしても少しも腑に落ちないんだ。おまえの同情の心つてのは何よりもたしかだ。或は俺の戀よりも強いだろう！」

兇猛な顔して今にも口をついて出さずにはいられないといつた風の或る表情が彼の顔にぱつと燃え上つた。

「だつて、君の戀は憎悪と見分けがつかないんだものね。」と、言つて公爵は微笑んだ。「その戀が消えてしまつたら、もつと不幸なことが起るにちがいないよ。ねえパルフェンさん、僕はこのことを君に言つておくよ……」

「おれが斬り殺すとでもいうのだな？」

公爵はぶるぶると顫えた。

「君は現在の戀のために、現在なめてゐる一切の苦痛のためにあの女をひどく憎むようになるだろう。あの女が君と一緒にならうと又しても考えるようになつたのが、僕にとつては何よりも奇異に思われてならない。昨日そのことをきいた時僕は殆んど信ずることができなかつた。そして非常に重苦しい氣分になつた。あのひとが二度も君を拒んで、式の間際に



逃出したことは、つまり豫感があつたからなんだ！……一體あの女は今君の何をあてにしてるだろう？ 君の金だろうか？ それは取るに足らぬ馬鹿氣なことだ！ それに金は君も恐らくずいぶんかけたことだろうからね。するとただ夫がほしいからだろうか？ それならあの女は君以外に男を見出すことができる筈だ。君以外の誰であらうとあの女にとつては君よりはましだからねえ。なぜなら、君はすぐにあの女を斬り殺してしまふからだ。あの女も今では恐らくこのことはよくよく感づいているにちがいない。君はそんなに強くあの女を、どうして愛するのだろう？ 實際、こうした戀を探し求めていた女があるつてことは、僕も聞いている……しかし……」

公爵は口を噤んで物思いに耽つた。

「何だ。また親父の寫眞を見て笑つてるな？」公爵の顔にあらわれるあらゆる變化あらゆる筋肉の動きを一つのがさず異常な注意を集めて觀察していたラゴージンはこう訊ねた。「僕が何か笑つたつて？ 若しもこうした不幸が君を見舞わなかつたら、このような戀が起らなかつたら、君は恐らく、君のお父さんそつくりの人になつただろう。それも極く最近のうちに、と、こう僕は考えていただけなのさ。こここの家でおとなしい口數の少い奥さんと二人で坐つて、時々口を出る言葉も紋切型で、だれ一人信用せず、またその必要を少しも感ぜずに、無言のまま、陰氣な顔をして、ただひたすら金を貯めていることだろうね。そして時たま古い本を取り出してはしきりと感心し、また二本指で十字を切ることに興味

を懐くようになるんだ。と言つてもこれはずつと年を取つてからだがね……」

「精々からかうがいいさ。しかし、それ、全く同じことをあの女も近ごろ言つたよ、やつぱりこの肖像を眺めながらね。おまえたちは何もかもすつかり一致するなんて不思議だなあ。」

「じゃ、あのひとは君のところへ来たことがあるの？」公爵は好奇心に誘われてこう訊ねた。

「来たよ。長いあいだ肖像をながめ、亡くなつた人のことを色々訊いていた。そして『おまえさんはこの人そつくりになる筈だつたんだわねえ。』としまいにはおれに微笑に笑いかけながら言つたよ。『パルフェン・セミヨノキツチさん、

おまえさんには優れた謙讓の心があるからよかつたようねもの、それがなかつたらおまえさんは激しい欲情を持つていゝるのだから、きつと西伯利亞に流刑されたにちがいないわ。』とこう言つたんだよ。(あの女がこう言つたんだよ。おまえに信じられるかどうか知らないが？ あいつがこんなことを言うのははじめて聞いたよ！)それから『おまえさんが今しているような悪ふざけを一切よしてしまつたら、おまえさんみたいになつとも教育のない人間はすぐにお金を貯めはじめ、お父さんのようにスコベツ派の連中に取り巻かれてこの家の中に坐つていゝることでしょうねえ。それから若しかしたら、しまいにはあの連中の方へ宗旨がえしたかも知れないわ。お金はとも好きになつて二百萬はおろか、どうかするとも千萬くらいは貯めこんで、その金袋に取り巻かれて飢え死

あの女は情をこめておふくろの手に接吻してから言つたよ。

『きつと、おまえさんのおつ母さんは色々な苦しみを堪え通して来た方だわ。』そこらの本をなあ、あの女が目にとめて、『これはどうしたの、露西亞歴史を讀み始めたの？』と言つた。(モスクワにいるとき、いつだつたか一度あの女が言つたことがあるんだよ。『お前さん、ソロヴィヨフの露西亞歴史を讀むならなんなりして自分を教育するといいわ。おまえさんたら何に一つ知らないんだから。』これはいいことだわ、こうしておよみなさいよ。わたしはおまえさんが初歩にどんな本を讀まなきゃならないか、目錄を教えてあげるわ。ほしーい？ ほしくない？』あの女がおれにこんな言葉をかけたこととはそれまでに一度もなかつたので、おれは寧ろ驚ろいた。それでその時はじめて人間らしい氣持になつてほつと息をついたよ。』

「僕はそれを聞いてとても嬉しいよ、パルフェンさん」と、公爵は心の底からこう言つた。「大變うれしいよ、もしかしたら神様が二人の間をうまく纏めて下さるかも知れないよ。」「斷然そんなことはない！」とラゴージンは性急に叫んだ。「いいかいパルフェンさん、もし君があんな女を愛しているんなら一體どうしてあのひとに尊敬されたいとは思わないのかね？ 若しそふ思つていゝるのなら、そんなにやけを起すことではないよ。そら、さつき僕が言つたろう、あの女がどうして君と結婚しようとしていゝるかということが僕には驚ろくべき問題なんだ。僕にはそれを解くことはできない。しかしそこにはきつと充分に考えぬかれた、ある理由があるに違いない

するでしょうよ。なぜつて、おまえさんは萬事につけて欲情が激しくつて、どんづまりまで行かなきやおさまらないんだから。』と、こうも言つた。實際これそつくりの話し振りだつた。言葉だつてそのままと言つてもいいくらいだ。それまで一度だつておれにこんな事を話したことはなかつた！ あれの女はいつでも取るにも足らない馬鹿氣なことを言つていゝるが、でなければ人を揶揄つてばかりいたんだ。それにその時だつてはじめは笑つていたんだが、後になると恐ろしく氣むずかしくなつてきた。それからこの家をずつと見て廻つたんだが、何かにおどおどしているような様子だつた。『この家をすつかり改築して氣持よくしよう。でなければ、式に間に合ふように他の家を買おう。』とおれが言うると、あの女は『いえ、いえ。何も改めることなんかないわ。このままで暮しましよう。あんなの奥さんになつたら、わたしあんなのお母さんの傍で暮したいのよ。』と言つてくれたぜ。それからあの女のおふくろのところへつれて行つてやつたが、おふくろは以前對して肉親の娘がするやうに親切なんだよ。おふくろは以前から、もう二年というもの半分馬鹿みたいになつてじつと坐つていゝるんだ(病氣なんだよ)。そして親父が死んでからこつちはすつかり赤ん坊みたになつて話もできず足も立たず坐つたまんまで人さえ見れば誰かまわすにその場からお辭儀ばつかりしている始末なのさ。飯をたべさせなくつたつて三日位は氣がつかないでいゝるそらだよ。おれはおふくろの右手を取つてあの女の手につけてやつた。『祝福しておくれ、お母さん。おれのお嫁さんになる人だよ。』とおれが言うると、



ということはどうしても疑い得ない。あのひとは君の愛を充分信じているし、また君のもつている美點も間違いなく認めている。これは確かなことだ！ 君が今言つた事がそれを裏書している。あの女がそれまでの態度や話し振りと打つて變つた言葉で君に語つたということを君が自分でちやんと言つたじやないか。君は猜疑心が強く、嫉妬深いから、何事でも悪い方のことばりに氣がついてそれを誇張するのだよ。それに勿論あのひとは君が言うほど君のことを悪く思つちやいないよ。だつて、それでなかつたら、あの女が君と一緒にいるうとするのは意識的に水に飛びこむのか、双の下にもぐりこむのと同じことじやないか。そんなことがどうしてあるものか。誰が一體、好きこのんで水の中に飛びこんだり双の下をかいくぐつたりするものか？」

パルフェンは苦つぽい微笑みを浮かべながら、公爵の熱しきつた言葉を最後まで聞き終えた。彼の信念はもはや微動だにしないほどしつかりと決まつたものようであつた。「何だつて君はそんな不愉快な眼つきをして人を見るの？」と公爵は壓迫されるような感じをうけて辛うじて言つた。「水の中か双の下か！」と、こちらはやつとのこと言葉で吐いた。「へえ！ だから、あの女がおれのところへ來るのは、まぎれもなくおれの後に双が控えているからだ！ 公爵、本當かい、君、今まで事の経緯を知らなかつたのかい？」「僕は君の言うことが分からないよ。」「それもそうかなあ、だが本當に分からないとは、へへ！」

がその日が近づくと、怖くなるのか、違つた考えでも浮ぶのか、そこそこは何とも分らないが、おまえも知つているよ、泣くは、笑うは、熱病みたいに暴れ廻つて始末さ。だから、おまえの所から逃出したなんてことは少しも不思議じやないや。あの女があの時おまえの所から逃出したのは、どんなに強くお前を愛しているかつてことを自分で氣がついたからなんだよ。おまえのところ居たたまれなくなつたんだ。おれがモスクワで探し出したつて、君はさつき言つただろう。ところが嘘なのさ——自分でおめえさんとこからおれの所へ駆けつけて、『日取を決めて頂戴、わたし覺悟をしたのよ！ シャンパンをお出し！ ジブシイ女のところへ行きますよ！』と叫び立てたんだ！……だから、おれがいなかつたら、あの女性は疾くに水の中に飛びこんでいるよ。こりや確なことだ。身を投げないのは、多分おれが水よりもつと恐いからなんだろう。意地からおれと一緒にいるつていうんだよ……一緒にいるようにでもなつたら、それこそ、意地からすることなんだ。」

「君はまた何ていうことを……なんてことを……」と公爵は叫び出したが、言葉が續かなかつた。彼は怖ろしそくにラゴジンを見まもつた。

「何だつて終いまで言わないんだ。」とこちらは笑いながら口を出した。「おのぞみなら言つてやろうか。おまえは今心の中で『そうだ。今となつちやどうしてあのひとをこいつと一緒にさせられよう。どうしてあの女にそんなことがさせられよう？』と考えているんだ。分かり切つてらあ、お前の考

君のことを他人があれだつて言うが……あの女は他の奴に惚れているんだよ。そら、どうだい！ おれが今あの女に惚れているのと全く同じくらいあの女は今他の奴に惚れているのだ。他の奴つてのをおまえ誰だか知つているかい？ それはおまえなんだ！ なあんだ、知らなかつたのかい？」

「僕？」

「お前さ。あの女はあの誕生日のあの時からお前にまいつちまつたんだ。しかしあの女はおまえと一緒にいることはできないことだと思ひこんでいるんだ。なぜつて、そうなりや、あの女がおまえを汚し、お前の一生を不幸にすることになるからな。『わたしはどんな女だか、分り切つていようじやないの。』つてよく言つたよ。このことは今まで繰り返言つている。この事はみんなあの女が自分の口からおれに面と向つて言つたんだ。おまえを汚し不幸にすることはどうしても赦されぬが、おれなんぞは、どうだつていい、だから一緒になつてやれ——と、こんな風におれを見ているのさ。こいつも承知して貰おうぜ。」

「じゃ、なんだつてあのひとは君の所から僕の所へ逃げて來たんだらう。又……僕のもとから……」

「お前のところからおれのところへ！ へえ！ 不意にあの女がそんなことを思ひ附くのは珍らしい事じやないや！ あの女は今ほまるつきりもう熱病みたいになつていんだ。ともすると『水の中へ飛びこむ覺悟でおまえさんと一緒にいるんだよ。一刻も早く結婚しましょう！』つて叫び立てるんだ。そして自分からせき立てて、式の日取を決めるんだ。とこ

えしていることなんだ……」

「僕はそんなことで、こゝろ來たんぢやない。パルフェンさん、嘘じやないよ。そんなことは考えてもいなかつた……」

「多分、そんなことで來たんでもなければ、考えもしなかつただろうさ。ところが、たつた今、間違もなく、そうなつたのだよ、へ、へ！ いや、もう結構だよ！ 何んだつてそんなにびつくりするんだい？ だが、本當にすこしもそれを知らなかつたのかい？ 驚ろかせるなよ！」

「それはみな嫉妬のためだ。パルフェンさん、全く病氣のせいだよ。それはみな君が途方もなく誇張して考えるからなのだ……」公爵は心中に激しい動搖を覺えながら、低い聲でこう言つた。「どうしたの、君は？」

「棄てるよ。」とラゴジンは、こう言つて、卓上の本の脇から公爵が何氣なく取り上げたナイフをひつたくつて元の場所へ置いた。

「僕は、ベテルブルグにいる頃から、何だか分かつていたよ。うだし、何だか豫感があるようだった……」と公爵は語り續けた。「僕はここへ來たくなかつたんだよ！ 僕はここであつた事をすっかり忘れてしまつた。心臓から引き抜いてしまつたかつた！ じゃ、左様なら……どうしたんだい君は！」

こう言ひながら、公爵は放心したように又しても例のナイフを卓上から取上げた。すると再びラゴジンがそれを取り上げて卓上に抛り出した。それは至極ありふれた形の鹿の柄がついた折たたみのできないナイフで、刃渡は五寸足らず、



幅もそれにふさわしいものであつた。

このナイフを二度までも、ひつたくられたことに、公爵が特別の注意を拂つているのに気がついたラゴージンは、憎々しげな憤りの色を浮かべて、ナイフを引つ攪むと本の間に挟んで、本と一緒に他の卓子に投げ出した。

「君はそれで、本の頁でも切るのかね？」と公爵は訊ねたが、その様子はどことなくほんやりして、まだ物思ひから充分に醒めきらないものようであつた。

「そうだ、頁を……」

「それは庭園用のナイフなんだろう？」

「うん、庭園用のだ。庭園用のナイフで頁を切つちやいけな」と公爵は訊いた。

「ただどそれ……まだ新しいんだ？」

「うん、眞新しいのがどうしたつていうんだい？ おれが現在、新しいナイフを買える御身分じゃないつていうのかい？」遂に、如何したことが我を忘れて、一語毎に汗顆を募らせながらラゴージンはこう叫んだ。

公爵はぶるぶると身顫いして、眼をすえてラゴージンをみつめた。

「おれたちは、まあ！」すつかり我に返つた公爵は、こう言つて俄かに笑い出した。「君、ごめんよ、おれひどく頭が重くなるよ、今みたいになるんだよ。そしてあの病氣が……おれはまるつきり、まるつきりあんなほんやりしたばかりの氣持になるんだよ。おれは全くあんなことを訊こうつて氣はなやないつて言つていたよ。これだつて、留で買つたものだけだ。まだ親父の生きていた頃、こいつを三百五十留で譲つてくれたつて言ひものがあつた。その人間てのは非常に繪の好きなサエリエフ・イワン・ドミートリキツチという商人なんだ。そして四百留までせり上げたものだつた。ところがまた先週のことだが、弟のセミヨーン・セミヨーンキツチに五百留出そうと申込んで来た者がいるんだ。おれは自分がつて置きたかつたから斷つたよ。」

「あ、これは……ハンス・ホルバインの模寫だよ。」やつとこの繪を見分けた公爵がこう言つた。「僕は出して眼ききしやないけれど素晴らしい模寫のようだねえ。僕はこの繪をあらで見たことがあるんだが、忘れられないよ。ただ……どうして君は……」

ラゴージンは俄かに繪を見すて、今までの道を先に歩み出した。勿論、不意にラゴージンの様子に現われた氣ぬけのしたような態度や、異様な苛々した氣分が、多分この突拍子もない振舞を説明してはいるだろう。しかしそれにしても、ラゴージンが自分の方から切り出した話を突然うち切つて、公爵に返事もしないのが公爵にはなぜかしら不思議に思われたのである。

「なあ、レフ・ニコライキツチ、疾うからおまえに訊きたい

\*一八六七年、わたしたちが瑞西へ旅行した時、私たちはバーゼルに一日滞在した。その博物館でハンス・ホルバインの繪を見て、彼は感  
激し、「こんな繪を見たら、信仰心がなくなるだろう。」と言つた。こ  
の繪の印象は晩年まで忘れられず、いくたびか話題に上つた。(ドス  
トイエフスキイ夫人の註)

かつたんだ……何もおぼえていないのだよ。左様なら……」

「こつちぢやない。」とラゴージンが言つた。

「忘れちやつた。」

「こつちだ、こつちだ、おれが連れて行つてやろう。」

4

公爵がさつき通つて来た部屋を二人は通り抜けて行つた。ラゴージンが少し先に進み、公爵がその後を續いた。大きな客間に入つた。この周囲の壁には幾つかの繪が掛けてあつた。それらは僧正の肖像畫と風景畫であつたが、見分けがつかないほど古びていた。次の部屋に通ずる扉のうへの方に、縦が五尺五寸ほどあるのに、横は八寸と少し位しかなく、恐ろしく奇妙な形をした繪が一點かかつていた。これには十字架から下ろされたばかりの救世主が描かれてあつた。公爵はこの繪をちらりと見て、何か思い出したようであつたが立ち止まらうとせず、そのまま戸口を通り抜けようとした。彼は非常に氣分が重いので一刻も早くこの家を出てしまいたいと思つていた。ところがラゴージンは突然この繪の前に立ち止つたのである。

「そら、ここにある繪はみな、」と彼は口を切つた。みな、

「二留か三留出して、亡くなつた親父が難賣で買つて来たものなんだよ。親父は繪が好きだつたからなあ。ここにある繪をある目ききの男が見て、どれもこれもがらくただつて言つたが、そら、これは……扉の上のやつさ。これはがらくただつて思つていたんだが、おまえは神を信じているのかい？」

「なんだつて君は奇妙な事を訊くんない。それに……その眼つきといつたら？」公爵は思はずこう言つた。

「あの繪を見るのが大好きだ。」暫らく黙つていたラゴージンは、又もや自分の問いかけたことは忘れたように、口の中をつぶやいた。

「あの繪を！」はつと胸に浮んだ考えにつられて、公爵は不意にこう叫んだ。「あの繪を！ そらだ、あの繪を見ていると信仰を失う入さえあるにちがいない！」

「そりや失つてしまふとも。」思いがけなくもラゴージンが不意にこう言い切つた。

二人はその時、出口のすぐ傍に来ていた。「なんだつて」と言つて公爵は急に立ちどまつた。「何てことを君は！ 俺は冗談のつもりで言つたのに、そんなにむきになつて！ それに君は何だつて訊いたの。俺が神を信ずるかどうかなんて？」

「そりや何んでもないんだよ。あの、俺は前々から訊いて見たいと思つていたんだ。どうだ、本當だろうか(おまえは外國で生活したんだからなあ。俺になあ、ある男が酔つ拂つて言つたことがあるんだよ。わが露西亞にはね、神を信じない人間が、世界のどの國よりも多いんだつて。そいつは『わが國ではよその國よりそれがやさしい。われわれはよその國より前に進んでいるのだから。』つて、そう言つたぜ……」



ラゴージンは馬鹿にしたような微笑みを浮べた。自分の言うことだけ言つてしまふと、いきなり彼は扉を開けて、ハンドルを掴んで、公爵が出て行くのを待ちうけた。公爵はびつくりしたが、そのまま扉の外へ出た。こちらはその後ろから階段の上り口に出て後手のまま扉を閉めた。二人とも自分たちほどこへ来たのか、又さしずめ何をしたらいいのか忘れてしまつたような顔附で、面と向かい合ひながら佇んでいた。「じゃ、さよなら。」と公爵は手を差し出しながら言つた。「さいなら。」と言つてラゴージンは差出された手を固くただ機械的に握つた。

公爵は階段を一段下りてから後を振りかへつた。「あの信仰の話なんだが、」と彼は微笑みを湛え、その上、ふいと或ることを思い出したため元氣づいて、(明らかにラゴージンとこんな氣持で別れたくなかつたので) 語り始めた。「信仰のことなんだがね、僕は先週は二日の間に四人の毛色の變つた人にあつたんだよ。朝は新設の鐵道に乗つていて、列車の中でという人と四時間ばかり話し込んで、すっかり近づきになつちまつたよ。僕はそれまでもその人のこととはずいぶん色々きいていた。とりわけ、無神論者つてことはよく聞いていたんだよ。その人は實際とても學識のある人なんだ。それで僕は本當の學者と話ができると思つて大變うれしかつたねえ。その上、その人が珍らしく人間の出來た人だつたんで、僕に對しても認識や概念の程度を同じうしたものだとして充分に話して下さつた。その人は神を信じないんだ。しかしその人はその間つともう、まるで神を信じない

寄つて、狙いを定めておいて、天に眼を向け、十字を切りながら、心の中で悲痛な祈りを捧げたつてことだ。そして「神よ、基督のために赦しを垂れ給え!」と、羊でも殺すように、ただ一刀の下に友人を斬り殺しておいて、時計を引き出したんだよ。」

ラゴージンは腹をかかえて笑つた。彼はまるで何か發作でも起つたような大きな聲で笑つた。先きほどまで非常に陰鬱な氣分に閉じこめられていた者がいきなりこんな調子で笑い出したのを見ると、何だか無氣味な感じさへした。

「いや、おれはそんなのが大好きなんだ! そいつは何より素晴らしいや!」と彼は今にも息がつまりはせぬかと思われはるほど聲をひきつらせながら嘔鳴り立てるのであつた。「一方のやつは神なんか少しも信じないんだし、も一方のやつは人を斬り殺すのにもお祈りを捧げるほど信仰深いんだろ。實際これは、なあ公爵、思いつこうたつて思いつける話じゃないぜ! は、は、は! 全く、こいつは何より素晴らしいや!……」

「朝になつて、僕は町に散歩に出た。」ラゴージンの唇の上にはまだ笑いの影がひきつたように發作的に顫えてはいたが、彼の大笑いがいくらか静まると、忽ち、公爵はこう言つてまた語り始めた。「ふと、氣がつくと、すつかりぼろぼろ

\*「罪と罰」を書いた一八六五年に、センナヤのあたりを歩いて出遭つたことである。この時に買つた十字架は一八六七年外國へ立つたキペルブルグに残して行つたが一八七一年に歸つて來ると、置いて行つたものはみんななくなつていた。ドストイエフスキイは紛失した十字架を實に惜しがつていた。(夫人の註)

い人じやないような話をなすつたんだよ。これには僕すつかり驚ろいてしまつたよ。なぜつて、その前にも僕はかなり不信心者の人々にも會つたし、その方面の本も讀んだんだけれど、その連中の言うことや、その方面の本に書いてあることは表面はいかにも尤もらしいが、本當のところは全然それと違つたもののように思われたからなんだよ。僕はその時その人にこのことを言つたんだ。しかし多分僕の言うことがはつきりしなかつたのか、それとも言い方がまずかつたのか、その人には僕の言うことが何やら分からなかつたんだよ……; として夕方に僕はあの郡の宿屋について一晩泊ることにしたんだが、その宿屋で前の晩に人殺しがあつたばかりなんだよ。それでも誰も彼もその噂で持ちきりだつた。酒を飲んでいいた譯でもなく、お互に長年つきあつて友達でもあつたいい年をした百姓二人の間に起つたことなんだよ。それは、この二人が一緒にお茶を飲んでから、同じ部屋で床に入ろうとしたんだ。ところが、この事件の起る前二日ばかりの間に、一人の方が連れの持つてくる黄色い硝子玉の糸に繫いだ銀時計に氣づいていたんだ。それまではそれをちよつとも知らなかつた様子だ。この男は泥棒じやないんだ。寧ろ正直なくらいで、暮らし向きも百姓としては決して貧乏な方じやなかつたということだ。しかしもう如何にも我慢できなくなるほどこの時計が氣に入つて、迷ひ込んでしまつたんだな。それでナイフを取り出して、相手が向うをむいた時、そつと後ろから忍び

\*これは實際の出來事だ、モスクワ地方裁判所で判決があつた。(夫人の註)

の服装をした酔つ拂ひの兵隊が、木を敷いた歩道を千鳥足で歩いてゐるんだ。ところがその兵隊が僕の傍に近づいて來て「買つて下さい。旦那、銀の十字架を、たつた二十哥銀貨一枚で差上げます。銀の十字架ですよ!」というんだ。その手を見ると、多分たつた今、頸からはずしたばかりらしい十字架が、ひどく垢まみれの空色のリボンについたままのつかつていたんだ。しかし、それは一目みただけで眞正銘の錫製だと分る、一面にビザンチン風の模様のはいつた大形の八端の十字架だつた。僕は二十哥銀貨を取り出して、その男にくれてやり、その場で自分の頸にかけた。——ところが、その男の顔つきから、馬鹿な旦那を騙して満足だと思つてゐることがよく分かつた。それでその兵隊は十字架でやつとありついた金で早速飲みに出かけた。これは本當のことだよ。ねえ君、僕はその時、僕が露西亞に歸つて來て以來、いつの間にか自分の心に忍び込んでいた様々のことが非常に強い印象となつて胸の中にこみ上げて來たんだ。以前は露西亞の國がまるで物言わぬスフィンクスのように少しも分からなかつたんだ。外國で暮らしてゐた五年といふもの、僕はこの國のことについては何となし幻想的に心の中に描いていたもんだ。そこで、僕は途中歩きながら考へたよ。いや、この基督を賣つた男を批難するのは暫く控えよう。こんな酔つ拂ひの弱い心の中に何が含まれてゐるかは、知れたことじやないんだ。一時間たつてから宿にかへつて來る途中で、乳飲兒を抱いた見すばらしい女に出遭つた。これはまだ若い女だつたし、乳飲兒も生後六週間くらいだつた。この女はその赤ん坊が生れて



始めて自分に笑顔を見せたのに気がついたんだ。僕が見ていると、この女は實に敬虔な様子をして不意に十字を切つたんだよ。僕が『お嬢さん、あんたどうしたんです？』(僕はその時、いろんなことを訊いて見たもんだよ。)すると女は『まあ、あの、はじめて赤ん坊の笑顔を見た母親の悦びと申しませぬものは、罪人が眞情こめてお祈りするようになったのを天からごらんされる神様のお悦びそつくりでございます。』その女がこう言つたんだよ。言葉も殆んどこれそのままだつた。これこそ實に深くて繊細な眞の意味における宗教思想なんだ。この中に基督教の全本質が、一氣にして喝破されている。つまり基督教の最も重要な思想——生みの親としての神、並びに子を思ふ親と同様の神の人間に對する愛の理解がこの中に表現されているのだ。無學な一人の女が言つたことだよ！ 本當に、母親といふものは……それに、或はこの女があゝの兵隊の細君であるかも知れないよ。いいかい、バルフェン、君はさつき僕に訊ねたが、これが僕の返答だ。宗教的感情の本質といふものはいかなる議論、いかなる過失及び犯罪、いかなる無神論によつても窺い知ることにはできないのだ。こうしたものには何かしらの外れなところがある。いつまで経つても外れてはいるだろう。それは無神論などがいつて永久に的外れな口舌を弄するようなものだ。しかし何よりも大切なのはこれが露西亞人の心臓に一番容易にはつきりと見出されることなのだ。これが僕の結論だ！ これこそわが露西亞から擲み出し得た僕の最も尊い信念の一つだ。バルフェンよ、爲すべきことはある！ わが露西亞の國にいてなす

で、公爵は重苦しい驚ろきを感じた。暫らくして、ラゴージンは無言のまま公爵の手をとつたが、まだ何事か決心がつかぬ風で、じつと立つていた。遂に、いきなり公爵を引きよせるようにして、やつと聞こえるような聲で「行こう。」と言つた。二階の上り口を通りぬけて、先程二人が出て來た扉の向いの戸口に立つて、ラゴージンは鈴を鳴らした。戸はすぐ開かれた。黒い着物をつけ、頭には布を巻いた腰のすつかりかがんだ老女が無言のまま恭々しくラゴージンに頭を下げた。こちらは何か口早く彼女に訊ねたが、立ち止まつて返事を聞こうともせず、そのまま公爵を導いて次々に部屋を通つて行つた。その部屋部屋も又薄暗く、何かしら非常に冷たい感じがするほど取り片づけられていて、白い清潔な被いかけた古風な家具類がいかに冷然と並べてあつた。ラゴージンは取次もたのまず、すぐ公爵を客間らしいあまり大きなからぬ部屋に導いた。部屋は艶のいいマホガニー造りの兩はしに戸のある仕切で區ぎられていた。向う側は恐らく寢室にでもなつていたのであらう。客間の片隅の暖爐近くの安樂椅子に一人の小柄な老婆が腰かけていた。彼女は一見したところ、まださほど老いぼれていず、寧ろかなり元氣そうな、氣持のいい丸顔をしていて、しかし頭はすつかり眞つ白で、全く子供の氣持にかえつてゐる様子であつた(一目ですぐその布を頸にまき、黒いリボンのついた白い頭巾をかぶつていた。彼女の兩脚は小さな腰かけにもたせかけてあつた。彼女の傍には彼女よりも多少年をとつた、一人の小ぎれいな老婆がい

べきことはある！ 僕の言葉を信じてくれ！ 思い出してくれ。モスクワで二人が屢々落ち合つて相語らつた時分のことを……それに今度も僕はここへかえつてくる氣は少しもなかつた！ それにこうした工合で君に會おうとは夢にも思わなかつた！ しまあいいさ！ 失敬するよ、左様なら！ 御機嫌よう！」

彼は踵をめぐらすと、そのまま階段を下りて行つた。「レフ・ニコライキッチ！」公爵が、最初の上り口まで下りたとき、バルフェンは上から呼びかけた。「兵隊から買った十字架は今もつているかい？」

「あ、かけているよ。」

こう言つて公爵は再び立ちどまつた。

「見せてくれよ。」

又しても奇妙な場面になつた！ 彼はちよつと考えてから上へあがつて來て、頸にかけたまま自分の十字架を見せた。

「おれにおくれよ。」とラゴージンは言つた。

「どうして？ 君はあの……」

公爵はこの十字架と別れたくなかつた。

「おれがかけるんだ。おれのをお前にやるから、かけろよ。」

「十字架を交換したいの？ それならいいよ。バルフェン、僕は嬉しいよ。これで兄弟になれるんだね！」

公爵は錫の十字架をはずし、バルフェンは黄金の十字架をはずし、二人は交換した。バルフェンは黙つていた。以前の疑惑の色や、以前の苦々しい殆んど嘲笑的な微笑みのあとが今なお消え去らず、どうかすると激しくあらわれるのを見

た。これも又喪服をつけ白い頭巾をかむつていたが、どうやら食客であるらしい。黙つて靴下を編んでいた。この二人は恐らくいつもこうして黙つてゐるのであらう。安樂椅子にかけてゐる方の老婆は、ラゴージンと公爵を見ると、笑顔をを見せて満足の印に幾度となく頭を下げた。

「お母さん、」とラゴージンは彼女の手を接吻しながら言つた。「これは僕の友だちのレフ・ニコライキッチ・ムイキン公爵。二人は十字架を交換したんです。この人はモスクワでは生みの兄弟みたい、いろいろと僕につくしてくれました。お母さん、この人を本當の子供と同んなじように祝福しておくれ。ちよつと待つて、お母さん、そら、おれが手を組んであげるから……」

しかし老婆はバルフェンが手をとるよりも前に自分の右手をあげて指を三本合せて恭々しく公爵に十字を切り、それからもう一度やさしく親しげに頷いてみせた。

「じゃ、行こう、レフ・ニコライキッチ。」とバルフェンは言つた。「おれはただこれだけのことでお前をつれて來たんだ……」

二人が再び階段の上に来たとき、彼は付け足した。

「あの、おふくろはなあ、人の話は何も分からないんだぜ。だからおれの言つたことも何も分かりやしなかつたんだ。……君のために祝福したんだよ。つまり自分で望んだんだ……じゃ、さいなら。それにおれも君も、別れるにはいい潮時だ。」

こう言い終えると彼は自分の部屋の戸を開けた。



「そんなら、お別れに抱かしてくれただつていいだろう、變な人だね！」公爵は優しさのあふれた非難の眼で彼を眺めて、こう叫びかけて、抱きつこうとした。だがパルフェンは兩腕をあげたかと思ふと、又すぐに、おろしてしまつた。彼は決心がつかねたのである。公爵を見まいと顔をそむける。彼は公爵を抱きたくなかつたのである。

「大丈夫だよ！ おれはお前の十字架をとつたからには、時計が欲しさに君を殺したりなんかしないさ！」とほんやりした調子で彼は言つて、ふつと何とも知れない奇妙な笑みを洩らした。すると、不意に彼は顔の様子が一變した。怖ろしく蒼白くなつて彼は顫え、眼は燃え出した。彼は兩腕をあげて固く公爵を抱きしめ、息を切らしながらいつた。

「そうした運命なら、あの女はお前がとるがいい！ お前のもんだ！ お前にくれてやる！ ……ラゴージンを忘れないでくれ！」

といつて了うと彼は公爵を振りすてて、後をも見ずに、急ぎ自分の部屋に入り、後ろざまにばたり戸を閉めた。

5

もうかなり晩くなつていた。かれこれ二時半ちかくなつていて、公爵が行つてみるとエバンチンは留守であつた。そこで、彼は名刺を置いて、『はかりや』旅館に出かけて、コ

「はかりや」にいる時から、或いはその前からかも知れないが、彼は自分の周囲にふいと何かを探しかかつていたらしかつた。永い間、半時間も忘れはてていて、急に又もや心配げにあたりを見わたして、何かを探しているのである。

しかし、久しいこと自分を捉えていながら、全く今まで氣のつかなかつた病的な動作に氣がつくや否や、忽然として彼の眼のまゝに或る追憶が閃いて、非常な興味を唆るのであつた。自分は今、何かしら周囲に探し求めているのだなと悟つて見ると、その瞬間に、彼は或る店の窓のほとりの鋪道に立どちまつてかなりの好奇心を寄せながら、窓に並んでいる商品を眺めていることに氣がついた。自分がいま、せいぜい五分間くらい前から、この商店の窓の前に佇つていたのは現實のことであつたらうか、ほんやりとそんな氣がしただけではなかつたらうか、それとも何かと混同していただけではなかつたらうか。彼はいま是非でもこのことをはつきり突きとめたいやうな氣がした。この店とこの品物は本當に存在しているものだらうか？ だつて、實際に彼は今日ばかりでも病的な氣持になつていてのを感じているのではないか。まるで以前に例の病氣の發作が起る前に感じた氣持とそっくりなのだ。彼はこのような病氣の發作の來る前には、ひどくほんやりしてしまつて、特に氣をひき緊めて見ないと、人の顔と物とを混同することさえ有り勝ちであつたことを、よくよく心得ていたのである。それにしても、店の前に佇つているのやらどうなのやら、その時、それをはつきりと突きとめたがつたに

客車の中で席に着かないうちに、いきなり彼はたつたいま手にとつたばかりの切符を床へ投げすてたかと思つと、困り果てて、物思わしげな顔をしながら再び停車場の前へ出てしまつた。暫らくしてから、彼は通りで何か急に思い出して、何か感づいたやうな風であつた。實に奇妙な、今まで永いあいだ彼を不安ならしめていたことを、胸にうかべたらしかつた。そういえば、彼はもうかなり永いこと續いているのに、今という今まで一向氣のつかなかつたことに係わつていたことを、不意に悟つたのである。もう何時間も前から、まだ

オリヤに會つて訊こうと考えた。若しもコオリヤがいなかつたら、置手紙をして來ることにして。さて『はかりや』へ行くと宿では「ニコライ・アルダリオノキッチさんは朝のうちに

お出かけのままでございますよ。お出かけの時、若しも訪ねて來た人があつたら、三時ごろまでには歸つて來ると言つて

するやうにと申されましてね。若しも三時になつても歸つて

來ない時は、汽車に乗つてバヴロフスクに出かけてエバンチ

ン將軍様の奥様の別荘でお食事をなさるものと思つてくれと

のお話で。」といつてゐる。公爵は仕方がないので、そこに

腰を据えて待つことにし、序でに自分も晝食をとることにし

た。

三時半になつても、四時になつてもコオリヤはやつて來ない。公爵は表へ出て、足の向くままに、人心地もせず歩き廻つてゐた。夏の初めのベテルブルグには、時として麗か

で、明るく、生暑く、物靜かな日が訪れる。まるで、わざと

のように、この日もこのやうな珍らしい天氣の日であつた。

暫らくの間、公爵はあてもなく、あたりをぶらついた。町

の様子はそのなにより分かつていなかつた。時をりあちこ

ちの他人の家の前の十字路や、廣場や、橋のうゑに立ちどま

つた。一度はまた、とある菓子屋の中へ入つて行つて一休み

したりした。また或る時は、いかにも物珍らしそうに道行く

人をしげしげと眺めかかつたりした。しかし、大ていは通行

人の顔も眼に入らず、一體どこを自分が歩いているのかも氣

にとまらなかつたのである。彼は苦しいほどに張りつめた氣

持になり、不安にもなつてゐたが、同時にたつた一人になり



窓に並べてある品物の中には、よく眺めて、銀六十哥と値ぶみまでした品があつたのである。こんなにぼんやりして、不安でたまらない氣持でいるのに、そのことだけは覺えていた。だから、若しもこの店が現に存在して、この商品がまた實際に他の品物の中に陳列してあるとしたら、彼はただこの品物一つのために、わざわざ立ちどまつていたことになるのだ。つまり、この品物は、停車場から出て来たばかりで、一方ならず心が動揺している時にさえも、彼の注意をよぶほど力づよい魅力をもつていたといふことになるのである。彼は殆んど憂いに沈んでいるかのようになり、右手を見ながら歩いてきた。居ても立つても居られぬような不安を感じて、心臓の鼓動は昂まつていた。ところが、その店があるではないか。とうとう彼は店を見つけて出した。引き返さうと思いついた時、彼はもう五百歩ほど店から離れていた。たしかに六十哥の商品がある。『無論、六十哥より高い筈はないんだ！』と彼はいま心の中で繰り返して笑い出した。が、その笑い出し方はヒステリックであつた。彼は、ひどく重苦しくなつて来た。彼はあそここの窓の前に佇んで、先ほどラゴージンが眼をふり向けているのを眺めたとき不意に振り返つたことをまざまざと思ひ出した。確かに勘違いでなかつたのだと信じて（尤も、どうしたはずみか、よく調べる前にも確信し切つていた）、彼は店を後にして大いそぎで遠ざかつて行つた。このことは何もかも急速に、是非とも考へてみる必要がある。今になつて、はつきりして来たのであるが、停車場でのことも夢の中で見たことではなく、自分に起つたことも何かしら

とすれば、これは一寸も『至高の人間の存在』なんかではなく、それどころか、最も下劣な部類に入るのが當然なんだ。それにしても、彼はやはり遂には極めて逆説的な結論に到達した、『なあに、こいつが病氣にしろ構うものか？』とうとう、こんな獨り合點をしてしまふ。『若しも、結果それ自體が、——若しも健康の状態に在つても、まざまざとおもひうかべて吟味の出来るあの一刹那の感覺が、最高度の調和であり、美であることが分かつて、充實、節度の感じ、人生の最高の綜合との和解、胸さわぎして祈る時の氣持にも比すべき融合の感じ、今まで聞いたことも、夢に見たこともなかつたような、それほどの感じを興えるものとすれば、いかにこれが異常な緊張であろうとも、そんなことは何も取り立てて言うがものはないではないか？』かような曖昧な言い分は、今なお餘りにも頼りないものであつたのに、彼自身にはかなり筋道の通つた當り前のことに考えられた。これこそ眞に『美と祈禱』であり、これこそ眞に『人生の最高の綜合』であると信じて疑う力もなく、しかも、疑いを挿しはさむこともできなかつたのである。彼はこの瞬間に、ハシッシェや阿片や酒など、凡そ人の判斷力を臺なしにし、人間一足を片輪にしてしまふ變態的な、途法もない妙な幻影を夢みていたのではなかつたか？ このことは彼にも病的な状態が終るにつれて、立派に判斷がついた。若しもこの刹那、つまり、發作の起る前に今なお意識のある最後の瞬間に、『そうだと。この刹那のためならば、自分は、生涯を棄てても

\*印度産の大麻の種子から採る麻酔劑。(譯者)

現實的なことで、以前からの不安も必らずやこれに關係しているに相違ないのだ。しかし、何となく押えることのできな心の中の嫌惡の情が又もや募つて来た。彼はもう何ごとも深く考えようとは思わなかつた。彼は熟慮することなどは止してしまつて、全く別のことを考へ込んだ。

わけても、こんなことが物思ひの種になつていた。彼の癲癇の症状には、今にも發作が起ころうという間際に（但し眼が覺めていて發作に見舞われる時に限る）、次ぎのような一つの徴候があらわれる。哀愁、憂鬱、意氣沮喪の眞つただ中に忽ち彼の腦髓は恰も焔のようになり、勢づいて、あらん限りの生命力が實に物ごとく一時に張りつめて来る。すると、この瞬間に生命の感じや自意識は殆んど十倍の力を増して来る。かと思つと、稲妻のように消えてゆく。消えないうちは、睿智も感情も強烈な光りに照らされる。一切の動搖、一切の懷疑、一切の不安は一擧にして和らぎ、あの朗らかな、何不足のない喜びや希望にあふれ、理性と卓れた悟性に充ちた一種のいとも崇高な靜寂境に融けゆくように見える。しかし、この瞬間も、この暫しの閃きも、發作そのものがいざ始まるやという時のきわどい最後の一秒（いつも一秒より上になることはない。）の豫感に過ぎない。もとより、この一秒は堪え難いものであつた。後で健康状態にかへつてから、この一瞬をつくづく考へながら、よく彼は獨り言をいつていた。いと高い純粹自覺と自意識、従つて『至高の人間の存在』の稲妻も閃きも、凡てが病氣に他ならぬものではないのか、當り前の状態が破壊されたことにはならないのか。若しもそうだと

かまわぬ！』と彼がはつきりと意識的に自分で自分に言い聞かせる餘裕があつたとしたらこの一刹那はもとよりそれ自身、彼の一生を賭するに値するのである。尤も、彼は自分の結論の辯証的な部分を固執したのではなかつた。こうして『至高の刹那』の明白な結果として、彼の前には愚昧、精神的暗黒、白痴の感じが突き立つていたのだ。いうまでもなく、彼がこんなことを、大眞面目になつて論議した譯ではあるまい。ところで、この結論、すなわち、この刹那の評價には、疑うまでもなく、誤謬が含まれていたのである。とはいへ、やはりこの感覺の現實的なことが彼をいささか當惑させていた。本當に現實の場合になつてみれば、どうにも手がつけられないのではないのか？ このことは、まぎれもなく實際にあつたことではないのか。自分は今のこの一刹那に、心の底から感じてゐる限りも知れぬ幸福のためには、一生を捧げても惜しくないのだと、今の今わが身に言い含める餘裕を彼はもつていたのではなかつたか。『この瞬間に、』モスケワにいて、よく落ち合つていた時分、彼はラゴージンにいつたことがある。『この瞬間には、光陰再び到らずという格言が、何とはなしに分かつて来るものだ。きつと、』その時彼は微笑みながら付け加えるのであつた。『あの癲癇もちのマホメットは水差を引つくり返して、その水が流れて出る間もないうちにアラアの棲家を見きわめてしまつたというが、丁度この一刹那のことだらうよ。』そうだ、モスケワにいる時はよくラゴージンと顔を合はせて、このことだけではなく他のことも話し合つていたのだ。ラゴージンはさつき、『お前



「あの時分は兄弟分だつたな」と言つたが、それは今日になつて初めて口にしたことだ、と公爵は心ひそかに考へた。

彼はレット・ニイ・サードの一もとの樹かげにあるベンチに腰をおろして、このことを考へていた。もう七時ごろになつて来た。公園には人影もなかつた。何かしら暗い影が暫しのあいだ沈みゆく夕日をかすめて通り過ぎた。息苦しい夕べであつた。何となく夕立の来る遠い前じらせのような氣はいであつた。彼は現在の觀照的な心境に一種の魅惑を覺えた。世界のあらゆる事物に對して、彼は思ひ出と記憶を辿つて心を寄せて行つたが、それがまた愉しいことであつた。彼は絶えず當面のこと、現在のことをそれとなしに忘れてしまいたいような氣になつたが、あたりを見廻すや否や、忽ちに、心から振り放したいと希つてゐる暗澹たる考へに、又しても思ひ出かぶるのであつた。さきほど飲食店で食事をとりながら給仕と話を最近の騒ぎがせな、噂を生んだ奇々怪々たる殺人事件のことが思ひかえされた。ところがそれを思ひ出すと同時に、彼の身のうえには又もや何かしら特別なことが起つて来た。

並々なぬ抑えきれない、殆んど誘惑ともいふべきほどの欲望が俄かに彼の意思を麻痺させてしまつたのである。彼はベンチから立ちあがると、公園を出て眞つすぐにホテルブルグスカヤ區をさして歩き出した。さつき、彼はネワの河岸通りでどこかの通りがかりの人をつかまえて、ホテルブルグスカヤ區はネワ河の向うのどの邊にあたるかと訊ねた。そこで方角を教へて貰つたのであるが、その時はそこへは行かなか

つた。それにまた、何も今日わざわざ是非とも行かなければならぬという譯でもなかつた。その邊のことは彼もよく承知して来た。アドレスはずいぶん前から持つて来た。従つてレット・ニイ・サードの身寄のいる家を探し出すくらいは容易なことであつた。が、彼はどうせ訪ねて行つたところで留守に相違ないと、殆んど思ひ込んで来たのである。「てつきりバゾロフスクへ行つたんだらう。さもなければコオリヤが『はかりや』へ何とか言づけをして行かん筈はない譯だ。』して見ると、彼が今そこへ出かけたにしても、無論その女に會うためではなかつた。別の、暗い惱ましい好奇心が彼をたぶらかしていたのである。一つの思ひもよらない新しい考へが彼の腦裡にうかんで来た……

しかし、彼にとつては、自分がこちらへ出向いて来たといふこと、自分の行く先が分かつてゐるといふこと、ただそれだけでももう嬉しくてならなかつた。一分間の後に、再び歩いてはいたが、自分の向つてゐる道には殆んど氣もつかなくなつた。「思ひもよらない考へ」について何かと思ひめぐらすことが、忽ちにして酷く厭やな、殆んど堪らないことになつて来た。彼は痛ましいほど氣を引き緊めて、眼にうつる凡ゆるものに眼をこらした。空を仰ぎ、ネワ河を見た。彼は行き止りの子供にさえも話を持ちかけていた。若しかしたら、癩癩の症狀がいよいよ募つていたのかも知れぬ。夕立は徐々になつた。遙かに遠く雷の音も聞こえ始めていた。ひどくむんむんして来た……

どうした譯か、さきほど會つたレット・ニイ・サードの甥のことがしきりに今になつて思ひかえされた。まるで、馬鹿らしいほど退屈な音楽のモチーフが何かのはずみに、しつこく心にうかんで来るかのようにあつた。不思議なことには、さきほど甥を紹介しながらレット・ニイ・サードが彼に物語つたあの殺人事件の當の下手人の姿が、その甥の姿とびつたり符合して思ひかえされるのであつた。さういへば、この殺人犯についての記事を読んだのは、まだつい最近のことである。露西亞へ歸つて以來、幾つとなしに、かうした事件についての風説は讀みもし、耳にもして来た。彼はこんなことになると、いつも一生懸命に根掘り葉掘り探つて来た。で、さきほど例のジェマリー家の殺人事件のことを並外れなくらいの興味をもつて給仕と話して来たのである。給仕は彼のいつたことに合點をうつて来たが、彼は今そのことを思ひ出した。給仕の顔が心に浮んで来る。あの男はそんなに抜けた青年ではなく、堅氣で用心深い人間であつた。「といつても、あの男だつて、どんな人間だか知れたもんぢやないよ。新らしい土地で新顔の人の心を見抜くのは大へんなことだ。」と彼は考へるのである。それにしても、彼は露西亞精神というものを熱烈に信じ始めて来た。ああ、この六箇月の間に、彼はいかばかり多くの全く新奇な、想像したこともなければ、聞いたこともなく、そしてまた思ひもよらないような出来事に遭つて来たことであらう！ ところが、他人の心に至つては見當がつかないのだ。——露西亞精神なるものも曖昧模糊たるものなのだ。現に彼はラゴージンとは永い間の交際で、兄弟のように親しく

交わつてゐるが、——果してラゴージンの心の奥まで彼は見抜いて来たのだろうか？ しかも、どうかすると、こゝろいつたような一切のことに甚だしい渾沌、甚だしい荒唐無稽、甚だしい醜態があるのだ！ ところで、さつきのレット・ニイ・サードの甥は、何て厭やらしい、己惚れの強いにきび野郎なんだらう！ それはそうと、僕は一體どうしたつていらんだらう？（公爵はこんな風に空想をつづけて行く。）一體あの男が例の六人殺しの下手人だともいふのかしらん？ 僕はどうもこんぐらかつてゐるらしい……、何て不思議なことだらう！ 何だか頭がぐるぐる廻るようだ……さて、あのレット・ニイ・サードの娘、うん、そうだ、あの赤ん坊を抱いて立つていた娘さ。あの子は何て人なつこい、可愛い顔をしてゐるんだらう。ほんとにあどけない、まるで子供みたいな顔つきをして、子供のようによつて……、その顔を殆んど忘れていたのに、今になつてやつと思ひ出したのも妙な話だ。子供たちに向つてレット・ニイ・サードは足を踏み鳴らしていたが、きつとみんなを有難がつてゐるのに相違あるまい。しかし、何はさて置いても、二二ヶ四というほど明瞭なことは、レット・ニイ・サードがあの甥のことを神様あつかいにしていることである！ それにしても、今日になつて初めて訪問したばかりの彼が、こんな思ひ切つた判断を下すのはどうしたものだらう。一體どうして彼はこんな判断を下せるのだらう？ 然るに、今日はレット・ニイ・サードの方から問題を出したのではないか。よもやレット・ニイ・サードがこんな男だらうとは思ひもかけなかつた。以前から知つていたレット・ニイ・サードは、決してこんな男ではなかつた筈



だ。レーベジエフとデューバルラ夫人——いやはや大した取合せだ！ それはそうと、若しもラゴージンが人を殺傷するとしたら先ず少くともこんな殺し方はないだろう。あんなに眼もあてられないような修羅場を展開するようなことはあるまい。圖面つきで注文した兇器と、前後不覺になつた六人の者！ ラゴージンが一體、圖面つきであつた兇器なんかを持つてゐるだろうか？……あの男が……しかし、……一體、ラゴージンが人殺しをすると思つてゐるのか？——こゝろ考へて來ると、公爵は不意に身慄した。

「僕ともあろう者が、こんな皮肉にも露骨な妄想を逞しうするのは罪ではないのか、卑劣なことではないのか！」彼はこゝろ叫んで、羞恥のあまり、さつと顔を赧らめた。彼は愕然として、道に釘付にされたように、じつと佇んだ。一時にいろんなことを思い出した——さきほどのバゾロフスクへ行く方の停車場、先ほどのニコライエフスキ停車場、それにラゴージンに面と向ひ合つてした眼のことについての質問、いまま自分の胸にかけてゐるラゴージンの十字架、ラゴージンが自分で連れて行つて受けさせた彼の母の祝福、さきほど階段の上でラゴージンがしてくれた最後の發作的な抱擁と最後の斷念、——おまけに、こうした様々なことであつた擧句のはてに絶えず何ものかを周圍に探し求めてゐる自分、あの商店、それにあの商品、——何ていう淺ましいことだ！ かういふ色んなことであつた後で、自分はいま『或る特別な目的』、『思ひもよらない考え』を胸に懷いて、或る所へ向つてゐるのだ！ 絶望と苦惱とが胸にあふれる。公爵は直ぐに宿屋へ

引き返そうと考へて、くるりと踵をめぐらし、歩き出しさえもしたが、ほんの一分間も経つたかと思つと、つと立ちどまつて、思案に暮れ、ついには又もや元の道へ向き直つて歩き出した。

かうして彼はもうベテルブルグスカヤ區へやつて來て、その家に近づいてはいたが、今ではもう以前の目的、『特別な考え』を懷いて歩いてゐる譯ではなかつた！ どうしてそんなことがあるものか！ そうだ。彼の病氣がまた起りかゝつてゐたのだ。これはもう確かな話である。事によつたら、今日じゆりに必らず發作が襲つて來るかも知れない。この暗澹たる氣持もその發作のせいなら、あの『考え』も發作のせいであらう！ しかし、今やすでに、闇は吹き拂われ、悪魔は逐いのけられ、疑惑は去つて、彼の胸には歡喜が満ちあふれてゐるのだ！ それにまた——ずいぶん久しぶりなこと、『あの女』に會わない。どうしても會わなければならぬ。……そうだ、今、ラゴージンと出合つて、その手をとつて二人で會いに行きたい。……彼の胸は澄みきつてゐる。彼は決してラゴージンの競争者ではない。彼は明日になつたら自分でラゴージンのところへ出かけて行つて、女に會つたことを告げるであらう。彼がこゝへ飛んで來たのは、さつきもラゴージンが話したように、會いたさ見たさの一念からであつた！ 多分、あの女は家にいる筈だ。バゾロフスクへ行つてゐるといふのは、それはどはつきりしたことではないのだから！ 　　そうだ、今こそ一切のことをはつきりとさせなければなら

ない。皆の者がお互いにお互いの心をはつきりと諒解できるやうにしなければならぬ。さきほどラゴージンが叫んだやうな陰惨な、苦痛に充ちた絶望の念をすつかりなくしてしまわなければならぬ。それにこうしたことはすべて心おきな……明るい氣持で成し遂げなければならぬ。まさかラゴージンに明るい心持が缺けてゐるといふ譯でもあるまい。あの男は、あの女を愛してはゐるが同情もたなければ、『いささかの憐憫の情も』懷いてゐない、と言つてゐるさうだ。あの男はさういつた後で、『君の憐憫の情の方が俺の戀より強いかも知れない。』と、さうも言つてゐる。——だが、だが、あの男は、我とわが身を蔑んでゐるのに違ひない。ふむ……ラゴージンが本を讀むつて、——それこそ『憐れみ』の證據ではないか、『憐れみ』の心が湧いて來たのではないか。その本が彼の手許にあるということが既に、彼女に對する自分の立場を充分に自覺してゐるといふ立派な證據になつてはいないか？ それにしても、さきほどの彼の話は何だといふのだらう？ いや、單なる情慾というよりは、つと深いものが確かにあつた筈だ。一體、あの女の顔が單に男の情慾を煽り立てるばかりのものだらうか？ それに、一體、あの顔で男の情慾を今どき煽ることが出来るものであらうか？ いや、あの顔は苦惱の念を催おさせ、人の魂を強く捉えるものだ。あれこそ、……すると、灼けつくやうな傷ましい記憶が不意に公爵の心に閃いた。

　　そうだ、傷ましい記憶。初めて女の發狂の徴候を發見した時、彼はどんなに自分が苦しみ惱んだか、そのことを思い出した。そのとき彼は殆んど絶望的な氣持を味わつた。それなのに、あの女が自分のところからラゴージンの許へ奔つた時、どうしてあの女を打つちやつて置いたのか？ うかうかと報せなどを待つてゐないで、自分であとを追つてゆくのが當り前の筈なのに。だが、……ラゴージンは今もなおあの女の發狂に氣がつかないでゐるのかしら？ ふむ……ラゴージンは一切のことについて他の理由、情慾的な理由のみを發見してゐるのだ！ それにあの狂氣じみた嫉妬の怖ろしさ！ さつき、あんな申し出をしよとしたのは、どういふ了簡なんだらう？ （公爵は忽ちに顔を赧くした。そして胸の中で何かぎくりとしたやうな氣がした。）

　　ところが、どうしてこんなことを思い出さなければならぬのか？ これではまるで兩方とも狂人じみてゐるではないか。自分があの女を情慾のために愛するといふこと、……それは殆んど考えられない沙汰である。残忍な、不人情なことだ。そうだ、そうだと……確かに、ラゴージンは自分で自分を中傷してゐるんだ。あの男は實に大まかな氣持をもつていて、苦惱を嘗めることも憐れみを寄せることも出来るのだ。事の真相を一から十まで承知して、あの傷つけられてゐる半狂亂の女が、どんなに可哀そうな人間であるかを見きわめたならば、その時こそはあの男も必らずや、以前の凡ゆる出來事、自分自身の蒙つた一切の苦痛も忘れて許してやるに相違ない。恐らくは、彼女の下僕となり、兄弟となり、親友となり、道しるべとなるに相違ない。同情はラゴージン自身の生涯に意義を與え彼を教えるところがあるに相違ない。同情と







ジンではなかつた。今はまた今で、あの家から五十歩ほど離れた筋向いの歩道に立つて、腕組みをしながら待つていた。もうすつかり姿を現わして、わざと見せびらかそうとしていくかのようだ。彼はまるで告訴人か裁判官のように立つていて、決してそれらしいところはなかつた。……時に、それとは一體、何のことなのか？

さて、どういふ譯か公爵は今も自分の方から彼の傍へ進み寄ろうとはせず、二人の眼と眼とが出遭つたのにも拘わらず、何も気がつかなかつたような振りをして顔をそむけてしまつた（そうだ、二人の眼と眼が出遭つて、互いに彼らは顔を見合せたのだ）。彼はさつきラゴージンの手をとつて、一しよに『あそこ』へ行きたいと思つたのではなかつたか？ 自分の方からラゴージンのところへ行つて、あの女のところを訪問したことを、話そうと思つたのではなかつたか？ そこへ行く途中で、歡喜の念が不意に心を充たし、例の悪魔を拂いおとしたのではなかつたか？ それともラゴージンの中に、つまりこの男の『今日』の言葉、動作、視線など、すべてこしたものの總和のなかに、公爵の怖ろしい豫感や、彼の心をかき亂した悪魔の囁やきを實證するような或るものがあったのではなかつたか？ その或るものというものは、ただ自然にそう思われるだけで、分析することも口に出して語ることも難かしく、充分に理由をあげて證明することもできかねる。しかも、さうした困難と不可能があるにも拘わらず、その或るものは充分にはつきりとした、打ち破ることのできない印象を刻みつけ、無意識のうちに強い確信となつて

るのだらう！』彼は門のところ立ちどまつたまま、昔々するよきな嘲笑いをうかべて、こんなことを考へてみた。殆んど絶望に近いよきな、堪え難い羞恥の念が新たに潮のように押し寄せて来て、彼を停んでゐる門の入口に釘づけにしてしまつた。彼は一瞬間、立ちどまつた。人間にはさういふことがよくあるものである。俄かに心に浮んで来る堪え難い思い出、殊に羞恥の情を伴つた思い出は、大ていは人間を一瞬間、その場へ立ちどまらせる。『そうだ、おれは不人情な人間で、卑怯者なのだ！』陰鬱な口調で言つたかと思つと、彼はいきなり、さつと動き出したが、又しても立ちどまつた。この門の中はいつも暗かつたが、この時はまた、わけても暗かつた。じりじりと押し迫つて来た夕立雲が夕日の光りを呑みつくして、ちようど、公爵がその家へ近づいた時、俄かに雲は空一面に流れて擴がつた。一瞬立ちどまつていた所から急に動き出したとき、彼は門の直ぐ下の通りに面した入口にいた。折柄、ふつと彼は門の奥の、薄暗がりの、ちようど階段の上り口のところに、一人の男の姿を眼にとめた。その男は何かを待ちうけてでもいるような様子であつたが、ちらと見えただけで、忽ちのうちに姿を消してしまつた。その男はつきり見きわめる暇がなかつたので、勿論、公爵はその男が何者であつたかはつきりと言ふことは出来なかつた筈である。かてて加えて、ここは旅館のこととて、絶えず多くの人々が出入りして、廊下をあちこちと足早に往來してゐた。しかし彼は、確かにその男を見きわめて、間違ひなくそれがラゴージンであつたという、否定することのできない充分な

行くのであつた……

『それは何に對する確信であらうか？（おお、この確信、その卑劣な豫感）の奇しさ、屈辱が、いかばかり公爵を苦しめたことであらう、さうして彼が、いかばかりわが身を責めたことであらう！』言えるものならば言つて見ろ、何の確信であるのか！』と彼は絶えず非難し、挑戦するような態度で自分で自分に言ひのであつた。『自分の考へてゐることに、はつきりと、正確に、逡巡することなく、堂々と形式を與えて言ひ現わして見るがいい！ おお、おれは何ていう恥知らずなんだ！』彼は憤怒に驅られ顔を赧らめながら、繰り返して言つた。『自分はこれからさき一生涯の間、どんな眼をしてあの男を見ようというんだ！ おお、何という日だらう！ おお、何という惨めなことだらう！』

ベテルブルグスカヤ區からの、この長い、心苦しい道の終ろうとする頃、直きにラゴージンのところへ行つて、彼の歸りを待ち受け、羞恥の念と涙とをもつて彼を抱いて、一切のことを物語り、何もかも一時に解決してしまおうという抑え切れぬ欲望が、ちらりと公爵の心を捉へた。しかし、既に彼は自分の宿屋の傍へ來ていた……さつきは實に、この宿屋も、この廊下も、この家全體も、自分の部屋も、ちらつと見ただけでも氣に食わなかつた。ここへ歸つて來なければならぬのだと思ひおこしては、この日一日、幾たび、何ともいえない厭やな氣持になつたことであらう……。『それにして、何だつて自分は、まるで、病氣にかかつてゐる女みたいだ、今日という今日、何でもかんでも懺悔なんてものを信ず

確信を突破のうちに掴み得たように感じた。ほんの一寸してから、公爵はその男の後を追つて階段へ駆けつけた。息の根が、はたと止まつてしまつた。『今こそ一切が解決するのだ！』と、奇怪な信念をもつて彼は口の中で呟やいた。

公爵が門から駆けあがつた階段は、一階と二階の廊下に通じていて、その廊下の兩側に客室が並んでゐた。その階段は、大ていの古い建物にありがちな、石づくりで、薄暗く、幅が狭くて、大きな石の柱をぐるぐる廻りながら上へ昇るやうになつてゐた。最初の小廣い中段のところにあるこの柱の中には幅が一步そこそこで、奥行が半歩ぐらゐの、壁の引こみに似た窪みがあつた。それでもどうにか、一人入れるぐらゐのゆとりはあつた。かなり暗くはあつたが、その中段まで駆けあがつて來た公爵は、どうした譯か直ぐにその引こみの中に人が隠れてゐるのに氣がついた。突嗟の間に公爵は右手を見ずにそこをさつと通り越してしまおうと考へた。既に彼は一步を踏み出したが、どうにも我慢がならなくなつて、ふいと振り返つた。

さきほどの二つの眼、『まぎれもないあの眼』が不意に彼の視線とぶつかつた。引こみの中に隠れてゐた男の方も、早くも一步を踏み出してゐた。一瞬間、二人は殆んど鼻をつき合わせるやうにして向き合つてゐた。公爵はいきなり相手の肩を掴んで、光りの射す所に近い階段の方へ振り向けるやうにした。彼ははつきりと相手の顔が見たかつたのだ。

ラゴージンの眼はぎらぎらと輝やきはじめ、狂暴な微笑みのために顔は醜く歪んで來た。相手の右手が振りあげられ、



その手の中にびかりと閃いたものがあつた。公爵はその手を遮ろうとは思わなかつた。彼はただ、「パルフェン、まさかと思うよ……」

と自分が叫んだらしいのを憶えているだけであつた。

それから、忽然として、何かしら彼の眼の前に展開した。異常な『内部の』光りが彼の魂を照らしたのである。そうした瞬間が恐らく半秒くらいも續いたのであろう。が、彼は、いかなる力をもつても押しとどめることができず、ひとりで胸の奥底から迸り出た、あの怖ろしい自分の悲鳴の最初の響きをはつきりと、意識的に記憶している。それから、彼の意識は忽ちのうち朦朧として、眞つ暗がりになつてしまつた。

かなり永いこと訪れなかつた癲癇の發作が彼を襲つて來た。誰でも知つていられるように、癲癇の發作、殊に『ひきつけ』の最高潮というものは束の間に襲來するものである。その瞬間には、俄かに顔面が、特に眼つきが激しく歪んで來る。痙攣と痙攣が全身と顔面の全筋肉を支配する。怖ろしい、想像もつかないような、何ともかとも例えようのない悲鳴が胸の底から迸る。その悲鳴の中には人間らしいところは微塵もなく、はたで見ている者には、それがこの當の本人の口から出る叫び聲であらうとは、どうしても考えられないのだ。少くともそう考へることは非常に難かしいのである。それはまるでその本人の體のうちに誰か別の人間が隠れていて、その人間が叫んででもいるかのようにすら思われる。少くとも、多くの人は、癲癇の發作に襲われてゐる人の様子を見て、どこ

「はかりや」へ立ち歸つた。彼がそこへ姿を現わしたのは、晩の七時前後であつた。そして残してあつた置手紙を見て、公爵がこの町へ來ていることが分かる、手紙に記されてあるアドレスをたよりに、大急ぎでそこへ駆けつけた。ところが、宿で公爵が外出していると聞かされたので、彼はそのままの食堂へ行つて、お茶を飲み、オルガンを聞きながら、公爵の歸りを待つことにした。然るに、はからずも、誰かが發作を起して倒れたという話を小耳にはさんだので、彼は何となく虫が知らせる氣がして、その場へ駆けつけた。すると、果してそこに公爵の姿を見出したのである。直ぐに應急の手當が施された。公爵は部屋に運びこまれると、やがて意識を取り戻したが、すつかり正氣に返るのには、かなり永いことかかつた。頭部の傷の診察のために迎えられた醫者は、傷口を洗つてから、傷のために別に危険になるようなことはないと言つた。一時間ばかりも経つてから、公爵に周圍の様子がかかりはつきり分かるようになる、コオリヤは公爵を馬車に乗せて、旅館からレーベジェフのところへ連れて行つた。レーベジェフはべこべこお辭儀をしながら、熱意をこめて、病人を迎えた。そして公爵のために別荘ゆきの目を早めて、三日目には早くもバゾロフスクへ引き移つていた。

とはなしに、神秘的なところさえもあり、生きた空もなく、堪え難い恐怖を感じたと、その印象を物語つてゐる。このような突發的な恐怖の印象が、その瞬間あらゆる他の怖ろしい印象を伴つて——レーベジェフをその場に立ち竦ませてしまつたればこそ、あわや顔上に下らんとしていた避くべからざる白双の下から公爵を救つたものと考えるのが至當である。で、レーベジェフはさすがに發作といふことには思いもよらず、公爵がよろよろと傍を離れ、いきなり仰むけに倒れたかと思つと、頭をひどく石の階段に打ちつけながら、眞逆様に階段をころがり落ちるのを見て、一目散に下へ駆け下り、倒れている相手を避けるようにして、無我夢中で旅館を飛び出してしまつた。

癲癇と身もだえと痙攣のために、病人の軀は十五段近くもある階段を一氣に下までころげ落ちた。直ぐに、ものの五分間とも経たないうちに、人々が倒れてゐる公爵を見つけて、忽ちどやどやと群をなして集まつて來た。頭の邊に流れてゐる夥しい血潮を見て、人々は怪訝の念に驅られた。この男は自分で間違つて怪我をしたんだらうか、それとも何か犯罪が行われたのであるまいかと。しかし、間もなく誰いとなしに癲癇ということが分かつて、泊り客の一人が、公爵をさきほどの客だと認定した。結局、この騒ぎは或る好都合な事情によつて無事に解決した。

四時までは『はかりや』へ歸ると言つておきながら、そのままバゾロフスクへ出向いたコオリヤ・イザオルギンは、不意に思い返して、エバンチン將軍夫人のところへ、『會食

レーベジェフの別荘はさして大きい譯ではなかつたが、かなり居心地もよく、きれいでさえもあつた。他人に貸すことに決めてある一廊は特に手入れが行き届いてゐた。通りから露臺へ入り口にはかなりに廣々とした露臺があつて、香橙や檸檬や素馨などを植えた緑いろの大きな桶がいくつも並んでゐた。レーベジェフのつもりでは、こうして置けば何よりも借手の眼をひくに相違ないとの趣向であつた。これらの木のうちの何本かは、別荘と共に手に入れたものであるが、彼はこれらの木が露臺の眺めをよくする効果に惚れ込んで、なお一段の生彩を加えようとし、丁度いい折があつたら、競賣に出る同じような桶植の樹木を買ひ占めようと決心してゐたほどであつた。ついに木が手に入つて、すつかり別荘へ運び込まれ、うまく配置された時にはレーベジェフは幾たびとなく露臺の階段から通りへ駆け下りて、通りから自分の家に見るとしては、その度ごとに、やがて來るべき借家人に要求する金額を心の中で増して行つた。元氣がなくなり、愁いとどざされて、體までも傷めつけられていた公爵にはこの別荘がひどく氣に入つた。尤もバゾロフスクに着いた日、つまり、發作のおこつた日から三日目に、公爵は胸の中では今なお癒り切らないように感じていたが、見たところの様子では健康人と殆んど變りがなくなつてゐた。この三日間に身のまわりに來てくれた人は誰もが彼を喜ばせた。殆んど傍を離れずにくれたコオリヤがうれしかつた。レーベジェフ一家の人達も（甥はどこかへ姿を消して家をあけていた。）うれしく、主



人のレーベジェフも慕わしかつた。まだペテルブルグの町にいた時に見舞に來てくれたイヴォルギン將軍にも、大喜びで應待した。夕方ちかくにここへ着いたその日にも、露臺にいる彼の周圍に實にたくさんの人が集まつた。最初に來たのはガーニーであつたが、公爵にはちよつと見わけがつかなくなつた、——會わずにいるうちに瘦せてしまつて、見ちがえるよふになつていたからである。それから、やはりパヴロフスクの別荘へ來ているワーニャとブチーツィンが姿を現わした。イヴォルギン將軍もレーベジェフのところへ殆んど絶え間なしに來ていたので、まるで一しよに引越して來たかのようになつて思われた。レーベジェフはイヴォルギン將軍を公爵の方へやりたくなかつたので、いつも自分の傍へ引きよせていた。彼はもう將軍と友達同志のようになつていた。見たところでは疾うの昔からの知合のようであつた。二人はこの三日の間に、どうかすると永いこと話しこんだり、時おり大聲を立てて議論したりして、それがまた學問上のことらしかつたりして、どうやらレーベジェフがそつとした議論を得意になつて居る様子を、公爵ははつきりと見てとつていた。レーベジェフは將軍をなくてはならない人間にし切つて居るとさえも考えられた。しかし、公爵に對すると同じように、レーベジェフは家族に對しても、別荘に引越して來たその日から、非常な警戒を始めた。公爵に迷惑をかけないようにとの口實のもとに、誰ひとり彼の傍へ近づけず、赤ん坊を抱いて居るヴェーラであるが、誰であるが、若しも娘たちが公爵のいる露臺へ行きそつた氣はいいを見せると、地團太を踏ん

ると、おとなしく言うことをきいて踵をめぐらし、戸口の方へ爪さき立ちして引きさがる。しかも、拔足で歩いて居る間じゆう、「わたしは一言も物をいけませんよ。そつら、この通り出て分つて居るでしょう。もう二度と参りませんよ。」とでも仄かすように、兩手をしきりに振つて居る。ところがもの十分、せいせい十五分とも経たないうちに又もややつて來るのである。コオリヤは公爵のところへ自由に入りができるのだ、このことがレーベジェフには甚だしく癪にさわり、ひどく侮辱されたやうな不満を感じるのであつた。コオリヤはレーベジェフが半時間もドアのかけに佇んで、二人の話を盗み聞きして居るのに氣がついた。むろん、このことを公爵に注進に及ばぬ筈はない。

「あなたはまるで僕を座敷牢へ入れて、手玉に取つて居るみたいですね。」と公爵は抗議を申し込んだ。「少くとも、別荘へ來たからには、そんなことはやめて貰いたいものです。僕は誰にでも會いたい人に會い、また行きたい所へも行きますから、そつ思つて下さい。」

「それあ、大きに御尤も。」といつてレーベジェフは兩手を振つた。

公爵は頭のさきから爪先まで、しげしげと眺めた。

「時にどうか、ルキャン・チモフェーキツチさん、あんたの寢臺の枕もとのところに釣つてあつた小さい戸棚。ここへ持つて來ましたか？」

「いいえ、持つて参りませんでした。」

「じゃ、あそこへ置いて來たんですか？」

で、まつしぐらに飛びかかり、駈けつけて、公爵が追つ拂つたりなんかないでくれと、どんなに頼んでも、散々に追いまくるのであつた。

「先ず第一ですよ。あいつらをかりそめにも甘やかすようなことがあると、尊敬の氣持はてんでなくなつてしまいますよ。それにまた、失禮なことでもありますね……。」公爵が開き直つて詰問をすると、ついに彼はこういつて辯解した。

「一體どうしたつてんだらう？」と公爵はたしなめた。「實際、あなたは何かの監視をしたり見張りをして下さるけれど、却つてこつちが苦しむだけです。もう何度となしに言つたように、僕はたつた一人で居ると退屈しようがない。そこへもつて來て、手を振つたり、爪さき歩きをされたりしては、却つてよけいに氣が腐つちやいますよ。」

公爵のいつたのは次のようなことであつた。病人には絶對安靜が必要だなどと、勝手な熱を吹いて家中の者を追つ拂つておきながら、當のレーベジェフはこの三日間いつも最初はドアをあけて首をつき入れ、まるで、「居るかしら？ 逃げてはいないか知ら？」と、はつきり確めようとでもして居るらしく、部屋の中を一わたり見廻して、今度は爪先を立てて、忍び足して、ゆつくりと安樂椅子の方へ近づく。そのためにこの下宿人はゆくりなくも嚇かされる。しよつちゆう何か用はないかと伺いを立て、しまいに公爵がたまりかねて、そつとしておいて下さいよと注意を促しかか

「とても持つては参りません。何しろ、壁からもぎ取らになりませんので……いや、とてもしつかりして居て。」

「そつら、じゃ、多分ここにもあんなのがあるでしょう？」

「却つてあれよりは上等の、ずつといいのがありますよ！ この別荘も、それと一しよに買いましたんで。」

「はあ！ ところで、誰ですか、さつき、あなたが僕のところへよこさなかつたのは？ 一時間ほど前に。」

「あれは……あれは將軍でございましての。ほんとによこしませんでしたよ。別にあなたに御用もありません。私はあの人を心から尊敬いたして居りますよ、公爵、あのお方は……あれは偉いお方でございまして。あれがとお思いになるでしょうがな？ いや、今にお分かりになりますよ。でも、やつぱり……その、公爵様、あの人にはお會いなさん方がよろしゆうございますよ。」

「けども、どうしてそつなんです、お伺いしたいものですが？ それに、どうしてレーベジェフさん、あなたは何だつてこんな爪さき立ちをして居るんです？ それに、いつも僕の傍へ寄つて來る時といえは、まるで内緒話でもしたそつな恰好をして？」

「淺ましい、淺ましい、自分でもそつは感じますよ。」とレーベジェフはいかにも尤もだというように胸を叩きながら、思いがけない返答をした。「でも、あなた様に對して將軍はあんまりもてなしがよすぎることになりませんか？」

「もてなしがよすぎると？」

「へえ、そつでございますよ。」



「第一に、あの人は手前どものところへ住み込もうつていうつもりもあるんですよ。それはまあいいと致しまして、あの人は物に躍起になるたちでしてね。直ぐに親類の押し賣りをいたしますんで。もう何べん私どもは、親類の約束をしたか分かりません。あの方の奥さんと手前どもの女房が姉妹で、われわれは義理の兄弟とかいうことでしたよ。あなたはまた、母方の又甥になるんですよ。昨日わたしに話して聞かせたばかりなんです。かりにもあなたが甥御さんというのでしたら、公爵様、自然わたしとあなたも親類ということになりませぬ。まあ、こんなことは大したことでもございませぬ。先ず、玉に瑕というところですね。ところが、たつた今、私に言つて聞かせるじやありませんか、あの人の一生涯、つまり少尉補の頃から昨年の六月十一日までの間に、あの人のところへやつて来て食事をする人の数が、毎日二百人を下つたところがなかつたんですよ。擧句の果てには、席を立ちあがる暇もなく、一晝夜の間にも十五時間もぶつ續けで、お午餐から夕食、それにお茶というわけで、テーブル・クロスを取りかえる暇もあるかなしの時が三十年の間、ほんの少しの休みもなしに續いたんですよ。一人が席を立つて歸ると、また別の一人がやつて来る、そして休みの日とか皇室のお祝ひ日には客の数が三百人にもなつたんですよ。それがまた、露西亞建國一千年の記念日には無慮七百人というじやありませんか。いやはや、全くもつて恐ろしい。どうもこんな消息は、甚だよろしくない徴候でございましてね。こんなに客あしらのいい人を、事もあるうに自分のところへ招ぶなんて空怖

ろしいことですよ。ですから私も考えちやいました。『こんな人はあなたにとりましても、私にとりましても、あんまりもてなしが過ぎはせんか。』と。」  
「でも、あなたはあの人と大分いい仲らしいじやありませんか？」  
「兄弟みたいなつもりで、私もそんな話は冗談だと思つて聞いてるんですよ。まあ、義兄弟ならそれでもよし。私にしては、大へんな名譽でございませぬから。まあ、あの二百人という大ぜい様のことや露西亞建國一千年前のお話を承わつただけでも、あのお方が實に御立派なお方だということは、よく分かりますし。いや、本氣で言つてるんでございませぬ。ねえ、公爵、あなたはいま内緒話つてことを仰つしやいましたね。何か、私がおの、あなたのお傍へ參る時、いかにも内緒話をしたような恰好をしてるか。ところがその、内緒話たるや、まるでわざと拵えたようにあるんでしてね。實は御存知様が唯今、あなた様と内密では是非ともお目にかかりたいというお便りがありましたので。」  
「一體、どうして内密になんか？一寸もそんな心配はないのに。僕は自分であの人のところへ行きますよ。今日にでも！」  
「そうですとも。そうそう、そんな心配は要りませんと。と、レーベジェフは手を振つた。「それに、あなた様が考えてらつしやるようなことは、あの方には怒ろしくも何ともございませぬでしょう。序でに申し上げますが、例の悪黨めが大てい毎日のように、あなたのお加減をどうだこうだと訊ね

に來るんですけれど、御承知でございませうね？」  
「よくまあ、あなたは何かという、あの男を悪黨呼ばりなさる。どうも僕には不思議でなりませんよ。」  
「別に不思議がるものはないでございませぬ。別に、」と大急ぎでレーベジェフは話題を外らしてしまつた。「私はただ、その、例の御存知様の怖れていなさるの、あいつではなかつて、全く別の、まるで別の人だと、それをお聞かせしたかつたのでして。」

「まあ、一體、何ですつて。早く聞かして下さい、」と公爵はじれつたそりに、レーベジェフのいかにも秘密らしく取りすました顔を眺めながら追究した。

「そこがそれ、秘密なんです。」  
「どういつてレーベジェフは薄ら笑いをした。」

「誰の秘密です？」  
「あなた様の秘密でございませぬ。御自分であなた様が、『僕のそばで言つてはならん』と、おとめになつたじやございませぬか……」と呟やいたレーベジェフは聴き手の好奇心を、病的に苛々するほど煽り立てたことに興味を感じて、いきなりこう結んだ、「アグライヤ・イワーノヴナさんを怖れていらつしやる。」

公爵は少々苦い顔をして黙つていたが、  
「ほんとにレーベジェフさん、僕はここを出て行きますよ。」  
不意に彼はこう言つた。「ガヴリーラ・アルダリオノキッチとプーチツイン御夫婦はどこに居られるんです？ あなたのところ？ あなたはあの人たちまで誘惑したんですね。」

「みなさんがいらつしやいますよ。ほら、そこへ。それに將軍まで後からついて來ますよ。戸をすつかり開けてしまつて、娘たちもみんな呼んで來ます。今すぐです、すぐです。」  
レーベジェフは両手を振つて向うの戸から、こつちの戸へと飛び歩きながら、びつくりしたように、こう囁やいた。  
この時、コオリヤが通りから露臺へ上つて來て、後からお客にリザヴェータ・プロコフィーヴナと三人の令嬢がやつて來ることを知らせた。  
「プーチツイン夫妻とガヴリーラ・アルダリオノキッチを通したものでしょうか、どうでしょうか、どうしますか？」と報せにおどろいたレーベジェフが駈け寄つてこう叫んだ。  
「何故、いけないんです？ 來たい人は誰だつて構いません！ いいですか、レーベジェフさん。あなたは初めから僕たちの關係を何だか、誤解してゐるんですね。あなたつて人は、しよつちゆう、何だか勘違いばかりしてゐるんですよ。わたしには人から逃げかくれするような理由は少しもありません。」こう言つて公爵は笑い出してしまつた。  
レーベジェフは公爵の顔を見て、自分も笑うのが義務だと考へた。レーベジェフは、心では竝々ならぬ不安に怯えていたが、表面はさりげなく如何にも満足そうにしていた。  
コオリヤの齎らした報せに間違ひはなかつた。彼は二人に報告するためにエバンチン家の人々にはほんの數歩先んじて來たのであつた。客人たちは俄かに兩方から現われた。露臺からはエバンチン家の人々、次の部屋からはプーチツイン夫婦にガーニャとイヴォルギン將軍。



エバンチン家の人々は、公爵の病氣のことも、彼がバゾロフスクに來ていることも、ほんの今方コオリヤから聞いて初めて知つたような始末であつた。それまでというものは、重苦しい疑惑に包まれていた。というのは將軍が家族の人々に宛てて公爵の名刺を送つてよこしてからすでに三日経つていたからである。この名刺を見たリザヴェータ・プロコフィーヴナは、この名刺の後を追うようにしてすぐにも自分たちに出かけた。公爵がバゾロフスクに來るに違いないと確く信じてしまつた。令嬢たちは、半年も手紙一本よこさない人が今じぶんになつてそんなに急いで來ることなんかありはしない、それにあの人はベテルブルグにもいるいろ仕事があるのかも知れない、人のことなんぞどうして分かるものか、と言つて將軍夫人を説き伏せようとしたが、それも無駄であつた。却つてリザヴェータ・プロコフィーヴナはそうした窘めにすつかり腹を立て、「明日公爵は間違ひなく來ます。それだつて本當から言へば遅すぎるのだけだ。」と言つて賭でもせんばかりの權幕であつた。その翌日は午前中ずつと待ちもつていた。晝食にも待つていた。夕方にもお心待ちにしてゐた。遂に暗くなつてしまつた時リザヴェータ・プロコフィーヴナは何でも彼でも矢鱈に當り散らすよになつて家のものとは誰彼なしに喧嘩を吹つかけるのであつたが、勿論、喧嘩の動機が公爵にあるのだとは一言も口にしなかつた。この三日目には朝から公爵のことは一言も語られなかつたのであるが、中食の時、アグラレーヤがひよいと口をこらして、ママが

「アグラレーヤは立ち騒ぎながらおるおる聲でこつ言つた。『だのにおまえさん方は禮儀がどうのこつと言つていたりして！』あの人は家のお友達じゃありませんか？」  
「だつて、深淺を知らずして水に入る勿れつて、ことがありませんわ。」と、アグラレーヤが突つこみかけた。  
「ふん、じやいらつしやらないで。その方がかえつていいかも知れませんよ。エツゲニイ・パーヴロキッチさんがいらしたら、お相手する人がございせんからね。」  
アグラレーヤはこつ言葉を聞かされても、勿論みんなの後について行つた。もともとと言われなくても行くつもりではいたのである。公爵もちやうど來合せてアグラレーヤと話をしていたが、彼女の求めに應じて、即刻、婦人たちに同伴することを承諾した。彼はもう以前から、エバンチン一家と近づきになつた當初から、公爵の話を聞いて非常に興味を覺えていたのである。それに彼と公爵とは知り合ひの間柄でもあつた。二人は最近ある所で近づきとなり、二週間ばかり、一しよに或る町で過ごしたことがあつたからである。それは三ヶ月ほど前のことであつた。公爵は公爵のことについて様々なことを話して聞かせなどして、全體として極めて同情のある見方をしてゐた。こつ言次第であるから、今、近づきの人を訪ねるについて心からの満足を感じていたのである。イワン・フォードロキッチ將軍はこの日は家にいなかつたし、エツゲニイ・パーヴロキッチもまだ訪ねて來なかつた。  
エバンチン家の別荘からレーベジェフの別荘までの道のり

怒るのは公爵が來ないからだと言つた時、即座に將軍が「それはあの男の知つたことじやない。」と口を出すと、リザヴェータ・プロコフィーヴナは怒つて席を離れるなりそのまま行つてしまつた。遂に夕方になつてコオリヤが姿を現わし自分の知つてゐる限りの報知や公爵危禍の顛末を詳かに物語つた。かくて最後にリザヴェータ・プロコフィーヴナに旗が擧つたのであるがどのみちコオリヤは彼女から手酷い小言を喰つた。毎日常日、この邊をうろろしつてゐる辭に、仕出かすことと言つたら碌でもない。自分で來るのが厭やだつたら、何とか知らせせてでもくれればいいのに。」コオリヤはこの「碌でもない」と言う言葉を聞いて、怒り出しさうになつたが、じつと胸を鎮めて、この次の機會まで取つておくこととした。それにこの言葉がこれほど人を侮辱したものでなかつたら、恐らく少しも腹を立てることはなかつたと思はれるほどコオリヤはリザヴェータ・プロコフィーヴナが公爵の病氣を知つて、心配したりあわてたりするのが嬉しかつたのである。リザヴェータ・プロコフィーヴナは是非とも即刻、ベテルブルグに人をやり、誰か一流の醫學界の大家を招いて、明日の一番列車でここへ連れて來るよになつなければならぬと永いこと言い言いつていたが、とうとう令嬢たちの言葉で思ひどまつた。間もなく夫人が病人の見舞いに行く支度をした時には、令嬢たちもさすがママに後れを取らうとはしなかつた。  
「あの人はもう、危いんだぞうだよ。」リザヴェータ・プロコ

は三百歩くらいであつた。リザヴェータ・プロコフィーヴナが公爵のところまでうけた不愉快な第一印象は、客の中に彼女の非常に思ひ嫌つてゐる人が二三いたといふことは言わずもがな、公爵の周圍に餘りに多勢の客がいたことである。第二として、驚ろいたことには、重態の病床にあるものだとばかり信じていた青年が、全く思ひもかけぬ健康な顔つきに笑みをたたえ、しやれた服装をして自分たちを迎えに出來たことである。彼女は驚ろきの餘りその場に立ち止つたほどである。コオリヤはそれを見ると有頂天になつて喜んだ。彼女は夫人が別荘から出かけるうちに、死にかかつてゐる人なんか誰もいません、臨終の床なんて何もありません、と、はつきり言つて置くべき筈なのに、悪戯氣を出してそれをわざと話さなかつた。それは自分の親友である公爵の健康な姿に接した時、夫人がきつと怒り出すに違ひないと考え、その時の様子が多分に滑稽なものであるうかと前もつて想像していたからである。そこでコオリヤは、自分とは親愛な感情で結ばれてゐるのにも拘わらず、絶え間なく冗談の言ひ合ひをし、ともすれば怖ろしく辛辣な皮肉をも應酬する間柄になつてゐるリザヴェータ・プロコフィーヴナをこの際、どこまでもからかつて怒らせようと、自分のその想像を無躰至極にも口に出してしまつたのである。  
「まあ、せかせかせしないで控えていらつしやいよ。いい子だから、折角のお得意の鼻が折れてしましますよ！」リザヴェータ・プロコフィーヴナは公爵のすすめる安樂椅子にかけながら、こつ言應酬した。



レーベジェフとブチーツインとイヴォルギン將軍は駈けよつて令嬢たちに椅子をすすめた。アグララーヤには將軍がすすめた。レーベジェフは8公爵にも椅子をすすめたが、その際も、いとも恭々しく腰を折り曲げて敬意の情を表わした。ワリーヤは、いつものように、嬉しくつて堪らないとでもいつた様子で、低い聲で令嬢方に御挨拶をしているのであつた。「これはほんとうのことなんですよ。わたしはあんたがもうきつと病床についていることだと思つていました。びつくりして大袈裟に考えていたんだわ。何も嘘を言うことはないから言いますが、あんたのうれしそうな顔を見たとき、忌々しい氣さえたのですよ。暫つて言つときますが、それはほんの一分間のことで。直ぐに氣がつかました。わたしは考えさえ取り戻せば、いつも賢いことをしたり言つたりしますからね。きつと、あんたも、そうでしょう。わたしにはほんとうの息子があつてこんな風に病氣が癒つたとしも、あんたが癒つたほどにはうれしくないでしょう。あんたがわたしの言葉を信用しないなら、それはあんたの恥で、わたしの恥じやありませんからね。この意地悪の小僧つ子ときたら、そんなことどころじゃありません。とても人を喰つた駄洒落なんかぬけぬけと言うのですよ。だけど、あんたはこの小僧つ子の眞面目をしているらしいわね。わたしは前もつて言つときますがね。よござんすか、わたしはそのうち、こんな者と交際するのは斷つてしまいますよ。嘘じやありません。」

「だつて、どうして僕が悪いんです？」とコオリヤは叫んだ。「あの、僕は公爵はもう殆んど元氣だつて幾度も言つたじや

ありませんか。それなのにあなたは、公爵が臨終の床にいられる方がずつと面白いもんだから、僕の言うことを信じようとなさらなかつたのぢやありませんか。」

「永くここにいらつしやるつもり？」とリザヴェータ・ブコフイナは公爵の方を向いて訊ねた。

「夏中か、都合によつたら、もつと永く。」

「あんたやつぱり獨りなの？ 奥さんはいらつしやらないの？」

「ええ、獨りです。」と、夫人の鋭鋒の無邪氣さに微笑みながら、公爵はこう言つた。

「何も笑うことはありません。普通のことです。わたしは別荘のことを言つておられるのですよ。どうしてわたしどもの所へいらつしやらなかつたの？ 家の傍屋が空いているのに。だけど、まあ好きなように！ これはあの人の家ですか？ あの人の？」と彼女はレーベジェフを頷で示しながら、附け加えた。「どうして、あの人はいつもおどけた恰好をしているんですの？」

この時、いつものように赤ん坊を抱いたヴェーラが部屋から露臺へ出て來た。この時までレーベジェフは椅子の間をあちこちとろろろしながら、身の置き場所に困つていなから、そうかといつて出て行くのもかなり厭やだというふうな様子をしていたが、ヴェーラを認めると、いきなり飛びかかつて、我を忘れて足を踏みならし、兩手を振つて、露臺から追い出そうとした。

「あの男は氣ちがい？」突然、將軍夫人はこう言い足した。

「いいえ、あの……」

「じや、多分、酔つ拂つておられるでしょうね？ あんたのお仲間はどうもかんばしくありませんね。」と無愛想な調子で言つと、彼女は、ほかの客を二わたりじろりと眺めた。「だけど、なんて可愛い子なんでしょう？ あれは誰なの？」

「ヴェーラ・ルキヤノヴナつて、あのレーベジェフの娘さんです。」

「あ……とても可愛い娘ね。わたし、あの娘とお友達になりたいわ。」

ところが、リザヴェータ・ブコフイナは稱讚の言葉を耳にはさんだレーベジェフは早速、紹介するつもりで自分から娘を引きつれて來た。

「親なし子でございます。母のいない子でございます。」そばに近よると、恍惚とした氣持になつて彼はこう言つた。「これが抱えている赤ん坊も——母のいない子供でございます。これの妹で、娘のリョヴォフィでございます。亡くなつた女房のエレーナと正式の法律上の結婚で出來た子でございます。女房は産後の肥立ちが悪くつて、六週間前に亡くなりました。神様の思召しで亡くなつたのでございます……それでございませう……ほんの姉と言つて過ぎませんが母代りに……」

「ただそれだけのことで、はい、ただそれきりのことで……」

「でも、お前さんつたら、ねえお父さん、馬鹿みたいに、ただそれつきりだなんて。あ、失禮、もう澤山だわ、お前さん自分でよく分かつておられるでしょう。」リザヴェータ・ブコフイナは極度の不満に驅られながら、急にそう言い放つた。

「全くさようでございます！」と言つてレーベジェフはいとも恭々しく頭を下げた。

「ちよいと、レーベジェフさん、あんたが黙示録の講義をなさるつて、ほんとうのこと？」とアグララーヤが訊ねた。

「はい、全くのことでございます……もう十五年前から。」

「わたし、あんたのことを聞きましたわ。あんたのこと、新聞に出てたような氣がするわ。」

「いや、あれは別の講師のことでございますよ。その人は亡くなりました、そのかわりに私が残つたようなわけです。」

と、無性に嬉しそりにレーベジェフが一氣に答えた。

「お願いだから、二三日うちにいつか講義をして下さらないこと、御近所のよしみでね。わたし黙示録のことがさつぱり分らないのですよ。」

「差し出がましいことを言うようですが、アグララーヤ・イワノヴナさん、そんなことはみんな、その男の駄法螺ですよ。」何とかがして話をはじめようとしていらいらしながら待ちかまえていたイヴォルギン將軍が不意に早口に言葉を挟んだ。彼はアグララーヤ・イワノヴナと並んで腰を下した。「勿論別荘には別荘なみの權利があります。」と彼は語をつづけた。「別荘には別荘特有の面白味もあります。それにこうした僭越至極の男を黙示録の講義のためにお招きになることも所謂妙案と稱するものでしょう、いや寧ろその思いつきの點において、拔群の妙案とさえ言うるでしょう。しかし、私は……あなたに驚かしたようにわたしを見ていらつしやるようですね？ イヴォルギン將軍です。御面接を得まして非



常に光榮に存じます。アグラレーヤ・イワーノヴナさん、わたしはこの手であなたをお抱きしたことがありますよ。」  
「大變うれしうございますわ。わたし、ワルワラー・アルダリオノヴナさんともニーナ・アレクサンドロヴナさんともお近づきでございますわ。」アグラレーヤは吹き出しそうになるのを一生懸命に押しこらえながら吃るようこう言つた。

リザヴェータ・プロコフィーヴナは、かつとなつた。彼女の胸に大分前から何かしら溜つていたものが一時に、はけ口を見出したのであつた。彼女はずつと古い昔の、一と頃の知り合いにすぎないイヴォルギン將軍にどうしても我慢がならなかつた。

「あんたは、相かわらず嘘を言いますね。あんたがあの子を抱いて下すつたことなんか一度だつてありませんわ。」彼女は憤然として言い放つた。

「ママ、あなた忘れていらつしやるのよ。ほんとうに抱いて下すつたんだわ、トヴェーリで。」

と不意にアグラレーヤが將軍の言葉を承認した。「あの頃あたしたち、トヴェーリにいましたわね。わたし、あの頃たしか六つ位でしたわ。この方が弓と矢を作つて、射ることを教えて下さいましたわ。わたしあの時、鳩を一羽射落しましたわよ。覚えていらして、一しよに鳩を射つたでしょう、ね？」  
「それから、わたしにはあの時、厚紙の兜と木剣を持つて来て下すつたわ。わたしもよく覚えていますわよ！」とアデライーダが叫んだ。  
「わたしもそれを覚えています。」アレクサンドラが合鍵を

まだ御自分の高潔な感情をすつかり酒に飲み乾しておしまひになつた譯じゃないのね。奥さんに苦勞をさせてさ。子供さんの躰けもしなければならぬのに、債務監獄に入れられたりなんかして。さあ、あんた、ここを出ていらつしやい。どこか隅つこの戸の蔭にでも立つて、泣きながら、罪のなかつた昔のことを思い出さない。神様もそうしたら許して下さいでしょうよ。さ、行くんですよ。わたしは眞剣に言つてゐるんですよ。以前のことを悔悟して思い出すことほど罪滅しはありませぬよ。」

しかし眞剣に言つてゐるのだと繰り返して言う必要はなかつた。將軍は、しよつちう酒氣を帯びてゐる人の常として、非常に感激し易かつたし、又どん底まで酒に身を持ち崩した人々と同じく、幸福だつた過去の思い出を、じつと堪え忍ぶことができなかった。彼は立ち上がると、おとなしく戸の方へ歩き出したので、リザヴェータ・プロコフィーヴナはすぐ

に彼が可哀そうになつて來た。  
「お前さん、アルダリオン・アレクサンドロキッチ！」と彼女は後ろから聲をかけた。「ちよつとお待ちなさい。わたしたちは誰でも罪のある身です。あなたも良心の苦しみが少くなつたと思つたら、わたしのところへいらつしやい。しんみり昔のことでもお話ししましょう。わたしだつて、あなたより五十倍も罪深い體かも知れませぬものね。さあ、今は向うへいらつしやい。ここにいらつしやることはありませんよ……」  
將軍が引きかえして來たので彼女は驚ろいてこう言つた。「しばらく放つておく方がいいでしょう。」父の後を追つて

打つた。「あんた方が傷ついた鳩のことで喧嘩をして部屋の隅と隅に立たせられましたわね。アデライーダは兜をかむつて、木刀をつけたまま立っていましたわ。」

將軍がアグラレーヤに、あなたをこの手に抱いたことがあると言つたのは、ただ會話の糸口を見つげるために言つたので、若い人々と知り合いになる必要があると考えた場合には大抵こんな工合に話を持ちかけるからに過ぎなかつたのである。しかし、今度だけは、まるでわざとのようにほんとうのことを言い、又まるでわざとのように、それがほんとうのことであるのを忘れていたのである。ところが、今アグラレーヤが突然、あなたと一緒に鳩を射つたことがあると言ひ出した時、彼の記憶は一時に蘇つて來た。そしてよく高齡の人が何か古い昔のことを思い出すときのように、事の枝葉末節に至るまで細々と思い出したのであつた。不幸な、そしていつも少々酒氣を帯びてゐるこの將軍に、この思い出の如何なる點がつよく作用したのか、それはちよつと言ひ難いが、彼はいきなり非常に感激してしまつたのである。

「覚えてはいますとも、何もかも覚えてはいますよ！」と彼は叫んだ。「あの頃、わたしは歩兵二等大尉だつたのです。あなたは可愛いほんのねんねさんでしたよ。ニーナ・アレクサンドロヴナさん……ガニーニャ……あなた方の所へ……よくお伺がいたものでしたなあ、イワン・フォードロキッチさん……」

「それなのに、今は何でことですの！」と將軍夫人が彼の言葉を受けた。「しかし、そんなに感激なさるところを見ると、

行こうとしたコオリヤを、こう言つて公爵がとどめた。「でないと、すぐに腹を立てて、折角のいい機會が駄目になつてしましますから。」

「ほんとうです、放つておきなさい。三十分もしたら又いらつしやい。」とリザヴェータ・プロコフィーヴナは決めつけるように言つた。

「一生にただの一度でもほんとうのことを言つと、こんなもんですかね。涙を流さんばかりですよ！」レーベジェフが思い切つてこう言つた。

「ふん、私の聞いていることがほんとうなら、あんたも、きつと立派な人間だよ。」とリザヴェータ・プロコフィーヴナがすかさずきめつた。

公爵のところ集つた客の相互の關係は追々に決まつて來た。公爵は勿論この場の様子から、將軍夫人や令嬢たちの自分に對する同情の深さをはかることができたし、それを有難くも思つたので、あなた方の來られる前に、時間は大分遅くはあつたが病氣をおしても今日は自分の方から訪問するつもりであつたのだと衷心から述べた。そこで、リザヴェータ・プロコフィーヴナは客を一わたり見廻してから、それは今すぐに實行できることだと答へた。プーチツインは、社交的な至極氣のつく人であつたからすぐ席を立つて、レーベジェフの傍屋に退いた。彼はその際、是非レーベジェフにも一しよに行こうと誘つたけれど、こちらは今すぐ行きますと言つたばかりで立とうとはしなかつた。ワトーリヤはその時令嬢たちと話をしていたので後に残つた。彼女もガニーニャも、將軍が



いなくなつたので大變喜んだが、そのガーニヤ自身もまた、間もなくブチーツインの後を追つて立ち去つた。彼は露臺でエバンチン家の人々と同席していた數分の間、憤まじやかな態度をとり、決して自分の品位を墜すようなことはなく、二度までも頭のでつぺんから足の爪先まで、じろじろと見つめるリザヴェータ・プロコフイーヴナのいかつい視線に少しもたじろぐようなことはなかつた。事實、以前の彼を知つていた人々は彼が非常に變つたことに氣づいた。それがひどくアグライヤの氣に入つた。

「今、出て行つたのはガヴリラ・アルドリオノキツチさんでしょう？」彼女の時々好んでするように、他人の話を妨げるように、誰にもなく突然大聲でこう訊ねるのであつた。

「そうです。」と公爵が答えた。

「すつかり見ちがえるところだつたわ。あの方もずいぶんお變りになつたわね。それも……ずつといい方に。」

「僕もあの人のために、とても喜んでゐるのです。」と公爵が言つた。

「あの人はとても病氣がひどかつたんですよ。」とワリーヤが同情を面に表わして嬉しそうに言い添えた。

「どうしてあの人がいい方へ變つたの？」と不満そうに怒つたような調子で、驚かんばかりに、リザヴェータ・プロコフイーヴナが訊ねた。「どこを押せばそんなことが言えるの？いいところなんか少しもありませんよ。お前さんは一體どこがよく見えるの？」

「貴しき騎士」よりいいものはありませんからね！」ずつとたように大きな聲で笑つた。アグライヤはもういよいよ本氣になつて怒り出したが、それがまた一段と美しさを添えるのであつた。彼女の取亂した姿と、そうした自分自身に對する忿怒の様子が彼女には極めて似合はかつた。

「この子はお母さんの言葉さえずいぶん勘違いしてゐるじゃありませんか。」と彼女は附け足した。

「僕はあなた御自身の喩の言葉を根據としてゐるんですよ！」とコオリヤが叫んだ。「あなたは一月ほど前に『ドン・キホーテ』の頁をめくりながら『貧しき騎士』よりいいものはないつて感嘆の叫びをあげられたじゃありませんか。その時いつた誰のことをおつしやつたのか僕には分かりません。

ドン・キホーテのことなのか、エツゲニイ・パーヴロキツチのことか、それともまた今一人の方のことなのか、それは知りません。しかし誰かのことをおつしやつたのには相違ありません。そして永いことお話しただじやございませんか。」

「お前さん、そんな得手勝手な當て推量をするのは生意氣ですよ。」とリザヴェータ・プロコフイーヴナがコオリヤをやりこめた。

「だつてそれは僕ひとりじゃないんですよ。」とコオリヤはだまらなかつた。「みんなで、その時、話したんですよ。今でも話しています。そら、さつき、S公爵やアデライダ・イワーノヴナやみんなが『貧しき騎士』に贊成だつて仰しやつたじゃありませんか。だから『貧しき騎士』は存在してゐるんですよ。確かにゐるんですよ。僕の考へでは、アデライダ・イワーノヴナさえ承知して下すつたら、『貧しき騎士』

とリザヴェータ・プロコフイーヴナの椅子の傍に立ちつづけていたコオリヤが俄かに大聲でこう言つた。

「わたしも同感ですよ。」S公爵がこう言つて笑つた。

「わたしも全く同意見よ。」とアデライダが元氣よく叫んだ。

「『貧しき騎士』つて何です？」と言つて將軍夫人は訝かしのげに、また忌々しそりに、大聲をあげた人々を見廻したが、アグライヤが、さつと顔を赧らめたのに氣づく急にかつとなつて言い足した。「どうせ碌でもないことなんですよ！その『貧しき騎士』つていろいろは何ものですか？」

「あなたのベットのこの坊主が人の言葉を穿き違えるのは、今更のことじやございませんまいし？」

傲慢な怒りに驅られてアグライヤはこう答えた。

アグライヤの怒つた時の動作の中には（それに彼女は非常に腹を立てやすかつた）。その眞面目な氣むすかしそな顔つきにも拘わらず、大抵いつも、何だか子供っぽい、まるで弱虫の小學生のような、それに隠し損なつたような何ものかが姿を覗けるので、それを見た人は時々笑い出さずにいられなくなるのであつた。それがまた、アグライヤには口惜しくてならなかつた。何をそんなに人が笑うのか、自分には分からなかつた。そこで『どうしてそんなことができるのだろう。何て失禮な人たちだろう。笑つたりなんかして。』とこう思うのであつた。今もやはり姉たちと公爵が笑い出したのである。公爵レフ・ニコラエキツチまでがどうしたのか顔を赧くしながら笑つてゐる。コオリヤは又面白くて堪らないとい

が誰だか僕たちみんなに分かつたんですけれど。」

「わたしが、どうしていけないんです。」と言つてアデライダが笑い出した。

「肖像を描いて下さらなかつたでしょう——それがいけないんですよ！アグライヤ・イワーノヴナがああ時あなたに『貧しき騎士』の肖像を描いてくれつておつしやつて、御自分で考へ出された主題をすつかり話されたでしょう。あの主題を覚えていらつしやるでしょう？あなたはそれをいやだつておつしやつたのです……」

「だつて、誰をどんな風に描けばよかつたんですの？あの主題では、『貧しき騎士』は、

兜の肩庇を人まゑに、

上ぐることすら絶えてなく

どんな顔ですか？何を描くんです。兜の肩庇？匿名？」

「名も分かりやしない。その兜の肩庇というのはいつた何ですか？將軍夫人はこの『貧しき騎士』という呼び名で（確かに大分前から呼ばれてゐるらしい）。誰の意味になるのかがよく分り始めたのでいらいらして來た。

ところが、レフ・ニコラエキツチ公爵も亦、もじもじして、遂にはまるで十くらゐの子供みたくにはにかみだしたので、彼女はすつかり怒り出してしまつた。

「何です。そんな馬鹿な話をやめますか、やめないんですか？わたしにその『貧しき騎士』の譯を聞かしてくれませんか、くれないんですか？近よることのできないような何か、怖ろしい祕密なんですか？」



しかし一座の人々はただ笑い續けているばかりであつた。

「いや、ほんの下らないことだ。ある奇妙な露西亞の詩があつて」と、明らかに、この話を採みつけて、話題を變えようとし、公爵が話の中へ割りこんで来た。「それが『貧しき騎士』のことを言っているんです。初めも終りもない斷片ですよ。一ヶ月ばかり前のこと、中食の後でみんながふざけながら、例の通り、アデライド・イワーノヴナの今度の畫題を探していたんですよ。御存じの通り、アデライド・イワーノヴナの畫題を見つけてるのが、もう大分まえからお宅さんの總がかりの仕事になつているのであります。そこでこの『貧しき騎士』に話が觸れた譯なのです。誰が持ち出したのか覚えていませんが……」

「アグライヤ・イワーノヴナです！」とコロリヤが叫んだ。

「大方そうでしたらう。わたしはすっかり忘れましたが。」と公爵は話を續けた。「ある人はこの畫題をすっかり冗談にして認めませんでした。外の人たちはこれ以上のものはないと主張するのです。しかしそれはどつちにしても、この『貧しき騎士』を表現するにはモデルが要するという事になりました。それで知つた人の顔色々と物色し始めたのですが、一つとしてこれと思ふのがなかつたので、この點が問題になつた譯です。ただこれだけのことで、しかし、どうした譯でニコライ・アルダリオ・キツチさんがこんなことを思い出されて、引用されたのか僕には分かりませんね。以前にその場の面白さがあつたことも、今となつては少しも面白くありません。」

この詩の中には言つてありませんが、何か輝やかしい姿、『清純な美の姿』らしいんです。それから、この姿に戀い慕つた騎士は首巻の代りに、珠數なんか首に巻いてたんだそうです。それからまだ何だかはつきりしない言ひさしにしたやうな銘、そう、A・N・Bつていう字がありましたわ、それを騎士は楯の上に彫りつけてたんですよ……」

「A・N・Dです。」とコロリヤが訂正した。

「でもわたしはA・N・Bと言つていんですよ、わたしはそう言いたい。」と忌々しうにアグライヤが遮つた。「まあ、あれはどちらでもいいとして、明瞭に分かつているのは、この貧しき騎士は自分の姫君が誰であるかと、どんなことをしようと、そんなことはもう少しも顧着しないのです。自分が姫を擧げ出して、彼女の清純なる美を信じた上は、もう永久にその前に跪すだけで充分だつていんです。つまり、後になつて彼女がたとい泥棒であると分かつたにしても、自分分は變ることなく彼女を信頼し、その清純な美のために槍を折ることこそ自分の使命であるという譯なの。詩人は清廉高潔な騎士の懐いていた中世紀の騎士のプラトニックな戀の大きな概念を、一つのこの異常な形の中に盛り込もうと思つたのらしいわ。勿論これはみんな理想です。『貧しき騎士』の中では、この感情が極端に禁慾主義にまで到達しているのです。しかしこうした感情を懐き得るといふことは多くの意味を示しているしこうした感情そのものが深い意味をもつてを

\*七七頁にもあるようにアウシヤンの詩の引用として「訂正した」のであるがA・M・Dたるべきところを作者はつねにMをNとし、この誤りに氣づかなかつたらしい。(編者註)

「それは何か新らしく毒のあるいやな馬鹿らしい意味を含ませたからです。」とリザヴェータ・プロコフィエヴナが遮つた。「深い尊敬の念以外にはそんな馬鹿な意味はすこしだつてありません。」さつきの狼狽した氣持を拂いのけて、すつかり冷静に立ち歸つていたアグライヤが、人々の思いもかけぬ重たい眞面目な聲でこう言つた。

そればかりではない、その態度にあらわれた種々の點から察するに、彼女は今ではこの冗談が段々と深みに落ちて行くことを悦んでいるかと思われた。彼女の心にこうした變化が起つたのは、公爵の困惑の状態が次第次第に募つて遂にはその頂點に達したことが、はつきりと分かるやうになつたその瞬間からであつた。

「まるで火がついたやうに笑いこけているかと思うと、今度はいきなり怖ろしく深い尊敬が出て来るんだね！　まるで氣ちがいみたいだよ！　何が尊敬なのかい？　さあ仰つしやい。ああだ、こうだと言つてるかと思うと、今度は何だつて、そういきなり深い尊敬が出てくるんだえ？」

「深あい尊敬といひますのはね。」母の殆んど毒々しいほど針を含んだ間に對し、アグライヤは依然として重々しい眞面目な様子をつづけながら答えた。「それは、この詩の中に、理想を懐くことのできる人間が偽りなく描かれていからです。第二にはこの人は一たん自分の理想を定めたからには、飽くまでもそれを信じ、そのためにはすべてを忘れて自分の一生を捧げるのです。今の世にこんな人はもうたんとはいませんよ。この『貧しき騎士』の特別の理想が何か、それは、

り、又一面から言へば極めて賞讃すべきことであるといふことは否定することができません。これは敢えて『ドン・キホーテ』に依つてもありません。『貧しき騎士』はドン・キホーテと同じやうな人物ですが、ただ眞面目であつて、滑稽な部分のないところだけが違つたのです。初めわたしは分からないので笑いましたけれど、今では『貧しき騎士』を愛しています。寧ろその勳功を尊敬しています。」

こうして、アグライヤの話は終つたが、その顔を見ると、それは眞面目に言つていのか、冗談に言つていのか、ちよつと見當がつかなくつた。

「ふん、そんなものはどこかの馬鹿だよ。その男も、その勳功とかいふものさ！」と將軍夫人は言い放つた。「それにおまえさんはずいぶん大演説をおやりだつたのね。どうもおまえさんの柄ではないやうだよ。とにかくこんなことはいけません。で、一體どんな詩なの？　讀んで頂戴。きつと知つてるんでしよう！　わたしは是非その詩が知りたいんですから。わたしは一生涯、詩というものには我慢がならなかつたのさ。まるで豫感でもしていたやうね。後生だから、辛抱なさいよ。どうやらわたしも、あんたも辛抱しなければならぬやうですから。」

夫人は非常に腹を立てていた。

レフ・ニコライキツチ公爵は何やら言おうとしたが、先刻から打ち續いた困惑のために、一口も物が言えなかつた。ただ獨り例の『演説』で思ふことを遠慮なく言つてのけたアグライヤだけは、少しも憶する色なく、寧ろ悦んでいるやうに



見うけられた。彼女は相變らず眞面目な重々しい態度をつづけたまま間もなく立ち上つて、もう前から心待ちにしながらただすめられるのを待つていたというような顔つきをして露臺の眞中へ進み出て、ずつと安樂椅子にかけ續けていた公爵の前に突つ立つた。一同は幾らかおどろいて彼女を眺めていた。殆んど總ての人々——公爵、二人の姉、母親——は不愉快な氣持になつて、てつきり辛辣な、その上まへもつて用意されてあつたらしいその新らしい悪戯を眺めはじめた。しかし、アグライヤはいかにもこれから詩を朗讀しますといつたこの改まつた自分の恰好がすつかり氣に入つたようであつた。リザヴェータ・プロコフイヅナはアグライヤが詩の朗讀を正に始めようとした刹那、今にもアグライヤをもとの席に追いかえそうとしていたが、丁度そこへ二人の新しい客が聲高に話しながら通りから露臺へ上つて來た。それは、イワン・フョードロキツチ・エパンチン將軍と、その後ろに續く一人の若い男であつた。一座に小さなざわめきがおこつた。

將軍について來た青年は、年の頃は二十八くらい、背の高い、すらりとした男で、きれいな、かしこそうな顔をして、大きな、黒い眸の輝やきにユーモラスな、人を食つたような様子で充分に窺われた。アグライヤはその男の方を振りかへると、相變らず勿體ぶつて、ただ公爵の

うとして進み出た時の、あの最初の氣取つた様子や不遜な態度は今も眞摯な態度と詩の精神と意義とに徹しようとする氣持によつて全く蔽いつくされてしまつた。彼女は詩の一言一句に意味をふくめて發音し、非常に質朴な調子で讀んで行つたので、朗讀が終る頃には一座の人々の注意を集注させたばかりではなく、譚詩の高邁な精神を傳へることによつて、最初にすまし込んで露臺の眞ん中に出て來た時の、あのわざとらしい氣取つた勿體ぶりをも幾分は當然のこととして容認させた形であつた。この勿體ぶりのうちに今はただ彼女が敢えて人に傳へようとしたものに對する彼女の深い尊敬の氣持、或いは、無邪氣だとさえもいえるような氣持のみが見られるのであつた、眼は光りを放ち、その美しい顔には、靈感と感激との輕い、殆んど見えるか見えないほどのおののきが、二度ほど通り返り過ぎて行つた。彼女は朗讀するのであつた。

世に貧しく、言葉すくなく、  
飾り氣もなき騎士のいて、  
見るからに快々として、蒼ざめたれど、  
こころ雄々しく、憚る色なく。

思い知られぬ  
ゆめをいだき  
夢の思いはむらぎもに  
ふかくさざまれ、

方ばかりを見、公爵の方ばかりを向きながら、詩の朗讀を續けていた。こんなことは何もかもが、或る特別な胸算用があつてやつてゐるのだとは公爵にもはつきり分かつて來た。しかし、少くとも新しい客たちは彼のこそばゆい氣持を直してくれた。連中を見つけると、彼は、つと立ちあがつて、愛想よく、遠くの方から將軍に頷いて、朗讀の邪魔をしないようにとの合圖をして、さて自分は安樂椅子のうしろに引き退がり、椅子の背に左の手で頰杖をつきながら、やはり譚詩に耳を傾けていたが、もう安樂椅子に腰をかけている時よりはずつと工合もよく、そんなに「おかしい」格好もしていなかつた。

リザヴェータ・プロコフイヅナはというと、これは命令をするような科をつくつて、そこに立ちどまつていてくれるやうにと二度も手を振つた。しかし、公爵は將軍について來た新しい客に、非常な興味を覺えていた。これは確かに今まで度々、噂にも聞き、一度ならず考へてもいたエヴゲニイ・パーヴロキツチ・ラドムスキイに相違あるまいと推察した。ただ彼の文官の服には面食らつた。エヴゲニイが武官だとかねて噂に聞いていたからである。詩を朗讀している間、すでに自分も『貧しき騎士』のことは何だか聞いたことがあるといつたやうな風をして、新しい客をその唇にたえず嘲るやうに微笑を漂わせていた。『事によつたら、この人が自分で工夫したのかも知れない。』と公爵は秘かに考へた。

その時このかた、よき人に思いこがれて、  
女を見ることを憚りて、  
世を終るまで女の前に、  
口をひらかむこころなく。

己れが頸に珠數をかけ、  
肩掛すらもまとわずに、  
兜の眉庇、人まえに  
上ぐることをすら絶えてなく。

清き戀情にみたされて、  
たのしき夢をひたすらに。  
楯に血をもて記せしか、  
A・N・Dと鮮やかに。

またパレスチナ、荒れ野にて、  
荒武者たちが岩づたい、  
聲高らかに、おのがじし、ひとのよき名を稱えつつ、  
戦のにわに馳するとき。

いとあららかに、物すこく、騎士は叫びぬ、  
Lumen coeli, santa Rosa! 聖なるのかけよ、  
異教徒たちは驚ろきぬ、  
この聲高き雄たけびに。



はるかに遠きわが城にかえり来れば  
戸をば鎖してひとり暮らしぬ、  
語る言葉も絶えてなく、ただ悲しみにかき暮れて  
狂えるごとく世を去りぬ。

そののち、この時のことを思い起して、ムイシキンは自分にとつてはどうにも解決のつかない或る疑問のために、永いこと極度の昏迷に悩まされるのであつた。それは、あれほど眞實のこもつた、美しい感情に、あれほど眼に見えて意地の悪い嘲笑いを、どうして結びつけることができたのか？ということであつた。嘲笑いの氣持があつたということ、そのことは公爵も充分に認めていた。公爵ははつきりとそのことを悟つて、そう考へなければならぬ理由をもつていた。というのはアグラレーヤが朗讀の時、A・N・Dという文字を、勝手にN・F・Bという文字に代えたことである。そこには思ひ違ひや聞き違へなどはなかつた——ということも彼は信じて疑わなかつた（實際にそうであつたことが後に證明された）。兎にも角にも、アグラレーヤの亂暴な仕草は——勿論、冗談ではあつたが、冗談にしては余りに辛辣な、輕卒な冗談である——前もつて手筈をきめて置いたものであつた。「貧しき騎士」のことは、誰もが、すでに一ヶ月も前から話していたことである（そして『笑つて』もいたのだ）。

それにしても、その後、公爵がどんなに思い出してみても、こう思われるのであつた。アグラレーヤはあの文字を發音

\* ナスターシヤン・イリツボヴァ、バラシコフの頭字（譯者註）

たなりますよ。」とリザヴェータ・プロコフィエヴァ夫人は苦々しそりに答えて、「ほんつとに恥だわ！家へかえつたら、直ぐにそのブッシキンの詩集を見せておくれ。」

「だつてブッシキンのなんか無さそうですよ。」

「いつの頃からですか、知れませんが、」とアレクサン

ドラが附け足した、「何だかほどけた本が二冊ころがつていますよ。」

「直ぐにフョードルかアレクセイを一番汽車で町へ買いにやりましょう。——アレクセイの方がいいわ。こつちへおいで、アグラレーヤ！あ、接吻して。おまえ、ほんとに巧く朗讀したわね。でも、おまえが本氣で讀んだんなら、」と、殆んど囁やくような低い聲で附け足した。「わたし、お前が可哀想だわ。若しも冷やかすつもりで讀んだんなら、お前の氣持を尤もだとは思いませんよ。だから、兎にも角にも、ちよつとも讀まなかつた方がよかつたんだわ。分かつて？さ、いらつしやい、お嬢さん、また一しよに話しましょう。でもずいぶんここに長居をしまつたわ。」

その間に公爵はイワン・フョードロキッチ將軍に挨拶をした。やがて將軍は彼にエツゲニイ・パーヴロキッチ・ラドムスキイを引き合わせた。

「途中でつかまえて来たんです。この人は汽車で来たばかりなんですから。私もこちらへ来るし、うちの者もみんなこつちにいることを知つたものですから……」

「また、あなたも此方においでだつたと聞きましたもんですから。」とエツゲニイ・パーヴロキッチが口を出した、「わた

したとき、冗談めいた様子とか、何か嘲笑めいた風とかは少しもなく、また、内にかくれている意味を——そう明瞭に感じさせようとして、特にこれらの文字に力を入れたというようなことさえもなく、寧ろ反對に、こんな文字は諷刺詩の中に確かにあつたもので、本の中にもそういう風に印刷されてあつたものだらうと思われるほど、相變らずの眞摯な態度と無邪氣な、極めて自然な素朴な態度を以てしたとしか思えなかつた。何かしら、重苦しい、不愉快なものが恰も公爵の心をちくりと刺したように思われた。

リザヴェータ・プロコフィエヴァは勿論、文字が變つていたことも、當てこすりであつたことも悟りはしなかつた。イワン・フョードロキッチ將軍に分かつたのは、詩を讀んだというだけであつた。あとの人たちの大部分は、これを悟つて、アグラレーヤの大膽な仕草や、これだけのことを企てたことに驚嘆したが、かたく口を噤んで素振りにさえも見せまいと努めていた。ところが、エツゲニイ・パーヴロキッチは（公爵はこのことなら賭をしてもいいとさえも思つていた）、ただ悟つたというばかりではなしに、悟つたことを素振りに表わそうとさえも努めていた。さればこそ、餘りに人を食つたような嘲笑いを浮べたのである。

「まあ、何ていいんでしよう！」と夫人は朗讀が終るや否や、すつかり有頂天になつて叫んだ。「誰の詩なの？」

「ブッシキンのよ、ママ、あたしたちに恥をかかせないで頂戴、ほんとに恥かしいわ！」とアデライーダが叫んだ。

「まあ、おまえさん達といると、もつともつとこれより馬鹿

しは、ずつと前からもう貴方のお近づきというばかりでなく、御厚誼をいただきたくいと絶えず考へて居りましたもので、すから、このいい機会をはずしたくないと存じまして。お加減がお悪いんですつて？唯今、お伺いしたんですけれど……」

「え、すつかり良くなりました。あなたにお目にかかれて何よりです。お噂は度々伺つて居りまして、また自分でも公爵とお噂をしたりしたものでした。」とレフ・ニコライキッチは手を差しながら答えた。

お互いの挨拶が済み、二人は互いに握手して、互いにじつと眼と眼を見合せた。忽ちのうちに二人の會話は一同の視線をあつめた。エツゲニイの文官服は一座の者に何か非常に強い驚異の念を惹き起して、そのほかの印象は一時まつたく忘れられて打ち消されたほどであつた。公爵はこのことを見て取り（彼はいま凡ゆることを素早く、貧るような眼で見取つた。あまつさえ、全くありもしなかつたことまでも見て取つたかも知れないのである）、それにこの服装の變化に何か殊さらに重大なものが秘められて居るようにも考えられた。アデライーダとアレクサンドラは訝かしげに何のかんのはかなりの不安をすらもつていた。將軍は殆んど興奮でもしているかように話をしていた。ただ一人アグラレーヤばかりは、さも物珍らしそりに、しかも落ちつき拂つて、軍服と文官服とは、どちらがよく彼の顔に映るかを較べてでも見ようとして居るかのやうにエツゲニイ・パーヴロキッチをち



よつと見ていたが、間もなくくると向きを變えて、もうそれつきり彼の方は振りかえりもしなかつた。リザヴェータ・ブコフイーヴナも、幾分は不安になつていたのかも知れないが、やはり何一つ訊いて見ようとはしなかつた。公爵には、エツゲニイ・パーヴロキッチが夫人のお覚えが目出たくないように思われた。

「驚ろきましたよ、全くびつくりしましたよ。」とイワン・フヨードロキッチは一同の質問にこたえてこつと言つた。「僕はさつきベテルブルグで會つたその時から、本氣にしようとは思いませんでしたよ。何だつてあんなに不意に、こんなことをなすつたのか、それが問題ですよ。會つたかと思つと、先ず第一に、大きな聲で、『役所の椅子をこわさなくなつたつていい。』と、こつなんですかね。」

そのとき話題に上つた色んなことから、次のようなことが分かつて来た。エツゲニイ・パーヴロキッチはずいぶん前からこの退職のことを觸れ廻つていた。しかも、いつもその話しぶりが、あまり眞面目でなかつたので、どうにも眞にうけることはできなかつた。おまけに眞面目な話の時には、かなりふざけた顔つきをしていたので、嘘か眞か區別がつかなくなつた、わけても自分の方から相手にその區別がつかないやうにと考へている時には甚しかつた。

「なあに、僕はね、ほんの一寸の間、三四ヶ月、せいぜい永くて一年くらい休職になつていようと思つてます。」とラドムスキイは笑つていた。「だつて少くとも僕の考へるところでは、何もそんなことを

して、確かめた。  
「今まで、こんなに永いこと氣がつかずに待つていたんですもの、明日までくらい辛抱ができるわ。」とアデライーダが仲に入つた。

「それに不體裁です。」とコオリヤが附け足した。「上流社會の人が文學なんかをそんなに面白がるなんて。エツゲニイ・パーヴロキッチに訊いて御覽なさい。そんなことより赤い車輪のついた黄色い馬車の道樂の方がずつと體裁がいいですよ。」

「また本から引つ張つて來ましたね、コオリヤさん。」とアデライーダがいつた。

「でも、この人は本から引つ張り出して來なかつたら話しの仕様がななんです。」とエツゲニイが後を引き取つた。「批評集の長い文句を、すつかりそのまま引つ張つて來て言うんですからね。僕は疾うから、ニコライ・アルドリオノキッチさんのお話を拜承して居りますが、今のは本から引いて來た言葉ぢやありませんね。ニコライ・アルドリオノキッチさんは明らかに赤い車輪のついた、僕の馬車を當てこすつたんです。尤も僕はあれを取り換えちやいましたよ。だから、あなたは申し遅れた譯ですね。」

公爵はラドムスキイの話を傾聴して……。そして彼が立派に、控へ目に、朗らかに身を持しているやうな氣がして、自分に突きかかつて來るコオリヤと話すのに、彼が全く同輩のやうな氣持で親しそつしているのが彼には一入うれしかつた。

しなくつてもいいと思つてすけれど。」と將軍はなおも憤然とした。

「ですけど、領地めぐりはいかがでしょうか？ あなた御自分からお勧めになつたことですよ、それに加えて、外國へも参りたいし……」

それにしても、話題は忽ち變つてしまつた。けれど、公爵の傍から見ると考へては、餘りにも特殊な今なお續いている不安の念は、なおも加わるばかりであつた。そこには確かに何か特殊なものがあつたのである。

「ではつまり、『貧しき騎士』がまた舞台へ上つたんですか？」とエツゲニイ・パーヴロキッチはアグライヤに近づきながら訊いていた。

ところが、公爵の驚ろいたことには、アグライヤは訝かしそつに、胸に落ちないかのように、まるで、『貧しき騎士』のことなんか、あなたと話す話題ではなく、あなたのお訊ねなされることはよく呑み込めもしないと言つて聞かせたやうな風をしていた。

「でも遅いですよ。今ごろブウキンの本を買いに町へおやりになるのは遅いですよ、遅い！」とコオリヤは一生懸命になつてリザヴェータ・ブコフイーヴナと言ひ合つていた。

「何度くり返して言つても、もう遅いですよ。」

「そう、ほんとに、今から町へ使いにやるのは遅いですね。」と早くもアグライヤを思い切つたエツゲニイ・パーヴロキッチがそこへ口を出した。「僕はベテルブルグの店はもう閉まつてると思ひますね。八時過ぎですよ。」彼は時計を取り出

「それ、何なの？」と、リザヴェータ・ブコフイーヴナはレーベチエフの娘のヴェーラの方を向いた。この娘は夫人の前に、何冊かの大型のすばらしい装幀の、殆んど眞新しい本を手にして立つていたのであつた。

「ブウキンです。」とヴェーラは答へた。「うちのブウキンですの。お父ちゃんや奥様に持つてつて上げるやうにつて言ひましたので。」

「どうしてそんなことが？ そんなことつてあるものかね？」とリザヴェータ・ブコフイーヴナはびつくりした。

「お上げするんじやございません。贈り物ではございません！ わざわざそんな失禮なことは致しません！」と娘の肩のかげからレーベチエフが飛び出した。「へえ、相當のお値段で。これは手前ども、家庭用のブウキンでして、アンネンコフ版でして、きよう日はなかなか手に入らないんですよ、ございますよ。へえ、相當のお値段で。お譲り申し上げたいと存じますして、謹んで持参いたしましたやうな譯で、それでもつて、こちらの奥様のまことに高尚な文學的感情的の勿體ない御待ち遠しさを癒やしたいと存じ上げて。」

「そう、讓つて下さるの。そんなら有難う。それで損するやうなことはしないでしよう、多分。でも、そんなふざけた眞似をするのは止してよ、ね。わたし、お前さんのことは、かなり學識が博いつていう噂を聞いてましたよ。折があつたら話をしましょうね。どう、お前さん自分で、うちへ持つて來てくれるの？」

「はい、謹んで……恭々しく！」と、非常にいい機嫌になつ



て、レーベジェフは娘の手から書物を引つたくりながら、妙な身振りをした。

「さあ、それで失くさないように気をつけて、そんなに恭々しくでなくてもいいから持つて来て頂戴よ、けど、条件つきですよ。」と夫人はじつと彼を見つめながら附け加えた、「闕のところまでは来させるけれど、それから上へ上げるつもりはないからね。その代り娘のヴェーラさんを今すぐにでもよこさない。あの子はすつかり気に入った。」

「何であの人たちのことを言わないの？」とヴェーラは堪らなくなつて父親に話しかけた。「そんなにしてたら、勝手に入つて来るわよ。もう騒ぎ出してらんだから。レフ・ニコライキッチ様。」今度は自分の帽子を取つていた公爵の方を向いて、こう話しかけた。「あちらへ、あなたにお目にかかりたいつて四人ほどの人がお見えになつて、わたし共のところまで待つています、悪口をいいながら。お父ちゃんはあるところへ通しちやならないつて言うんですけれど。」

「どんなお客様？」と公爵が訊いた。

「用事で參られたそうですけど、今もしこちらへ通さなかつたら、待ちぶせでもしそうな人たちです。レフ・ニコライキッチ様、お通しなすつた方が宜しうございますよ。それから追い歸してやつた方が。あちらでガヴリーラ・アルダリオノキッチさんやブチーティンさんが言つて聞かしていらつしやるんですけれど、言うことを、どうしても、どうしても聴かないんです。」

「バヴリシチェフの件です！ バヴリシチェフの件です！」

いて驚ろきながら訝かしそふな顔をして訊ねるのであつた。誰も彼もが興奮して、事の起るのを待つていたことは事實であつた。

公爵はかような全く個人的な問題が、今ここにかくまで大きな關心を一同の者に懷かせるに到つたことに、心から驚異の念を覺えた。

「若しもあなたが今すぐに、自分で、この事件をお片づけになつたら、それこそ、ほんとに立派なものでしようね。」アグライヤは何か妙に眞面目な様子をして公爵の方へ歩み寄りながら、こう言つた。「そして私たちはみんな、あなたの證人にならして頂きますわ。あなたの顔に、ねえ、公爵、泥を塗りがつてゐるんですから、あなた堂々と自分の身の明しを立てる必要がありますわ。私たちは前もつて、あなたのため心からお喜びしていますわ。」

「わたしもまたこんな穢らわしい強請が結局片がついてくれればいいと思ひますよ。」と將軍夫人が叫んだ。「そんな奴らうんと酷い目に遭わしてやんなさいよ。公爵、手加減なんかなさんな！ わたしはこのことはもう耳が痛くなるほど聞かされて、あなたのためにずいぶん氣骨を折りましたよ。尤も、そんな奴らの顔を見るのも面白いわ。ここへ呼んでおいで。私たちはじつとしていきましょう。アグライヤはうまいことを考へつた。公爵、何か、このことをお聞きになりまして？」と、彼女は公爵の方をふり向いた。

「勿論、聞きました。それもお宅で。それはそうと、私もその若い連中の顔が見たいですね。」と公爵は答えた。

そんなことさせるがものはありませんよ、全く！」とレーベジェフは両手を振つた。「あんな奴らの話なんか聞くがものはござんせん。公爵様、あんな奴らのことで心配なさるのには、見つともないですよ。全くでござんす。あいつ等には、そんなことをしてやる價值がありません……」

「バヴリシチェフさんの息！ おやおや！」と公爵は極度にどぎまぎしてこう叫んだ。「僕は知つてます……だけど僕はね……僕はこの事件はガヴリーラ・アルダリオノキッチさんに委任したんですからねえ……。唯彼もガヴリーラ・アルダリオノキッチさんが仰つしやつてました……」

ところがガヴリーラ・アルダリオノキッチは部屋を出てもう露臺へ出て来ていた。その後からブチーティンがやつて来た。

すぐそばの部屋からは何人かの人の話し聲を壓倒しようともしてゐるかのような、イヴォルギン將軍の大音聲と騒がしい物音が聞こえて来た。コオリヤはすぐに物音のする方へ駆け出した。

「これは實に面白い！」とエヴゲニイ・パーヴロキッチが聞こえるように言つた。

『して見ると、あいつは事件を知つてゐるんだな！』と公爵は考へた。

「バヴリシチェフさんのどの息です？ それに、バヴリシチェフさんの息なんて、どんな息もないじやありませんか？」とイワン・フードロキッチ將軍は物珍らしそうに一同の顔を見廻し、自分だけがこの新しい話を知らないのだと氣がつ

「一體、それは虚無主義者つていう仲間なんですか、え？」  
「そうじやござんせん。あいつ等は虚無主義者つていうのは違ふんです。」とレーベジェフは前へ進み出たが、これも矢張り興奮の餘り、今にも慄え出さんばかりであつた。「へい、あれは違ふんでござんして、一風かわつてゐるんでござんすよ。私の甥つ子の話では、あいつ等は、虚無主義者よりは酷いんだそうです。あなた様はお顔をお見せになつて、それでもつて奴らをどぎまぎさせてやろうつていうような御了簡でしたら、とんでもないこと。あいつ等は決して、それ式のことどぎまぎなんか致しませんのでござんす。虚無主義者も矢張りどうかすると、物の分かつた、それに學問まである連中もあるにはあるんですけれど、こつちの奴らと來たら、もつと上手なんでござんす。何せ、先ず第一に實務家なんでござんすから。この方は主に虚無主義の結果というやうなものでしょうが、しかも一本道を通つて來たんでなくつて、耳學問で片つ面を通つて來て、何かの雜誌へ論文を書いて意見を述べるなんかつてことはしないで、すぐにもう實行するんでして。まあ、例えば、ブッシンなんかつてものは無意味だの、露西亞は當然いくつかに分裂しなくてはならぬのだと。そんなことは、てんで問題にならんです、實際。けれど、若し何か仕でかそうと思つと、たといそれがために八人の人をやつけなければならぬやうなことになるつても、萬難を排して爲し遂げるのは當然のことであると思つてゐるのです。時に、公爵、どうも私は矢張りお勧め致したくはないんでござんすが……」



しかし、ムイキン公爵はもう來客を迎えるために戸を開けようと歩き出していた。

「あなたは中傷なすつていられるんですね、レーベツェフさん」と彼は微笑みながら言い出した。「あなたの甥御さんは大分あなたを焚きつけたもんですね。リザヴェータ・プロコフィーヴナさん。この人のいうことを本気にしないで下さい。はつきり申しますと、ゴルスキイやダニーニロフのような人物が出たのは、ほんの偶然のことです……しかも、こんな人たちが……思い違いをしてるだけのことです……。ただ僕はここで皆さんの前で會いたくはありません、失禮ですけれど、ヴェリザータ・プロコフィーヴナさん、若しあの連中が入つて來たら、僕はお眼にかけて、それから連れ出したいと存じます。さあ、どうぞ、皆さん！」

彼はむしろ別の、彼にとつてはまことに辛い考えに心を痛めつけられていた。彼の胸には夢のようにぼんやりと次のようなことが、浮んで來るのであつた。この事件は今、ちょうど、この時刻に、頃合を見はからつて、こうした證人のいる前で、しかも恐らくは、彼を勝たせるのではなく、大恥をかかせるのを豫期して、誰かが巧く仕組んだのではなからうか？ と。が、彼はまた自分の『變態的な、意地の悪い疑い深さ』を省みて、あまりにも悲しかつた。若しも自分の心の中に、かような氣持を懐いていることを誰かに知られていたら、多分、彼は死んでしまつていたであらう。やがて、新しいお客たちが入つて來た丁度その時、彼は道徳的な意味で、自分の周囲にいる人たちの誰よりも、自分は遙かに下等な

だと、心から考えようとしていた。

五人の人が入つて來た。四人の客は新顔で、あとからついて來た五人目の人はイヴォルギン將軍であつた。將軍はひどく憤慨し興奮して、燃えるように熱辯を振つていた。「この人は必らず僕を叱つてくれるだろう！」と公爵は薄笑いを浮かべながら考へた。コオリヤも皆と一しよに滑り込んで、來客の一人であるイッポリットと熱心に話をしていた。イッポリットは耳を傾けて、にやにや笑つていた。

公爵はお客たちに腰をかけた。彼等はいずれも年の若い、まだ一人前になつてさえない連中なので、偶然にこの連中がやつて來たことも、この連中のためにわざわざ格式ばるようになったことも、驚異に價するほどであつた。例えば、この『新しい事件』については何ら知るところもなく、理解するところもないイワン・フォードロキッチ・エパンチンは、あまりにも若いのを見て、憤慨し始め、若しも夫人の公爵一個人の利害關係に對する、彼には不思議なほどの熱意が彼を牽制しなかつたならば、必らずや反抗したに相違ないと思われるのである。尤も、彼は半ばは好奇心、半ばは人がよかつたので、何か助太刀もし、とにかく自己の權威をもつて役に立ちたいとさえも考へながら、その場に踏みとどまつていた。ところが中へ入つて來たイヴォルギン將軍が遠くの方から會釋をする、又もや忌々しくなるのであつた。そこで、苦々しい顔をして、今度はもう絶対に口をきくまいと決心した。

さて、四人の若い來客のうちには、ただ一人、三十位の男

がいて、これはもとは『ラゴージン組の退職中尉で、拳闘家であり、希望者には十五銀留で拳闘を教へていた』男である。察するに、彼は心、うの友たちとしてほかの連中に勇氣をつけ、いざという場合には護衛するつもりで従つて來たものらしかつた。そのほかの連中の中で頭株になつてゐるのは、自分ではアンチーブ・ブルドフスキイと名乗りを上げたが、仲間の間では『パブリシチェフの息』という名で通つてゐる男であつた。この男は貧乏らしく、いかにも無精な支度をしてゐる青年で、兩肘のところが鏡のように光るほど脂でよごれたフロツクに、上まで釦をかけた、これも脂じみてゐるチョッキを着け、ワイシャツの行方も分らないほどの着方をし、極端に油がにじみ出てよれよれになつた黒絹のショールを着け、洗ひもしない手に、ひどく面皰の出た顔を、プロンドの髪に、若しもこんなことが言えるものなら『罪がなくて恥知らず』な眼つきをしてゐた。彼は背は低くなく、瘦せていて、年は二十二くらい。その顔にはいささかの皮肉めいた影も、自らを省みる氣はいも感ぜられなかつた。それどころか、自己の權利なるものに對する、全くの、愚鈍な心酔と、それと同時に、絶えず自分は踏みつけにされて、そういう風に自分を感じようとする不思議な、不斷の欲求ともいふべき妙なものの影が浮んでゐた。彼は興奮して、何だか、語尾を濁しながら話してでもゐるかのようになり、せき込んで、吃りながら話してゐるので、吃りなのか、それとも外國人なのかと思われた。その實は生粹の露西亞生れなのである。

先ず彼の後から眞つ先にやつて來たのは、すでに讀者に知られてゐるレーベツェフの甥で、その次はイッポリットであつた。イッポリットは至つて年の若い男で、十七か、せいぜい十八くらい若い男で、智慧がありそうで、しかも常にいらした顔つきをして、その顔には怖ろしい病氣の痕跡が残つてゐた。まるで骸骨のやうに瘦せ衰えて、蒼白味がかつた黄いろい色つやをし、眼は輝やき、兩方の頬には二つの赤い斑點が燃えるやうに鮮やかに見うけられた。彼は引つきりなしに咳をしてゐるので、一言いふ毎に殆んど、一呼吸ごとに息せききつて疲れた聲が混るのであつた。彼が極度の肺結核にかかつてゐることは、ちよつと見ただけでも明瞭であつた。もう、せいぜい二三週間の壽命であらうと思われた。彼は非常に疲れていたので、誰よりも先にぐつたりと椅子に腰を下ろした。ほかの連中は、入つて來るときに、いくぶん固くなつて、多少まごついてゐた。しかも勿體ぶつてあたりを眺め、どうかした機みに威嚴をなくすることを怖れてゐる風がありありと見えてゐた。この威嚴なるものは、何の役にもたたない世俗のありとあらゆる些細なこと、偏見だとか、乃至は自身自身の利害關係を除いた俗世間の殆んど凡ゆるものを否定してゐる者の聲價に比べると、妙にそぐわないものであつた。

「アンチーブ・ブルドフスキイです。」と、せかせかと吃りながら『パブリシチェフの息』が名乗りを上げた。

「ウラジミール・ドクトレンコです。」と、澄んだ聲で、きつぱりと、まるで自分がドクトレンコであることを自慢でもする



かのように自己紹介をしたのはレーベジェフの甥であつた  
「ケルレルです。」と退職中尉が呟やいた。

「イッポリッド・テレンチェフです。」と、最後の男が、いきなり、甲高い聲で喚き立てた。

一同の者はついに公爵と向き合つて、一列に腰をかけ、直ちに自己紹介をすると、濼い顔をして、元氣をつけるために、夫々、一方の手から一方の手へ帽子を置きかえた。誰も彼も今にも話をはじめようと身構えをしていたが、挑戦的な顔つきをして何かを待ちうけながら黙り込んでいた。その顔つきには『いや、兄弟、冗談じゃねえ、かつがれて堪るもんか!』といったような調子が讀まれるのであつた。中で誰か一人、まず切つかけをつくるために唯の一言でも言い出したら、忽ち一齊に、われ先にと互いに邪魔をしながらも話し出したに相違ない氣がした。

「皆さん、僕は一人もおいでになるとは思つていませんでした。」と公爵は話し出した、「今日の日まで僕は病氣をしていたのですけれど、お話のことは（と彼はアンチープ・ブルドフスキイの方を向いて）もう一ヶ月も前にガヴリーラ・アルダリオノキッチ・イヴォルギンさんに委任しておきました。そのことについては、あなた方へも御通知申し上げて置いた筈です。尤も、僕は決して僕個人としての辯明を避ける譯で

つ言い出した。「つまり、直接に相當の地位にある俺自身に關したことであつたのなら、またブルドフスキイの位置に置かれていたのなら……俺は……」

「皆さん、たつた今、僕はあなた達のいらしたことを知つたんです、本當に。」公爵は又もや繰り返した。

「僕らは、公爵、あなたの友達が誰だろうと、そんなことは平氣ですよ。僕らは當然の權利があるんだから。」又もやレーベジェフの甥が言い放つた。

「しかし、失禮ながら、お訊ねしますが、あなたは如何なる權利があつて、とイッポリットはまた金切聲を出したが、今度はひどく憤慨していた。「ブルドフスキイの事件をあなたの友だち連中に審判させようつていうんですか？ けれど、僕たちはあなたの友だちに審判して貰おうつてつもりはないんですよ。あなたの友だちの審判なんか、どの程度のものか位は、分かり過ぎるくらい分かつてますからね。」

「けども、ブルドフスキイさん、ここでお話するのが厭やでしたら、と、相手のこういつた切り出し方に非常に驚ろかされていた公爵は、やつとのこと口を入れることができなかつた。「さつきも申し上げたことですが、すぐに別の部屋へ參ろうじやありませんか。あなた達のことは、もう一度くり返して申し上げますが、たつた今、聞いたばかりで……」

「だつて、あなたにそんな權利はありませんよ。そんな權利は、そんな權利はありませんよ……あなたの友だちの……全く！」と、粗野な、用心ぶかい眼で、あたりを見廻しながら、いきなりブルドフスキイは呟やき出したが、他人を信用

はありませんが、ただお含みをいただきたいのは、時刻が時刻ですから……若しそんなにお暇をとらないのでしたら、一しよに別の部屋へいらしていただきたいのです……。何しろこちらには唯今、僕の友人諸君が居られるものですから、どうかその邊は……」

「友人諸君……それは幾たりでも……お好きなだけ……しかし失禮ですが」と、まだそれほど大きな聲は立てなかつたが、不意にレーベジェフの甥が、まるで訓戒でも與えるような調子で遮つた。「失禮ですけれど、こつちには文句があるんです。あなたはもつと丁寧な扱つてくれてもよかりそうなものですね。二時間も下男の部屋に待たせるなんてことをしないで……」

「そして、勿論、……僕だつて……でもこれは公爵流つていうもんですよ！ そしてこれは……あなたは、して見ると、將軍なんですね！ でも僕はあなたの下男じゃありませんよ！ そして僕は、僕は……」とアンチープ・ブルドフスキイは極度に興奮して、いきなり早口で言い出したが、唇をふるわし、非常な屈辱をうけたかのように聲をふるわし、口角泡を飛ばして、まるで自分が破裂したか、或いは八つ裂きにもされたかのようなあつた。しかし、あまり不意にあせり出したので、十言目くらいからは、もう何が何やら譯が分からなかつた。

「あれが公爵流つてやつさ！」と甲高い、われ鐘のような聲でイッポリットが叫んだ。

「若し俺がこんな扱いをうけたのなら」と拳闘家がぶつ

せず忌避すればするほど、いよいよ辯論が起るのであつた。「あなたにそんな權利はないんだ！」こつ言つたかと思つた、ぶつたり断ち切つたように口を噤んで、黙々として、赤い際立つた血筋の見える、ひどく飛び出た近視眼を突き出し、全身を前に屈めて、訝かしげに公爵の方を見下ろした。

これには公爵もすつかり驚ろいてしまつて、自分も口を噤んで眼を丸くして、一言も物をいわずに、相手を眺めていた。

「レフ・ニコライキッチさん！」と俄かにリザヴェータ・プロコフィーヴナが呼びかけた。「さあ、これをいま直ぐ讀んで御覽、これは直接にあなたの事件に觸れていますよ。」

彼女があわてて、或る週刊のユーモア新聞を差し出して、記事のところを指さした。レーベジェフはお客が入つて來たときに、横の方から駈け出して來て、一言も物をいわずに、この新聞をわきのポケットから引っぱり出し、しるしのある段のところを指さしながら、夫人の眼の前へつき出したのであつた。レーベジェフは、前から將軍夫人の御機嫌とりに奔走していたのである。リザヴェータ・プロコフィーヴナはざつと眼を通して見て、少からず驚ろき、ひどく心をかき亂された。

「けども、聲を出して讀まない方がよかありませんか、と公爵はかなりにどきまぎして、呟やいた、「僕は一人で讀みましよう……あとで……」

「じゃ、いつそ、お前が讀んで御覽、直きに、聲を出して！ 聲を出してね！」リザヴェータ・プロコフィーヴナは堪りかねて公爵がやつと手をかけたばかりの新聞を引つたくつて、



コオリヤの方を向いた。「大きな聲で、誰にもよく聞こえるように。」

リザヴェータ・プロコフィーヅナは熱し易く夢中になる婦人であつたから、時には、ゆつくり考えもしないうちに、いきなり、空模様を調べもしないで、錨を全部ひき上げ、外海へ乗り出すようなこともするのであつた。イワン・フォードロキッチは不安げにもじもじしていた。しかし、誰も彼も一分間ほどの間は、ゆくりなく口を噤んだまま、げげんそうに待ち設けていた。コオリヤは新聞をひろげて、駈けつけて来たレーベヅエフが教えてくれたところから、聲を立てて讀み始めた。

「無産者と貴族の末裔、白晝日ごとに行われる強盗のエピソード！ 進歩！ 改革！ 正義！ 奇怪なる事件は、わがいわゆる神聖なる露西亞に勃發しつつある。しかも改革と會社經營の旺んなる時代、民族性を云々し、年々數億の正貨が外國に流出する時代、工業を奨励し、勞働者が手を空しうするこの時代、等々、枚擧に遑なき現代においてである。諸君、先ず當問題の核心に入らう。」

ここに生ぜる奇々怪々なるアネクドットなるものは、すでに衰微せるところのわが國の地主階級（Proletariat）の末裔の一人に關するものである。しかもかかる末裔なるものは、すでに祖父たちは、球轉がしによつて身代を磨り、父たちは止む

んだのである。——この公爵は未だ乳呑兒であつた爲に、さる露西亞の極めて富裕なる地主の好意によつて引き取られ養育されることになつた。この露西亞の地主は——假りにPと呼ぶことにしよう。——以前の黄金時代には四千人の農奴隷の所有であつたが（農奴隷！ 諸君、かような言い方がお分かりだろうか？ 僕には分からない。大辭典でも調べなければならぬ。『この口碑は生新しいが、なかなか本氣にはいたし兼ねる！』という類いのものだ。）、察するに、外國に閑日月を送り、夏は温泉に暮らし、冬は巴里の花屋敷に暮らして、そんなところら莫大な金をおとすというやうな露西亞ののらくら者や油虫の一人であつたらしい。少くとも昔の農奴からあがつて来る小作料の三分の一は巴里の花屋敷の經營者のポケットへ収まつたといふことだけは明言できるのである（かの經營者こそは何という果報者であつたらう！）。それはさておき、何不自由のないP氏は親のない男爵様をまるで公爵様のように育てて、自分が序でに巴里から連れて来た男女の家庭教師（むろん、相當の）をつけておいた。しかし一門のうちの最後の、華族の末裔は白痴であつた。花屋敷からつれて来た家庭教師は何の役にも立たなかつた。この教子子は二十歳になるまで、露西亞語をも含めてどこの國の言葉をもただ單に話すことさえも習わなかつた。尤も、露西

なく軍隊に入つて、見習士官乃至は中尉となり、例によつて罪なき官金費消のごときものによつて、軍法會議に附せられて獄死し、その子に至つては、この物語の主人公のごとく白痴として成長し、或いは刑事上の問題にさえも關係しながら、かかる事件に對しては教訓又は矯正に重きを置いて、陪審員が大いに辯明するのであるが、さもなくば、結局、民衆をして唾然たらしめ、唯さえも悪化せる現代を更に汚辱する如き醜行をして敢えて身を終る始末である。

時にこの物語の主人公たる末裔氏は、半年ほど前に、外國風のゲートルをつけ裏も附かざる外套を纏つて慄えながら白痴の（原語の）治療をうけていた露西亞より、冬の露西亞に歸つて来たものである。ここに正直にいえば、この男は幸運兒であつた。されば彼は、既に露西亞において治療せし興味ある病氣（それにしても白痴は治療しうるものである）か、想像して見たまえ！）については言わずもがな。「或る階級の人種は——幸福なり！」との露西亞の諺の眞理たることを身をもつて證明し得るのである。靜かに考へても見たまえ。父の死せる際には、——噂によれば父は陸軍中尉であり、全中隊の金を忽ちの中に歌留多によつて費消した爲か、或いは部下に對して極度の體罰を與えた爲か（諸君、昔日を思い起されよ。）、軍法會議に廻されている中に死

\* 球轉がし——賭博の一種。（讀者註）

露西亞語は想すべきである。やがて遂に露西亞の農奴所有者の腦裡に露西亞へやれば白痴に智慧をつけることができるという一つの空想が浮んで来た。——尤もこの空想は論理的なものであつた。のらくら者の大地主が、金さえ出せば、市場で智慧が買えるのだ、ましてや露西亞へ行けば……と想像したのは無理もない話である。露西亞へ行つて或る教授のところ療養して居るうちに五年は過ぎた。何千という金が費やされた。もとより白痴は精巧にはならなかつた。しかし、人の話では、無論、やくざ者には相違なかつたが、どうやら人間らしくなつて来たとのことであつた。ところが、忽然とP氏が亡くなつた。もとより遺言はなかつた。後の事は、例によつて一寸も整頓されてはいなかつた。慾にからまる相續人は山ほどいたが、こんな手合には、お情けで生れつきの白痴を直して貰いに露西亞三界まで行つて居る一門中の最後の末裔のことなどは、一寸も構つて居られなかつた。この末裔は白痴には相違ないが、聞くところによれば、それでも教授をだまかして、二年の間、恩人の亡くなつたことを押しかくして、うまく無料で治療をして貰つたという。然るに、この教授その者がかなりの食わせ者で、やがて遂には金のないのに怖れをなし、というよりも、二十五才の油虫の食意地に怖れをなして自分の古いゲートルを穿かせ、着古しの外套を與え、お情けに三等車に乗せて



nach Russland (露西亜) —— 露西から追い出してしまつたのだ。さて、ここでこの主人公は運が盡きたように見えるかも知れぬ。ところが、それは全く見當ちがいなのだ。飢饉によつて、いくつかの縣の人たちは全く餓死せしめた運命の女神は、乾き切つた野原の上を走り過ぎて、大洋の上にこぼれ落ちたクルイロフの「黒雲」のように、あらゆる贈り物を一時にこの貴族にふりかけた。殆んど、彼が露西からベテルブルグへ姿を現わしたのと時を同じうしてモスクワでは、彼の母方（勿論商家の出である。）の身うちの者が死んでしまつた。この人は年をとつた子供のない獨り暮らしの商人で、髯だらけの分離派の教徒であつたか、まぎれもない、手の切れるよるな現金で、何百万という遺産を、（諸君、これが我々に残されたのだつたら申し分がないんだが！）これを全部、末裔氏に、露西で白痴の治療をして貰つていたこの公爵の手へ易々と遺して行つたのだ。さあ、こうなると、もう萬事の調子が變つてしまつた。或る美人の妾の尻を追いまわそうとしていた公爵の周囲には、忽ちにして友人や知己が雲のごとくに集まつて、親戚でさえも顔を見せたが、何よりも甚しいのは、名家の令嬢たちが、正式結婚を渴望して、蟻のごとくに群がつて来たことである。何が結構だといつて、こんなに結構なことはあるまい。貴族、百萬長者、白痴——こんな立派な資格を悉く一

る青年に一つの事件を委任され、その代理としてやつて来たことである。この青年というのは苗字こそ違つていたが今は亡き氏の息にほかならなかつた。道樂者のP氏は、家に使つてゐる女の中で、正直な、貧しい一人の娘で、しかも歐羅巴風の教育をうけた（尤も、それは勿論、農奴制が榮えていた頃の且那様の權利に乗じたものであるが。）女の子を誘惑して、やがてこの關係が近き將來において避くべからざる結果を生むことを知つて、大急ぎで、この娘を或る職人で、勤めをさせ持つてゐる男に片づけてしまつた。この男は既に久しい前から、この娘に思いをかけていた者で、高潔な性質の持主であつた。初めのうちはP氏も新婚の夫婦を援助していたが、彼の亭主は高潔な性質の持主として、これを潔しとせず、間もなく彼の援助を拒絶してしまつた。暫らくするうちに、P氏は次第々々にその娘のことも、娘に産ませた息のことも、すつかり忘れ果てて、やがて御承知のようにわが子に對する後始末もせず死んで行つた。そのうちに、正式結婚をした夫婦の間に生れた息は、他姓を名乗つて成長し、生母の夫にあたる人の高潔な性質によつて、養子という事にして貰つたが、しかもこの養父は壯年にしてあの世の人となつたので、ささやかな財産と、足腰のたたない病身の母をかかえて、都離れた遠い田舎に寂しく残されてしまつた。やがて自ら都に出

身に具えてゐる御亭主は、提灯をつけて探しまわつても見あたらないであらう。註文されても出来ないであらう……」

「それは……それはもう呑込めない、僕には！」とイワン・フォードロキッチは極度に憤慨して、不意に叫んだ。「止しなさい、コオリヤ！」と公爵は哀願するような聲で叫んだ。喚きごえが四方から聞こえる。

「讀むんですよ、どんなことがあつても讀みなさい！」とリザヴェータ・プロコフィーヴナは遮つたが、明らかに自分自身を一生懸命に抑えようとする氣は見えなかった。

こういわれては二進も三進も行かなかつた。コオリヤは熱くなつて、顔を赭くし、興奮しながら、困つたような聲を出して讀みつけ始めた。

『所が、俄か成金が、いわゆる最高天上界に昇つたように有頂天になつてゐる間に、一方には全く思ひもよらぬ出来事が起つたのである。或る麗かな朝、彼のところへ一人の訪問客がやつて来た。この人は落ちつき拂つた嚴めしい顔をして、話しぶりは、いかにも丁寧で、しかも威厳があり、服装は質素であるが氣品があり、どことなく進歩的な思想の持主らしい感じであつた。やがて彼は手短かに來意を告げた。聞いて見ると、彼は有名な論議士で、歐

て、商人の家に教師をして、高潔なる日ごとの勞苦によつて金を儲け、それによつて、最初は中學に入り、やがて、遠大なる志望をもつて、更に有用な講義の聽講生となり、とにかく生計を立てて行つたのである。然るに、露西の商人に一時十哥くらいで物を教えたところで、そんなに澤山の金が入るものではあるまい？ それに足腰のたたない病身の母をかかえてゐるのである（結局、遠い田舎で死んでくられても、殆んど彼には肩の重荷をおろしてくれたいことにはならないのである）。ここに於いて問題が起さる。かの末裔氏は正義公道の上から如何なる判断を下すべきであつたか？ 讀者諸君、諸君はもとより彼氏が次のごとき獨り言をいつたとお考えになるであらう。

「おれは一生の間、P氏から賦與されたものを厚く享けたのだ。おれの教育費、家庭教師の給料、白痴の治療費に何萬という金が露西でなくなつた。ところで今、おれは數百萬の資産を擁してゐるが、P氏の息は、輕薄にも、自分を忘れ去つた父親の振舞に對して、自身は何の罪とががないのに、人に物を教えたりして高潔な性質を臺なしにしてゐる。おれの爲に費消されたものは悉く正義公道の上からいつて、當然あの息の手に行かなければならない。おれの爲に浪費されたあの莫大な金は事實おれのもではないのだ。これは偏に運命の女神の盲目的過失



であつて、あの金は息が承くべきものであつた。この息の爲に用いらるべきものであつて、斷じておれの爲に使はるべきものではなかつた。——それが、こんなことになつたのは、輕薄な、忘れっぽいP氏の空想的な所産に他ならないのだ。若しも、おれが、全く高潔で、デリケートで、公平な人間だつたら、おれは彼の息に、全財産の半分をやるべきだらう。しかし、おれは何よりも先ず勘定高いし、あまりにもよくこの問題が法律的な問題でないことを知りすぎているので、おれの何百萬の財産を二分してやるようなことはしないのだ。けれどもP氏が、おれの白痴の治療代に出してくれただけ何萬という金をこの息に返してやらないとなれば、これは少くともおれにとつては餘りにも卑怯な、破廉恥ということになるだらう(末裔氏は「あまりに勘定高いということにもなるだらう。」と附け足すのを忘れていた)。ここにはただ良心と正義公道なるものがあるばかりだ。若しもP氏がおれを引き取つて養育してくれずに、おれの代りに自分の息のことを心配したとしたら、おれはどうなつたか分からないからである。▽

ところが、話はまるで別なのだ！ わが末裔氏は、そういう物の考え方はしないのだ。この青年の辯護士が、實はこの人は單に友誼のために、青年の方では殆んど氣が進まないのに、無理押しつけに、自

ら進んで彼のために奔走するに至つたのであるが、この辯護士がどんなに彼の前で、名譽、廉潔、正義公道、更に單なる利害關係の上からも彼がいかなる義務を負うべきかを言い聞かせても、瑞西仕込みの彼氏は一寸も靡かないのである。何たることであるぞ？ まずこれまでの所は先ずやむを得ないとしても、ここに、實に許しがたく、また如何なる奇妙きつてれつなる病氣を口實としても恕しがたい事實があるのだ。即ち、やつと自分の教授に貰つたゲートルをぬいだけばかりの百萬長者は教師をして自ら刻苦勉勵しつつかある高潔なる青年が決して施しや補助金をくれというのではなく、たとえ法律的ではないにしても、自己の當然の權利を要求し、しかも自分が頼んでいる譯ではなく、友人が代つて斡旋の勞をとりつつあるに過ぎぬという事實をさえも了解し得なかつたことである。實に大様な顔をして、幾百萬かの金によつて無辜の民を屈服せしむることができるようになつたことに陶醉して、この末裔氏は僅か五十留の紙幣を取り出して、不躰けにも施しをくれるような顔をして、かの高潔なる青年に送つたのである。諸君よ、諸君はまさかと思われぬであろう？ 諸君は憤慨し、諸君は恥辱を感じ、忿怒の叫びをあげられる事であらう。然るに彼はかかる事を敢てしたのである。金を直ちに返したのは勿論である。いわゆる、「竹籠返し」に類へたたきつけたのである。

る。さて、この問題は最早や如何なる方法をもつて解決されるであらうか！ 問題は法律的なものではなく、ただ單に公開して世に問うのみである。我々はこのアネクドットを、その正確なるを保證し、以て輿論に訴えようとして居る。聞くところによれば、さる錚々たるユーモリストは、この問題を一讀三嘆すべき寸鐵詩に詠じたる由にて、これは單に地方のみならず、都會新聞の三面においても特種となすべき價值があるとのことである。即ち、

\* レフはシナイデルの外套を

五年の間、もてあそび

寝ても覺めて、もひたすらに

いつもつまらぬ長談義、

卷いたゲートル窮屈に

歸れば片見の百萬兩。

やれ嬉しやと露西亞語で

神に祈りをしたものを、

書生の金を捲き上げて。』

ユオリヤは讀み終えると、大いそぎで公爵に新聞を渡し、一言も物をいわずに、隅の方へ駈けて行つて、隅のところへびつたりと身をおしつけて、兩手で顔をかくした。彼にはこんなことが堪らなく恥かしかつたのである。未だ初々しく、

\* レフ——末裔氏の名(作者註)

こころが獨つたことに馴れきらない彼の感傷易い心は、極度にいつてもよいほど掻きみだされていた。彼には何かしら異常な、忽ちにして凡ゆるものを破壊してしまふようなことが起つたような氣がし、しかも聲をあげて、これを朗讀したという、ただそれだけのことによつて、自分がその原因となつてゐるような氣がするのであつた。

が、誰も彼もが、やはりそういつたようなことを感じたやうにも思われた。

令嬢たちにとつては、實にこそばゆい恥かしいことであつた。リザヴェータ・ブロコフイヴナは極度の忿激を抑えていたが、やはり恐らくはこの問題に容喙したことを、痛々しく後悔してゐたことであらう。もうすつかり黙つてしまつていた。公爵はどうかといへば、こういう場合に内氣すぎる人々がよくこつた場合と同じような氣持を感じてゐた。彼は他人の振舞いを我が事のように恥じ、自分の客たちに氣恥かしい思いをして、最初はその人たちの顔を見るのさえも怖れた程であつた。プチーツィン、ワーリヤ、ガニーヤ、それにレーベジェフさえもが——みな何とはなしに困りきつたような様子をしてゐた。最も奇妙なのはイッポリットと『パヴリシチェフの息』が、やはり何か呆れたような風をし、レーベジェフの甥がまた何やら不足そうにしてゐたことである。ただひとり拳闘家だけは全く落ちつき拂つて、口髭などをひねりながら、尤もらしい顔をして坐りこんでゐた。いくら伏目がちであつたが、それも、どぎまぎしたからではなく、却つて品のいい憤し深さや、こちらが勝つと



いうことが餘りにもよく見透しがついていたためらしかつた。この記事が極度に彼の氣に入つてゐるといふことは、あらゆる點から見ても明瞭であつた。

「一體、これは何だつていうんだ。」とイワン・フォードロキツチは聲低く呟やいた。「まるで五十人もの下男が集つて作つたようなものだ。」

「閣下、失禮ですが、一寸お伺いします。あなたはそんな積りでいて、我々を侮辱しようつていうんですか？」イッポリットはそう言つたかと思つと、體じゆうを慄わした。

「それは、それは、それは立派な紳士として……ね。そうでしょう、閣下、かりそめにも立派な紳士たる以上は、こんなことは無禮じゃありませんか！」と拳闘家は不意に何故かしら身ぶるいして、口髭をひねつて、肩から胴まで伸ばしながらかみがみ言い出した。

「第一、僕は君に『閣下』なんて言われる覚えはない。第二に、僕は君なんか何ら辯明する積りはない。」と怖ろしく憤慨したイワン・フォードロキツチは辛辣に答え、席を立つて、一言も物を言わずに、露臺の出口まで引き退がつたが、やがて一同に背を向けて階段の一ばん上のところに立ちどまつた。——彼はリザヴェータ・プロコフィーヴナが席を立つるとさへも考えていないのを少なからず腹立たしく思つてゐた。「皆さん、皆さん失禮ですが、皆さん、どうか僕に一言いわして下さい。」と心悲しく興奮して公爵が叫び出した。「そしてどうぞですからお互いに、諒解の行くように話をしたいものです。僕はね、皆さん、新聞記事のことは何でもありません。」

「結局そこでですよ。」とリザヴェータ・プロコフィーヴナは腹立たしげに言い出した。

「ねえ、公爵、お忘れなすつたんですね。」見るに見兼ねたレーベジェフは、まるで熱病にでもかかつたように、いきなり椅子と椅子の間を分けて前へやつて來た。「よく呑み込んで下さいよ。あいつ等をここへ通して、話を聴いておやりになつたのは、ただ貴方さまの優しい氣象と、全く御立派なお情けによることです。そしてこんなことをして戴く權利なんて、あいつ等には一寸もあるもんじやござんせん。おまけに、この一件はガヴリラ・アルダリオノキツチさんにお任せになつたものですし、しかも、こうなすつたのは並々ならぬ御好意によることなんでございませぬ。それに唯今ねえ、公爵さま、折角いいお客さまがいらしつてゐるのに、貴方さまはこんな連中のために折角のお集りの方を犠牲になすつて、つまり、こいつ等をさつさと通りへつまみ出さないつて法はありませんよ。ですから私はこの家の主として、それこそ大喜びで……」

「全く、それに相違ないぞ！」と部屋の方からイヴォルギン將軍の雷のような聲が聞こえて來た。

「もう澤山ですよ。レーベジェフさん、結構、結構！」と公爵はやり出しがかかつていたが、憤激の叫びが彼の言葉を押し消してしまつた。

「いや、公爵、失禮ですが、今はこれ位で澤山じやありませんよ。」とレーベジェフの甥の聲は殆ど一座の者を壓倒してしまつた。「この際に、この問題をはつきりと、確かにして

ません、平氣です。けれども、ただね、皆さん、記事の中に書いてあることは、まるで根も葉もないことです。これは皆さん御自身、よく御存じのことですから申し上げることで、恥ずかしい位ですよ。ですから、これが貴方たちのどなたかがお書きになつたのだとしたら、僕はただ驚ろくばかりです。」

「僕は今の今までこんな記事のことは一寸も知らなかつた。」とイッポリットは明言した。「僕はこの記事はあたりまえだとは思いません。」

「僕あ、書いてあつたのは知つていましたが、しかし……やはり發表しろとは勧めませんでしたよ。何せ時期が早いんだし。」とレーベジェフの甥が附け足した。

「僕も知つてたんですが、僕には權利があります……僕には……」と『バヴリンチェフの息』が含み聲で言い出した。

「何ですつて！じや、あなたが御自分で作つたんですか？」と公爵は好奇心をもつて、ブルドフスキイを見ながら訊ねた。「一體、そんな記事つてあるもんでしよるか！」

「だつて、そんなことを訊く權利があなたにあるとは思いませんね！」とレーベジェフの甥が口を出した。

「だつて、ブルドフスキイさんに、こんな藝當ができるなんて、驚ろくほかはないじやありませんか……いや……僕が言いたいの、あなた達がこの問題を輿論に訴えたというのに、何故さつき僕が友人たちのいる前でこの問題のことを言ひ出した時に、あんなに直ぐに腹を立てたのかということですか？」

置かなくちやならん。どうもまだ、よく分つて貰えないようですからね。この問題には、法律的なごまかし方はないのです。それをいいことにして、僕たちを叩き出そうと脅やかしなさん！公爵、一體あなたは、この問題が法律的なものではなく、若しも法律的に調べたら、合法的にあなたに唯の一留でも請求する權利はないという位のことを呑み込めないほどの頓馬だと、思つてるんですか？ ところがね、ちやあんと、呑み込んでいますよ。法律的な權利がないにしても、その代りには、人道的な、自然の權利があるんですからね。常識の權利と良心の聲つていう奴があるんですからね。この權利は人間のつくつた腐つた法典なんかには、どこを探したつて載つちやいないでしょうが、清廉潔白な人、言い換えると、常識のある人は法典に載つていないような點にまでも、常に常に清廉潔白な人であることを義務としてゐるのです。僕たちが通りへつまみ出されるのも（唯今、そういつて脅かされましたが）、それも怖れずに、また、こんなに遅くなつてからお訪ねするのは不躰なことだと承知しながら（尤も遅くなつてから來た譯ではありません。あなたが下男の部屋に待たしておいたから遅くなつたのです）、こちらへ參つたのは、ただおねだりをしてるのではなくつて、當然のことを要求しているだけのことだからです。もう一度申しますが、何も怖れずに參つたのは、あなたを常識のある人、つまり、節操と良心のある人だと思つたからなのです。全く、これは本當のことです。だからこそ、貴方んところにいる居候だの、無心をする連中なんかのように、腰を低くして入つては



來なかつたのです。全く束縛されない自由の人として、昂然と、おねだりに來たのではなくつて、自由な、どこへ出しても恥かしくない要求を持つて來たのです。(いいですか、お願いではなくつて、要求をもつて來たのですよ。よく覚えて下さい!) 僕たちは威厳をもつて明らかに質問を提出しますよ。あなたはブルドフスキイの事について、御自分を正當だと思いませんか、不當だと思いませんか? あなたはバヴリシチェフ氏に恩をうけた或いは恐らく、死ぬところを助けて貰つた、とお思ひになりますか? 若しそうお思ひになるとすれば(分かり切つたことです)、何百萬という財産を貰つた手前、今はブルドフスキイと名乗つてはいるが、その實はバヴリシチェフの息たる者が困つていて聞いて御恩がえしをしようという積りはありませんか、乃至は良心に照らして當然のことだとは思ひませんか。承知か、不承知か? 若し承知ならば——即ち、別の言葉でいうと、あなた方の言葉で節操といい、良心といい、僕たちが常識という一—そう正確な名稱を充てているものを、あなたがもつておいでだつたら、僕たちの言ひ分を聽いて下さい。そうすれば問題は覺がつくことです。こちらから頼まれたり、お禮をいわれたりして承知するようなことはしないこと、そんなものは當てにしないで下さい。というのは、あなたがそうするのは決して僕たちの爲にはなくつて、正義公道のためなのですから。若しも不承知だというのなら、つまり駄目だとおつしやるのでしたら、直ちに僕たちは歸りますし、もう文句はありません。ただ、面と向つて、みんなのいる前で、あなたという人

一種特別な顔をして、一同を見廻したのであつた。

「僕の考へでは」と公爵は極めて靜かに語り出した、「トレンコさん、僕から見ると、あなたが今おつしやつたことの半分くらいは全く本當のことです。いや、大半は事實だと認めてもいいくらいです。そこで、若しあなたのお話に何か言ひ抜かしたことがなかつたら、僕は全く同感なのでした。さて、一體、何を言ひ抜かしたのかということになると、はつきり口に出して言ひ表わすことができせん。しかし、あなたの言葉が飽くまでも眞實だというには、勿論、何かが缺けています。けどもいつそ例の問題にとりかかるといひましょう。皆さんにお訊ねしたいのですが、何のいわれがあつて、こんな記事を發表なすつたのですか? だつて、この記事の片言隻句に至るまで、誹謗ならぬはないじやありませんか。だから、僕にいわせると、あんた達は卑劣なことをしたことになるのです。」

「ちよつと待つて下さい! ……」

「それは……それは……それは……」興奮している客の方から一時にそんな聲が聞こえて來た。

「その記事については、」イッポリットが甲高い聲で口を入れた。「その記事については僕もほかの者も賛成しないつて、さつき申し上げた筈です! それを書いたのは、この男です。よ。」と、竝んで坐つてゐる拳闘家を指さした。「それは不躰な書き方で無學らしくいかにもこの男と同じ程度の退職軍人が書きそつた文句をいれて書いてあります。この男が馬鹿で、

は粗笨な頭腦をもち、低級な發達をした人だといつてやるだけですよ。そうしてこれから先、あなたは節操と良心のある人間だと自ら名乗ることもできないし、言ひ權利もないと言つてやりましょう。それから、あなたつていう人は、この權利を余りにも安直に買ひ入れようとしてゐるのだと言つてやりますよ。僕の言うことはこれでお仕舞いなんです。質問を出しましたからね。若しできたら、さつさと今のうちに追い出しなさい。あなたには、これくらいのことではできる筈です。あなたは勢力家ですもの。但し、僕たちは兎にも角にも要求をしてゐるのであつて、おねだりをしてゐるのではないということをよく覚えて下さい。要求はする。しかしねだつてはいませんよ!」

レーベジェフの甥はかなり熱くなつて、言葉を切つてしまつた。

「要求する、要求する、要求するんです。おねだりじやありません……」とブルドフスキイはぶらぶら言つて、蝦のようになつた。

レーベジェフの甥がくさりやつてしまつたと、一同は何となく動揺して來て、ぶつぶつ言ひ聲さえも聞こえて來た。尤も、一座の者は誰も彼もが、明らかにこの問題に關り合ひのを避けていた。避けたいのはただ一人、熱病にかかつてゐるようなレーベジェフだけであつたらう。(妙な話ではあるが、レーベジェフは明らかに公爵の味方なのにも拘わらず、自分の甥の話の聞くと、同族の楽しい誇りといつたやうなものを感じていたらしくなつた。少くとも、彼は満足するやうな

おまけに職人風情だつたことを、僕も本當だと思ひます。これは毎日、面をつかんで言つてやることですけれど、しかし兎に角、この男にも半分は權利があるので、輿論に訴へるといふことは、何人にも與えられた、従つてブルドフスキイにも與えられた合法的權利なのです。愚にもつかないことを書きたてたことに對しては、この男に責任を帯びさせたらいいんです。それから僕が一同を代表して、あなたの御友人が席にゐることに反對した、その件については、皆さん方に、是非とも説明しなげりやならんと思ひます。大體、僕が異議を申し立てたのは、僕たちの權利を主張するためであつて、實を申せば、僕たちは證人のいることを望んでさへもいるのであつて、さつき、まだここへ入つて來ない先から、四人が四人とも、それは賛成してゐたのです。あなたの證人がどなたであらうと、たといお友だちであらうとも、ブルドフスキイの權利を認めずには濟まされなないでしょうから(何しろ、數學的に明らかです)、あなたのお友だちが、あなたのお友だちとあれば、なおさら都合です。そうなれば事件の眞相はいよいよ明瞭になりますよからね。」

「それに違ひありません。僕らはそう決めてたんです。」と、レーベジェフの甥が言ひ放つた。

「それなら、そういうおつもりでいたんでしたら、何故さつき、話の初まりから、あんなに嘔鳴つたり、騒いだりしたんです!」と公爵は今更ながら呆れてしまつた。

「あの記事については、ねえ公爵」と是非とも一言いおうとしていた拳闘家は、愉快そうに元氣ついて、喙を容れた(婦



人たちが同席していたのが確かによく利いたのではないかと疑われた。「あの記事について申すと、正直のところ、あれは僕がその筆者です。いつも弱っているのに免じてやつている病身の友人が、今、あの記事を小つびどくやつつけましたけど。然し、あれは自分で書いて、心から親しい友人のやつている雑誌へ通信という形で発表したものです。ただ詩だけは実際に僕が書いたものではなく、事實、有名なユーモリストの筆にかかるものです。ブルドフスキイには一通り讀んで聞かせただけですが、しかも全部じやありませんでした。そしてすぐに發表することに賛成してくれたんですが、僕は賛成を得なくとも發表することはできたということをお承知なすつて下さい。輿論に訴えるということは何人にも與えられた、貴重な権利です。ねえ、公爵、願わくばあなた御自身もこれを否定しない位に開けた人であつて欲しいものです……」

「何も否定なんか致しません、けれどどうです。あなたの書かれた記事の内容は……」

「辛辣だとおつしやりたいんでしよう？ けれども、あれは謂わゆる公益のために書いたもんじやありませんか。だからこんな好い機會を逃すつて話はなかつたんですよ？ 悪い事をするのは以ての外には相違ありませんが、何よりも先ず公益のためということになるんですからね。あの記事に若干不正確なところがある、つまり誇張したところがあるというのでしたら、何より先に根本の動機が主要なものであつて、何よりも先ず目的や主題に重きを置いておられることを認めて下さい

えり見た。「しかし、僕はあの男が一寸も氣に入りませんでした。僕は最初の時から、このチェバロフという男が問題の核心をつかまえていて、明けつけな言い方ではあります。この人がブルドフスキイ君の純情なを利用して、こんなことを始めるように焚きつけたのかも知れないと、こう見て取つたのです。」

「そんなことをいう権利はあなたにありませんよ。……僕は……純情じやありません……それは……」とブルドフスキイは興奮して呟き出した。

「そんなことを臆測する権利はあなたにありませんよ。」と説諭でもするよな口調でレーベジェフが口を入れた。

「これは家に失敬きわまる！」とイッポリットが金切り聲を出した。「失禮な、あてはずれな臆測だ。一寸も本筋に觸れてない！」

「御免なさい。皆さん御免なさい。」と公爵はうろたえてあやまつた。「どうか、勘忍して下さい。これはつまり、互に胸襟を披いた方がよろしくはないかと思つたからのことなのです。その邊はお察しに任せます。僕はチェバロフに對して、自分はベテルブルグにいないのだから、早速、友だちにこの問題の處理を頼むようにしましょうと言いました。で、ブルドフスキイ君、それについてはここでお知らせいたしましょう。正直に申しますとね、皆さん、僕にはこの問題は極めて詐欺めいたものに見えたのです。というのはその時チェバロフが……。ああ、そんなに腹を立てないで下さい。皆さん！ 後生ですから腹を立てないで下さい！」と公爵は

い。重要なのは有益な引例であつて、細かい事は後で調べることにしたのです。それに文章の調子というものもあるし、また、いわゆるユーモラスに書こうという考えもあるし、結局誰が書いてもこんな風に書くものじやありませんかね！ は、は！」

「そう、しかし全く間違つていますよ、方法が！ 皆さん、僕ははつきり申しますが、」と公爵は叫んだ。「あなた方は、どんなことがあつても僕という者がブルドフスキイ君の要求を容れるのを肯んじないという假定のもとに、あの記事を發表なすつたのですね。従つて、それによつて僕を脅やかし、怨みを晴らすつていうんですね。けれども、どうして前もつて分かるのです。僕は、ひよつとしたら、ブルドフスキイ君の要求を容れる氣になつてるかも知れないじやありませんか？ 今、僕は皆さんのいる前で公然と言いますけれども、要求は容れるつもりです……」

「ああ、それでこそ、思慮分別のある高潔な人の、よく物のわかつた立派な言葉です！」と拳闘家が宣言した。

「まあ！」とリザヴェータ・プロコフィエヴァは思わず叫んだ。「もう堪らん！」と將軍が呟やいた。

「ちよつと、皆さん、ちよつと待つて下さい、僕はくわしくお話しします。」と公爵は哀願した。「五週間ほど前に僕がゝにいた時、こちらのブルドフスキイ君から一切を委されてるチェバロフという人が訪ねてきました。ケレル君、あなたは、あの記事の中で、あの人のことを大へん賞めて書いてましたが、」と、俄かに笑い出しながら、公爵は拳闘家をか

又もやブルドフスキイに憤激の色があらわれ、仲間の人たちも興奮してまぜかえそうとしてゐるのを見て、驚いてこゝろ叫んだ。「この問題を詐欺めいたもののように考えた僕がいつたからとて、何も皆さんに個人的な關係を及ぼす筈のものじやありません！ その頃、皆さんのうちのどなたにも個人的にお目にかかつたこともなく、それにお名前さえも僕は知らなかつたんじやありませんか。僕はただチェバロフに會つただけで、そういう判断を下したのですからね。僕は全體のことを言つてるんです……何故つて、皆さんは御存じないかも知れませんが、あの遺産を譲つて貰つてからというもの、ずいぶん僕は人に瞞されて来たからなんです！」

「公爵、あなたは實に初心なんですな。」とレーベジェフの甥が嘲る様に指摘した。

「おまけに、公爵で百萬長者と來ているあなたは、多分、ほんとうに氣立てが善良で、馬鹿正直かも知れませんが、やつぱり『世間に通用している法則』を免れることは、勿論できやしませんよ！」とイッポリットは宣言した。

「多分そうでしょうとも。皆さん、多分、それあ、」と公爵はあわてて、「尤も、お話の『世間に通用している法則』というものが、一體どんなものかは、よく呑み込めませんが。しかしまあ、さつきの續きを申します。ただ矢鱈に腹を立てないで下さい。誓つて申しますけれど、僕はあんた達に恥をかかそうなんて了簡は更に有つて居りません。それなのに、皆さんは實際はどうなんですか。誠心誠意をもつてお話を聞かできないじやありませんか。言つたが最後、すぐに腹を



お立てになる！ それにしても、第一に僕が非常に驚ろいたのは、『バヴリシチェフの息』つていう者がこの世に居るということ、チェバローフの説明によると、實にみじめな境遇にいるということです。バヴリシチェフさんは僕の恩人であり、親父の友人でもあります。（ああ、ケルレル君、君は何だつて、あの記事の中で僕の親父のことを、あんなに出鱈目に書き立てたんです？ 中隊の金を費い込んだのだ、部下の者に侮辱を與えたのと、そんなことは斷じてないことですよ——これは僕が信じて疑わなところですよ。よくもまあ、あんな誣言を書く氣になれたもんですね？）しかし、バヴリシチェフさんについて書かれた記事に至つては全く言語道斷です。君は實に高潔な人を、淫蕩的で輕薄な人などと、まるで實際に君が眞實なことでも語つてゐるかのやうに、思いつつて大膽に、きつぱりと斷言してゐますね。ところが、あの方はこの世に又とないほど純潔な方だつたのですよ！ それにまた實に立派な學者でもあつたのです。また科學界における多くの尊敬すべき人たちと通信を交わし、たくさんの金を科學の進歩のために注ぎ込んだのでした。また彼の愛情や美德に至つては、おお、勿論、君の書いたのは公平な見方です。そのころ僕は殆んど白痴同然で、何にも分からなかつたのですが（尤も露西亞語は兎に角、話しましたし、また相手が何を言つてゐるのかくらいは分かりましたよ）。しかし、今ここで思ひ起してゐることは、全部その眞價が分かりません……」

して、「あなたのお話は、あまりセンチメンタルすぎませんか？ 僕らは子供じやありませんよ。あなたは話の本筋へさつさと取りかかるつもりだつたんでしよう。もう追つつけ十時になりますよ。それを承知して下さい。」

「そう、そう、皆さん、御免なさい。」と公爵はすぐに同意した。「初めは疑つて見たのですが、その後では、自分だつて勘違いをしてないとも限らない、バヴリシチェフさんには、確かに息さんが、あつたかも知れないと、そういう氣持になりました。しかし、ひどく驚ろいたのは、その息さんが、こんなに易々と、つまり、公然と自分の素性を暴露して、それに大事なことです。自分の母の顔へ泥を塗つたといふことです。それというのも、チェバローフが既にその時に、輿論に訴えるといつて脅やかしたからで。」

「そんな馬鹿なことを！」とレーベジェフの甥が嘖嘖り出した。

「あなたにはそんなことを言う權利はない。……そんなことを言う權利はないんですよ！」とブルドフスキイも叫んだ。

「息は父が不埒なことをしたつてその責任を負う筈のものではなし、また母親にも罪はない筈です。」とイッポリットは熱くなつて金切り聲を立てた。

「それならば、尙さら憐むべきだといふ氣がしますが、……」と、びくびくしながら公爵は言ひ出した。

「あなたはね、公爵、初心つていふばかりでなく、ひよつとしたら、それ以上かも知れませんか。」とレーベジェフの甥が意地わるそうに、せせら笑つた。

「一體あなたはどんな權利があつたんです！……」とイッポリットは極めて不自然な、黄色い聲を張りあげた。

「何も、決して、そんなものはありませんでした！」と、公爵はあわてて遮つた。「これは貴方のおしやる通りです。よく分かります。でも、これは、ついつつかりしてたもんですから。で、僕はその時すぐに自分に言つて聞かせました。自分の個人的な感情が問題に影響を與えるようなことがあつてはならない。なぜかというに、若しも自分がバヴリシチェフに對する感情のために、ブルドフスキイ君の要求を容れることが自分の義務だと考えたならば、たとえどんな場合にでも、即ちブルドフスキイ氏を自分が尊敬してゐようと、いまいと、必らず要求を容れなければならぬと心ひそかに考えたのです。皆さん、こんなことを僕が言ひ出したのは、實はたゞ、あの息が母の祕密を世間の人に曝露するといふことが、兎に角、僕には不自然に思へたからなのです。……要するに、あのチェバローフは悪黨に相違あるまい。ブルドフスキイ君を、まんまと瞞して、こんな詐欺をするやうに喉かけたんだらうと、こう思ひ込んだのが抑々の初まりでした。」

「しかし、もう聞いちや居られん！」という聲がお客たちの方から起つた。中には椅子から飛びあがつた者さえもあつた。

「皆さん！ そして僕がそういう肚をきめるに至つたのは、實は不仕合せなブルドフスキイ君はきつと正直な、頼るべきところもない、まんまとべてん師の手にかかるやうな優しい人に相違ない、して見れば、尙さらこの人を『バヴリシチェフ

フ氏の令息」として援助する義務があるわけだ。——先ず第一にチェバローフに對抗し、第二には、誠意と友情をもつて、令息を善導するやうに努めて行こう。第三には自分の胸算用でバヴリシチェフ氏が僕のために費やしたと思ふ金の全部、即ち一萬留の金をお渡しすることにして、それによつて援助をしようと考えたのでした。」

「まあ！ たつた一萬留！」とイッポリットが嘖嘖り出した。

「ねえ、公爵、あなたは算術があんまりお得意でないのか、それともお得意すぎるかでしょうね。見かけは、お目出たそうな風をしていらつしやるけれど。」とレーベジェフの甥が叫んだ。

「僕あ、一萬留じや厭やだ。」と、ブルドフスキイがいつた。

「アンチーブ！ 承知し給え！」と、拳闘家はイッポリットの椅子の背ごしに、身を屈めて、早口に、わきへ聞こえる位の聲でつぶやいた。「承知し給えよ。あとになれば氣がつくよ！」

「ま、お聞きなされ、ムイキンさん！」とイッポリットは金切り聲を出した。「ようござんすか、僕らはね、馬鹿じやないんですよ。おそらく、そこにおいでのお客様や、僕らを見て憤慨しながら、せせら笑ひをしていなさる御婦人がたや、わけても、そちらの、勿論お近づきになる光榮を僕ももつていませんが、何かお噂を聞いたやうな氣もする、そちらの旦那様などが（といつて彼はエツゲニイ・バローロキッチを指さした）、みんなと思つていらつしやるやうな、そんな下司な馬鹿共じやないんですよ、僕らは……」



「一寸、一寸、皆さん、又、あんた達は、勘ちがいなすつて！」と興奮して公爵は彼等に呼びかけた。「第一にケルレル君、あなたはあの記事の中で僕の財産を實に、實に不正確に書いておいでですね。僕は決して何百萬なんて金を譲り受けはしませんでしたよ。恐らく僕のもつてるのは、あんたが豫想されたののせいぜい八分の一か、十分の一くらいのものでしよう。第二に、僕のために何萬て金を費つたなんてことはありませんよ。シュネーデル先生は年に六百留すつ受け取つてましたが、しかも、それも初めの三年きりですし、それにパヴリシチェフさんはいい家庭教師を見つげに巴里へなんか行つたことは一度もありませんでした。これまた誣言というものです。僕のつもりでは、僕のために費やされた金はとて一萬留には達しないのですけれど、それでも僕は一萬留と決めたのです。ここで御承知いただきたいのは、當然の義務として假りにブルドフスキイ君を熱愛しているとしても、これ以上は差し上げられないということ、ただ単にデリカシイの感情の上からいつても差上げられないということと、というのは他でもありません。つまり、これは要するに御恩がえしのためであつて、決して贈り物を差し上げるのではないからです。皆さん、どうして皆さんにこの事がお分かりにならないのか、僕には見當が付きません！ それにしても後に不仕合せなブルドフスキイ君に、友情をもつて報いようと思つたのでした。たしかにブルドフスキイ君は瞞されていたのです。何故というのに、若しも瞞されているのでなかつたら例えは今日ケルレル君があの記事の中で敢えてしたような母

親の秘密の曝露なんかつていう、あんな下司なことに自分から承諾を與えることができる譯はありません……それにしても、皆さん、あんた達は何だつてそう腹を立てなさるんです！ こんなことでは、結局、お互いに諒解し合うことができないじやありませんか！ ああ、僕が考えた通りになつちやつたのか！ 今にして僕は、僕の臆測の正しかつたことが、はつきりと眼に見えて分かつて来た。」公爵は相手の興奮を鎮めようと、しかもそれが却つて興奮を増すばかりだということには気がつかずに、夢中になつて口説いていた。「何？ 何が分つて来た？」と、人々は殆んど憤激の極に達して彼に迫つた。

「とんでもない。第一に、僕はブルドフスキイ君という人を自分で、はつきりと見て来たのです。だから、どんな人だかということは今よく分かるのです。……この人は純な、しかも、みんなに瞞されている人です！ 頼るところのない人で……だから僕は大胆に見てやらなければなりません。また第二に、僕がこの問題を委任したガヴリラ・アルダリオノキッチさんからは、僕が旅行していてペテルブルグへ行つてからは病氣などしていたので、何のたまりもありませんでしたが、この人は今、丁度一時間まえに初めてお目にかかりましたら、いきなり、チェバローフの策略はすつかり見すかしてしまつた。それにはその證據を握つていると、言つて聞かされたのです。それにまた、あの人の話ではチェバローフという奴は、僕が豫想していたのと全く同じ人間でした。僕はね、皆さん、みんなが僕のことを白痴だといつてゐることも

チェバローフが僕つて奴が易々と金を出す奴だという世間の評判を聞いて、まんまと瞞してやろうと考へ、しかもパヴリシチェフさんに對する僕の氣持を利用したら譯はないと考へていたのだ位のこと、よく分かつています。しかし、一ぱん大事なことは、——まあ、聽いて下さい、皆さん、おしまいで！ ——大事なことは、今、俄かにブルドフスキイ君が決してパヴリシチェフの息なんかじやないつて事が、はつきり分つたことです！ たつた今、ガヴリラ・アルダリオノキッチさんが僕に知らしてくれて、確かな證據が手に入つたと斷言なすつたのです。さあ、皆さんは、どうお思いになります。今までなすつたことが、結局、本當とは思えないじやありませんか！ まあ、お聞きなさい、確かな證據があるつていふんですよ！ 僕はまだ本氣にはなれません。自分では本氣には、どうしても、僕はまだ疑つています。ガヴリラ・アルダリオノキッチさんが未だ詳しいことは全然、聞かして下さらないので、けども、チェバローフが食わせ者だということ、それはもう疑う餘地がありません！ あの男は、不仕合せなブルドフスキイ君や、こうして健氣にも友人を（たしかにブルドフスキイ君は皆さんの支持を必要としてゐる様子です。それは僕にだつて、よく分かつてます！）心から支持しようとしてお出かけ下すつた皆さんをも、すつかり口車に乗せてしまつて、一人のこらず、こん詐欺事件に捲き込んでしまつたのです。だつて、これは事實において、いんちきな詐欺じやありませんか！」

「……どうして『パヴリシチェフの息』じやないんだ？ ……どうしてそんなことがあるもんか！ ……」と、口々に叫ぶ聲が聞こえる。

ブルドフスキイの一派は名狀すべからざる恐懼を來して、た。

「ええ、勿論、詐欺です！ だつて、若しもブルドフスキイ君が今、『パヴリシチェフの息』でないことが判明すれば、その場合に、ブルドフスキイ君の要求は、そのまま詐欺行爲ということになるでしょう（つまり、無論、これは同君が情を知つていたと假定してのことですが！）。ところが、ブルドフスキイ君が瞞されたのだということ、そこに問題があるのです。だからこそ、僕は同君の立場を明らかにしようとして頭張つてゐるのです。僕は、だからこそ、同君は、その純情なる點において憐憫に値するのだと言ひ、また同君は支持されなかつたら、やつて行けないのだと言ひます。若しそれでなかつたとなれば、ブルドフスキイ君はやはり、やはりこの事件によつて、べてん師ということになつてしまふのです！ 尤も僕は、同君は何も知らない、すでによく信じ切つてはいます！ やはり僕自身も瑞西へ行くまでは、同じような状態にいたものです。やはり取りとめないことを啜やっていたのでした。——思つてゐることを口に出して言ひ表わそうと思つてもそれがどうしてもできない……。そういう氣持はよく僕には分かつています。僕は大いに同情します、何しろ、僕自身がやはり殆んど同じだつたからです。だからこんなことを言つても差し支えがない譯です！ ところで、やはり僕は、たとえこの際、『パヴリシチェフの息』がいな



いにしても、また、一切のことが、いんちきだと分つたにしても、やはり自分が決めた方針を變えずに、バヅリシチェフさんの記念として、一萬留をお返しするつもりです。僕はブルドフスキイ君の事が起るまでは、バヅリシチェフさんの記念として、この一萬留の金を學校の基本金にするつもりでした。しかし今となつては、學校の方へ使うのもブルドフスキイ君に差し上げるのも、同じ譯になるでしょう。ブルドフスキイ君が假りに『バヅリシチェフさんの息』でなくともやはり『バヅリシチェフさんの息』と殆んど同じようなものだからです。同君自身も意地わるく瞞されていたのですからね。自分では本當にバヅリシチェフの息だと心から思い込んでいたのです！ 皆さん、ガヅリラー・アルダリオノキッチさんのお話を聞いて下さい。そしてこの話をおしまいにしましょう。そんなに怒らないで下さい。そんなに興奮なさらないで、まあ、お坐り下さい！ ガヅリラー・アルダリオノキッチさんは直ぐに何もかも説明して下さるでしょう。正直に申しますと、僕自身も詳しいことを、全部ききたくつてしようがないんです。あの人の話ではね、ブルドフスキイ君、あの人はわざわざブスコフにいるあなたのお母さんを訪ねて行かれたそうですけれど、あなたがあの記事の中で無理やりにかかせられたように、決して死にかかつてなんかはいなかつたそうですよ。……さ、どうぞ、皆さん、お掛け下さい。お掛けなすつて！」

公爵は自ら腰をおろして、席から飛びあがろうとするブルドフスキイの一行を、再び元の席に着かせることができた。

り出した。瞬くうちに一同の話しごえは聞こえなくなつた。誰もが、わけてもブルドフスキイの一行は、非常な好奇心を寄せて耳を傾けた。

「君は勿論、こんな事實を否定なさらないでしようね。」とガヅリラー・アルダリオノキッチはブルドフスキイに向つていきなりこう切り出した。相手はびつくりして、眼をむいて、彼の言うことを一生懸命に聴いていたのであるが、どう見ても、ひどく狼狽しているらしかつた。

「否定なさらないでしようね。いや、むしろ眞面目な氣持なら、むしろ、否定なんかはしたくないでしょうね。というのは、君のお母さんが、十等官ブルドフスキイ氏、つまり君のお父さんと正式に結婚されてから二年たつて、君が生れたという事實です。君の生年月日を實證的に證明するのは、きわめて譯もないことです。従つて、君に對しても、お母さんに對してもあまりにも失禮にあたるケルレル君の文章の中のこの事實の捏造は、ただ單にケルレルの例のふざけ切つた空想の仕業だというように説明するよりほかありません。ケルレル君はこんなことをして、君に明らかに權利があることを認めさせ、また君の利益をもつと増してやろうと考えていたのでしょう。ケルレル君の言い草だと、君に前もつて、この記

最後の十分間乃至は二十分間というものは、彼は夢中になつて、聲を高く張りあげ、氣短かに、一座の人たちを聲で壓倒しようとするかのやうに、早口に喋りつづけていた。しかし後では、ついうつかりと口から出て來た二三の言葉や臆測に、ひどく後悔せずには居られなかつた。若しも、我をも忘れるほどに興奮したり、夢中になつたりしなかつたら、こんなに露骨に、せかせかと、人の前で獨りよがりな思わくや、言う必要もない明けすけなことを平氣で言つたりなどはしなかつたであらう。ところが自分が席に着くや否や、忽ちに痛々しいほど烈しい悔悟の念が胸をつくのであつた。自分が瑞西へ行つて治療をしてもらつたと同じ病氣が、相手にあるかのような口物を公然と洩らしてブルドフスキイを「侮辱した」點を除いても、學校へやる筈の一萬留を、彼のつもりでは、まるで贈り物をやるかのやうに、不躰に不用意に、しかもみんなのいる前で他人にも聞こえるやうに、提供すると申し出たことを許すにしても、さきの病氣のことは、實に唯ならぬ事であつたのだ。「明日まで待つて、相對の時に申し出た方がよかつた。」と公爵は直ぐに思ひ直した。「しかし、今となつては、もう訂正の仕様もあるまい！ そうだ、おれは白痴だつた、まぎれもない白痴なんだ！」と、慚愧の念にうたれ、極度に悲觀して、彼は獨りでこう決めてしまつた。とかくするうちに、今までわきの方に佇んで、頭として口を開かなかつたガヅリラー・アルダリオノキッチが、公爵に招かれて前の方へ出て來て彼のわきに立つて、公爵に委任されていた問題に關する報告を、落ちついて、はつきりと、や

事を、全部ではなかつたけれども兎にも角にも、讀んで聞かしたということですが……今さら疑うまでもなく、同君はこの邊のところまでは、讀んで聞かせなかつたに相違ありません……」

「たしかに、そうでした。」と拳闘家は遮つた。「けれども、この事實はみんな、この事實に精通している人から僕は聞かされたものです。そこで僕は……」

「御免なさい、ケルレル君。」とガヅリラー・アルダリオノキッチは彼を押しとどめた。「僕に言わして下さい。間違ひなく僕は順序を追つて君の記事のことに及ぶ筈ですから、そのときに説明して貰いましょう。今は順序にしたがつて、あとを續けた方がいでしょう。さて全く偶然に妹のワルワラー・アルダリオノヅナ・ブチーツイナの骨折りで、僕はあれの友だちで未亡人の地主、ヴェーラー・アルクセイヅナ・ズブコフワから、亡くなられたニコライ・アンドレーキッチ・バヅリシチェフさんの手紙を一つ手に入れました。これは今から二十四年まえ、故人が外國から未亡人に宛てたものでした。ヴェーラー・アクセイヅナさんと近づきになつてから、僕はこの人に教えて貰つて、チモフラー・フォードロキッチ・ヴィヤゾフキンという退職の大佐のところへ行きましたが、この人はバヅリシチェフさんとは遠い縁つづきになる人で、若い頃は非常に仲がよかつたそうです。この人を通じて、やはり外國からニコライ・アンドレーキッチがよこした手紙を更に二つ手に入れることができました。この三つの手紙、その日付、その中に書いてある事實から推して、ニコライ・アンドレー



キツチさんはブルドフスキイの生れる丁度一年半まえに外國へお立ちになつた、(そのまゝ三年間あちらにいらした)といふことが反駁することはおろか、疑いをさし挿む餘地もないほどはつきりと、數學的に證明されるのです。君もよく御承知のように、君のおつ母さんは唯の一度も露西亞を離れたことはなかつたのです……。それにしても、今は手紙を読むことは控えておきましょう。もう夜も更けていますから、兎に角事實だけを發表しておきましょう。ですから、ブルドフスキイ君、若し氣が向いたら、明朝にでも僕のところでお眼にかかりますから、なんでもお好きだけの證人なり、筆蹟鑑定の人なりを連れていらして下さい。そうすれば、今、發表しました事實が明々白々たる事實だということを、どうしても認めないわけには行かなくなるでしょう。僕は信じて疑いません。若しそうだとすれば、この事件は勿論、何もかもが自然に消滅して、それでおしまひということになるでしょう。」

又しても一座にざわめきと激しい動搖が起つた。當のブルドフスキイはいきなり椅子から立ちあがつた。

「若しそうだとすれば、僕は瞞されたんだ。瞞されたんです、しかし、チェバローフにじやないんです。以前から、ずっと以前から瞞されていたのです。鑑定家なんか欲しかありません、面會もしたことはありません。僕はあなたを信じますから、これであきらめることにします……一萬留もお断りします……さうなら……」

彼は帽子をつかむと、椅子を押しやつて、出て行くこととし

「ケルケル君、君が唯今おつしやつた事實は、」とガヴリーラ・アルダリオノキ、チが後を引き取つた。「なかなか貴重なもんでしたよ。ともかく僕は極めて正確な材料に基づいて、次のことを斷言して憚からんです。勿論、ブルドフスキイ君にしても、自分の生年月日はよくよく知つて居られたのですが、しかし、バヴリシチェフさんがその頃外國に滞在なすつて居られたという事情を全く御存じなかつたのです。バヴリシチェフさんは生涯の大部分を外國でお暮らしなすつて、露西亞に歸つて居られたのは、ほんの僅かの間だつたそうです。そのうえ、當時旅行なすつていたというこの事實も、二十年以上も経つた今日まで記憶されるほど、それほど大したことではなかつたので、バヴリシチェフさんと極めて親しかつた人々さえもよく憶えていない位ですから、そのころ生れてもいなかつたブルドフスキイ君の知ろふ筈はないじやありませんか。勿論、證據をお見せすることはできないことではありません。しかし僕は正直のところを言いますと僕の手に入つた證據なるものも全く偶然に手に入れたもので、どちらかという、手に入らない方がよかつたのかも知れません。こんな譯ですから、ブルドフスキイ君にしろ、又チェバローフにしたところで假りにこの二人がこの證據を提供しようと考えたにしても、それは殆んど絶望だつたでしょう。尤もそんなことは考えもつかなかつたかも知れませんが……」

「失禮ですが、イヴォルギンさん、」と不意にイッポリットがいらいらしているような聲で遮つた、「潛越なようですが、何だつてあなたは、そんな御託を並べるんです? 事件はも

た。

「ブルドフスキイさん、宜しかつたら、」とガヴリーラ・アルダリオノキ、チは靜かにやさしく彼を呼びとめた。「ほんの五分間で結構ですからお待ち下さいませんか。この事件に關聯して極めて重大な、兎にも角にも特に君にとつては非常に興味のある二三の事實が判明したので、僕の考えるところでは、あなたもそれを黙殺する譯には行くまいと思いません。また、あなた御自身にしても、事件がすつかり明白になれば、恐らく愉快になられることと思ひます……」

ブルドフスキイは深く物思いに沈んでゐるかのようになり、うなだれたまゝ黙つて席についた。彼と一緒にしようとしたレベジョフの甥も、同じように席についた。この男はなかなか當惑したり、圖々しさを失くしたりする男ではなかつたが、それでも、かなりに參らされたというような様子をしてゐた。イッポリットは眉を擧げて、寂しそうな顔をしてゐたが、これも又いかに驚いたらしい顔つきをしてゐた。

ところが、丁度この時、彼は激しく咳き入つて、ハンカチを血で汚してしまつた。拳闘家は殆んど氣を失わんばかりに驚ろいた。

「ええい、アンチーブ!」と彼は悲痛な聲で叫んだ。「僕があの時、言わないこつちやないじやないか……おとつ。君は、事によつたら、本當にバヴリシチェフの息じやないかも知れんて!」

押しかくしたような笑い聲が起つたが、そのうちの二三人が一そう高い聲で笑い出した。

はや明々白々たるもので、僕たちも大體の事實は快よく信用することを躊躇しないつもりです。何だつて、そんな重苦しい、人を馬鹿にしたような無駄口をだらだらと引つぱり廻すんです? 多分、あなたは御自分の探偵のお手並を自慢なさりたいんでしよう。自分は何ていう腕ききの探偵だろう、判事だろうと、僕たちや公爵の前で見せびらかしたいんでしよう? それとも、あいつは何も知らずにこの事件に關聯したのだと言つて、ブルドフスキイ君のために謝罪や辯護を引き受けてやろうつていうお積りなんですか? が、それはあんまり圖々しいですよ、あなた! ブルドフスキイ君があんなに謝罪して貰おうの、辯護をして貰おうのと思つていないことは、疾うに御承知の筈だとばかり思つていましたよ! この人は侮辱されたと思つて、忌々しがつてゐるんですからね。それでなくつてさえ、今は重苦しい氣持で、きまりが悪い立場にあるんですから、あなたはそれを察してやるのが當然じやありませんか。それを察してやるのが……」

「もう結構です。イッポリット君、もう結構ですよ。」と、ガヴリーラ・アルダリオノキ、チは辛うじて隙を見つけて口を入れた。「氣を落ちつけて下さい。そういきり立つもんじゃないやありません。あなたはかなり工合が悪いようですね? お氣の毒です。そんな譯ならば僕はここで止しましょう。けれども、どちらかといへば餘分のことばはさしおいて、皆さんにこれだけは充分に詳細にわたつて御承知お願ひした方がよろしいと思ひ事實を二三、ごく手短かにお話ししようと思ひます。」じれつたいと言つたように、幾分ざわめき立つてき



た一座の氣配に氣がついて、彼はこう附け加えた。「僕はこの事件に關心をもつていらつしやる皆さんに證據を擧げてお話ししようと思つただけです。さてブルドフスキイ君、君のお母さんがバヴリシチェフさんにいろいろ面倒を見ていたのだのは、實はお母さんが、バヴリシチェフさんのかなり若かつた頃に戀せられた小間使の妹だつたからです。そしてバヴリシチェフさんは、相手が急病でなくなるようなことがなかつたら、きつと結婚してに相違ないと思われほど激しい惚れかたをしていたので。このあくまでも正確な家庭内の出來事を知る人は極めて少く、殆んど忘れられていたくらいです。僕はこの點について確かな證據をもつています。更にその後の事情をお話ししましょう。君のお母さんはまだ十くらいの子供の頃、親代りに、バヴリシチェフ氏に引き取られて、養育され、持參金をどつさり分けて貰つたりしたので、こうした心づくしが却つて多くの親戚間に非常に不安な取沙汰を生むようになりました。中には同氏が自分の育てた娘と結婚するのじやないかななどと、考える人さえもあつたのです。しかし、結局のところ、お母さんは御自分の希望で（これも實に正確なやり方で證明ができます。測量官ブルドフスキイ氏のところへお嫁入りなすつた。それは二十歳の頃のことです。で、僕のところにはブルドフスキイ君のお父さんがどんな方であつたかを證明すべき幾つかの事實が集つています。これによりますと、お父さんは全くの非實務的な人で、お母さんの持參金の一萬五千留を受けとられると、直ぐに官を辭せられ、ある取引專業の方に手を出されましたが、

て遂には次第次第に、親戚やバヴリシチェフ家の内輪の人たちの間に、君はバヴリシチェフ氏の息であつて、君のお父さんは同氏のためにすつかり騙し込まれていないのか知らという疑いをひき起しました。この疑いが根強く人々の胸に植えつけられて、誰もがそれに相違ないと思つようになつたのは同氏の晩年のことで、誰もが遺言に度膽を抜かれていた頃のことです。また、その頃には最初の事情なんかはすつかり忘れられて、それを調べてみることもできなくなつていたので。ブルドフスキイ君、ここに疑うまでもなく、こういつたような噂が君にも傳わり、君もすつかりそれに氣をとられていたに相違ありません。僕は親しく君のお母さんにお眼にかかりました。お母さんは、こんな噂はすつかり御承知だつたのですが、さすがに自分の息のあんたが、この噂に儲まされていようとは今もつてなお夢にも御存じないのです。（僕もやはりこのことは隠してました。ねえ、ブルドフスキイ君、僕があんたのお母さまに、ブスコフでお目にかかつた時には、お母さまは病氣と、この上もないよくよくの貧乏に悩まされていらつたのです。バヴリシチェフ氏が亡くなつた後から、お母さんはそつち境遇に陥られたのです。お母さんは感謝の涙にむせびながら、今はただあんたのお蔭でその日その日を過して行つて、そしてあなたの將來を樂しみに暮らしていると僕に仰つしやつたのです。お母さんはあんたの將來を非常に期待して、來るべき日の出世を心から信じていらつしやるんですよ……」

人に騙されて、すつかり資本をなくされてしまつたのです。その傷手に堪えられないで、酒に親まれるようになり、そのために病氣に罹つて、とうとう、あなたのお母さんと結婚されてから八年目に若死にされたのです。その後のことはお母さんの口から親しくお聞きしましたところによりますと、お母さんは着のみ着のまま投げ出された形で、バヴリシチェフ氏の昔に變らぬ鷹揚な手助けがなかつたら、疾うの昔に死んでしまつていた筈でした。バヴリシチェフ氏は年に六百留までの扶助をなすつたのでした。また同氏がまだ赤ん坊だつたあなたを非常に可愛がられたということも數えきれないほどの證據があるのです。これらの證據や、またあなたのお母さんを引き合ひに出すようですが、お母さんのお言葉から考へ合せてみますと、あなたを可愛がられたのは、主として、あなたが幼少の折に、吃りか、不具者か、兎に角、そつちつたような見るも哀れな不仕合せな子供だつたからだらうと思ひます（ここでちよつと一言、いつて置きますが、僕が知り得た極めて正確な、證據によつて考えますと、バヴリシチェフ氏は一生の間、造化の神に虐げられ、辱かしめられた者、特に子供にはある種の極めてやさしい同情をそそいでいたのでした。——この事實は今度の事件の上にも極めて重大な意味があると僕は確信しています。さて、最後に僕は、もう一つの重大な事實について、精密な調査を成し上げたことを自慢してもいいと思ひます。バヴリシチェフ氏の君に對するこの一方ならぬ愛情は（氏の心盡して君は中學校に入つて、特別な保護の下に勉強することができたのです。やが

て、不意に大きな聲で叫んだ。「そんな小説もどきのお話か何になるんですか？」

「何てけがらわしいことだ、無禮な話だ！」とイッポリットは激しく身を打ちふるはせてこう言つた。しかも、ブルドフスキイは一言も口をきかず、身じろぎさえもしなかつた。

「何になるですつて？ 何故ですつて？」實に驚ろいたといつたような顔をして、心の中では自分の結論を述べようと意地わるく待ち構えながら、ガヴリーラ・アルダリオノキッチはこう言つた。「先ず第一に、ブルドフスキイ君は既に、バヴリシチェフ氏が自分を可愛がつてくれたのは博愛のためであつて、決して息として愛したのではないといふことを、恐らく十二分に納得されたことでしょう。ブルドフスキイ君はケルレル君があの記事を讀んで聞かした時、是認もし、保證もされたさうですから、この事實はどうしても知つておかなければならないことだつたのです。あなたを潔白な人間と考へればこそ、僕はこういうことを言うのです。ねえ、ブルドフスキイ君、第二に、この事件に關しては、チェバロフでさえも一寸も、いかさまや騙りの氣持を持つていなかつた、といふことが判明しました。これは僕にとつても甚だ重大な點です。というのには、僕までが公爵と同じように、この不幸な事件をいかさまな詐欺事件と考へているように、先ほど、憤慨のあまり公爵が申して居られたからです。ところが、事實はまるつきり反對です。この事件は、どこからどこまで確乎たる信念によつて充たされているのです。尤も、チェバロフは實際のところ大山師であるかも知れませんが、事實、こ



の件に關する限りは、彼は一介の三百代言にしか過ぎませ  
ん。彼は辯護人として、しこたま儲けようとしただけで、そ  
の胸算用は微細で巧妙であつたばかりでなく、極めて正確な  
ものでさえあつたのです。彼は公爵がたやすく人に金をお渡  
しになることや、公爵の亡きバヴリシチェフに對する感激や  
尊敬の念、すでに世間周知の名譽や良心の義務に關して公爵  
のもつて居られる騎士的な見識（これが何よりも大事なので  
す。） こういうものに基ずいて事件に手を着けたのです。と  
ころで、ブルドフスキイ君については、次のように言つても  
宜しかろうと思ひます。この人は豫て懐いて居られた信念の  
ために、チェバローフや取巻きの連中におだてられて、利害  
關係よりは寧ろ、眞理、進歩、人類に對する奉仕として、こ  
の事件を起されたものと思ひます。今や、これだけの事實を  
報告した以上は、ブルドフスキイ君が見かけによらず、極め  
て潔白な方であるということは誰にもよくお分かりのことと  
存じます。そして公爵も今では前よりは一そう快よく、親友  
としての助力、並びに先ほど學校とかバヴリシチェフとかの  
話が出ました時におつしやつたような實際上の援助も引き  
けて下さることと存じます。」

「よして下さい、ガヴリーラ・アルダリオノキツチさん、よ  
して下さい！」と公爵はひどく狼狽して叫んだが、しかしも  
う間に合わなかつた。

「僕は言つたぢやありませんか、もう三度も言つたぢやあり  
ませんか。」とブルドフスキイはいらだたしげに叫んだ。「僕  
はお金なんか欲しかありません。受け取りやしません……何

せたと言ひましたが、あなたはお母さんを愛していらつしや  
る。お母さんが御自分の口からそうおつしやつたんですよ……  
僕は知らなかつたんです……ガヴリーラ・アルダリオノキ  
ツチさんが先程おしまひまで話して下さいなかつたものです  
から……すみませんでした。僕は厚かましくも、あなたに  
一萬留を差し上げるなんかと言ひましたが、あれは僕が悪か  
つたんです。あんな風にして言うべきことじやなかつたので  
す。しかし、今となつては……もう仕方がありません。あな  
たは僕を輕蔑していらつしやるのですから……」

「あ、これは全く精神病院だ！」とリザヴェター・プロコフ  
イーヴナが叫んだ。

「勿論、氣ちがい病院だわ。」とアグライヤは我慢がしきれ  
ず、こう言つたが、その言葉は一座のざわめきの中に掻き消  
されて行つた。みんなは大きな聲で話したり、議論めいたこ  
とを言つていた。口論している者も、笑つている者もあつ  
た。イワン・フォードロフキは極度の憤懣に達して、自分  
の權威を傷つけられたような顔つきをして、リザヴェター・  
プロコフイーヴナを待ちうけていた。レーベジェフの甥はよ  
くよくのことを言ひ出した。

「ねえ、公爵、あなたには帽子しゃつぽを脱ぎましたよ。つまり、あ  
なたは御自分の……その、病氣しやまひ（まあ遠慮してこう言つとき  
ましようね。）のですな。とにかく利用の仕方を御存じです  
からね。あなたが友情だの、金だのを提供なさる遣り口があ  
んまり鮮やかなんですから、潔白な人間はどうしてもそい  
つを受け取るわけにはゆかないじやありませんか。あんまり

だつて……。欲しかありません……けがらわしい……」  
こう言つたかと思うと、彼はそのまま露臺から駆け下りよ  
うとした。すると、レーベジェフの甥がその手をつかま  
えて、何か耳打ちをした。すると相手はいきなり取つてかえし  
て、ポケットから封のしてない、大形の封筒を取り出して、  
公爵の立つている傍の卓子の上にはうり出した。

「さあ、金です！ あんたはよくもいけ圖々しく！ よくも  
圖々しく！ 金なんか！」

「あなたが失敬にも贈り物という名目でチェバローフの手を  
經てよこされた二百五十留です。」とドクトレンコが説明し  
た。

「あの記事には五十留としてありましたよ！」とコオリヤが  
叫んだ。

「すみませんでした！」と公爵はブルドフスキイに近づきな  
がら言つた。「僕はあなたに、實に申し譯のないことをしま  
した。ブルドフスキイ君。しかしあの金は贈り物として差し  
上げたのじやありません。全く。僕は今も申し譯のないこと  
を言ひました……先ほど悪いことを言ひました（公爵は  
すつかり調子が狂つて、顔つきも疲れ切つたように弱々しか  
つた。又その言葉もとりとめのないものであつた）。僕はさ  
つきべてん師だと言ひましたが……あれはあなたのことじや  
ありません。僕の勘違いでした。僕は、あなたが……僕と同  
じように……病人だと言ひました。しかも、あなたは僕なん  
かのような人間じやありません……家庭教師をして、お母さん  
を養つていらつしやる。僕はあなたがお母さんに恥をかか

無邪氣すぎるのか、あんまり遣り口がうますぎるのか、どつ  
ちかですわ……尤も、御自分じや話よりもよく御存じなん  
でしょう。」

「ちよつと御免なさい、皆さん。」一方、金の包みをあけて  
いたガヴリーラ・アルダリオノキツチはこう叫んだ。「この中  
には二百五十留なんかありませんよ。みんなで、たつたの百  
留しか。公爵、實は僕は何か腑に落ちないことでもあつちや  
いけないと思つたもんですから。」

「ほつとして下さい、ほつとして下さい。」と公爵はガヴリ  
ーラ・アルダリオノキツチに向つて兩手を振つた。

「いや、『ほつとく』なんてことはできません！」とレーベ  
ジェフの甥は忽ち突つかかつて來た。「公爵、あなたが『ほ  
つとして下さい』なんて僕らに對する侮辱です。僕らは逃げ  
も隠れもしません。何もかもぎつくばらんに言ひます。實  
は、その中にはたつたの百留つきりで、二百五十留なんかあ  
りません、しかしそれにしたところと同じことじやないです  
か……」

「いや、同じことじやありません。」と、變んだなあ  
と子供みたいな顔つきをしてガヴリーラ・アルダリオノキツチ  
は相手の隙を見て、口を出した。

「話の邪魔をしないで下さい。僕たちは、あなたが考えてい  
るような馬鹿じやありませんよ。辯護士さん。」とレーベジ  
ェフの甥は憎々しげな口調で叫んだ。「勿論、百留は二百五  
十留じやありませんし、同じものでもありません。しかしで  
すね、この場合、大事なのは主義主張ですよ。主旨が大切な



んですよ。百五十留足りないなんてのは、ほんのちつぽけな問題です。大事なのはブルドフスキイ君があなたの贈り物を受けとらなかつたことですよ、あなた。あの男があんたの顔に金を叩きつけたことなんです。この意味からしたら、百留であろうが、二百五十留であろうが同じことじゃありませんか。ブルドフスキイが一萬留うけとらなかつたことは、あんたもよく御覽なすつたでしょう。あの男が恥知らずだつたら、この百留も持つては來なかつたでしょうよ！ その百五十留つてのはチェバローフが公爵のところへ出かけて行つた費用に使つてしまつたんです。むしろ、あんた方は僕らの無器用さ加減や、事を運ぶ手つきのぎこちないのを勝手に笑つて下さい。あんた方はそれでなくつてさえ一生懸命、僕らを笑いものにしてやろうとしてるんですからね。しかし僕らを恥知らずだなんかとは言わせませんよ。あの百五十留はね、あんた、僕らが一緒になつて公爵にお返します。たとい一留ずつであろうともお返しします。利息をつけてお返しします。ブルドフスキイは貧乏で、百萬の財産家でもなし、おまけに、チェバローフは旅行から歸つて來るなり勘定書を突きつけるし。僕らは裁判には勝つのをあてにしたんだけれど……誰だつてあの男の立場に置かれたら、ほかにやりようがあるもんか？」

「誰とは何です？」とS公爵が叫んだ。

「わたしはもう氣が狂いそうだし」とリザヴェータ・プロコフィーヴナが叫んだ。

「これはまるで」と今まで永いことじつと立つて傍觀して

三年に一度くらいのもので、決してそれより多い事はありません！ 決してそれより多いことはありませんがの！」と、きつぱり斷つた。

「もう澤山です！ イワン・フォードロキッチ、放つておいで下さい！」とリザヴェータ・プロコフィーヴナは叫んだ。「何だつてわたしの方へそんなに手を差し出していらつしやるんです？ あなたは、さつき私を連れ出すことができなかったじやございませぬの？ あなたはわたしの夫で、一家の頭じやございませぬか？ わたしがあなたのいうことを聽かないで、出て行かなかつたら、わたしを、この馬鹿者を耳を掴んで曳き摺り出すのが當りませぬじやございませぬか？ それがおできにならなければ、せめて娘たちのことくらい心配して上げてよさそうなものですね！ けど、もうあなたのお世話にならなくつても、わたしは自分で何とか方法をつけて行きますよ。こんな恥かしい思ひは何年たつたからつて忘れやしません……ちよつと待つて下さい。わたしはまだ公爵にお禮を申していませんから！ ……公爵、有難う、どうもいろいろ御馳走様！ 若い人たちのお話を聞いているうちに永居をしてしまいました……あれは、なんていうだらしないことでしょう。なんて見苦しいことでしょう！ 今のは、めちやくちやです。汚らわしい。あんなことは夢にだつて見られやしないわ！ え、あんな手合つて、そうそう世間にざらに居るものじやない！ ……お黙り、アグラレーヤ！ お黙り、アレクサンドラ！ おまえさんたちなんかの知つたことじやないよ。エヴゲニイ・パーヴロキッチさん、わたしのそばを

いたエヴゲニイ・パーヴロキッチが笑い出した。「この間から騒がれていた辯護士の辯論みたいなあ。その辯護士がですねえ、強盜の目的で一時に六人の人間を殺した被告の貧困状態を説明しているうち、突然、次のような結論をしたんですよ。『被告が貧困に迫られてこの六人殺しを執行するに至つたことは、きわめて自然なことである。また加害者の立場に置かれたら、誰だつてかくの如き計畫を念頭に思ひ浮べないものはないだろう？』つて、まあ、こう言う風なことを言つたそうですが、なかなか面白いですよ。」

「もう澤山です！」憤怒のあまり今にも身を顛わさんばかりになつて、突然、リザヴェータ・プロコフィーヴナがこう言い出した。「もう、こんな馬鹿話の切りをつけていい時分でしょう！」

彼女は恐ろしく亢奮していた。嚴めしそくに頭をうしろにそらして、横柄な、憤ろしい、じれつたような態度で、夫人は輝やかなしい眸を一座の人々の上に注ぎかけた。この瞬間、彼女は敵も味方も見さかいがつかなくなつてゐる様子であつた。それは、一刻も早く闘おうという氣持、一刻も早く誰かに飛びかかつてやりたいという氣持が、大きな衝動となつて來た時、今までじつとこらえていた憤怒が、ついに爆發しようとする危機一發の氣持であつた。リザヴェータ・プロコフィーヴナをよく知つてゐる人たちは、彼女の心中に何かしら特別なものが現われたことを感じていた。イワン・フォードロキッチは翌くる日S公爵に向つて、「あれは、よくあんなことがありますよ、しかし、昨日みたいに激しいのは、まあ

うろろろなさらないで頂戴。何だつてわたしの傍をうろろろなざるんです！ もうあんななんかにほうんざりしました！ ……それであなたはあの連中のところへお詫びに行くんですよ……ね。」と彼女は再び公爵の方を向いて突きかかつた。

「すみませんでした。厚かましくもあなたにお金を差し上げるなんかと言ひまして……」など何だつてあなたは言うのです。あなたは何だつて笑うんです、空威張りやさん！」彼女は不意にレーベジェフの甥に食つてかかつた。「僕らはそんな金なんか、お斷りします。僕らは要求するのであつて、無心するのではありません。」なんてよくも言ひましたね！ きつとこのお白痴さんが明日にでも、あの連中のところへ、このこ出かけて行つて、又、友情やら、お金やら持ち出すのをよく見ぬいてしたことだわ！ あんたは行くんです。あなた、行きませぬか？」

「行きます。」と物しずかな、やさしい聲で公爵は言つた。

「聞いてたでしょう！ だから、おまえさんなんかはそれを當てにしてるんだらう。」彼女は又してもドクトレンコの方を向いて、「もうお金はちやんとポケットの中へ入つたも同じだと考へて、それで威張り散らすんだらう。人を煙にまいたようなことを言うんだらう……さあ、おまえさんはお慥巧だから、よその馬鹿を見つけた方がいい。わたしはね、ちやんとおまえさんの遣り口を見抜いてゐるわ……おまえさんのからくりは、ちやんと見抜いてますよ！」

「リザヴェータ・プロコフィーヴナさん！」と公爵は叫んだ。「もう出かけましょう、奥さん、もうずいぶん遅くなりまし



たよ。それに公爵もお連れしましょう。」できるだけ物静かに、微笑みながら、S公爵はこう言つた。令嬢たちは殆んど呆れかえつて、横の方に立つていた。將軍はもうすつかり呆れかえつていた。ほかの人たも同じようにあつけにとられていた。少し離れたところに立つていた幾人かの人、忍び笑いをしながら、囁やき合つていた。レーベジェフはうつとりして我を忘れたような顔をしていた。

「滅茶苦茶でね、汚らわしいものなんか、ざらにありますよ、奥さん。」とレーベジェフの甥は表情たつぷりな様子をしてこう言つたが、かなり情氣たつぷりな聲であつた。

「それにしてもあんなのつてありませんよ！今あなた達がしたような、あんなのつてあるものじゃありません。」とヒステリーにでもかかつたような憎々しげな笑いをうかべてリザヴェータ・プロコフィーヴナは早速相手の言葉を捉えた。

「どうか、かまわないで下さいよ。」と彼女は自分を宥めようとすると人々にこう叫んだ。「ねえ、エツゲニイ・パーヴロキツチさん、あなたはさつき仰つしやつたわね、辯護士が法廷で、貧困のために人を殺すほど自然なことはないつて言つたつてね。それが本當だとすると、世もいよいよ終りが来たんだわ。わたし、まだそんなこと聞いたこともない。今になつて、わたしは何もかもすつかり分りましたわ！ほら、この吃りやさん、どうしてこの男が人殺しをしないつて言えましょう？（彼女はいぶかしげな顔をして自分の方を眺めているブルドフスキイを指さした。）え、誓つてもいいわ、きつと人を殺します！この人は多分、あなたのお金一萬留は

教徒みたいで、新聞でこの人をまるで取つて喰いそりなことを言つたじやないの。『要求するんです。無心じやありません。僕らはあなたに二言もお禮なんか言いません。御自分の良心を満足させるためですからね。』なぞと、よくも言えたものですね。變な道徳があればあるものさ。いいかえ、おまえさん方が公爵に一言もお禮を言わなければ、公爵だつておまえさんに『僕はパヴリシチェフさんに少しだつて感謝の念をもつていない。パヴリシチェフさんが慈善を施したのには御自分の良心を満足させるためだつたのだから。』つて返答するかも知れないんですよ。ところが、おまえさんてば、公爵がパヴリシチェフさんに對してもつて感謝の念ばかりが目あてじやないの。それに考えて見るがいい。この人はおまえに借金があるんじゃないのよ。おまえさんに恩義がある譯じやないよ。だからこの人の感謝の念をのけたら、喰い物にするものが何があるんです？よくも自分で、お禮は言わないなんてことが言えたものだわ？氣ちがい沙汰じやないの！世間が誘惑された娘を恥かしめると、人はその世間を野蠻な情け知らずと考えるものです。そのように世間を情け知らずだと考えたら、こんな世の中に生きてゆく娘はさぞかし辛いことだろうと考えてやるのが當りまえなのに。ところが、する事もあるうに、おまえはその娘をわざわざ新聞でそうした世間の前に曳きずり出して、苦しいなど言つてはならぬと無理なことをいう！まるで氣ちがいのする事だわ！見え坊だわ！神を信じない人たちだ。基督様を信じない様人間だ！おまえさん方は、とどのつまりは共喰いしなきや

受け取らないでしようよ。多分、良心に咎めて受け取らないでしよう。だけど、夜になつたら、やつて来てあなたを殺して、お金箱の中からお金を引き出すにちがひありません。良心に咎められて、引き出すでしようよ！それも、この人にとつては恥かしいことじやないでしよう！『高潔な絶望の發作』だとか、『否定』だとか何とか譯の分からない御託を並べるんでしようよ……ちえつ！何もかも世の中のこととは逆しまになつてしまつたんです。何もかもが足を上に向けてしまつたのです。箱入り娘が、いきなり往來の眞中で馬車に飛び乗つて、『ママ、わたしつい二三日前にカルキツチとか、イワーノキツチとかいう人と結婚しましたのよ、左様なら！』なんかと言ふようなことが、おまえさん方にとつては立派な行いなんではないか？尊敬に値する、自然なことなのかしら？婦人問題なんですかね？ほら、この坊主も、（と彼女はコオリヤを指した。）ついでこの間は議論をして、こんなのをこそ『婦人問題』だつて言ふ始末なんです。いいかね、たとひ母親は馬鹿であろうと、せめて人間らしく付き合ひがいいわ！……え、何でつてさつきおまえさん方は、首をそらして入つて来たんだらう？まるで『傍へ寄つちやならん、俺様たちのお通りだ。私たちにありつたけの權利をよこせ。だが、貴様たちは眼の前で一言も喋つちやならんぞ。おれたちには最下等の下男の取扱ひをしてやるから！』つてでも言つた恰好だつたじやないの。やれ眞理を追究するだの、權利にもとつてだのと言つてはいる辯に、自分は回

收まらないほど、見え坊で、己惚れ根性が込みこんでいるんだわ。わたしが豫め言つとききます。これが騙りでないのかしら、これが滅茶苦茶でないのかしら。これが陋劣なことではないのかしら？ところがこんな事があつた後でも、この恥知らずは、おめおめと、あの連中のところへお詫びに行くんだとさ！おまえさんたちみたいなのがどこにあるものか！何を笑つてるの？わたしがおまえたちを相手にして自分の面汚しをしてるからなの？え、それはもう汚してしまつた後だから如何ともしようがないわ！……ねえ、笑うのはやめておくれ！このへつほこめ！（彼女はいきなりイッポリットに食つてかかつた。）自分じややつと息をついてるくせをして、他人を墮落さしたりなんぞして。おまえがわたしの子を墮落させたんだよ、（彼女は再びコオリヤを指した。）この子はおまえのことを寔言にまで言つてるんだよ。おまえはこの子に無神論をよくも教え込んでくれましたね。おまえは神様を信じないんだね。おまえのような人は、うんととつちめてやつてもいいんだよ。ね、とつと消えてお終い！……レフ・ニコライエキツチ公爵、じや、あんな奴らんところへ明日お出かけなさるでんすね？」と彼女は息を切らしながら、又しても公爵にこう訊ねた。

「出かれます。」

「もうおまえさんなんか見たくもない！」と言つて、彼女は素早く身を翻して出て行くところとしたが、不意にまた引き返して来て「それからこの無神論者のところへ行くんだね。」と、イッポリットを指さした。「何だつて、おまえはわたしを見



て笑うの！」イッポリットの辛辣な嘲笑いに堪えきれなくなつて、彼女はどことなく不自然な調子でこう叫ぶと、彼に飛びかかつた。

「リザヴェータ・プロコフイーヴナ！ リザヴェータ・プロコフイーヴナ！ リザヴェータ・プロコフイーヴナ！」と四方から一時に叫び聲が起つた。

「ママ、何んて恥かしいことをなさるの！」とアグラーヤは大きな聲で叫んだ。

「氣にかけないで下さい。アグラーヤ・イワーノヴナさん」とイッポリットは穏やかな調子で言つた。リザヴェータ・プロコフイーヴナは彼に飛びかかつたが、なぜかしらその手を堅く掴んでいた。彼女は彼の前に立つたまま、物狂おしい瞳を据えてじつと彼を見つめていた。「心配しないで下さい。

あなたのママはこんなくたびり損いを打つ譯にはゆかないつてことに、すぐにお氣づきになるでしょうから……。僕がなぜ笑つたかは説明いたします……。聞いていただければ大へん嬉しうございます……」

と、彼はいきなり激しく咳入つて、一分間ほどは咳をとめることができなかった。

「今にも死にそりになつて居る癖に、まだ大きな口を利いている！」と言つてリザヴェータ・プロコフイーヴナは彼から手を離し、その唇から血を拭き取る様子を、殆んど恐怖とも言うべき顔をして眺め乍ら、また「まあ、話どころじゃやないじやないの！ おまえさんはすぐに行つて寝なくちや……。」「と叫んだ。「そりなさいよ。」とイッポリットは低い、殆ど

のようにおもての空氣の中でみんなと一しよに居られるのは、今日が最後ですよ。二週間経つたら間違ひなく土の中に入つて居る筈ですからね。つまり、これが人間や自然に對するお別れみたいなものですね。僕はそんなに情にもろくはありませんが、それでもやつぱり、こんな事件がパヴロフスクで起つたことが大へん嬉しいんです。何はともあれ、青葉の繁つた木立でも見てみましょう。」

「まあ今度は妙な話になつたもんだね。」リザヴェータ・プロコフイーヴナはなお一そう驚いてこう言つた。「おまえさんはすつかり熱に浮かされて居るんだね。さつきは金切り聲を出したり、びびり聲を出したりしてたかと思つて、今度はやつこのこと息をつきながら、すつかり息ぎれして居るじやないの！」

「僕はすつかにやすみます。何だつてあなたは僕のお頼みを聞いて下さらないんです？ ……あのね、奥さん、僕はすつと以前からあなたにお近づきになりたいと思つて居たのですよ。あなたのお噂をいろいろ聞いて居ました。……コオリから。僕を見棄てないでくれるのは、コオリヤ一人だけだと言つてもいいくらいです。……あなたなかなか風変わりなお方ですね。奇抜なお方ですね。僕はいま親しくお目にかかつてよく分かりました……。僕はねえ、あなたが少し好きになつてきましたよ。」

「まあ、それなのにわたしは、本當にすんでのところ、この人を打つところだつたわ。」

「まあ、おまえさん、氣でも狂つたんじゃないの？ 變なことうばかり言つて！ 手當しなければならぬのに、話なんかどうだつていいんですよ！ さあ、あつちへ行つて横におなり！」リザヴェータ・プロコフイーヴナは、びつくりしてから叫んだ。

「横になつたら、もう死ぬまで起きられないのです。」と微笑みながら、イッポリットは言つた。「僕は昨日も、そんな風に寝てしまおうかと思つて居たのです。もう死ぬまで起きないよ。」と。だげど明後日まで延期したので、足の立てる間だけと思つて、……その連中と一しよにここへ来たかつたもんですから……。だが、もうすつかりくたびれちやいまして……」

「さあ、お坐り、お坐んなさい。どうして立つてるの！ さあ椅子を。」とリザヴェータ・プロコフイーヴナは飛び上つて自分から椅子をすすめた。

「有難う存じます。」とイッポリットは低い聲で言葉をつづけた。「では、向き合つてお坐り下さい。そして少しお話ししましょう……。是非とも二人でお話ししましょう。リザヴェータ・プロコフイーヴナさん、僕は今度のことを頭張りますよ……。」「と彼は再び彼女に笑いかけた。「まあ考へて下さい。僕がこ

す。どうです僕の見當に狂いはないでしょう。この方がお嬢さんのアグラーヤ・イワーノヴナさんですね？ 何て美しい方でしょう。僕、さつき一目見たときすぐ分かりましたよ。今まで一度もお目にかかつたことはなかつたのですけれど。この世の見おさめに美しい方なりとも見さして下さい。」とイッポリットは何となく氣恥かしいような、歪んだ微笑を浮べた。「さあ、そこには公爵も、あなたの御主人も、皆さんも大ぜいいらつしやる。それなのに、どうして僕のお最後のお頼みをかなえて下さらないのです？」

「椅子を！」とリザヴェータ・プロコフイーヴナは叫んだが自分で引きよせ、イッポリットの眞向に腰をおろし、「コオリヤ、」と呼んで彼女は呟いつけた。「すぐにこの人と一しよに行つて頂戴、この人を送り届けて頂戴。明日わたしが、きつと自分で……」

「まことに失禮ではございますが、僕にお茶を一杯いただけませんか？ ……すつかり疲れてしまつたものですか。どうでしょうリザヴェータ・プロコフイーヴナさん、あなたは公爵をお茶にお招きのようでしたが、ここにお残りになつて、一しよにいて下さいませんか？ ……公爵はきつと皆さんにお茶を御馳走なさると思ひますから、僕の勝手な言ひ分はお許し下さい……。しかし僕はあなたをよく分かっています。あなたは親切な方です。公爵も同様です……。僕たちはみんな可笑しい位いい人間ばかりです……」

公爵はびつくりしてしまつた。レーベジェフは大きく分かつて出て行つた。それにつづいてヴェーラも出て行つた。



「それもそうだね。」と將軍夫人がきつぱりと云つた。「じや、お話しなさい。なるべく落ちついてですよ。夢中になつちや駄目よ。おまえさんの泣き落しには負けました。……公爵！ わたしはおまえさんの所でお茶を飲む理由はないのだけれど、こういう有様だから、ここにじつとしていきましょう。だ、ただ、わたしは誰にもお詫びなんかしませんよ！ ええ、誰にだつて！ 馬鹿らしい！ ……でも、わたしがおまえさんに悪態でもついたというのなら、勘忍しといて貰いましょう。厭やなら厭やで仕方がないけど。しかし、わたし誰もここへ引き止めてゐるんじやありませんよ。」と、夫人はいきなり、ひどく怒つたような顔つきをして夫と娘たちの方を振り向いた。その態度はまるで夫や娘たちが、夫人に對して大へん悪いことでもしたかのようであつた。「わたしは一人だつて家へは歸れますからね……」

しかし彼女は言うだけのことをすつかり言われなかつた。一同は彼女に近づいて、その周圍を取り巻き、ちやほやし始めた。公爵は、すぐさま一同に向つて、居残つて茶を喫むようにといひ、今までこれに氣づかなかつたことを詫びた。將軍までが非常に上機嫌になつて、「それにしても露臺じや冷えやしないかね？」などとリザヴェータ・プロコフィーヴナに向つて宥めるように愛想よく云つた。彼はイッポリットに向つてさえも、「もう大分まえから大學へ通つてますか？」と危うく問ひかけようとしたが、これはさすがに遠慮した。エヴゲニー・パーヴロキッチと公爵は俄かに非常に愛想がよく愉快になつてきた。アデライーダとアレクサン

ドラの顔にはさつきの名残をとどめてゐる驚ろきの表情のかけから満足らしい色が浮んで來た。要するに誰も彼がリザヴェータ・プロコフィーヴナの危機が過ぎたことを明らかに喜んでいたのである。ただ一人、アグライヤのみは苦い顔をして、少し離れたところに黙々と腰を下ろした。その他の人々もみな居残つて、誰一人出て行こうとするものはなかつた。イヴォルギン將軍までが出て行こうとはしなかつた。尤も將軍はレーベジェフが通りすがりに何やら小さな聲で囁やくと、どうやらその言葉があまり面白くなかつたのであろう。そのままだこの隅へ姿をかくしてしまつた。公爵はブルドフスキイとその一味の者にも、それぞれ近づいてすすめて廻つた。しかし、彼等は、さも緊張してゐるといつた顔つきをして、イッポリットの歸りを待つ旨を、聲低く答えてそのまま露臺の一番はなれた片隅に引つ込んで、またしても其の場所に一列に並んで腰を下ろした。間もなく茶が運び出されたところを見ると、多分、茶はレーベジェフが自分のために豫め準備していたのであろう。

時計が十一時を打つた。

イッポリットはヴェーラ・レーベジェフのすすめるお茶に唇を潤おして茶碗を卓子のうゑに置いたが、急に氣恥すかし

くなつて來て、殆んどどきまぎしてゐるような風をして、あたりを見まわした。

「リザヴェータ・プロコフィーヴナさん茶碗をごらん下さい。」と彼は何だか妙にそわそわして、「この磁器の茶碗は、この美事な磁器の茶碗は、いつもレーベジェフのところの硝子の蓋のついた函の中に藏つてあつて、一度も出したことがないんですよ……この家にもよくあるように、これは細君の嫁入道具なんです……こんなに出したところを見ると……それけ勿論、あなたに敬意を表してですね。それほど喜んでゐる譯ですよ……」

彼はもつと何か言いたかつたのであるが、何を言つていいのかわからなかつた。

「それにしても、やつぱり氣恥すかしくなつたんですね。大方そんなことだらうと思つていましたよ。」と本意にエヴゲニー・パーヴロキッチが公爵の耳に口を寄せて囁やいた。「これは、あぶないじやありませんかね？ あの様子だと今口惜しまざれに何か、リザヴェータ・プロコフィーヴナも堪らなような、飛んでもないことをやらかすにきまつてますよ。」

公爵はいぶかしげに相手の顔を眺めた。「あなたは突飛なことなんか平氣でしよう？」とエヴゲニー・パーヴロキッチは言い足した。「わたしもそうなんです。却つて望んでゐるくらいです。つまりわが親愛なるリザヴェータ・プロコフィーヴナに、今日できめんに罰が當ればいいと、ひたすら望んでゐるんです。それを見なくちや歸れませんよ。あんな、熱があるようですね？」

「後でお話ししましょう、邪魔しないようにして下さい。え、僕は工合が悪いんです。」そわそわしてゐるといふよりは寧ろいら立たしげな調子で、公爵はこゝろ答えた。彼は自分の名前をいつてゐるのを耳にした。イッポリットが自分の噂をしていたのである。

「あなたは本氣にしないんですか？」とイッポリットはヒステリックに笑つた。「そりやその筈です。しかし公爵はいきなり本氣にして、少しも驚ろいたりなんかしないでしようよ。」

「公爵、聞いているの？」と云つてリザヴェータ・プロコフィーヴナは彼の方を振りむいた。「聞こえてるの？」

あたりにはいた人は笑ひ出した。レーベジェフは忙しそうに、前の方へ突き出て來て、リザヴェータ・プロコフィーヴナのすぐ前をうろろははじめた。

「この人の話ではね、そら、その變な恰好をした男、おまえさんの家主が……そこにゐる旦那に頼まれて、おまえさんにあてつけてさつき讀んだ新聞記事を直したんだつてさ。」

公爵はあつけにとられてレーベジェフを眺めた。「一體、何だつてあなたは黙つてゐるの？」じれつたそりに足を踏み鳴らしさえもして、リザヴェータ・プロコフィーヴナはこゝろ言つた。

「仕方ありませんよ。」レーベジェフから眼を離さずに公爵はこゝろ呟やいた。「この人が直したことはよく分かつてます。」「本當。」と、リザヴェータ・プロコフィーヴナは素早くレーベジェフの方を振り向いた。



「全く本當のことでござんす、閣下！」レーベジェフは片手を胸に當てて、いささかの揺るぎもない落ちついた態度でこゝろ答えた。

「まるで意張っているようよ！」リザヴェータ・プロコフィーヴナは飛び上らんばかりになつて、こゝろ叫んだ。

「不東者でして、全く不東な！」とレーベジェフは呟いて、自分の胸を叩きながら次第に頭を下げた。

「おまえが不東者だつて、わたしの知つたことじやないよ！この男は『不東者』だとも言えば、それで済むと思つてる。それに公爵、あんたはこんな連中と交際して、もう一度言つて置きますが、恥かしくはないの？ もう決して赦しませんよ！」

「公爵はわたしを赦して下さいませう。」レーベジェフは確信と感動とを籠めてこゝろ言つた。

「ひたすら高潔な氣持から、」不意に駆け寄つて來たケルレルはリザヴェータ・プロコフィーヴナに面と向つて響き渡るような大聲をあげてこゝろ言つた。「奥さん、苦境に陥つた友人を裏切るまいとして、ひたすら高潔な氣持のためにあなたが御自分でもお聞きになつたように、僕は、この男が僕らを階段から突き落すなんかと言つたにも拘らず、さつきはこの訂正の事實をかくしていたのです。しかし本當のことを明らかにするために申しましたが、僕は六留でこの男に頼んだのです。しかし、それも決して文章を直すためではなく、主として僕の知らない事實を教えて貰わんがためです。その方の事情に通じている人間として、この男にたのんだ次第です。ダ

「おまえさんは、何だつてわたしを笑ひ者にしようとしてこゝへ引き止めたの！」

「とんでもない、」とイッポリットは歪んだような、薄笑いをうかべた。「しかしリザヴェータ・プロコフィーヴナさん、僕は何よりもあなたの恐ろしく突拍子もないのは驚ろいてしまいました。僕は實のところ、レーベジェフのことがあなたにどれ位、效き目があるか知りたと思つて、わざと、あなたを引きとめたんですよ。あなた一人が目あてです。なぜつて、公爵はきつと赦して下さいさと思つたからです。どうです、公爵は本當に赦して下さいさ。……若しかしたら、言い譯の言葉まで考えていらつしやるかも知れませんよ。ねえ公爵、それでしよう？」

彼は息を切らしていた。その奇怪な興奮は一言ごとに亢まつて行つた。

「それで？……」彼の調子に驚きながらも、リザヴェータ・プロコフィーヴナは腹立たしそりにこゝろ言つた。「それで？」

「僕はあなたのお噂をいろいろ聞きました。これに似たようなことを……大へん愉快に……あなたを御尊敬するようになりました。」とイッポリットは語り續けた。

彼は、こゝろは言つているものの、これらの言葉で、全く別な意味を表わそうとしているかのようであつた。彼の言葉には嘲笑的な調子がこもつていたが、同時にそれとは似てもつかないような深い眼ざしで周囲を見廻し、うろたえて言葉をつまらせる様子が著しく目についた。凡てこゝろしたこと

は、その肺病患者らしい顔つきと、異様な程にぎらぎらと輝

いたルのことにしても、瑞西の先生のところでの大食のことに就いても、二百五十留の代りに五十留としたことも、要するに、そうした組み合せはみんなこの男が六留でやつたことです。文章は直しやしなかつたんです。」

「わたしは注意しとかなきやなりません。」と次第に笑い聲が昂じてゆく中で、熱病やみのようにいらいらして、どことなく、のろのろした聲でレーベジェフは彼を遮つた。「わたしは直したのは、ただ前半だけで、真ん中ごろまで來た時、ある點で意見が合わないで口論をして、わたしは後の半分は直さなかつたんです。だから、あの中の成つてない所は（あの文章は全く成つちや居らんなあ！）決してわたしの責任じゃござんせん……」

「この人がやきもきするのはそれ位のところだよ！」と、リザヴェータ・プロコフィーヴナは叫んだ。

「一寸お訊ねしますが、」とエツゲニイ・パーヴロキッチがケルレルの方を向いて云つた。「記事を訂正したのはいつですか？」

「昨日の朝でした。」と、ケルレルが報告した。「僕らはその時、互いに堅く秘密を守るといふ約束をしたんです。」

「じゃ、この男があんたの前に匍いつくばつて、何事によらず、あんたのいうことを聽くつて誓つていた時分ですよ！ええ、何ていう人たちだろう！ おまえのプウシキンもいらなきや、おまえの娘も來て貰うのも止めます！」

リザヴェータ・プロコフィーヴナは立ち上ろうとしたが、不意にいらいらしたようにプーチーインの方を振り向いた。

やく、まるで前後を見失つたやうな眼ざしと共に思わぬ人々の注意を彼の上に引つと引きつけるのであつた。

「尤も、僕は世間知らずではあります（これは白状します）、それでも随分びつくりさせられましたよ。あんたが大膽にも僕らの仲間の中に残られて、しかもこんな……お嬢さん達までも一緒に残られて、こんな醜聞までもお耳に入らんのですからねえ。尤もお嬢さん方は小説の方でこんなことは疾つくに御承知かも知れませんが……なぜつて僕は少々あわてますからね……しかしそれは先ずどつちにしたつて、一體あなたの外に誰があるでしょう……こんな子供（え、僕は子供にちがひありません。又このことも白状しておきますよ。）の願いを聞き容れて、一緒に表で夜をすごされたり、何かと……世話をなすつたり……何かと……そして、翌くる日には恥かしい思いをするような人は……（尤も、僕も自分の言ひ方が間違つてゐることは認めますがね。）こゝろしたことを何もかも僕は非常に賞讃し、尊敬してゐます。だが、閣下の、あなたの御主人のお顔には、こゝろいうことはするもんじやないとはつきり書いてございます……ひ、ひ！」彼はすつかり狼狽して、卑屈な笑い方をしたが、俄かに唖込んでしまつて、二分間ばかりは言葉を續けることができなかった。

「息までつまつたよ！」とリザヴェータ・プロコフィーヴナは峻厳な好奇心を懷いて彼を見ながら冷やかな鋭い調子でこゝろ言つた。「さあ、いい子だから、もうお終いにおし。遅くなつたから！」



「君、失禮ながら、わたしの方からも一言、御注意しておきます。」と遂に我慢しかねて、イワン・フォードロキッチはいらいらした調子で、いきなりこう言い出した。「家内がこうしてここに居るのは、レフ・ニコライキッチ公爵がわれわれ一同の親友であり、お近所の方であるからです。それに又、いずれにしたところで、君のような若造が、リザヴェータ・プロコフィエヴナのすること爲すことをかれこれ批評したりわしの顔に書いていることを、面と向つてとやかく言うのは生意氣だ。全く。それに、家内がここに居残つたのは、一言一言に憤激を新にしながら、將軍は語り續けた。「君、手つとり早く言うと、驚ろいたのと奇妙な若い連中を見ようつていう誰にもよく分かる極めて現代的な好奇心からなんです。わしが残つたのは、時々往來に立ち止まることがあるのと同じ氣持からです。つまり、何か一寸目につくものがある時、その……その……その……」

「珍らしいものでしょう。」とエツゲニイ・パーヴロキッチが口を入れた。

「いや全くその通り、」と、少々譬喩の言葉に困つて居る閣下は大いに悦んだ。「まつたくその珍らしいものを見るようなもんですよ。しかし、文法的にこう言いうるならば、わたしには何よりも驚くべきことで悲しむべきことであつたのです。リザヴェータ・プロコフィエヴナがここに居残つたのは君が病氣で——もし君が死にかかつて居るというのが實際のことであるならば——つまり君のあわれつばい言葉に同情したからだといふことが君みたいな若い人が氣づかれなかつた

る。  
「僕はまだまだあなたは伸びられる方だと思ひましたよ……」とイッポリットは物思ひから覺めて再びこう言い出した。「そうだ！僕はこういふことを言う心算だつたんです。」不意に何を思ひ出したように彼は悦ばしそりに叫んだ。「それから、ブルドフスキイは心の底から母親は庇おうとしたが、結局は母親を恥かしめることになつたでしょう。それに公爵も清い心からして、ブルドフスキイに優しい友情と、莫大な金を提供されようと望まれたのです。我々のうちの唯一人として、公爵に嫌惡の念を懷いているものはありません。それなのに、この二人は眞實の敵味方のような立場に立つてしまいました……は、は、は！あなた方はブルドフスキイが自分の母親を汚し恥をかかすやうな事をするなんてお考えになつて、あの男を憎んでいらつしやる。ね、そうでしょう？　そうでせう？　そうなんでしょう？　あなた方は恐ろしく綺麗事とか、優雅な形式とかを好んでいらつしやるんじゃないやありませんか。そればかりを主張していらつしやるじゃありませんか。それに違ひないでしょう？　（僕はずつと前からそれだけだと思つていましたよ。）え、皆さんのうちの誰だつて恐らくブルドフスキイほど自分の母親を愛する人はないでしょう！公爵、僕は知つていますよ。あなたはこつそりガネチカの手からブルドフスキイのお母さんにお金を贈られたでしょう。ところで僕は誓つて言いますが、今度はブルドフスキイが、形式の纖細さがなくとか、母親に對する尊敬がないとか言つて、あなた方はきつと笑つていますよ、ええ、勿論ですとも、

こと、それが兎に角、わたしには何よりも驚くべきことで悲しむべきことであつたのです。又どんなことがあろうとも妻の名譽、性質、品格に汚名をきせることは絶対にできないことです……リザヴェータ・プロコフィエヴナ」將軍は顔を眞赤にしてこう言葉を結んだ。「おまえ出かけるのだつたら、公爵さんにお暇をなさい。そして……」

「御教訓を感謝いたします、將軍。」イッポリットは物思わしげに彼を眺めながら、思いがけなくも眞面目な調子でこう言つた。

「行きましょう、ママ、まだなかなか暇がとれそうだわ！……」とアグラレーヤは椅子から立ちあがりながら、いら立たしげに、腹立しげにこう言つた。

「あなた、イワン・フォードロキッチ、お願いですから、もう二分ほど待つて下さい。」とリザヴェータ・プロコフィエヴナはいかめしい態度で夫の方を振り向いた。「何だかこの人はすつかり熱に浮されてうわごとを言つて居るようです。あの眼を見れば分かります。このままうちやつて置くわけには行きません。レフ・ニコライキッチ！　この人をあなたのところ泊めて戴けますか！　今晚ホテルブルグへ連れて行く譯にはゆきませんからね。Cher Prince ねえ、あなた、お 退屈しやありませんか？」と夫人はどうしたことか、いきなり公爵の方を振り向いた。「アレクサンドラ、ここへいらつしやい。髪を直さなくちやいけませんからね、さあ。」  
彼女は直すところなどは少しもない娘の髪を直してから、接吻をしてやつた。ただこのために彼女は娘を辱んだのである。

彼はははは……

彼はははは……

「それでおしまいな？　もうみな言つてしまつたの？　それう、行つてお寝みなさい。お前さんは熱にうなされて居るんだから。」彼から心配そうな眼を離そうともせずリザヴェータ・プロコフィエヴナはいら立たしげにこう言つて遮つた。

「まあ、どうしたことですか！　お前さんはまだ喋つて居る！」  
「あなたは笑つてらつしやるようですね？　どうして、僕を笑うんです？　僕にはちやんと分かつてますよ。あなたは僕のことを笑つていらつしやるんです！」彼は不安な、苛立たしそふな態度で不意にエツゲニイ・パーヴロキッチの方を向いてこう言つた。

こちらは實際に笑つていたのである。

「僕はただ君にお訊ねしたいと思つたまでなんですよ……イッポリット君……失禮しました、僕はあんたの苗字を忘れちやいました。」

「チェレンチェフ君です。」と公爵が言つた。

「あ、チェレンチェフでしたか、公爵、ありがと。さつき聞いたんですけれど、つい慌ぬけになつてしまつて……チェレンチェフ君、僕は君にお訊ねしたいんですが、實は僕が聞いたところでは、君が十五分ばかり窓のところで群集と話をしたら、みんなは何もかも賛成した、早速君の後からついてゆくと言つたとかいふ御意見のようでしたが、あれは本當ですか？」

「そう言つたでしょう。大いにそうかもしれませぬ……」



と、イッポリットは何か思い出したようにこう答えた。「え、きつと言つたに相違ありません！」と、彼は再び元氣づいてエツゲニイ・パーヴロキッチをきつと見つめながら、不意にこう言つた。「一體それがどうしたというんです？」

「いや、別に何でもありません。僕はただ念のために知つておきたいと思つただけです。」

エツゲニイ・パーヴロキッチは口を噤んだが、イッポリットはじれつたそりに待ちうけながら、やはりじつと相手を見つめていた。

「さあ、どうしたの。濟ましたか？」とリザヴェータ・プロコフィーヴナはエツゲニイ・パーヴロキッチの方をかえり見た。「あなた、早く濟ましておしまいなさい。この人はもう寝なきやならない時分です！ それとも二の句がつけないの。」

彼女は恐しく氣短かになつていた。

「僕は實に附け加えたくつてしようがないんです。」とエツゲニイ・パーヴロキッチは笑いながら續けた。「チェレンチエフ君、君の友人諸君から聞かされたこと、それから君が今あんなに辯舌あざやに述べられたこと全部を綜合して考えると、僕の見るところでは、一つの權利謳歌の理論に歸着するようですね。しかも何もかもさし置いて、何もかもよそに見て、何もかもそのほかのものは除外してまで、更に事によつたら權利そのものがどこに存在するかの研究も後にして……ひよつとすると僕の勘違いでしようか？」

「勿論、勘違いですよ。僕にはあなたのおつしやることか否

「しかし僕はあなたを怒つてる譯じやありませんよ。」と全く思いがけなく不意にイッポリットは斷言して、微笑みをさへも浮べて、殆んど無意識に手を差し出した。

エツゲニイ・パーヴロキッチは初めは一寸びつくりしたが、極めて眞面目な態度で自分の方へ差し出した手に觸つた。まるで詫びを聞き届ける時のような風をして。

「僕はもう一つ附け加えずには居られません。」相も變らず曖昧な、しかも恭々しげな調子で彼はこう言つた。「君が僕の話の最後まで聞いて下さつたその御注意の程を感謝いたします。というのは、僕が幾たびとなしに觀察した經驗に徴しますと、我が國のリベラリストという輩は誰かが何か独自の信念を持つていて、それを大目に見ることができず、早速、自分の論敵に悪罵をもつて應酬し、或いは何かもつと卑劣な手段で報いられないで済まさないからです……」

「成程、それは全く君のおつしやる通りです。」とイワン・フョードロキッチ將軍がいつた。そして兩手を後ろに組み合わせる、實に退屈で堪らないというような顔をして露臺の出口の方へ身を引いて、忌々しそりに欠伸をした。

「さあ、もうあなたの話は澤山です。」いきなりリザヴェータ・プロコフィーヴナは頭ごなしにこう言つた。「あなたの話にはうんざりしました……」

「もう遅くなつた！」とイッポリットは心配そうに、殆んど驚ろいたかのようにこう言つて、俄に立ち上つたが、氣が氣でないらしくあたりを見廻し、「あなた方をお引きとめてしてしまいましたね。實は何もかも申し上げたかつたのです……」

みこめない位です……それから？」隅の方でも不平を漏らす聲が起つた。レーベジェフの甥は何やら低い聲で呟いた。

「もうそれ以上いうことは殆んどありません。」とエツゲニイ・パーヴロキッチが語をついだ。「僕が言つて置きたいのはただこういうことです。このことが直きに力の權利、つまりた單なる鐵拳や個人的欲求の權利にいきなり飛躍するかも知れないつてことです。尤も世の中のこととは大抵これで片づくんですけれどね。ブルードンも力の權利を主張してしましたからね。亜米利加戰爭の時でも、最も進歩的な多くのリベラリストが移民の權益保護のために、黒人は黒人で、白人よりは下に立つべきものだ、従つて力の權利は白人のものだ……と、こんな意味のことを宣言しましたからね。」

「それで？」

「つまり、それだから君は力の權利を否定しないのでしようね？」

「それから？」

「君もなかなかの理窟屋ですね。僕が言いたいのは力の權利つていうものは虎や鰐の權利、ダニイロフやゴルスキイの權利とさえもあまり縁が遠くないつてことです。」

イッポリットはエツゲニイ・パーヴロキッチの言うことを殆んど聞いていなかった。「それで」とか「それから」とか言つてゐるのは、寧ろ會話の場合に古くから馴れ切つた習慣のためであつて、決して好奇心をもつていたり注意を向けてゐるからではないらしかつた。

「もうその先は何もありません……これでおしまひです。」

僕は思つていたので、あなたが沈黙さんが……これを最後として……しかしそれも僕の幻想でした。」

どうやら、彼は發作的に元氣つき、ほんの一寸の間、本物の幻覺のような状態から、意識を完全に呼びかえして、様々のことを不意に思い出しては語つてゐるやうであつた。尤もその話は大いには斷片的なもので、それも恐らくは、ただ獨り病床にあつて、寝つかれぬ夜長のつれづれなるままに、かなり前から思いついて、ついに案じていたものらしかつた。

「では、さよなら！」と彼は不意に鋭い聲で言つた。「あなた方は、僕にすらすらと譯もなくさよならが言えると思ひですか？ は、は！」と言つて彼は自分の不器用な質問を忌々しげに嘲笑するのであつた。そうかと思ふと不意に、言いたいことがどうしてもうまく出て來ないので業を煮やしたやうに、いら立たしげに聲高く言い出すのであつた。「閣下……僕にそれだけの價值があると思ひでしたら、まことにここがましい次第ですが、僕の葬式に立ち會つていただけませんか？ でしょうか……ねえ皆さん、あなた方も將軍に續いて……」

彼は又もや笑い出した。しかしこれはもう狂人の笑いであつた。リザヴェータ・プロコフィーヴナはびつくりしながら彼の方へ近づいてその手を掴んだ。イッポリットはやはりその笑顔のまま、じつと彼女を見つめていた。しかもその笑いには前から續いてゐるのではなくて、顔に凍りついたまま残つてゐるものようであつた。

「あのね、僕がここへ來たのは、樹木を見るためなんです



よ。それ、あれです……(彼は公園の樹立を指さした。)おかし  
しいじやありませんか？ 何もおかしいことはありませんか  
？」彼は眞面目な調子でリザヴェータ・ブロコフイーヴナに  
訊ねたが急に考え込んでしまった。やがて一分も経つと頭を  
あげて、一心にきよきよきよと一同の中を探しはじめた。

彼は右手のすぐそばの以前の場所に立つているエヴゲニ  
イ・パーヴロキッチを探していたのである。彼はそれを忘れ  
てあたりを探しているのであつた。「あ、あなたはまだいた  
んですか！」と彼は遂に探し出した。「あなたはさつき、僕  
が窓のところまで十五分ばかり喋ろうとしていたのを、しきり  
に笑つてましたね……あのね、僕は十八の子供じやないん  
ですよ。僕は永いこと枕の上に寝つづけて、永い間その窓の外  
を眺めて、永いこと考えていたんです……あらゆることを……  
……あの……。死人には年がないつてことを。あなたは御存じ  
でしょうね。僕は先週、夜中にふと眼がさめた時そんなこと  
を考えたのです……。あなたは何を最も怖れているのか。御  
自分でお分かりですか？ あなたは僕らを軽蔑していらつし  
やるけれど、僕らの誠實なものを何よりも一番怖れていらつし  
やるんですよ！ 僕はそのこともやはりその晩、寝ていて考  
えたのです……ねえリザヴェータ・ブロコフイーヴナさん、  
僕がさつきあなたのことを笑おうとしたなんて、そんなこと  
を考えていらつしやるんですか？ いいえ、僕はあなたのこと  
とを、笑つたりなんかしません。ただあなたを讚美しようと思  
つたのです……。コオリヤが言つていましたが、公爵があなた  
を子供だつて仰つしやつたさうですね……それは大出来で

ガ・エータ・ブロコフイーヴナは殆んど慄ましそりに言つた。  
「明日は新しいお医者さんが来ますよ。前の医者は診察を誤  
つてたのです。さあ、かけなさい。足もとがふらふらしてる  
じやないの！ うわごとばかり言つて……ああ、この人を  
一體どうしたらいいんでしょう！」と彼女は、はらはらしな  
がら彼を安樂椅子に坐らせた。

彼女の頬には微かな涙が光つた。  
イッポリットは胸を打たれたように立ち止つて、片手をお  
ずおずと差し伸し、この涙に觸つた。彼はどことなく子供ら  
しい微笑みを浮べた。

「僕は……あなたのことを……」と彼は嬉しそりに言い出し  
た。「あなたはお分かりにはなりませんまいが、どれほど僕が  
あなたのことを……この人はいつも僕にあなたのことを夢中  
になつて話して聞かせたんです。ほら、この人コオリヤです  
……僕はこの人が夢中になるのが好きでたまらないんです。  
僕はこの人を墮落なんかさせやしません……僕はこの人  
人を後に残して行かなければなりません……僕はみんなを打  
つちやつて行こうと思つていました。——けれど、そんな人  
は一人もいませんでした。誰もいなかつたのです……僕は事  
業家になりたいと思ひました。僕はその権利をもつていまし  
た……ああ僕は何ていふことを望んだのでしょうか！ 僕  
は今ではもう何も望みません。何も望もうとは思ひません。  
僕はもう何も望まないと自分の心に誓つたのです。僕なんか  
いなくなつて。他の人が眞理を探求してくれるでしょう！  
それにしても。自然は皮肉なものだ！ 何だつて自然は「彼は

す……そらだ。ええと、僕はどうしたんだろう……まだ何か  
言いたいことがあつただけ……」彼は両手で顔を蔽つて  
考え込んだ。

「あ、そらだ。さつき、あなたが、さよならつて仰つしやつ  
た時、ああ、ここにこんな人たちがいるが、みんなやがては  
亡くなつてしまふ。永久に亡くなつてしまふ！ こんなこと  
を僕は不意に考えたのです。それからこの木立もやはり同じ  
ことだ。——あとには煉瓦の壁が……僕の窓の眞向にある  
……マイエルの家の赤い壁ばかり……さあ、あの連中にと  
んなことをすつかり言つてみる……。試しに言つてみる。ほ  
ら、美人がいる……それなのに、おまえは死人じやないか。  
死人だといつて自己紹介をしる。「死人は何んでも言えるん  
だ。」つてさう言つてみる……公爵夫人マリヤ・アレクセーヴ  
ナは咎めはなさるまいつて、そう言え。は、は！……あな  
た方は笑つていらっしゃるじやありませんか？」彼は訝かしげに周  
圍を見廻した。「あのね、寝ていると、いろんな考えが浮ぶ  
んですよ……それで、僕は自然は皮肉なものだと確信したの  
です……あなたは先刻、僕のことを無神論者だとおつしやい  
ましたねえ。ところがこの自然は……何だつてあなた方はま  
た笑うんです？ あなた方は恐ろしく残酷ですねえ！」と彼は  
周圍を見廻しながら、突然、悲しそうな憤りの聲をあげた。  
「僕はコオリヤを墮落させはしなかつたですよ。」不意に思  
ひ出したような、今までと全く違つた眞面目な自信ありげな  
調子で彼は言葉を結んだ。「誰一人、ここでおまえさんを笑  
つてる人はいないんだから、氣を落ちつけないよ！」とリザ

急に興奮して言葉を吐いた。「何だつて自然は後になつて冷  
笑を浴びせかけるつもりで、最も優れたものを創り出すので  
しょうね？ 自然はこの世において完全なものと認められる  
唯一の人間をつくつた……さういう人間を人に示して置きが  
ら、流血の惨事を惹き起すようなことを、必らず口にするよ  
うにその人間を運命づけているのです。しかも、若しその血  
が一時に迸り流れたならば、人々はきつとむせかえること  
でしょう！ ああ、僕が死ぬのはいいことなんだ！ 僕もまた  
生きていたら、恐らく何か恐ろしい嘘を言うにちがひありま  
せん。自然がそんな風に、仕向けるでしょう！……僕は、  
誰も墮落なんかさせやしません……僕はただ凡ゆる人の  
の幸福のために、眞理の發見と普及のために生きていたかつ  
たのです……僕は窓からマイエルの壁を眺め、ほんの十五分  
間ばかり話をして、あらゆる人を説き伏せようと考へまし  
た。そして一生にただ一度、共鳴しました……それもあらゆる  
人とはなく、あなたとでした！ 一體、何の得るところ  
があつたか？ 何もありません！ ただあなたに輕蔑される  
ことになつただけです！ つまり、僕は馬鹿なんです。つま  
り、餘計者です。つまり、潮時が来た譯です！ しかも何一  
つ思い出となるようなことも残すことができなかった！ 音  
もなく足跡もなく、何一つ成しとげた事もなく、何か一つの  
信念を普及することもなく！……この馬鹿者を笑わないで  
下さい！ 忘れて下さい！ 何もかも忘れて下さい……後生  
ですから忘れて下さい。そんなに残酷にならないで下さい！  
實はねえ、僕はこんな肺病患者にならなかつたら、自殺でも



していた筈ですよ……」

彼はもつと色んなことが言いたそうであつたが、言い切らずに安樂椅子にどつかと身を投げ出し、両手で顔を蔽つたまま、小さな子供のようには顔を立てて泣き出した。「まあ、一體この人をどうしろつておつしやるんですか！」リザヴェータ・プロコフィエフナはこう叫んで、彼の傍に駆け寄り頭を掛けて、しつかりと自分の胸に抱きしめた。彼はしやくりを上げて睨り泣くのであつた。「さあ、さあ！もう、泣くのはおよし。もう澤山だよ。お前さんは本當にいい子なんだよ。神様もお赦しになりますよ。お前さんは無學なんだから。さあ結構。男らしくなさい……それにお前さん恥かしくなりま

すよ……」  
「僕はあそこね」とイッポリットは一生懸命に頭をもたげようとしながら言い出した。「弟と妹たちがいるんです。まだ小つちやくつて、可哀そうな、無邪氣な子供たちです……あの女がこの子たちを墮落させるんです！聖母のようなあなたは……御自分がまだ子供なんですから、——あの子たちを救つてやつて下さい！あの女は……恥かしい……ああ、あの子たちを助けて下さい。助けてやつて下さい。神様が百倍にして御恩は返して下さい。お願いですから、後生です……」  
「もう何とかおつしやつて下さい。イワン・フォードロキッチ、一體どうしたらいいんです！」と、堪りかねたようにリザヴェータ・プロコフィエフナは叫んだ。「後生ですからそ

「よろしかつたら、あなた方も残つてはいかがですか。」と公爵は言った。「場所はありませんから。」

「閣下。」思いがけなくもケレル君がこう言つて、感激したように將軍の傍へ駆け寄つて来た。「今晚の看病に適當な人間が必要でございましたら、僕は友人のためにいさぎよく犠牲になりましょう……あの男は實に氣だてのいい奴です！閣下、僕はかなり前からあの男を傑い人間だと思つて尊敬して居ります！勿論、僕は教養の點では浅い人間です。しかしこの男の方は何か批評でもさしたら、正に眞珠です。一言一句これみな眞珠のこぼれ散る感があります。閣下……」

將軍はがっかりしたように顔をそむけた。  
「どうしたつて汽車に乗れる譯はありませんからあの人に泊つて戴けるのは大變うれいのです。」リザヴェータ・プロコフィエフナのいら立たしい問いに答えて公爵はこう説明した。  
「まあ、おまえさんは居睡りでもしているんじゃないの？あんたが厭やだつて言うのなら、公爵はわたしが家へ連れてゆきますよ！まあ、この人までが倒れそうになつてる！あんたは鹽梅でも悪いの？」

リザヴェータ・プロコフィエフナはさつき公爵が瀕死の病床に臥していないのを見た時、その顔つきから察して公爵の健康をあまりよい方へ誇張して考え過ぎたのである。しかしつい先程までの病氣、それにつき纏ふ重苦しい回想、今宵の數々の氣苦勞から來た疲勞、「バヴリシチェフの息」事件、今のイッポリットの事件、——こうしたすべてのことが一しよになつて、病的な公爵の感受性を、殆んど熱病的な状態に

の鹿爪らしい沈黙をよして下さい！あなたが何とか決めて下さらなければ、わたしは、ここで夜を明かしますから、それは承知して下さい。あなたはぜひぶん得手勝手な權力を振り廻してわたしをひどい目にあわせました！」

リザヴェータ・プロコフィエフナは興奮して夢中になり待つたなしの返事を待ち設けていた。しかし、こうした場合、（よし數人は多くとも）その場に居合す者は、かかり合いになることを怖れて、大抵は、沈黙と逃げ腰の好奇心をもつて應酬しておいて、後になつてから初めて自分の考えを述べるものである。この場に居合せた人たちの中には、一言も口を利かずに、朝まででも、じつとそのまま坐り込んでいそうなる連中もあつた。例えば、ワルワラ・アルダリオフナである。彼女はこの晩、少し離れたところに坐りつづけたまま、ずつと沈黙を守つて、異常な好奇心を懷きながら、ただひたすらに耳を傾けていた。しかし、それにも恐らく何か因縁があるのかもしれない。

「おい、僕の意見はだな」と將軍が口を切つた。「今さしあたつて必要なことといえは、我々が騒ぎ立てることではなくて、いわば寧ろ看護人なんだがな。それも氣のつく落つた人が泊つててくれると有難いんだが。それにしても兎も角、公爵と相談して……さつそく安靜にしてやらなければ……明日になつたら、また何とかお話に乗つてもいいだろう。」  
「あ、もう十二時だ。さあ出かけよう。イッポリットは僕らと一しよに行くんですか。あなたの所へ残るんですか？」ドクトレンコは氣短に、いら立たしうに公爵の方を向いた。

まで乗り立てたのである。しかも、その上、今、公爵の癖の中にはまだ何か別な懸念、むしろ危惧の念ともいふべきものが浮んでいた。公爵はイッポリットが何かやり出しはしないかと恐れるように、おそおそと彼を眺めた。

俄かにイッポリットは立ち上つた。その顔は歪んで、物凄いに蒼ざめ、絶望に近い羞恥の色が漂つていた。これは主として、憎々しげに臆病そうに一座の人々を眺める眸と、わなわな顫える唇のうえを匍い廻る弱々しい歪んだ微笑に現われるのであつた。彼はすぐに伏目になつて、微笑を浮べたまま、露臺の出口のわきに立つてゐるブルドフスキとドクトレンコの方へふらふらと近づいて行つた。彼はこの人たちと一しよに歸る心算なのである。

「あ、これだ。僕が危ぶんでいたのは！」と公爵は叫んだ。「てつきりこんなことだろうと思つて！」

イッポリットは狂氣じみた憎悪を浮べていきなり彼の方を振り返つた。その顔の筋肉が悉く顫えながら物を言つているように思われた。

「ああ、あんたはこれを危ぶんでいたんですつて！あんたが『てつきりこんなことだろうと思つた』んですつて！實はね、僕がここで誰かを憎んでいるとすれば、」と彼は口角泡を飛ばして、聲をからしながら金切り聲で喚き立てた。  
「僕はあなた方をみんな憎んでるけれど、それは、あなたなんです。面かぶりの、口さきのうまい人間、白痴の、百萬長者の慈善家のあんたを世界中の誰よりも最も憎んでるんです！僕はあんたの噂を聞いてゐた時分から、ちやんとあ



んたつて人間が分かっていたんです。そして憎んでいたんですよ。心の中のありつたけの憎悪を傾けて憎んでいたんです。……今夜のことも、あなたのたくらんだことです！あなたが僕に發作が起きるほどにしたんです！あなたは死にかかつている人間に恥をかかした！僕のさつきの馬鹿げた振舞いもあなたの罪です！僕が死なないで生きているのだつたら、あなたを殺してやる！あなたのお慈悲なんぞ、欲しくもありません。そんなものは誰からも貰いやしません。いいですか、誰からも何一つ貰いはしませんよ！僕はさつきは熱で夢中になつてゐたんだから、あなた方は今になつて威張ることなんぞはできないんですよ！……僕はあなた方を、永久に呪つてやります！」

ここまで来ると彼はすつかり息が切れてしまつた。「泣いたのが恥かしくなつたんですよ！」とレーベジェフはリザヴェータ・プロコフィーヴナに囁やいた。「つてつきりこんなことだろうと思つた」なんて、これはこれは公爵、なかなかの慧眼ですね……」

しかしリザヴェータ・プロコフィーヴナは彼に二瞥さえも與えなかつた。彼女は突つ立つたまま傲然と身を反らして、頭を後にぐつと引いて、輕蔑を含んだ物好きさうな眼ざしで、「この連中」を眺めてゐた。イッポリットの言葉が切れた時、將軍はちよつと兩肩を揺り上げたが、彼女は腹立たしげに、一體、その仕草は何と云ふことですか？と咎め立てるやうな風をして、將軍の頭の先から足の先までじろりと眺めまわした。が、すくなくには彼女は公爵の方に眼を直つて、

彼女が我を忘れてゐるようであつたが、公爵に顔を見る暇も與えず、素早く身を翻してしまつた。しかし、病人のイッポリットはどうかこうかにかして！みんなが辻馬車に乗せ込んでしまつたので、公爵にとつては今さら振り棄てる人もいなければ、振り棄てる物もなかつた。

「どうでしょう、イワン・フォードロキッチ、まだこんな事が長く續くんですようか？ あなたはどうお考えですか？ まだこの先長く、あんな憎たらしい小僧どもにやきもきさせられるんですようか？」  
「いや、おまえ、勿論、わしも覺悟はしてゐるし……公爵だつて……」

イワン・フォードロキッチも公爵に手を差し出したが、握る暇もなく、ぶんぶんしながら騒々しい物音を立てて靈臺を下つて行つたりザヴェータ・プロコフィーヴナの後を追つて駆け出した。アデライードと、その婚約の男、それにアレクサンドラなどは、愛嬌を見せて心から公爵に別れを告げた。エツゲニイ・パーヴロキッチもその中の一人であつた。彼は一人で愉快そうにしていた。

「筋書通りでしたね！ ただあなたまでが可哀そうに、辛い目に遭つたのはお氣の毒でした。」と彼は實に愛くるしい微笑を浮べて囁やいた。

「アグライヤは別れも告げずに歸つて行つた。」

しかし、この夜の出來事はこれだけでは濟まなかつた。リザヴェータ・プロコフィーヴナは更に一人、全く思いがけない人と邂逅して、苦しい思いを忍ばなければならなかつた。

「公爵、家の風變りな仲よしさん。結構な一晚を過ごさして下すつて、どうもありがとう。多分、わたしたちを、りまうまと、こんな馬鹿騒ぎに曳き摺り込んでやつたと思つて、とても嬉しいでしょうね……だけど、もう澤山よ。どうもありがとう。せめて、わたしに自分というものをよく見さして下すつたことだけでも忝けない次第ですわ！……」

「言い終ると彼女はぶりぶりしながら、自分の小さなマントを直し始めた。「あの連中」の歸つてしまふのを待つていたのである。間もなく、十五分ばかり前に、ドクトレンコが、レーベジェフの倅の中學生を呼びにやつておいた辻馬車が、「連中」のところへやつて來た。將軍も夫人の後をうけて早速、喉を入れた。

「公爵、僕は實際、まつたく思いもよらなかつたですよ……何しろ、あゝして親密な御交際を願つていた後ですからねえ……それに、とうとう、リザヴェータ・プロコフィーヴナも……」  
「まあ、どうして、まあ、こんなことになつたんですようね！」と叫んで、アデライードは素早く公爵に近づいて、握手を求めた。

公爵は途方に暮れたやうに彼女に微笑みかけた。途端に焔のように性急な、早口な囁やきが彼の耳を燒きつけたやうな氣がした。

「若し今すぐにも、あなたがこの汚らわしい連中を振り棄ててしまわなければ、わたしは生涯、一生誰あなた一人を憎みつづけます！」アグライヤの囁やきであつた。

彼女はまだ階段を下りて往來（公爵の周囲を取巻いてゐる）へ下り切らぬ中に、二頭の白馬に曳かせた駟馬はかりに素晴らしい馬車——輓馬車が、不意に公爵の別荘の傍を駆け抜けた。馬車の中には二人のあてやかな貴婦人が坐つていた。しかし十歩とも駆け抜け抜けない中に、馬車はびたりと止まつた。婦人の一人はまさしく、どうしても見すごしならぬ人の姿を眼にとめたかのように素早く後ろを振りかへつた。

「エツゲニイ・パーヴロキッチ！ あなただつたの？」と不意に透き通るやうな美しい聲が響いた。この聲を聞いて身顫したのは公爵の外にもう一人あつたらしい。「まあ、わたしすつかり嬉しくなつちやつたわ。とうとう探し當てた！ わたしあなたのためにわざわざ町に便をやつたのよ。二人も一日じゆうあなたを探していたんだわ！」

エツゲニイ・パーヴロキッチは雷に打たれたやうに、階段の中途に立ちどまつてしまつた。リザヴェータ・プロコフィーヴナもその場にじつと佇んでいたが、それはエツゲニイ・パーヴロキッチのやうに恐ろしさに茫然としたのではなかつた。彼女は五分間まえ、「あの連中」を睨みつけた時と同じやうに、傲然として冷やかな輕蔑の眼、この傍若無人な女を見つめたが、忽ちその落ちつき拂つた眸をエツゲニイの方へ移した。

「随分お久しぶりだわね！」と透き通るやうな聲が續いた。

「クプロフの手形のごとは安心していらつしやい。わたししが説き伏せてラゴージンに三萬留で買わせましたから。三ヶ月の間は安心できてよ。それからビスクープやらその外の



やくざ者の方は、知合いの間柄だからきつとくましくゆくでしようよ！ まあ、ざつとこんな風に萬事がうまく行つたの！  
じや、御機嫌よう。明日また！」

幌馬車は動き出し、間もなく消えうせた。

「あれは気がいだ！ 憤りのあまり顔を赧くして、訝かしげに周囲を見廻しながら、やつとのことでエズゲニイ・パーヴロキッチは叫んだ。「あの女の言うことは少しも分らない！ 手形つて何だろう！ 一體、あの女は何者だろう！」  
リザヴェータ・プロコフィヰナはまだ二秒ばかりじつと彼を見つめていたが急に身を翻して自分の別荘の方へ歩き出した。エズゲニイ・パーヴロキッチは、ちやうど一分してから、ひどく興奮の態で、公爵の立つている露臺へ引きかえし來てた。

「公爵、あなたはほんとうに、今のは何のことだかお分かりになりませんか？」

「さつぱり分かりません。」と公爵は答えたが、自分の心も並々ならぬ病的な緊張を續けていた。

「ほんと？」

「ええ。」

「僕も分からないのです。」と言つてエズゲニイ・パーヴロキッチは不意に笑い出した。

「ほんとにあの手形とか何とかには少しも關係がないでんです。ええ、決して嘘じやありません！ ……あ、あなたはどうなさいました。氣でも失いそうじやありませんか？」  
「おお、いや、大丈夫です。決して……」

……という公爵自身にとつての痛ましい疑問であつた。公爵は自分以外の誰がこの事件に罪があるのか、言い切らなかつた。N・F・Bの文字については、あれはただ無邪氣な悪戯、というよりは寧ろ、子供らしい悪戯で、これについて何かと考へめぐらすのは恥かしいことである、寧ろある點から見れば殆んど恥知らずのすることである、と公爵は考へていたのである。

とはいへ、自分が主なる「原因」となつて亂痴氣さわぎを惹き起した汚らわしい「晩」の翌くる朝、公爵はS公爵とアデライーダとの來訪に接した。二人は「主として公爵の體の調子を訊くために、二人きりの散歩のついでに立ち寄つたのである。その前にアデライーダは公園で一本の樹を見つけた。長い曲りくねつた枝がこんもりと茂つて、新緑に萌え、幹には洞や裂け目のある、珍らしい老樹であつた。彼女は是非ともそれを描いて見ようと考へた！ 殆んどこの話だけで訪問のまる半時間ばかりを過ごしてしまつた。S公爵は、いつものように愛想よく優しく公爵に以前のことを訊ねたり、二人が始めて近づきになつた當時を思い出したりした。こういう場合で、昨晚のことは一ことも話題に上らなかつた。しかし、遂にアデライーダは堪りかねて、微笑みながら、實は二人とも *incognito* 來たのだと告白した。告白はそれだけで終つたが、しかし *incognito* 來たということから察しても兩親、殊にリザヴェータ・プロコフィヰナが、何かしら特に不機嫌でいることが分かつた。夫人のことは勿論、アグライヤのことも、將軍のことさえも、アデライーダ

ようやく三日目になつて、エバンチン家の人々の機嫌が直つた。

公爵はいつものように多くの點で自分を責め罰せられることは心の底から覺悟をしていた。それにしても初めの間はリザヴェータ・プロコフィヰナが本當に腹を立てはしない、むしろ彼女は自分で自分に腹を立てたのだと確く信じていた。このように確執の期間が長びいたので、三日目になると公爵は極めて陰鬱な袋小路にでも踏み込んでしまつたかのような氣持になつた。それは種々の事情のためではあるが、わけても一つのことの主なる原因となつたのである。それがこの三日間に公爵の猜疑心のうちに段々と枝を擴げて行つた。（公爵は、ついこの間から、二つの相反した性癖のために、自分を咎めていた。それは人並はずれた「お話にならぬほど執拗な信頼心と、またそれと同時に、「暗鬱で愚劣な」猜疑心とであつた。）要するに、幌馬車の中からエズゲニイ・パーヴロキッチに話しかけた、あの奇矯な婦人の件が三日目ごろになつて氣味のわるい謎のように、彼の心の中に擴がつて行つたのである。この事件の他の方面には先ず觸れないこととして、この謎の本體は、この新たな「奇妙な出來事」について自分に確かに罪があるものであるか、或いはたゞ氣に

とS公爵はここへ來て一言も話さなかつた。そしてまた散歩に出かけて行く時にも、公爵と一緒に行くといふ言わなかつた。自分の家に来るようになどとは仄めかしさえもしなかつた。このことについては、アデライーダが極めて異色のある一言をもらした。自作のある水彩畫のことに話が及んだ時、彼女はいきなりそれを公爵に見せたいと言ひ出した。「どうしたら早くお目にかけるでしようね？ ああ、そうだと！ コオリヤが若し今日やつて來ましたら、持たせてよこしましやう。でなければ、明日またわたしはS公爵とお散歩に出るとき、持つて参りましよう。」と彼女は決めたが、今までの危惧の念を誰にも都合のいいように、巧く解決ができたのを喜んでいて大變嬉しそうであつた。最後に、別れの挨拶も殆んど済んだ時になつて、S公爵はふと思ひ出して、「あ、そうだつた。」と訊いた。「ねえ、レフ・ニコライキチさん、ゆうべ馬車の中からエズゲニイ・パーヴロキッチに聲をかけた婦人は誰だか御存じありませんか？」

「あれは、ナスターシャ・フィリップヰナです。」と公爵は言つた。「一體あなたは今まで、あの人が誰だか御存じなかつたんですか？ しかし一緒に乗つていたのは誰だか存じません。」

「噂で知つています！」と、公爵は相手の言葉を受けて、「しかしあの女が嗚鳴つたことは何の意味でしょう。正直のところを言いますと、あれは私にとつても、他の人たちにとつても大きな謎なんですよ。」

S公爵は、眼に見えるほど激しく驚ろいている様子であつ



「あの女は何かエツゲニイ・パーヴロキッチさんが出した手形のことを言っていたんです。」と公爵は極めて簡単に答えた。「それがどこかの高利貸の手に入っていたのをラゴージンがあの女に頼まれて引きとつて、エツゲニイさんのために延期してやることになつたと言つたのでしよう。」

「ねえ、公爵、それは聞きませんでしたよ。それは聞きましたがね。しかし、一體そんなことつてあるものでしょうか？ エツゲニイ・パーヴロキッチが手形なんか出す筈はないじやありませんか！ あれだけの財産家なんですからね……以前は浮氣のせいで、そんなことになつて、私が引き取つてやつたこともありませ……しかし、あれだけの財産家なのに、高利貸に手形を渡して、それがために心配しなければならぬなんて——ありよう筈がありません。それにあの男がナスターシャ・フリリッポヰナさんと、『あんた』なんかつていう口を利き合うほど親しい間柄にあるということもあり得ないことです。——まあ謎つていうのは主としてこのことです。あの男はさつぱり譯が分からないと言つていますが、私はそれを信じます。ところで公爵、私があなたにお訊ねしたいのは、この事で何かお耳に入つたことはないでしょうか？ つまり何かの風の吹きまわしで、せめて、あなたのところへでも、噂が傳つてやしないかと思つたのです。」

「いいえ、何も存じません。本當に、僕はこのことには何の關係もないのですよ。」

「ああ、公爵、あなたはどうなすつたんです！ 今日は何だ

……」  
S公爵は不意に再び黙りこんでしまつた。彼は明らかに、公爵に向つてナスターシャ・フリリッポヰナのことを話すのが厭だからしつた。

「して見ると、いづれにしても、あの人はエツゲニイさんの知合いという譯ですね。」ほんの一分間はかり口を嚙んでいたムィンキン公爵は不意にこう訊ねた。

「それはどうもそうらしいんです。何しろ浮氣な男ですからね！ しかし、それが實際だとしたら、かなり以前のことでしょう。まだあの以前、つまり、二三年前の前のことでしょうか。あの男はトッキーイとも知合いの仲なんですからね。それにしては現在あんた様なこととは決してある譯はないんです。『あんた』なんかつて呼ぶ譯はない筈です！ あなたも御存じの通り、あの女はずつと、こちらには、いなかつたんです。どこにもいなかつたんですよ。またあの女が姿を現わしたつてことは、大ていの人はまだ知らない筈です。私があつた馬車に氣がついたのは三日ほどで、決してそれ前のことじやありません。」

「美事な馬車ですわね！」とアデライドが言つた。

「ええ、美事な馬車です。」

二人は立ち去つたが、しかも二人はレフ・ニコライキッチ公爵に對しては、極めて親しい、打ちとけた、好意ともいへるべきものを寄せていた。

この小説の主人公にとつて、この訪問は非常に高價なといえる何ものかを含んでいた。公爵が昨夜以來（或はもつと

かいつもと違つた人のようですね。あなたがこんな事件に關係があるなんて果して、そんなことを僕が想像できるものですか？……まあ、今日はお加減が悪いんですね。」と言つて彼は公爵を抱いて接吻した。

「つまり、『こんな』事件に關係があるつて、一體どんな事件なんです？ 僕には『こんな』事件なんてものは、少しもさつぱり分かりませぬ。」

「たしかに、あの婦人は、他人のいる前で、エツゲニイ・パーヴロキッチの持つてもないし、また持つこともできないような性質を押しつけて、何かあの男の妨害をしようと思つたのに違いありません。」とS公爵はかなり無愛想に言つた。

レフ・ニコライキッチ公爵はときまぎした。しかしそのまゝ、訝かしげに相手の顔を眺めていた。が、相手もまた黙りこんでしまつた。

「でも、あれはただ手形だけのことじやないんでしょうか？ ゆうべのことは、文字通りに考へているんじゃないでしょうか？」公爵は遂に、何だか堪らなくなつたというような様子でこう呟やいた。

「だから私が言つてゐるじやありませんか。ご自分でよく考へてごらん下さい。エツゲニイ・パーヴロキッチと……あの女と、そのうえラゴージンとの間に、一體どんな關係があるものですか？ ようござんすか。も一度いつて置きますが、あの男の財産は素晴らしいものです。私にはよく分かつています。まだその外に伯父さんからも別に財産を譲りうけることになつてませぬ。ただナスターシャ・フリリッポヰナが

以前からかも知れないが、いろんな疑念を重ねたと限定しても、この訪問をうけるまでは自分の懸念を肯定する氣にはなれなかつたのである。しかし今は凡ゆることがはつきりして来た。勿論、S公爵はこの事件の解釋を誤つてはいるが、それでもやはり事實の周圍をうろつき廻つて、兎にも角にも、術策のあることを悟つてゐるのである。(尤も、心の中でははつきりと悟つてゐるのかも知れないが、ただそれをはつきりと言いたくないために、強いて間違つた解釋を下したのかも知れない。)と公爵は考へた。しかしここで何よりもはつきりしてゐるのは、あの連中が(とりも直さずS公爵が)何か事實をつきとめようとの下心で、自分のところへやつて来たというところである。まさしくそうだとすれば、きつと自分たはたしかに共謀者だと認められてゐるに相違ない。その上若しこれがそんな重大な事實であるとすれば、あの女には恐るべき目的があるにちがいない。とすれば、どんな目的であるるか？ 戦慄すべきことだ！ 『それなら、どうしてあの女を思いとどまらせたいのであろう？ あの女が自分の狙いを定めたとなると、どうしても思いとどまらせることは不可能だ！』それはもう公爵が今までの經驗でよく知つてゐることである。『まるで氣ちがいだ！ 氣ちがいだ！』

しかし、この朝は、このほかに様々な解決のつかないこととが餘りに、餘りにも簇々と起つて来て、それが殆んど同時に、即決を迫るので、公爵はかなり憂鬱になつてゐた。多少とも氣を紛らわしてくれたのはヴァーラ・レーベジェフであつた。彼女は赤ん坊のリー・ポチカを抱いて来て、笑いな



長いこと何かしら話して行つた。それと入れ代りに妹が口を開けてやつて来た。續いてレベージェフの息の中學生が遊びに来て、父の講釋では、黙示録にある、この世の水上に隕ちた『苦蓬星』は、歐羅巴中に散布している鐵道網なのだ。うだ、とこんなことを言つた。公爵にはレベージェフが、そんな講釋をするとは受けとれなかつたので、今度いい折を見て當人に會つてはつきり訊いて見ようと考へた。ヴェーラ・レーベージェフから公爵が聞いたところではケルレルが昨夜以來この家に入り込んで、いろんな様子から見ると、どうも當分は出て行きそうもないとのことであつた。それはここにいい相棒を見つけたからで、將軍とはかなり親密な間柄になつた。尤も彼の言い草では、自分の教養の補いをするために、ここに留まつているのだという。大體においてレーベージェフの子供たちは段々と日ごとに、公爵の氣に入つて来た。コオリヤは一日中、家を空けていた。彼は朝早くからベテルブルグに出かけていたのである(レーベージェフもまた何か自分の用で出かけた)。しかし公爵は、今日必らず自分のところへ來なければならぬことになつてゐるガニーニヤの來訪を待ちこがれてゐた。

彼は午後六時すぎ、食を終えたとすぐに訪ねて來た。公爵は彼を一目みて、この人は少くとも事件の内容を正確に知つてゐるに相違ない、それに、この人にはワルワラ・アルダリオ・ボヅナや、その亭主のプチーツィンのような立派な助手がついてゐるのだから、どうしたつて知らない筈はないと、そつういふ氣がした。しかし公爵とガニーニヤの關係は、いつも

しまつた。

ガニーニヤは、話をしてゐる中に、ナスターシャ・フィリップボヅナはバゾロフスクに來てからまだ四日にしかならないのに、もうみんなから注目されてゐるという話をした。彼女は、マトロスヤ通りにあるダリーヤ・アレクサンドロヴナの極めて見すばらしい小さな家に暮らしてゐるが、老女のもつてゐる馬車はバゾロフスクといつてもいい位の美事なものであつた。彼女の周圍には、早くも後をつけ廻す老年青年が群れをなして集まり、時には彼女の乗つてゐる馬車の馬に乗つてお供をしてゐる人もあるという。ナスターシャ・フィリップボヅナは以前のように、好き嫌いがはげしくて、よくよく選んだ上でなければ自分の傍へ近づけないことにしている。しかもそれでも彼女の周圍には既に一小隊くらいの人が集つていて、いざという場合には充分その人たちで間に合ふとのことであつた。別荘ぐらしの人の中で、もう正式の婚約が出來てゐるといふ或る男は、ナスターシャのことがもとで、早くも自分の許嫁の娘と口論したとか、また、ある老將軍は自分の息子に向つて呪いの言葉を浴びせかけんばかりの劍幕になつたとか、噂はとりどりであつた。彼女はよく一人の美しい、やつと十六になつたくらい少女と一しよに馬車を乗り廻してゐた。この少女はダリーヤ・アレクセーヴナの遠縁の娘で、非常に唄が上手なので、その小さな家に毎晩、おもてを通る人が聞き耳を立てるといふ。それはそつうと、ナスターシャ・フィリップボヅナは極めて慎ましかに身を持して、衣裳も派手ごのみではなく、というよりは極めて

一種特別なものであつた。例えば、公爵は、彼にブルドフスキイの事件の處置を委任し、特にわざわざ彼に懇願したほどであつた。ところが、これほどの信頼を傾け、また以前の關係もあつたのにも拘らず、お互いに何も氣にすまいと決めてでもゐるような點が二三、いつも二人の間に残つていたのである。しかし公爵には時として、若しかしたらガニーニヤは自分の方から進んで、最も打ちとけた友人としての眞情を披瀝したいと望んでゐるのではないかと、そつう思われることもあつた。例えば、今も彼が入つて來るや否や、今こそ凡ゆる點において二人の間に張つてゐる氷を打ち砕くべき時が來たのだとガニーニヤが極めて強い信念を、懐いてゐるように思われるのであつた(しかし、ガニーニヤはせかせかしてゐた。それは妹のワリーヤがレーベージェフのところへ彼を待つてゐたからである。二人とも何かの用事で氣が急いでゐた)。

それにしても、ガニーニヤが、公爵の性急な質問や、ふつと思わず口をついて出てくる報告や、友情の吐露、そつうしたものを期待してゐたとすれば、これは勿論、彼の大きな思い違ひである。この二十分の訪問の間、公爵はずつと深い物思ひにさえも沈んで、殆んど茫然としてゐた。従つてガニーニヤが待ちに待つてゐたかすかすの質問、というより寧ろある重大な質問にも、とても出ては來なかつたのである。そこで、ガニーニヤはせいぜい辛抱して喋つて行こうと決心した。そつうしてこの二十分間というものは、彼は口を休める暇もなく、微笑みを浮かべながら、極めてあつさりした、たわいもないことを早口に喋りつづけて、ついに肝腎なことに觸れずに

優れた趣味が現われてゐるので、貴婦人たちは彼女の「趣味、美貌、幌馬車」を羨望してやまないという。

「昨日の突拍子もないいざこざは、」と、ガニーニヤは言つた。「勿論、前々からたくらんでゐたことで、そのことは考慮に容れる譯にはゆきません。あの女に何か言ひがかりをつけるには、強いて、あらをさがすか、それとも中傷するかしなければなりません。しかし、それもぐずぐずしてゐては駄目です。」と言つてガニーニヤは言葉を結んだ。彼は公爵がきつと、「どうして昨日のいざこざを前々からたくらんだことだなどと言ふか、又なぐずぐずしてゐてはいけぬのか?」と訊ねるだらうと當てにしてゐたのである。

しかも公爵はそのことについて何も訊かなかつた。エツゲニイ・パーヴロキッチの事については、ガニーニヤは別に何も訊ねられないのに長々と説明した。それも何という切つかげもないのに、不意に言い出したので、かなり妙であつた。ガニーニヤの意見では、エツゲニイ・パーヴロキッチはナスターシャ・フィリップボヅナを以前も知らなかつたし、今も彼女の顔をはつきり覚えてゐるかどうか頗る怪しいとのことである。なぜというのに、四日ほど前、散歩に出かけたとき、ある人から彼女を紹介されて、連れと一緒にほんの一度その家へ立ち寄つたことがあるに過ぎないからである。又あの手形のことややはりありやう筈のないことである。(ガニーニヤはこのことをはつきり知つてゐた)。エツゲニイ・パーヴロキッチの財産が莫大なるものであることは勿論のことである。「尤も領地の方の多少の仕事が、事實、幾分か亂脈にな



つてはいるが。』と言つて、この好奇心を煽る話題をガリーニは打ち切つてしまつた。ナスターシャ・フィリポヴナのことにについては、前に少し述べたこと以外は一言も口にはしなかつた。やがて、ガリーニに續いてワルワラ・アルダリオ・ヴナが入つて来た。彼女は一分間はかり腰を下ろしている間に（やはり訊ねられもしないのに）、こんなことを述べた。エヴゲニイ・パーヴロヴィチは今日か、或いは事によつたら明日の中にベテルブルグへ行く筈で、自分の夫（イワン・ペトロヴィチ・ブチーツィン）も同じくエヴゲニイ・パーヴロヴィチの用件でベテルブルグへ行く筈である。實際、何か事件が起つたらしい、とこう言つた。また彼女が實際に言ひ足したところによると、リザヴェータ・ブコフイ・ヴナは今日は非帯に機嫌が悪く、何より不思議なことには、アグライヤが家内中の人と口論したとのである。それも父親や母親とはかりではなく、二人の姉たちとさえも口喧嘩をしたという。『これは全く宜しくないことですね。』とワルワラは言つた。ほんの何気なくいつた風に、この最後の事實（公爵にとつては極めて意味深長な事實）を報告するとこの兄と妹は歸つて行つた。『パヴリシチェフの息』の件に就いてもまた、ガリーニは一言も口をきかなかつた。多分、表面だけの遠慮のためか、或いは『公爵の胸中を不憫に思つた』からであろうが。公爵は兎にも角にも彼の盡力によつて事件が片づいたことを改めて禮を述べたのであつた。

やつとこれで一人きりにして貰へたと、公爵は嬉しくてたまらなかつた。彼は書齋を下りて通りを横切り、公園に入つた。如何にして最初の一步を踏み出すべきか、ということをやつくり考へて、決めたと思つたからである。しかし、この『一步』はとくと考へるべきものではなく、あつさり決行すべき類いのものであつた。彼は俄かに、こんな事を何もかも、振り切つて、もとの道を引き返し、どこか遠い所へ行つてしまいたい、邊鄙な片田舎へでも行つてしまいたい、誰に暇乞いするでもなく、今すぐにでも飛び出してしまいたいと激しい欲望に驅られた。わずか二三日でもここにじつとしていたら、きつと抜き差しならぬように必らずこの世界へ永久に曳き摺りこまれてしまつて、この世界が自分の將來にふりかかつて来るだろう、とこう彼は豫感した。しかし、もの十分とも考へないうちに、彼は逃げ出すのは『不可能』だ、これは先ず以て自分が小心なためだ、自分の眼の前に問題が控えているのに、それを解決しないのは、少くとも、その解決のために全力を盡そうとしないのは、今の自分のなすべきことではないと決めてしまつた。こうした考へを懐いて彼は家に歸つて来たが、十五分とも散歩はしてゐなかつたのである。この時、彼は全く不幸な人間であつた。

きさうにはなかつた。ケルレルは、あれやこれやと實に長々と、とりとめもなく話したそうであつたが、やつと一言か二言いつたかと思つと、いきなり、結論へ一足飛びに飛んでしまつて、自分は『凡ゆる道徳の影』を見失つて（これは一に上帝に對する不信心にも、とづいたことであるが）、果ては泥棒をさへもするようになったと告白した。

あいつは悪黨だ！ ええ、全く！  
「あなたは一體、エメラルドを持つてらつしやつたんですか？」  
「どんなエメラルドを僕が持つてゐるとおつしやるんです！ ああ、公爵、あなたはまだ明るく無邪氣に、いわば田舎風に人生を見ていらつしやる！」  
ここに至つて、公爵は、哀れというよりは、寧ろ自分が恥かしくなつてきた。彼の心に『誰かの立派な感化力によつて、この人間を何かに育て上げることができないか知ら？』という考へが、ちらと閃いた。しかし自分の感化は或る理由によつて極めて不適當だと考へた。——これは謙讓の念からではなくて、物に對する特別な見方によるのである。いよいよ二人の話は調子づいて来て、別れるのがいやなくらいになつた。ケルレルは極めて穩やかな氣持で、こんな事がどうして話せるのか想像さえもつかないような事を告白した。新しい物語に移る度に、彼は胸の中は『涙で一ぱいになつてゐる。』と強く念を押すのであつた。それなのに彼の話しぶりには、自分のしたことを自慢でもしているような風で、それと同時にどうかすると、二人が氣ちがいのうに聲をあげて笑ひ出さずにはいられないほど可笑しい話をした。

「いや、このことは、あなたただ一人にだけですよ。ただ自分の發展を助けるためと思つて言うのです！ 他人には言うべきことじやありません。死ねばこの秘密は經帷子の下に一つんでゆきます！ しかし、公爵、あなた御存じないでしょうが、とても御存じないでしょうが、現代において金を儲けることは非常に難かしいですね！ どこで金が手に入るんだ。失禮ですがお教へ願ひたいですわね。いつも返事はただ一つです。『金か、ダイヤモンドを持つて来い、それを抵當に金を借してやろう。』つて。つまり僕の持つていないものばかりです！ あなたに、これが想像つきまじりか？ 僕は遂には腹が立つて、いつまでもいつまでもじつと、立つてました。『エメラルドを抵當に貸してくれませんか？』と訊くと、『エメラルドなら貸してやろう。』あ、それは結構だ。』と言つて、僕は帽子をかむつて外へ出ました。ちえつ、畜生

「僕は氣高い、氣高い、騎士のように氣高いんです！」とケ



ルレルは夢中になつて相槌をうつた。しかし、ねえ、公爵、こんな事は一切、心の中で考えているだけのことで、つまり空威張に過ぎません。實際問題となると決してこうは行かない！ どうしてこうなんでしょう？ 譯が分からない。」

「そう失望したもんじやありません。今、あなたは自分の秘密をすっかり僕に打ち明けて下さつたと、はつきり斷言できますね。少くとも僕には、あなたが今お話になつたことへ、この上もう付け加えることはできないようです。そうじやありませんか？」

「できない！」とことなく憫れむような聲でケルレルが叫んだ。「おお、公爵、あなたはそんなにまで、言わば、瑞西流に人間というものを理解なさるんですか？」

「じや、まだ何か付け加えることがあるとでもいうんですか？」

「おすおすとした顔つきをして、公爵は驚ろいたようにこつと言つた。「それでは、君は一體、僕から何を期待してたんですか。どうぞ仰つしやつて下さい。それから何のために僕のところに来て告白なんかなすつたんです？」

「あなたから？ 何を期待してたか？ まず第一に、あなたの淳朴な氣持に接するだけでも愉しいのです。あなたと膝を交えて語るのには愉快です。少くとも、今、僕の前にいるのは最も善良な人だつてことがよく分かりますからね……それから第二には……第二には……」

彼は言葉に窮してしまつた。

「多分、金を借りたいと思つたんでしよう？」と、公爵は非常に眞面目で素朴な、幾分、臆病そうな調子で囁やいた。

から、内面的にも、また外面的にも僕が涙に暮れながら（と）うとうと堪りかねて僕は聲をあげて泣いてしまつたんです。僕ははつきり覚えていますよ！、いよいよ寝つきやうとしたその瞬間に、『一つ、あの男から金を借りることはできんだらうか、告白をした後で。』という悪魔のような考えが浮んで来たのです。こんな譯で、僕は、いわば何かの『愁嘆場』みたいに告白の手筈を決めてしまつたのです。つまり、涙で路を滑りよくしておいて、あなたに同情の念が動き出した頃合に、百五十留ほどせしめようと思つたのです。あなたのお考えでは不束なことになりませんか？」

「だつて、それはきつと本當のことじやないんでしよう。それは別のものと偶然になつたんでしよう。二つの考えが一しよになる。それはよくあることです。僕はそれがしよつ中あるんです。それにしても、そんなことは宜しくないと思ひますね。それに、ねえ、ケルレル君、僕は何よりこの點で自分を責めてるんですよ。あなたは、丁度、僕自身のことを話したみたいですね。僕は、どうかすると、こんなことを考えることさえあるんですよ。」と、公爵は深い興味を覺えたかのように、非常に眞面目に熱心な態度で語り續けた。「人間は誰でもみなそうなんだと言つて、自分の行爲を是認しかかつたりするんです。というのは、この二重な考えと闘うのは恐ろしく困難なのですからね。僕には経験がありますよ。こいつが何處からやつて来るか、どうして生れるのかさつぱり分かりません。しかし、あなたは卑劣だと、きつぱり言われる！ そう言われると僕も亦この二重な考えが怖ろし

ケルレルは思わすぎくりとした。彼は以前のような驚ろきの様子を見せて、ちらりと公爵の眼をまともに眺めたが、すぐに拳で卓子を強く叩いた。

「ああ、これだな。こんな工合に、あなたは人をどぎまぎさせるんですね！ でも、公爵、冗談じやありませんよ。黄金時代にも聞いたことのないような、あんな淳朴な無邪氣な様子をなさつてゐるかと思つと、いきなりこんな深刻な心理觀察の矢でもつて人の心を、突き通されるんですからねえ。だが、失禮ながら、これには説明を要します。即ち、僕は……僕は……すつかり降参しました！ 勿論、僕の目的は歸するところ金を借りることなんです。しかし、あなたが金のことを見れば、それが當然のことだといふような風でしたね。」

「そう……あなたにしては、それが當然でしょう。」

「憤慨なすつていないんですか？」

「ええ……一體どうして？」

「ねえ公爵、僕が昨晩からここに居残つてゐるのは、第一に佛蘭西のブルダルウ大僧正に深甚なる敬意を表するためなんです（レーベジ、フのところまで三時まで栓を抜きましたよ）。」

第二に（僕の言うことが嘘偽りのないつてことは、あらゆる十字架にかけて誓います！）僕がここに残つたのは、あなたに心の底からすつかり告白して、自己の發展に役立たせようと考えたからです。僕はこうしたことを考えながら、涙を流して三時すぎに眠りに就きました。僕がその時この上もなく高潔な氣持だつたことは信じて下さるでしょうね。心の奥底

くやつて来る。だがいずれにしても僕はあなたの裁判官じやありませんよ。僕の考えるところでは、これを不束なことだと言つた下に片附ける譯には行きません。あなたはどうか考えますか？ あなたは涙で金を引きだそうなどと奸計をめぐらしつた。しかしそれにしても君の告白の中には外に高潔な、金錢以外のものがあつたと、あなたは現に自分の口で誓つたでしよう。さて、お金のことで、道樂に要るんでしよう。え、それならば、あんな告白をしたあなたとしては言うまでもなく、淺はかな考えですよ。暫らく道樂から身を退いてはどうですか？ これも駄目ですか。一體どうしたらいいんでしよう。もうあなた自身の良心に委せる以外に方法はありますか。あなたはどう考えますか？」

公爵は並々ならぬ好奇心を懷いてケルレルを眺めた。その様子から見ると、二重の考えの問題はかなり以前から彼の心を捉えていたものらしい。

「こんなあなたみたいな人を、どうして白痴だなんていうんだらう。さつぱり分らない！」と、ケルレルは叫んだ。

公爵は、微かに顔を赧らめた。

「ブルダルウ大僧正にしたところが、こんな奴を赦しはしなかつたでしょう。それなのに、あなたは僕を赦して人間的に裁いて下さつた！ 僕は自分に對する罰として、並びに僕が感動した印として百五十留は要りませんから、ただ二十五留だけ下さい。それで充分です！ それだけあれば、僕にとつて少くとも二週間は大丈夫です。二週間はないうちは、決してお金の無心になんぞ來ません。アガーシカの御機嫌をと



ろうと思つたんですが、あの女にそれだけの資格はありません。ああ、親愛なる公爵さま、神よ、爾に祝福を與えさせたまへ！」

「つい今、外から歸つて来たばかりのレーベジェフが、とうとう入つて来た。そしてケルレルの握つている二十五留紙幣を見つけると、ちよつといやな顔をした。ところが、金を手に入れたケルレルは、そそくさと逃げ出して、間もなく姿を消した。レーベジェフは早速、彼のことを誹謗し始めた。」

「あなたの仰つしやることは公平じゃありません。あの人は心から後悔しました。」堪りかねて公爵はこう注意した。

「それにしても、そんな後悔なんか何です？ 昨晚、わたしは申しましたと、まるで同じでございますよ！ 『不束者だ。不束者だ』と言つても、それはほんの口先のことです！」

「じゃ、あなたが、あのように言つたのは、口先だけのことで、ですか、僕はまた……」

「それでは、あなたお一人にだけほんとの事を申しましよう。あなたは人の心の底を見透しなさいませからね。言葉も、實行も嘘も眞實も、私の心の中ではみんな一緒になつていて、みんな本當なんです。眞實と行爲は、心から後悔した時に出て来るものでござんす。本氣になさろうと、なさるまいと、それは構いませんが、わたしは決して嘘は申しませんよ。だが嘘と口先は、何とかして人を騙してやろう、後悔の涙で泣き落してやろうと、まるで悪魔のような（誰にでもよくあることとござんすが）考えを起こした時に出て来るも

で。わたしが關係したというのが、つまり、ただわたくしの所へ今このような集りがあつて、その中には、これこれの人が居られますと、機會を見はからつて、あの方にお報せしただけのことです。」

「僕は、あなたが息子さんを『あそこ』へ使いにやつたのを知つていますよ。ちやんと本人からさつき聞いたんですから。しかしまあ、何ていう術策だらう！」と、公爵は堪りかねて叫んだ。

「それはわたくしの術策じゃござんせん。ちがいます。」と言つて、レーベジェフは兩手を振つた。

「他の人たちは、他の人たちです。それに、これは術策と申すよりは、寧ろいはば幻想とでも言いますものなんです。」

「だが、一體、ほんとうはどういうことなんです。お願いだから、説明して下さい。このことが、僕に直接關係があるつてことがあなたには、分からないんですか。それに、エヴゲニイ・パーヴロフさんの顔へ泥を塗つてるじゃありませんか。」

「公爵！ 公爵様」と言つてレーベジェフは又もや體をちぢめた。「あなたが本當のことをすつかり言わして下さい。さういふんじやありませんか。實の所、あなたに本當のことを申し上げようとしたのは一度や二度のことじゃござんせんよ。それなのに、あなたはわたしの話を終いまでお聞きにならなかつたのです……」

公爵は暫らく口を噤んで考え込んでいた。「ではよろしい、本當のことを言つて下さい。」と重々しい

のです。いや、全くのところ、そういつたような工合なんです。すよ！ 他の人間には決して言うことじやなかつたんです。言えば、笑うか唾を吐きかけるかするにきまつていますからね。だけでも、公爵は人間的に裁いて下さいますんで……」

「これはまあ、あの人も、たつた今、それとそつくりのことを言いましたよ。」と公爵は叫んだ。「それに、あなた方は二人ともまるで自慢でもなさるような恰好ですね！ あなた方には驚ろき入りますよ。あの人があなたよりずつと實直です。あなたはすつかり商賣みたいになつていますからね。いやもう結構、レーベジェフ君、そんな苦い顔をするのはおよしなさい。手を心臓のところへあてるのはおよしなさい。何か僕に言いたいことがあるんじやありませんか？ 譯もないのに来る筈もなし……」

レーベジェフは顔を歪めて、體をすくめた。

「僕は一つあなたに訊ねたいことがあつて、一日中、あなたの歸りを待つていたんですよ。ね、一生にたつた一度のつもりで、最初から本當のことを言つて下さい。あなたは昨晚の馬車の一件に多少關係があるんでしよう。それとも？」

レーベジェフは又しても顔を歪めて、ひひひと笑い聲をもらして、手を揉んだり、はては唾までして見せたが、それでもまだなかなか口を切ろうとはしなかつた。

「僕は關係があつたと睨んでますよ。」

「しかし、ほんの間接に、全くちよつと間接にばかり合つて居るだけで。わたしは實際、本當のことを申しつけて居りますよ。」

調子で言い出したが、それまでには心の中ではかなりのいざこざがあつたらしく見える。

「アグライヤ・イワノヴナさんが……」とレーベジェフは早速やり出した。

「お黙んなさい、お黙んなさい！」と公爵は狂おしげな聲で叫んだが、その顔は憤慨のためか、或いは羞恥のためであるうか、眞つ赤になつた。「そんな事がある譯はない。それはみんな出まかせです！ それはみんなあなただが、さもなければあなたのような氣ちがいが考え出したことです。僕はもうこれから決してあなたからそんなことは聞きませんから、そのつもりで下さい！」

その晩おそくなつてから、もう十一時に近い頃エオリアが新しいニュースをどつさり持つて来た。このニュースにはベテルブルグに關するものとパヴロフスクに關するものと二通りあつた。エオリアはベテルブルグに關する話は、いずれ後でゆつくり話すことにして大急ぎに概略だけを話した（これは主としてイッポリットと昨夜の事件についてであつた）。それから續いて話はパヴロフスクの方へ移つて行つた。彼は三時間ほど前にパヴロフスクへ歸り着いたのであるが、公爵の所へは寄らずに、そのままエパンチン家を訪れたのである。「ところがそこは恐ろしくごたつて居る」のであつた。

その主なる原因は、勿論、昨晚の幌馬車であつたが、その他に、まだ彼にも公爵にも分らない事が、何か起つたのに相違ないらしかつた。「僕は勿論、スパイじやないんですから、誰にも探りを入れようなんかつてはしなかつたんです。しか



し、僕が行つたらね、とても歎待してくれましたよ。ほんとうに思いがけないくらい歎待してくれました。だけど、公爵、あなたの話はこればかりも出ませんでしたよ。」とコオリヤは報告した。しかし何より不思議でまた大事なことは、さつき、アグライヤがガーニヤの肩を持つて、一家の人々と口論したことである。詳細な點は知ることもできないが、ガーニヤの肩を持つたという事だけは確かな事實であつた（まあ、何としたことでしょう！とコオリヤは言つた）。それに、その口論もかなり激しかったのだから、何か大變な譯があるにちがいない。將軍は遅れて、エヴゲニイ・パーヴロキッチと一緒にやつて来た。將軍は不機嫌らしく苦い顔をしていたが、エヴゲニイ・パーヴロキッチはみんなから非常に歎待されて、恐ろしく陽氣で愛想がよかつた。最も價値のあるニコースはリザヴェータ・プロコフィーヴナがワルワラ・アルドリオノヴナを追い出したという事である。夫人は令嬢たちのところに坐つて話し込んでゐるワルワラを自分の傍に招いて、極めて丁寧な言葉づかいで、永久にこの家に足を踏み入れないようにと言ひ渡した。——「僕はワリーリヤがリザヴェータ・プロコフィーヴナのそばを離れて、令嬢たちに別れを告げた時、令嬢たちは、彼女が永久にこの家へ来てはならないと斷わられてゐることも、これが最後のお別れだということも知らなかつたのである。」

ん！

公爵は黙つていた。「あなたはひどい懷疑派ですね、公爵」二分間ばかりして、コオリヤはこう附け足した。「いつ頃からですか、あなたがずい分ひどい懷疑派になつたような氣がしてなりません。あなたは何かも信じないで、いつも豫想ばかりするようになりますね……けど、僕がこの場合、『懷疑派』つて言葉を使つたのは當つてるでしょうか？」

「當つてると思ひます。でも本當のところは自分でも分らないんですが。」

「しかし、僕は自分の方から『懷疑派』つて言葉は取消しします。その代り新しい説明を見つけたました。」とコオリヤがいきなり叫んだ。「あなたは懷疑派でなくつて、怪氣屋です！ あなたはあの偉そうなお嬢さんのことで、ガーニヤのことを恐ろしく焼いてらつしやる！」

こう言つたかと思つと、コオリヤは飛び上つて、今まで恐らくこんな笑い聲は出たこともあるまいと思われほど大きな聲で笑い出した。公爵が眞赤になつたのを見ると、コオリヤは一そう大きな聲を立てて笑い出した。公爵がアグライヤのことで嫉妬してゐるといふ考えが、ひどくコオリヤの氣に入つたのである。しかし、公爵が心から惱んでゐるのに氣がつくと、彼はびたりと笑いやめた。それから二人は極めて眞面目に、心配らしい様子で、一時間か一時間半ぐらい話しつづけた。

翌くる日、公爵は手放せない用件があつて、午前中をベテ

て訊ねた。

「だけど姉さんが追い出されたのは七時すぎか八時ごろなんです。僕はワリーリヤがとても可哀そうなんです。ガーニヤも可哀そうです……二人は、いつもきつと、何か悪企みをしてゐるにちがいないんです。そんな事でもしなくちやいられないんです。しかし、何を企んでゐるんだかちつとも分らない。また分かりたくもありません。だけど、公爵、僕は誓つて言いますが、ガーニヤには良心があります。あの人は勿論、色んな點から見ても零落した人間ですけど、また多くの點で、搜したり見つけたりしてやるに足りる好い性質をもつてゐます。僕は以前あの人がよく呑み込めなかつたんです。これは一生涯の恨みだと思つてゐます。……つい今、ワリーリヤのことをお話しした後で、僕がこの先を話し續けてもいいでしようか。僕にはよく分りませんが、實際、僕は初めから全く獨立した立場にゐるんですが、そうかといつて考えない譯には行きませんからね。」

「君がそんなに兄さんを可哀そうがつたつて、どうにもならないぢやありませんか。」と公爵は注意した。「事件がそんなにまでなつてゐるのなら、ガヴリイラ・アルドリオノキッチさんはリザヴェータ・プロコフィーヴナさんの眼にも險呑だと思われてゐるんでしょう。だから、あの人の例の期待は是認される譯になります。」

「え、どんな期待ですか？」と、コオリヤはびつくりして叫んだ。「あなたは考えていらつしやるんじやありませんか。アグライヤさんが……、そんなことはありやう筈がありません。」

ルブルグに過した。バダロフスクに歸つて来たのは午後四時すぎであつたが、途中の驛でイワン・フォードロキッチに出會つた。こちらはいきなり、公爵の手を取つて、戦々兢兢としてゐるらしく、あたり見まわしてから、一緒に歸ろうと言つて、公爵を一等車の方へ引つぱつて行つた。彼は或る重大な件についてよく相談をしたいという希望に燃えていた。

「ねえ、公爵、先ず第一に、僕を怒らないで呉れ給え。もし僕が何か悪いことでも言つたりしたらそれは綺麗さつぱり忘れて呉れ給え。僕は昨晚、君のところをお訪ねしようと思つただけだけれどこのことについてリザヴェータ・プロコフィーヴナが……どんな風だか分らなかつたもんだから、……僕んとこは……正に地獄さ。何だか謎みたいなスフィンクスの棲み家になつてね。僕はうろろして、何が何だか、さつぱり分らないのさ。君のことについては、僕の考えでは、我々の誰よりも君が最も罪が軽い。そりや勿論、君のことから、いろんな騒ぎも起りはしたけれどね。どうだね、公爵、博愛家たることも愉快ではあるうが、しかし大して愉快とも言えんね。實は僕自身も、若しかしたら、禁斷の木の實を喰べた方かも知れないよ。僕は無論、品位というものを好むから、従つてリザヴェータ・プロコフィーヴナさんをも尊敬してゐる譯なんだが、しかし……」

イワン將軍は、まだそれから長い間、こんな調子で話し續けていた。が、その言葉は呆れかえる程とりとめのないことばかりであつた。極端に不可解な何ものかのために動揺し、混亂してゐる様がありありと見えていた。



「君がこの一件に何の係り合もないことは僕の信じて疑わないところだ。」と彼はやつとのこと、どうやら前より少し明瞭に語り出した。「しかし當分の間、僕の家を訪ねないでくれ給え。このさき、風向きが變るまではね。僕は打ちあげてお願いする。がさて、あの、エヴゲニー・パーヴロキッチのことについては、と、彼は一方ならぬ熱をこめて叫んだ。「あれは何の意味もない中傷だ。中傷も中傷、ひどい中傷だ！ 讒謗だ。何か悪企みがあるんだ。何もかも打ち壊して我々を喧嘩させるためにしたことだ。實はね公爵、これは君にだけの話だがね。我々とエヴゲニー・パーヴロキッチとのにはまだ一言も話は進んでいないんだよ。いいかね？ 我々は何ものにも束縛されてはいない——しかしこの一言は今に切り出されるかも知れない、もう近いうちに。こういう譯で、これを邪魔しようという計畫なんだ！ だが何のために、どうして——ということになると僕には呑み込めない。恐るべき女だ。何を仕出かすやら分からん突飛な女だ。僕は夜もろくろく眠れないほどあの女が怖い。それからあの馬車はどうだろう。白い馬、實にシツクだ。實際あれこそ佛蘭西で言うシツクつて奴だね。誰があんな女に買つてやつたんだ。一昨日エヴゲニー・パーヴロキッチに疑いをかけたのさ。しかし、そんな事のありよう等がないつてことが分かつた。若しもそんなことがない筈だとすると、何のためにあの女はこんな邪険をするんだらう。ね、そうだろう、まるで謎じやないかね！ あの女は自分の傍にエヴゲニー・パーヴロキッチを

引き寄せて置きたいからな。しかし、もう一度繰り返して言うけど、斷じてエヴゲニーはあの女と知り合じやないんだ。それから、手形のことなんか——あれは全くの出鱈目だ！ よくあんなに往來ごしに『あなた』なんかつてよくも圖々しく言えたもんだ！ 純然たる策謀だ！ 分かり切つたことさ。輕蔑をもつて否定すべきことであつて、又、一そうエヴゲニーを、尊敬させることになる。馬鹿げたことだ。僕はリザヴェータ・プロコフィエフナさんにもそう言つておいた。さあ、今度は、僕のごく内々の氣持を話してあげよう。僕の深く信ずるところでは、あの女はだね、以前の僕の行爲に對して、個人的な復讐をしているんじゃないかと思ふんだよ。と言つても、あの女に對して悪い事をした覚えはないんだが、ただある一つのことを思い出して赤面しているところだ。さて、今になつて又あの女が姿を現わした。僕はもうすつかり消えてしまつたものと思つていたのに。それはそうとあのラゴージンは何處にいるんだね？ 僕はあの女はもうすつと前にラゴージン夫人になつていっているものとばかり思つていたんだが。」

要するに、この人はひどく迷つていたのである。そして途中一時間ばかり彼は殆んど一人で話し續けて、いろんな質問を持ち出しては、自分でそれを解決し、しつかりなしに公爵の手を握り締めた。そしてどんな事件であろうと、かりそめにも公爵に疑いをかけようなどとは思わないと、少くともそのことについては一心に公爵に誓うのであつた。これは公爵にとつては重大なことであつた。やがて最後には、將軍

はベテルブルグの或る役所の長官をしているエヴゲニー・パーヴロキッチの親身の伯父の話をした。「立派な地位にある人で、年は七十ほどになるが、あの道にかけてはなかなか達人者なもので、食い道樂で、相當な苦勞人なのさ……は、は！ 僕はよく知つてるけど、この人がね、ナスターシャ・フィリツボヅナの噂を耳にして、釣つてやろうとずい分骨折つたものさ。さつき、ちよつと立ち寄つて見たが、氣分が悪いとかいうことで面會できなかつたが、ともかく金持だよ。素晴らしく金持だよ。そのうえ、權威もあるし……まあ、どうか丈夫で長生きなされるように、いづれそのうちにはエヴゲニー・パーヴロキッチの氣に入るわけさ……しかし、やつぱり僕は怖いね！ 何だか分からないが怖い……何だか空中を翔つているような氣がする。何だか蝙蝠みたいなものが、災難が飛んでいゝみたいに、怖ろしい、怖ろしい！……」かくて遂に、既に前にも述べて置いたように、漸く三日目にエバンチン家とレフ・ニコライキッチとの間に正式の和解が遂げられたのである。

午後の七時ごろ、公爵は公園へ出かけようとしていた。そこへ突然、リザヴェータ・プロコフィエフナが一人で露臺へ入つてきた。「先ず最初に言つておきますけれど」と、彼女は言い出し

た。「わたしがお詫びに來たなんて、そんな圖々しい考えはおこさないで頂戴。冗談じやないわ！ 何もかも、あなたが悪いんですよ。」

公爵は黙つていた。

「悪いでしょう、それとも悪くないの？」  
「あなたと丁度おんなじくらいに。尤も、僕だつて、あなただつて、わざと悪いことをした譯じやありません。僕は一昨日は自分が悪いんだと思つていましたが、今では、そんなことはないと考えるようになりました。」

「はあ、なるほどね！ そんなら、ようござんす。話してあげますからお掛けない。わたしはここに突つ立つている氣じやありませんからね。」

二人は腰をおろした。  
「それから第二には、あの意地悪の小僧つ子たちのことは一言も口にはいけませんよ！ わたしは十分間だけ坐つて、あなたとお話します。わたしは、あなたに訊きたいことがあつて來たんですよ（一體あなたは何だと思つて？）。それであの意地悪の小僧つ子たちのことを一言でも言つたら、わたしはすぐに出て行きますからね。そしたら、もうきつぱり、あなたとは絶交です。」

「いいです。」と公爵は答えた。  
「じゃ、伺いますけどね。あなたは二月か二月半くらい前、復活祭の頃、アグラレーヤに手紙をやりまして？」  
「ええ、やりました。」



「何の目的があつて？ 手紙には、どんなことが書いてあつて？ 手紙を見て頂戴な！」

リザヴェータ・プロコフィーヴナの眼は燃えかがやき全身はいらだたしさのあまり殆んど身悶えせんばかりであつた。

「僕んところには手紙はありません。」びつくりして、かなりに怯し氣づいて、公爵はこう言つた。「若し、しまつてあるとすれば、アグライヤさんのところにある筈です。」

「お茶を濁すもんじやありません！ 何を書いたんです。」

「僕は、濁してなんかいませんし、何も、怖れては、いませぬ。僕が手紙を出してはならないつていう理由はないと思ひますよ……」

「お黙んなさい！ そんなことは後でおつしやい。手紙には何を書いてありました？ 何だつて赧くなるんです、そんなに？」

公爵はちよつと考え込んだ。

「リザヴェータ・プロコフィーヴナさん、僕にはあなたの思つてらつしやることばかりありません。この手紙が大變あなたのお氣に觸つたことだけは分かりますけど。ようござんすか、僕はそんな質問にはお答するのを御免こうむつてもいいと思ひます。しかし、あの手紙のことを怖れてもいなければ、書いたことを後悔してもいいし、決してそのために赧くなつたんでもないつてことを證明するために（この時公爵は前よりも一そう赧くなつた）、僕はあなたにその手紙を讀んで差し上げましょう。僕は多分、暗記してると思ひますから。」

「一寸の間、彼女は興奮を抑えて溜息をついた。」

「では、『貧しき騎士』つてのは何ですか？」

「二向に存じません。これは僕の知つたことじやありません。何かの冗談でしょうよ。」

「これは、案外おもしろいことを聞きますね！ けど、本當にあの子はあなたに心を惹かれたのかしら？ だつて、あの子は口で、あなたのことを『片輪』だの『白痴』だのつて自分言つてたんですものね。」

「僕にそんなことを聞かして下さらなくつてもいいのに。」公爵は答めるようではあるが、殆んど呟やくような聲で、こう言つた。

「怒つちや厭やよ。あの子は甘やかされて来たもんだから、我儘で氣ちがいみたいなどころがあるんです——氣に入つたとなると、きつと大きな聲で悪口を言つたり、面と向かい合つていやみをいつたりするんですよ。私も娘の頃は丁度あれと同じでした。ただ、お願いですから得意にならないで頂戴ね。あなたのものじやないんだから。私はそんなことを本氣にしたくもなければ、この先だつて本氣になんかしたかありません！ 私はあなたが何とか處置をつけるようにと思つて言ひます。ね、ほんとに、あなたは、あの子と結婚してはいいのだね。」

「奥さん、何を飛んでもないことをおつしやるんです！」公爵は驚ろきのあまり椅子から飛び上らんばかりであつた。「でも、結婚しないばかりの様子だつたじやないの？」

「ええ、そうです。」と、公爵は呟やいて、うなだれた。

こう言つて公爵は以前に書いた文面と殆んど一字一句も違わずに繰りかえした。

「何て馬鹿げた話だらう！ あなたは、そんな馬鹿げたことに何か意味でもあると思つてるんですか？」並々ならぬ注意を傾けて聞き終えたりザヴェータ・プロコフィーヴナは、言葉鋭くこう訊いた。

「自分でもはつきりしたことは分かりませんが、僕の氣持が眞面目なものだつたということだけは分かります。あちらにいた時分、ふつと溢れるような生命力と並々ならぬ希望とを感ずるような時がありました。」

「どんな希望ですか？」

「説明するのはむずかしいんですけど、あなたの今、考えていられるのは確かに違つてでしょう。希望つてのは……そうですね、つまり、未來への希望で、自分も『あちら』ではまんざら他人でもなく、通りすがりの人間でもないだろうつていう嬉しい氣持なんです。すると、僕は不意に、この故郷が好きになりました。或る眩しいほど陽のさしている朝、僕はベンをとつてアグライヤさんに宛てて手紙を書いたので、どうしてあの方に宛てたのか——それは自分でも分かりません。どうかすると、人はそばに友だちがいてくれたらと思ひることがあるでしょう。そんな風に僕も友だちが欲しくなつたものと見えます……」暫らく黙つていた後で、彼はこう言ひ添えた。

「あなたは惚れたんじゃないの？」

「いいえ、僕は……僕は妹に宛てるような氣持で書いた。」



「じゃ、どうしたんです、そんな様子から見ると、あの女に惚れているんでしょう？ 今度も、あの女のために来たんでしょ？ それ、あの？」

「僕は結婚のために来たんじやありません。」と、公爵は答えた。

「この世に何か、あなたにとつて神聖なものがありますか？」

「ありません。」

「じゃ、お誓いなさい、あの女と結婚するためじやないつてことを。」

「何でも好きなものに誓います！」

「あなたの言葉を信じます。わたしに接吻して頂戴。やれやれ、やつと、これで安心して、息がつけますよ。しかし、よござんすか、アグララーヤはおまえさんを愛してはいませんかよ。だから自分の處置をおつけなさい。わたしの息の通つてゐる間は、アグララーヤをあなたにやりはしませんよ！ ようござんすか？」

「ええ。」

公爵は眞つ赤になつて、リザヴェータ・プロコフィーヴナの顔をまともに見ることができなかつた。

「耳をほじくつて聞いていらつしやい。わたしはあなたをまるで神様のように待っていました（ところが、あなたはね、それだけの価値のない人でした！）。わたしは毎晩、涙で枕を濡らしましたよ——あなたのことを思つてじやないんだから心配なさんな。わたしには別ないつも絶えることのない悲しみがあるんです。わたしがあなたをそんなに待ちこがれ

ッチに今日きつぱり言つておきました。さあ、わたしがすつかりあなたを信用していることが分かるでしょう？」

「よく分かっています。」

リザヴェータ・プロコフィーヴナは射るような眼で公爵を眺めた。或いは彼女はエヴゲニー・パーヴロキッチに關するこの報告が、公爵にどんな感銘を與えるか、はつきり知りたかつたのかも知れぬ。

「ガヴリーラ・イヴォルギンのことを何も知りませんか？」

「え……色々、知っています。」

「じゃ、あの人がアグララーヤと關係があるつてことを知っていますか、どうですか？」

「少しも知りませんでした。」と、公爵は驚ろいて身顫いした。「何ですつて、ガヴリーラがアグララーヤさんと關係があるつておつしやるんですか？ そんな筈はありません！」

「つい近頃のことです。それには妹がこの冬中、鼠のようにごそそと立ちまわつて、道をつけたんですよ。」

「僕には信じられません。」公爵は動揺して暫く考え込んでいた後で、きつぱりこう言つた。「若しそんな事があつたのなら、僕はもうはつきり知つている筈です！」

「多分、あの男が自分であんたのところへやつて来て、あなたの胸に泣き伏して、告白でもすると考えているんでしょう！ まあ、あなたは何ていう間拔なんでしょう。本當に間拔なんだねえ！ みんなが、あなたを騙している。あんなに……あんなに……それなのに、あの男をすつかり信じ切つて

いるなんて恥かしくないのかしら？ 一體あなたの眼には入

ていたのは、神様があなたを親友か、肉身の弟としてわたしに授けて下さつたんだと今も變らず信じているからです。わたしの親しい人としてはベラコンスカヤのお婆さんのほか誰一人いないし、それも遠くへ逃げてしまつて、おまけに年の故で羊のような莫迦になつてゐるんですからね。ところで今度は、『はい』とか『いいえ』とか簡単に返事をして頂戴。一昨日、あの女がどうして馬車の中から呼びかけたか知つてますか？」

「本當に、僕はあれに何の關係もなければ、知りもしないんです！」

「それでも結構です。あなたを信じます。今はわたしの考えも違つてきました。しかし昨日の朝なんか、みんなエヴゲニー・パーヴロキッチの罪にしてはいたんですよ。一昨日の晩と昨日とまる一晝夜の間。今となつては無論、あの人たちのいうことを認めない譯には行きません。あの人があつたとき、馬鹿にいられて擲擲されたつてことは、はつきりしてゐます。しかし、どうしてやら、何のためやら、どんな考えがあつてしたことやら、分かりはしない（もうこの事だけでも怪しいんです！ それに見つともないことですよ！）。——それはいづれにしても、あの人にはアグララーヤをあげる譯にはゆきません。あなたにちやんと言つておきますよ！ あの人がいい人であろうとも、これに變りはありません。わたしも以前は迷つていましたが、今度こそきつぱりと決心がつきました。『まあ、わたしを棺に入れて土の中に埋めた上で、娘をやつて下さい。』つて、こう、わたしはイワン・フョードロキ

らないんですか。あの男は何事につけてもあなたを騙してゐるんですよ。」

「あの人時々、僕を騙すのはよく知つています。」と、公爵は氣が進まないような様子で小聲に言つた。「それに、僕がそれを知つてゐるつてことを、あの人承知してゐるんですよ。」

と、彼は附け足したが、終いまで言い切らなかつた。

「知つて、信用するんですよ！ まあ、御念の入つたことだわねえ！ 尤も、あなたにして見れば當然のことかも知れないんですからね。こんなこと驚くがものはないから。ちえつ！

あ、そうだ、あのガリーニカ、でなければ、ワリーカがあの子をナスターシャ・フィリップポヴナに結びつけたんでしょう？」

「誰ですつて？」と、公爵は叫んだ。

「アグララーヤを。」

「受けとれません！ そんな筈はありません！ 一體、何の目あてがあつてです？」

公爵は椅子から飛び上つた。

「わたしにも信じられません。證據はあるんだけど。全くわがままな、氣まぐれな氣狂いみたいな娘です！ 意地悪な娘です。意地悪な、意地悪な！ 千年も萬年も意地悪を續けるんですよ！ わたしはこうきつぱり言います。家の子は揃いも揃つてあんな風になつてしまいました。あのびしよ濡れの牝鷄みたいなアレクサンドラまでが。でもあのアグララーヤはもう手のつけようがありません。わたしもそんなことは本當にはできません！ しかし、本當にしたくないと思うから本

ていたのは、神様があなたを親友か、肉身の弟としてわたしに授けて下さつたんだと今も變らず信じているからです。わたしの親しい人としてはベラコンスカヤのお婆さんのほか誰一人いないし、それも遠くへ逃げてしまつて、おまけに年の故で羊のような莫迦になつてゐるんですからね。ところで今度は、『はい』とか『いいえ』とか簡単に返事をして頂戴。一昨日、あの女がどうして馬車の中から呼びかけたか知つてますか？」

「本當に、僕はあれに何の關係もなければ、知りもしないんです！」

「それでも結構です。あなたを信じます。今はわたしの考えも違つてきました。しかし昨日の朝なんか、みんなエヴゲニー・パーヴロキッチの罪にしてはいたんですよ。一昨日の晩と昨日とまる一晝夜の間。今となつては無論、あの人たちのいうことを認めない譯には行きません。あの人があつたとき、馬鹿にいられて擲擲されたつてことは、はつきりしてゐます。しかし、どうしてやら、何のためやら、どんな考えがあつてしたことやら、分かりはしない（もうこの事だけでも怪しいんです！ それに見つともないことですよ！）。——それはいづれにしても、あの人にはアグララーヤをあげる譯にはゆきません。あなたにちやんと言つておきますよ！ あの人がいい人であろうとも、これに變りはありません。わたしも以前は迷つていましたが、今度こそきつぱりと決心がつきました。『まあ、わたしを棺に入れて土の中に埋めた上で、娘をやつて下さい。』つて、こう、わたしはイワン・フョードロキ

らないんですか。あの男は何事につけてもあなたを騙してゐるんですよ。」

「あの人時々、僕を騙すのはよく知つています。」と、公爵は氣が進まないような様子で小聲に言つた。「それに、僕がそれを知つてゐるつてことを、あの人承知してゐるんですよ。」

と、彼は附け足したが、終いまで言い切らなかつた。

「知つて、信用するんですよ！ まあ、御念の入つたことだわねえ！ 尤も、あなたにして見れば當然のことかも知れないんですからね。こんなこと驚くがものはないから。ちえつ！

あ、そうだ、あのガリーニカ、でなければ、ワリーカがあの子をナスターシャ・フィリップポヴナに結びつけたんでしょう？」

「誰ですつて？」と、公爵は叫んだ。

「アグララーヤを。」

「受けとれません！ そんな筈はありません！ 一體、何の目あてがあつてです？」

公爵は椅子から飛び上つた。

「わたしにも信じられません。證據はあるんだけど。全くわがままな、氣まぐれな氣狂いみたいな娘です！ 意地悪な娘です。意地悪な、意地悪な！ 千年も萬年も意地悪を續けるんですよ！ わたしはこうきつぱり言います。家の子は揃いも揃つてあんな風になつてしまいました。あのびしよ濡れの牝鷄みたいなアレクサンドラまでが。でもあのアグララーヤはもう手のつけようがありません。わたしもそんなことは本當にはできません！ しかし、本當にしたくないと思うから本

ていたのは、神様があなたを親友か、肉身の弟としてわたしに授けて下さつたんだと今も變らず信じているからです。わたしの親しい人としてはベラコンスカヤのお婆さんのほか誰一人いないし、それも遠くへ逃げてしまつて、おまけに年の故で羊のような莫迦になつてゐるんですからね。ところで今度は、『はい』とか『いいえ』とか簡単に返事をして頂戴。一昨日、あの女がどうして馬車の中から呼びかけたか知つてますか？」

「本當に、僕はあれに何の關係もなければ、知りもしないんです！」

「それでも結構です。あなたを信じます。今はわたしの考えも違つてきました。しかし昨日の朝なんか、みんなエヴゲニー・パーヴロキッチの罪にしてはいたんですよ。一昨日の晩と昨日とまる一晝夜の間。今となつては無論、あの人たちのいうことを認めない譯には行きません。あの人があつたとき、馬鹿にいられて擲擲されたつてことは、はつきりしてゐます。しかし、どうしてやら、何のためやら、どんな考えがあつてしたことやら、分かりはしない（もうこの事だけでも怪しいんです！ それに見つともないことですよ！）。——それはいづれにしても、あの人にはアグララーヤをあげる譯にはゆきません。あなたにちやんと言つておきますよ！ あの人がいい人であろうとも、これに變りはありません。わたしも以前は迷つていましたが、今度こそきつぱりと決心がつきました。『まあ、わたしを棺に入れて土の中に埋めた上で、娘をやつて下さい。』つて、こう、わたしはイワン・フョードロキ

らないんですか。あの男は何事につけてもあなたを騙してゐるんですよ。」

「あの人時々、僕を騙すのはよく知つています。」と、公爵は氣が進まないような様子で小聲に言つた。「それに、僕がそれを知つてゐるつてことを、あの人承知してゐるんですよ。」

と、彼は附け足したが、終いまで言い切らなかつた。

「知つて、信用するんですよ！ まあ、御念の入つたことだわねえ！ 尤も、あなたにして見れば當然のことかも知れないんですからね。こんなこと驚くがものはないから。ちえつ！

あ、そうだ、あのガリーニカ、でなければ、ワリーカがあの子をナスターシャ・フィリップポヴナに結びつけたんでしょう？」

「誰ですつて？」と、公爵は叫んだ。

「アグララーヤを。」

「受けとれません！ そんな筈はありません！ 一體、何の目あてがあつてです？」

公爵は椅子から飛び上つた。

「わたしにも信じられません。證據はあるんだけど。全くわがままな、氣まぐれな氣狂いみたいな娘です！ 意地悪な娘です。意地悪な、意地悪な！ 千年も萬年も意地悪を續けるんですよ！ わたしはこうきつぱり言います。家の子は揃いも揃つてあんな風になつてしまいました。あのびしよ濡れの牝鷄みたいなアレクサンドラまでが。でもあのアグララーヤはもう手のつけようがありません。わたしもそんなことは本當にはできません！ しかし、本當にしたくないと思うから本

ていたのは、神様があなたを親友か、肉身の弟としてわたしに授けて下さつたんだと今も變らず信じているからです。わたしの親しい人としてはベラコンスカヤのお婆さんのほか誰一人いないし、それも遠くへ逃げてしまつて、おまけに年の故で羊のような莫迦になつてゐるんですからね。ところで今度は、『はい』とか『いいえ』とか簡単に返事をして頂戴。一昨日、あの女がどうして馬車の中から呼びかけたか知つてますか？」

「本當に、僕はあれに何の關係もなければ、知りもしないんです！」

「それでも結構です。あなたを信じます。今はわたしの考えも違つてきました。しかし昨日の朝なんか、みんなエヴゲニー・パーヴロキッチの罪にしてはいたんですよ。一昨日の晩と昨日とまる一晝夜の間。今となつては無論、あの人たちのいうことを認めない譯には行きません。あの人があつたとき、馬鹿にいられて擲擲されたつてことは、はつきりしてゐます。しかし、どうしてやら、何のためやら、どんな考えがあつてしたことやら、分かりはしない（もうこの事だけでも怪しいんです！ それに見つともないことですよ！）。——それはいづれにしても、あの人にはアグララーヤをあげる譯にはゆきません。あなたにちやんと言つておきますよ！ あの人がいい人であろうとも、これに變りはありません。わたしも以前は迷つていましたが、今度こそきつぱりと決心がつきました。『まあ、わたしを棺に入れて土の中に埋めた上で、娘をやつて下さい。』つて、こう、わたしはイワン・フョードロキ



當にしないのかも知れない。」と、彼女は咳やくように附け足した。「なぜ、あなたは家へやつて来なかつたんです？」と不意に彼女は公爵の方を振り向いて、「この三日の間ずつとどうして家へ来なかつたんです？」と、じれつたそうに浴びせ掛けるのであつた。

公爵はその譯を話しかけたが、彼女は又してもそれを遮つた。

「みんなが、あなたを馬鹿もの扱いにして、騙しているんですよ！ 昨日、市内へ行つたそうですが、きつと膝をついて、あの悪黨に一萬留け取つてくれつて頼んだんでしょう！」

「決してそんなことはありません、考えもありませんでした。僕はあの人に會いませんでした。それに、あの人は悪黨じゃありません。僕はあの人から手紙をもらいました。」

「じゃ、見して頂戴！」

公爵は紙挟みから手紙を取り出して、リザヴェータ・プロコフィーヴナに渡した。手紙には次のように書いてあつた。

『拜啓。小生は他人様の眼より見れば、勿論、自尊心などもつべき柄には無之候。他人様の意見に依れば、小生はかかることをなすには、餘りにもつまらぬ人間に有之候。しかも、これは他人様の意見にて、貴君の御意見には無之候。公爵よ、小生は貴君が恐らく他の何人よりも優れた人物なりと確信致し居り候。小生、この確信あるがために、ドクトレンコ

違ありません。おお、あなたは何て小つちやな赤ん坊でしやう、奥さん！』

「まあ、あなたは横面でもなぐつて貰いたいの？」

「いいえ、決してそんな考えはありません。ただあなたが手紙を讀んで喜んでいらつしやるのに、それを隠されるからです。どうしてあなたは御自分の氣持を恥かしがられるんです。何事につけてもあなたはそうなんですよ。」

「もう一步たりとも、わたしの方に近寄つちやなりません。」

忿怒のあまり顔を眞つ蒼にして、リザヴェータ夫人は躍り上つた。「もう今後はわたしとこころへ顔なんか見せないで下さい！」

「だけど、三日たつたら、ここへいらして、家へ来てくれつておつしやるに相違ありませんよ……どうしてまあ、あなたは恥かしくないでしやうね？ それはあなたの立派な氣持じやありませんか。何を恥かしがることがあるもんですか！ あなたは全く自分で自分を苦しめていらつしやる。」

「死んでも——あなたを呼んだりなんかしません！ あなたの名前なんか忘れてしまふ！ 忘れてしまいます！」

彼女は公爵の傍から飛びはなれた。

「僕はあなたのお言葉がなくても、お宅へあがることを止められてはいます！」と、公爵はその後からすぐ叫んだ。

「何ですつてえ？ 誰が止めました？」

彼女はまるで針でも刺されたようにいきなりこちらを振り向いた。公爵は答えるのにまごつた。思いがけないことながら飛んでもない失言をしてしまつたと思つたのである。

と意氣投合せず、遂に絶交いたせし次第に有之候。

小生は貴君より一哥たりとも斷じて頂戴いたすまじく候。然るに、貴君は愚母を御援助下され、これに對しては、生來の意志薄弱によるとは申せ、深く感謝いたすを當然の義務と心得居り候。兎も角、目下の小生が貴君を見るの眼は以前とは全く變り居り候。是は、この由を貴君にお傳え申すを必要と認め申し候。但し今後、貴君と小生との間には、何らの關係もあるまじきものと愚考いたし居り候。

アンチープ・ブルドフスキイ。

二伸 例の二百留に満たざる金額はそのうち必ず返却仕るべく候。』

「まるで出鱈目だわ！」とリザヴェータ・プロコフィーヴナは手紙を抛り出し思い切つてこう言つた。「讀むだけの値打もなかつたわ。何だつて、あなたは、にやにや笑つてるの？」

「だつて、あなただつてその手紙を讀んでうれしかつたでしよう。」

「何ですつて！ こんな虚榮心に食い荒らされたようなくだらない話が！ あなたには分らないんですか。あの連中つたら、傲慢と虚榮心が亢じて、氣ちがいになつて居るんですよ。」

「それはそうでしょうが、この人は謝罪して、ドクトレンコと別れたんですよ。この人が虚榮心が強ければ強いだけ、このことはその虚榮心にとつて一そう貴重なものだつたに相

「あなたを止めたのは誰です？」と、リザヴェータ・プロコフィーヴナはいきり立つて叫びかけるのであつた。

「アグラレーヤさんが止めたのです……！」

「いつ？ さあ、いつて、ごらん!!!」

「今朝、僕に決してお宅へ行つてはならない、と言つてよこされました。」

リザヴェータ・プロコフィーヴナは棒のように突つ立つていたが、あれやこれやと考えていた。

「何をよこしたの？ 誰をよこしたの？ あの子供にたのんで？」と、又しても不意に叫んだ。

「手紙をいただきました。」と、公爵は言つた。

「どこにあるんです？ お見せなさい！ 今すぐに！」

公爵はちよつと考えたが、やがて、チョッキのポケットから無造作にたたんだ紙きれを取り出した。それには次のようなことが書いてあつた。

『レフ・ニコライキッチ公爵、あのような事のあつた後で、もしあなたがわたしの別荘をお訪ね下さつて、驚ろかそうつてお考えになつていらつしやるのでしたら、決してわたしはあなたを歡待する仲間には入りませんから、さよう御承知下さい。アグラレーヤ・エパンチン。』

リザヴェータ・プロコフィーヴナは、ちよつとの間考えていたが、不意に公爵の方を向いて、その手を取り引つぱつ



納本

世界文學選書 87  
白痴 全四卷  
第二卷  
VX 00



昭和二十六年六月十五日 發行

譯者 中山省三郎  
發行者 竹内君代  
印刷者 井關好彦  
發行所 株式會社 三笠書房  
東京都千代田區神田神保町二ノ二〇  
電話 九段區 六五〇四番  
振替 東京 二〇九六番

大同印刷・壽製本

た。  
「今すぐに！ いらつしやい！ どうしても今、今すぐに！」  
彼女は非常な興奮と焦躁の發作に驅られてこう叫んだ。  
「だつて、あなたは僕をわざわざ……」  
「何をいうんです？ ほんとに無邪氣なお人好しなこと！  
少しも男らしいところなんかありやしない！ さあ、今度こそ、わたしがこの眼ですつかり見てあげる……」  
「せめて帽子くらいはとらして下さい……」  
「それ、これがあなたの穢らわしい帽子、さあ行きましよう！ 流行物さえ、氣の利いた見立てができなかつたのね！……これはあの子が……これはあの子がさつきのことがあつたので……熱に浮かされて。」ほんの一寸の間も手を放さず、公爵を引つぱりながらリザヴェータ・プロコフ・イヅナは呟やいた。「さつき、わたしがあなたを庇つて、あの人は、ばかだ、だからやつては來ないよ、と云つたからだ……でなければ、こんな出鱈目な手紙を書くわけがありません！ こんな無作法な手紙を。實に無作法な手紙です。身分の高い教養のある、はしこい、はしこい令嬢として！……ふむ！」と、彼女はなおも續けた。「しかし、それとも、……それとも、……事によつたら、あなたが來ないのに腹が立つてした事かも知れない。白痴にこんな手紙をやれば、文字通りにとるかもしれないつてことを氣にとめなかつたのかしら。ところがやつぱりその通りだわ。あなたは何を盗み聞きしているの？」彼女は思わず口をこぼしたのに氣づいて、こう叫んだ。「あの子はあんたみたいな道化者が欲しいのよ。久しく、あなた

に會わなかつたから、それでこんな頼みようをするんです。あの子が今こんなにあんたをからかうのが、わたし嬉しい。嬉しい。とても嬉しい！ あんたはこんなことをされる値打があるんです。あの子はやり方を知つてる。ああ、實によく心得たもんだ！……」

白痴 第二卷 終



